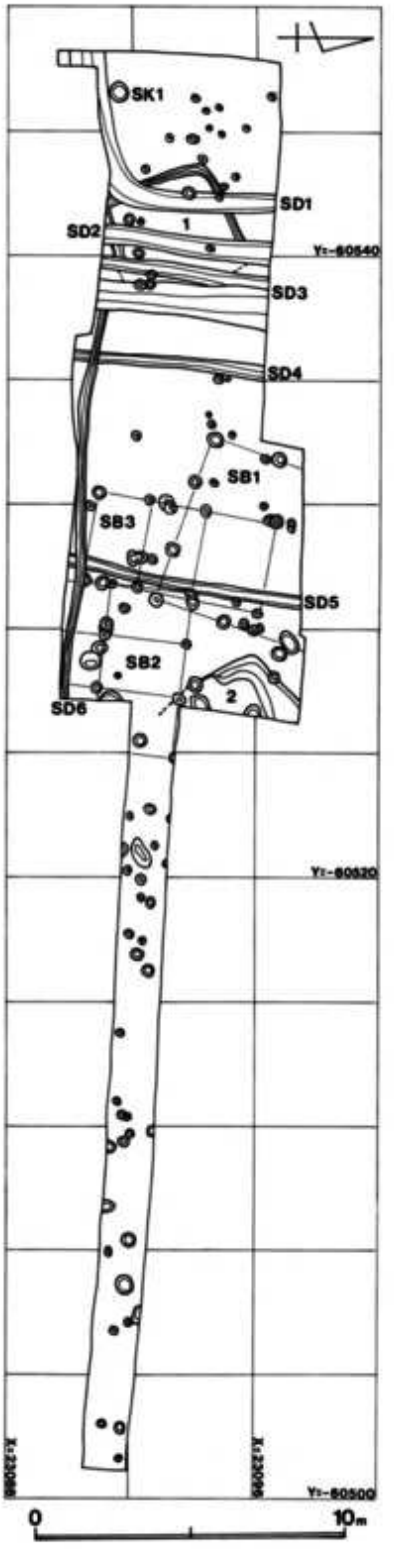
第Ⅳ章　東田遺跡の発掘調査

第１節　遺跡の概要

本遺跡は、古墳時代後期の集落跡と中世の屋敷跡を主体とする遺跡で、標高74mの平坦な現水田部内に位置している。周辺には同時代の遺跡が多く、南西側約200mには中世屋敷跡の日延遺跡Ｃ地点(本報告)が、東側約70mには送電線鉄塔建設に伴って発掘調査された古墳時代集落跡の浅見境遺跡が、北側約140mには古墳時代集落跡と中世屋敷跡の浅見境北遺跡(本報告)がある。また、本遺跡上や周辺の現地表面には、１町四方の方格地割りが連続する条里形地割り(児玉条里遺跡)が広がっており、今回調査した地点はこの条里坪を界する東西･南北両方向の坪界線の交点付近にあたっている。

本遺跡の東側は、昭和40年代に実施された共和南部土地改良事業によって、地形や土地の区画がほとんど改変されているが、それ以前の微地形(第183図)を見ると、本遺跡と東側の浅見境遺跡との間には、緩やかに蛇行しながら概ね南西から北東方向に向く幅約50mの細長く浅い帯状の低地が延びている。この細長い帯状の低地は、南西側は城の内遺跡と日延遺跡の間の細長い低地から延び、北東側は東牧西分遺跡(恋河内1995)の南側の旧男堀川が流れていた狭い低地に通じるようであり、生野山残丘下の湧水による開析作用によって形成されたものであることが伺える。本遺跡の調査地点は、この狭い帯状の低地に沿って北東方向に張り出す緩やかな微高地の東端部にあたるようであり、同じ微高地上の北東端に位置する浅見境北遺跡とは、連続する同一遺跡であった可能性も推測される。

検出された遺構は、住居跡２軒(古墳時代後期)、掘立柱建物跡３棟･土壙１基(古墳時代後期)、溝跡６条(古代３･中世１･近現代２)であるが、この中で特に注目されるのは、条里形地割りの坪界線にほぼ一致して併走する第１号溝跡と第２号溝跡である。この溝は、時期が古代に溯る可能性の高いもので、本遺跡上の現地表面に見られる条里坪界線の位置が、中世以前からさほど変化していないことが解る。本遺跡は、中世になって一時期この条里形地割り内に屋敷地が形成されるが、その後中世～近世前半の内に再び水田化され、近世後半以降に耕地の拡張に伴って南北方向の坪界線が一部東側に若干移動したようである。



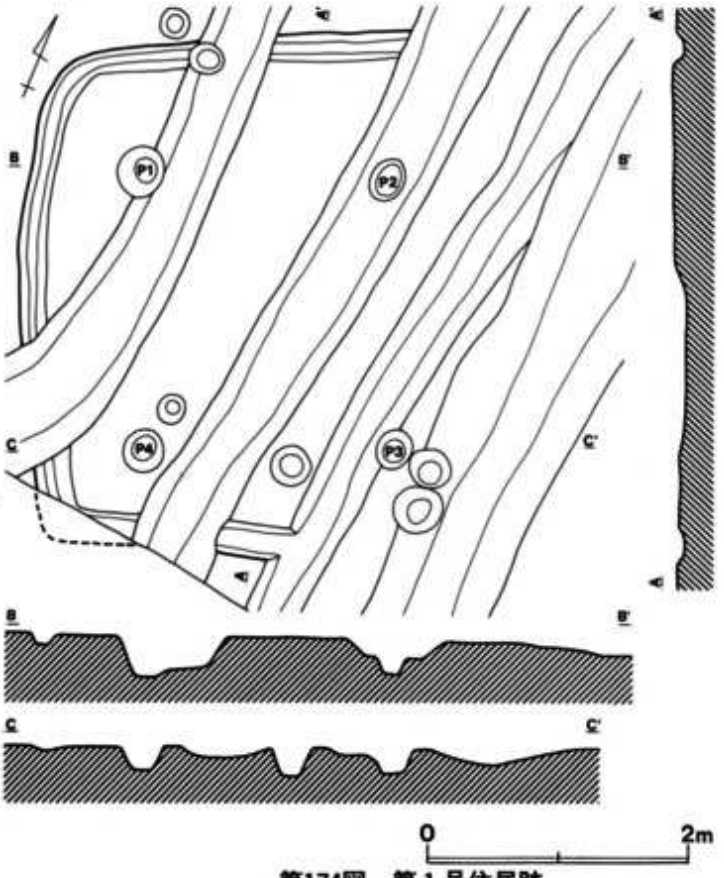
第173図　東田遺跡全体図

第２節　検出された遺構と遺物

１．竪穴式住居跡

第１号住居跡（第174図）

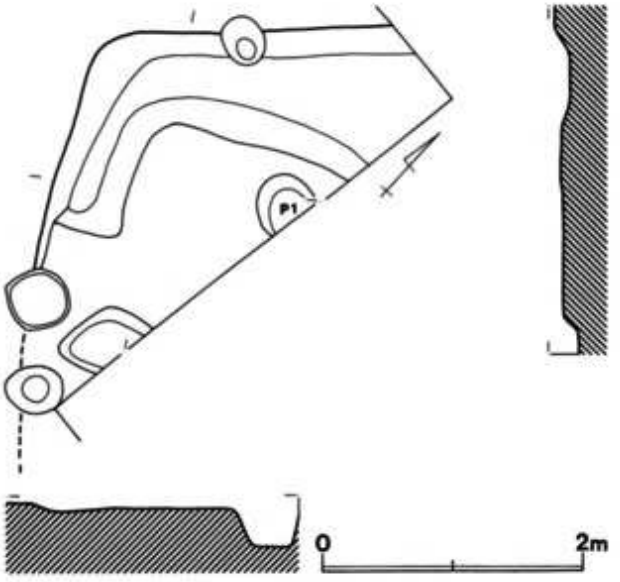
調査区の西側に位置し、第１～３号溝跡に切られている。本住居跡は、遺存状態が極めて悪く、すでに耕作によって住居の床面直下まで削平されており、かろうじて壁溝の一部と主柱穴が残存していただけである。平面形は方形を呈するものと思われ、規模は北西から南東方向が4.00mある。壁溝は、20cm程度の均一な幅で、深さは８cm程残存している。主柱穴は、住居の対角線上に配置される４本主柱穴（Ｐ１～Ｐ４）と考えられ、直径30cm程度の円形を呈している。時期は、重複する第１～３号溝跡から鬼高式土器の破片が多く出土していることから、古墳時代後期の可能性が高いと思われる。



第174図　第１号住居跡

第２号住居跡（第175図）

調査区中央部の北端に位置する。すでに耕作によって住居の床面下まで削平されており、調査区内で残存していたのは、床面下の壁際を馬蹄形に掘り窪めて、ロームブロックを均一に焼土粒子や炭化粒子を微量に含む暗茶褐色土を埋め戻した掘り方の一部だけである。また、黒褐色土を主体とするＰ１は、本住居跡に伴う可能性が高いものである。時期は、残存する掘り方埋土中から鬼高式土器の破片が多く出土していることから、第１号住居跡と同じく古墳時代後期の可能性が高いと思われる。



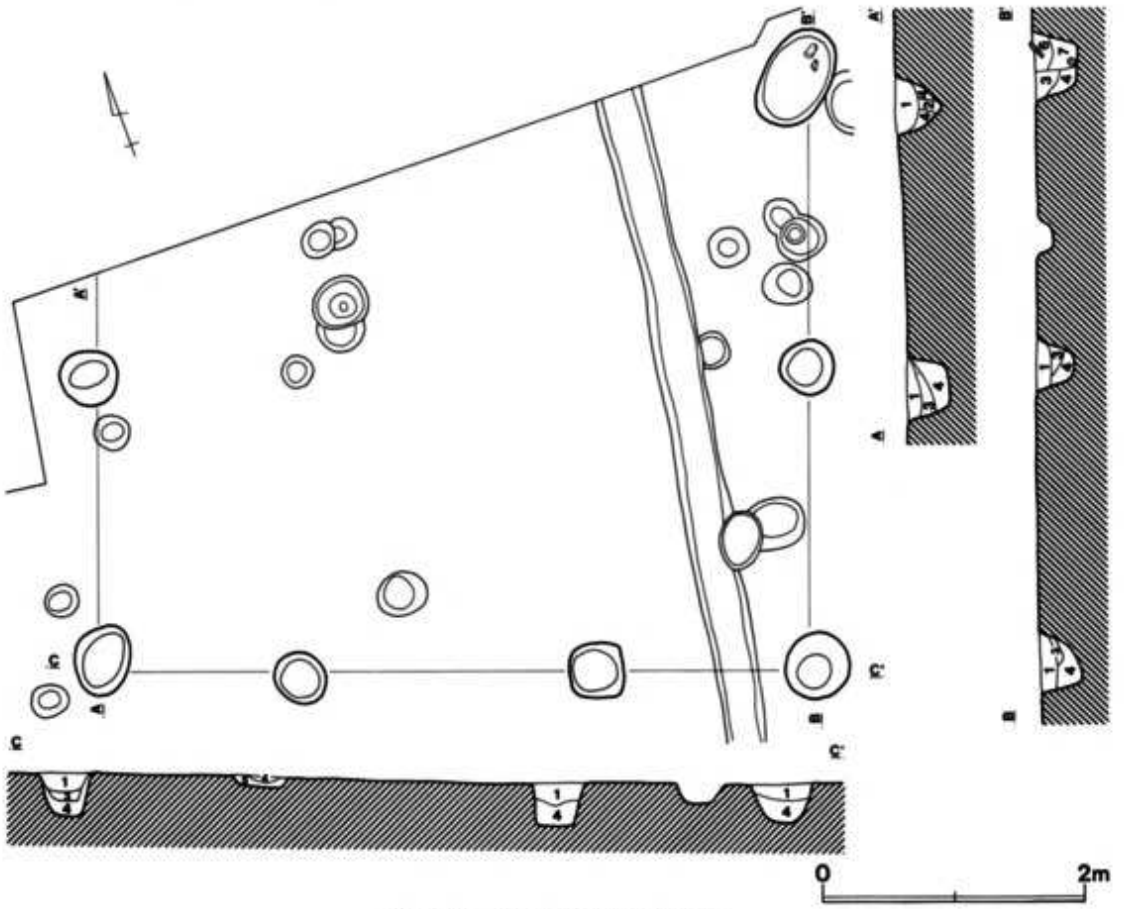
第175図　第２号住居跡

2．掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第176図）

調査区の中央部北側に位置する。第2号掘立柱建物跡・第3号掘立柱建物跡・第5号溝跡と重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、調査区の関係から建物の南側半分しか調査できなかったため全容は不明であるが、南北方向が3間・東西方向が2間以上の側柱式と推測される。規模は、東西方向が5.50m、南北方向は5.10mまで測れる。建物跡の南北方向は、N−19°−Eを向いている。柱心間は、東西方向の柱穴列は、西側から1.60m・2.30m・1.60mを測り、真ん中の1間が両側の1間に比べて広くなっている。南北方向の柱穴列は、いずれも2.30mの等間隔である。柱通りは、南北両側の柱穴列とも直



第176図　第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡土層説明

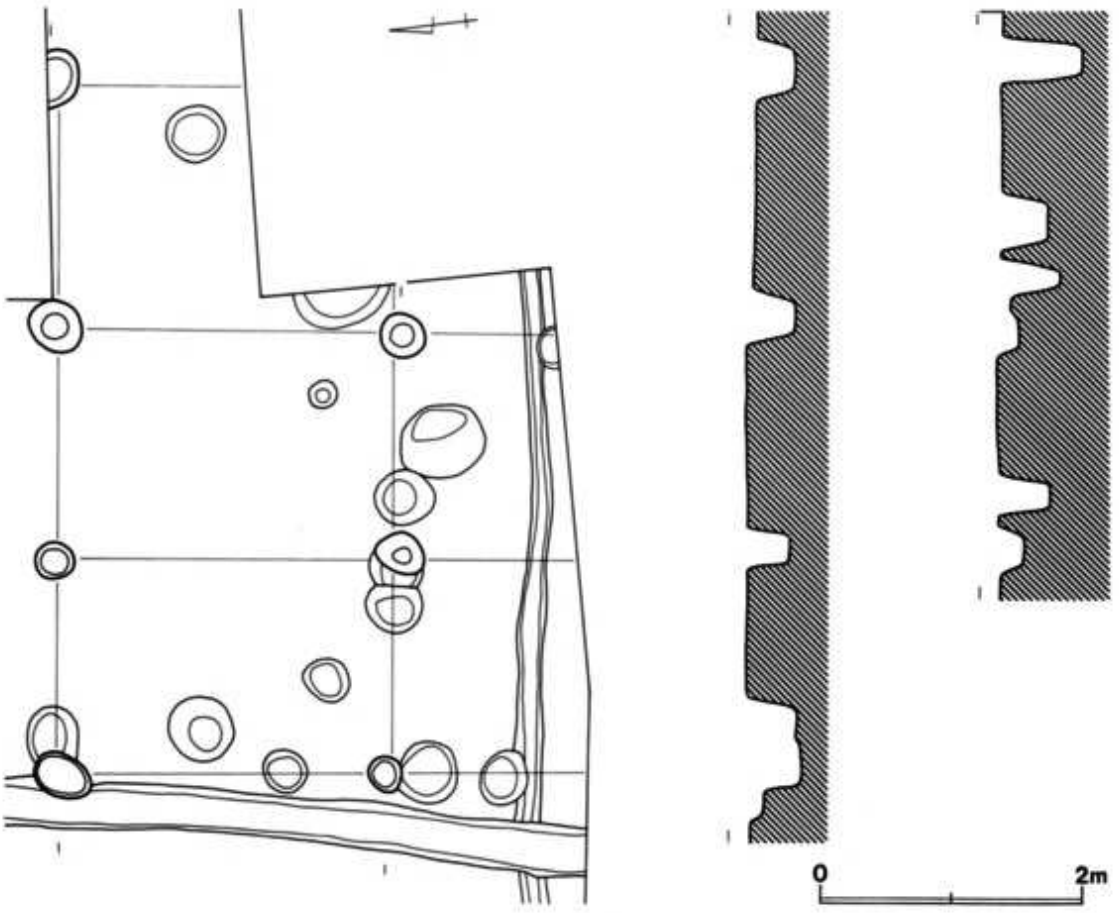
第1層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：黒褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を肥料含む。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：黒色土層（ローム粒子・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。）
第6層：黒色土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第7層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

線上に比較的良く並んでいる。柱穴は、直径40cm～50cmの円形を呈するものが主体であるが、南北方向の東側柱穴列北端の柱穴だけは、他の柱穴と違って比較的大きな柱穴掘り方をしている。確認面からの深さは30cm程度のものが主体である。出土遺物は、柱穴覆土中から鬼高式土器の破片が少量出土しただけであるが、これらはいずれも本建物跡に伴うものではなく、混入と考えられる。本建物跡の時期は、柱穴の覆土にB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。

第2号掘立柱建物跡（第177図）

調査区の中央部に位置し、重複する第5号溝跡と第3号掘立柱建物跡を切っている。この他、第1号掘立柱建物跡とも重複しているが、それとの新旧関係は不明である。

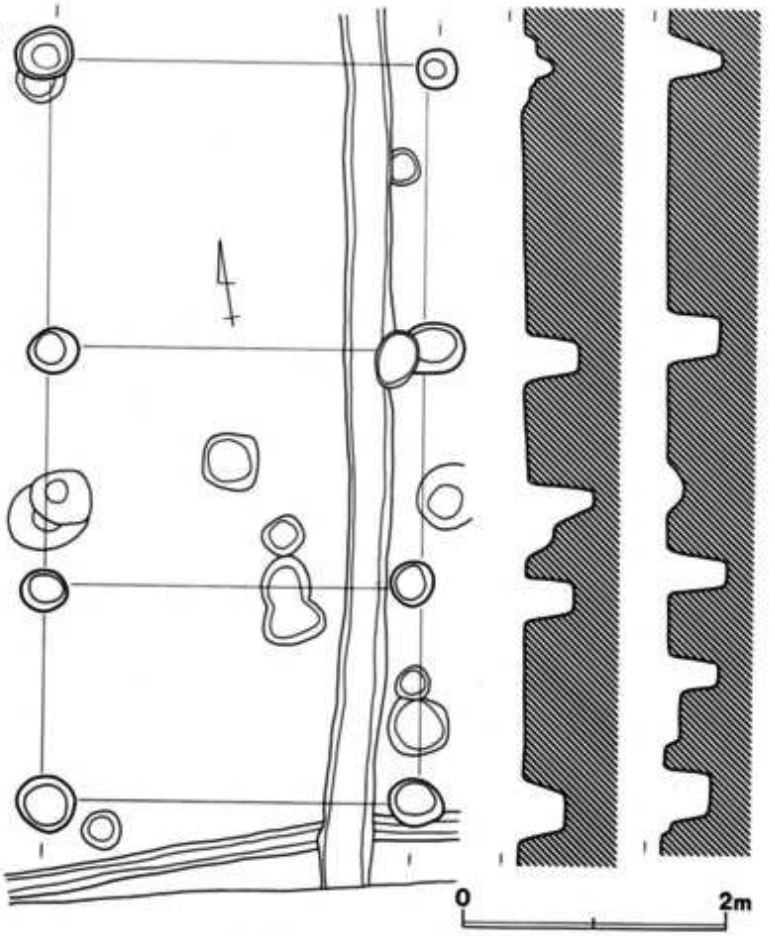
建物跡の形態は、調査区の関係から建物の全容は不明であるが、東西方向が3間・南北方向が1間以上あるものと思われる。規模は、東西方向が5.40mを測り、その柱心間が1間1.80mのほぼ等間隔で、南北方向は1間が2.60mある。建物跡の東西方向は、N－96°－Eを向いている。柱穴は、直径30cm～40cmの円形を呈するものが主体で、確認面からの深さは30cm～60cmとややばらつきが見られる。時期は、柱穴覆土中にB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。



第177図　第2号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡（第178図）

調査区の中央部に位置し、重複する第2号掘立柱建物跡に切られている。この他、第5号溝跡と第1号掘立柱建物跡とも重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。建物跡の形態は、調査区の関係から建物の全容は不明であるが、東西方向が1間・南北方向は3間もしくはそれ以上あるものと思われる。規模は、東西方向が2.80m・南北方向は5.60mかそれ以上あるものと思われる。南北方向の柱穴列の柱心間は、北側から2.20m・1.70m・1.70mを測り、北端の1間が他に比べて広くなっている。建物跡の南北方向は、N−10°−Eを向いている。柱穴は、直径30cm～40cmの円形を呈するものが主体である。確認面からの深さは、西側柱穴列北端の柱穴が20cmとやや浅い他は、30cm～45cmと比較的深くしっかりしたものが多い。柱穴列の柱通りは比較的良い。柱穴覆土は、B軽石とロームブロックを含む暗褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、柱穴の覆土にB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。

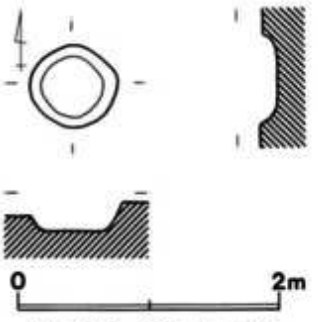


第178図　第3号掘立柱建物跡

3．土　壙

第1号土壙（第179図）

調査区の西端に位置し、南側には第1号溝跡が隣接している。平面形は、やや不整の円形に近い形態を呈し、規模は東西方向が67cm・南北方向が63cmを測る。壁は、やや丸みをもって緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で23cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量に含む黒褐色土を主体としている。出土遺物は、覆土中より古墳時代後期の土師器甕や坏の破片とともに須恵器甑の破片も出土している。本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期の所産と考えられる。

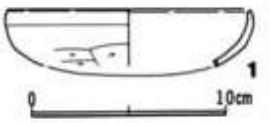


第179図　第1号土壙

4．溝　跡

第1号溝跡（第181図）

調査区の西側から西端にかけて位置し、重複する第1号住居跡を切っている。本溝跡の東側約80cmには、ほぼ同時期と考えられる第2号溝跡が、南北方向に向かって併走している。本溝跡は、本遺跡上や周辺の水田部に広がる1町四方の条里形地割り（児玉条里遺跡）の坪界線に沿うもので、恐らく併走する第2号溝跡との間が南北方向の坪界線であったものと考えられる。また、本溝跡が調査区内で「L」字状に流路を変える場所は、この条里形地割りの東西方向と南北方向の坪界線の交点にあたる。規模は、上幅が1m前後・底面の下幅30cm前後の比較的均一であるが、溝が方向を変える部分は底面の下幅が他に比べてやや広くなっている。壁は、やや直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは調査区北側壁の断面で40cmを測る。底面は、比較的広く平坦であり、あまり細かな凹凸は見られない。遺物は、覆土中より古墳時代後期の鬼高式土器の破片が比較的多く出土しているが、これらは重複する第1号住居跡等の該期の遺構から流れ込んだものと思われる。鬼高式土器の破片以外では、内屈口縁系の土師器坏の破片が1片出土している。この土師器坏（第180図）は、口縁部の湾曲が弱く、体部がやや低く、篦ケズリの範囲が体部下半で、口縁部ヨコナデとの間に未調整部分を残しており、それらの特徴から8世紀中頃～後半に位置づけられるものである。本溝跡の時期は、溝の上面を中世水田層の第Ⅲ層が被覆し、溝の覆土中にB軽石を含まないことから、古代の所産と考えられる。



第180図　第1号溝跡出土遺物

第1号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏		口縁部は若干内湾ぎみに立ち、体部はやや浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外－茶褐色	1/8。 覆土中。

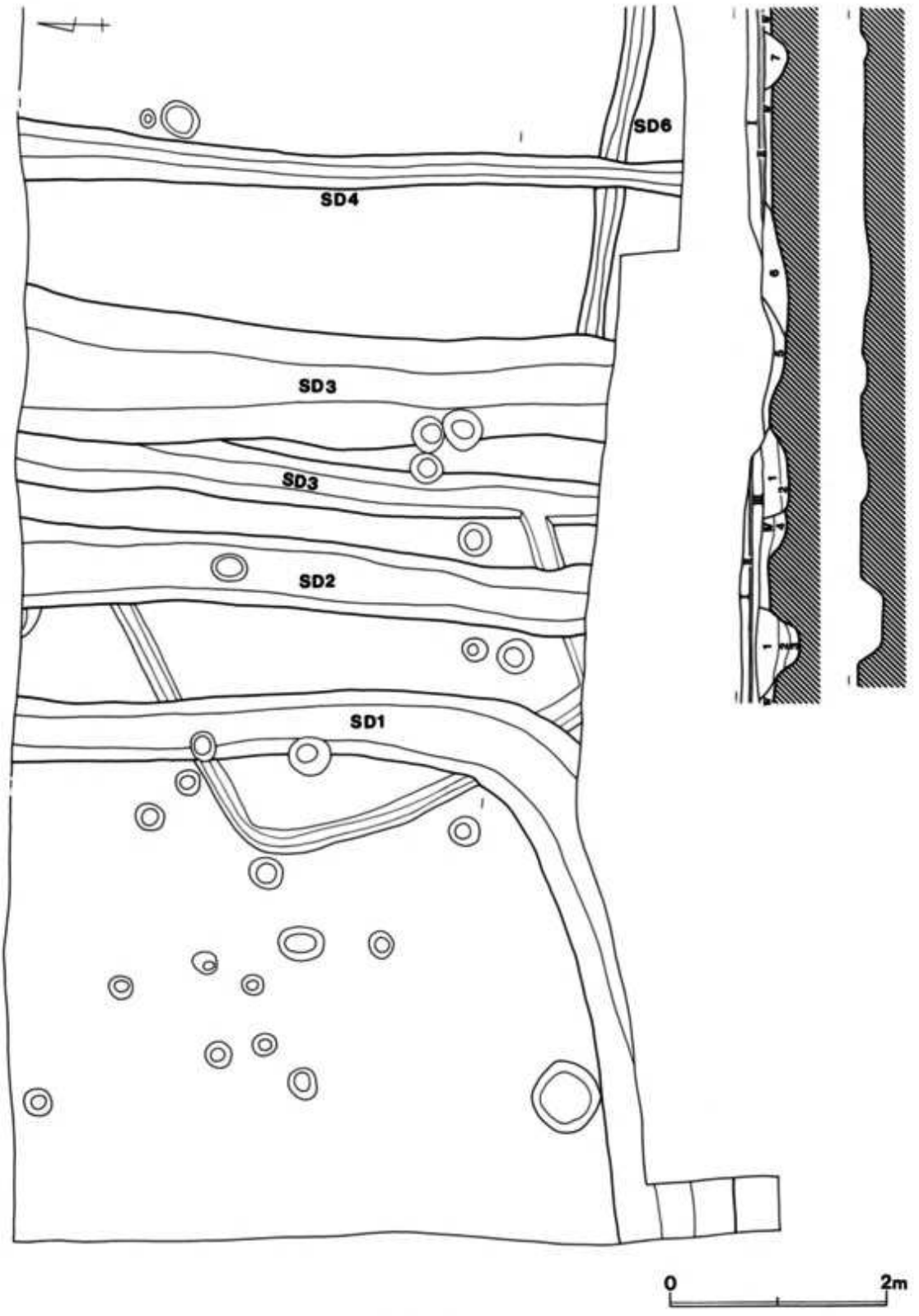
第2号溝跡（第181図）

調査区の西側に位置し、重複する第1号住居跡を切っている。本溝跡は、西側約80cmの本溝跡と同時に存在したと考えられる第1号溝跡とともに南北方向の条里坪界線に沿うものである。規模は、溝の上幅が60cm～70cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは調査区北側壁の断面で25cmを測り、第1号溝跡よりも浅くなっている。壁は緩やかにやや丸みをもって立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、第1号溝跡とほぼ同じであるが、第3層は見られない。

遺物は、覆土中からは古墳時代後期の鬼高式土器の破片が少量出土しただけである。本溝跡の時期は、第1号溝跡と同じく古代の所産と考えられる。

第3号溝跡（第181図）

調査区の西側に位置し、重複する第1号住居跡と第6号溝跡を切っている。本溝跡は、現地表面に存在する条里形地割りの南北方向の坪界線の痕跡と見られる溝と同一のもので、現地表面の溝が掘り返される以前のものである。時期は、近世後半以降でも比較的新しい時期と考えられる。



第181図　第1～4号溝跡

第４号溝跡（第181図）

調査区の西側に位置し、重複する第６号溝跡に切られている。調査区内では、ほぼ南北方向に向いて直線的な流路をとっており、西側約５ｍに位置する条里形地割りの坪界線と平行している。規模は、溝の上幅が30cm～55cmあり、確認面からの深さは調査区北側壁の断面で22cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は狭く丸みをもっている。覆土は、Ｂ軽石を含む暗灰褐色土を主体としている。本溝跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土中にＢ軽石を含むことから中世の所産と考えられる。本溝跡は、比較的小規模な溝であり、東側には重複した中世の建物跡が近接していることから、条里形地割りに規制された屋敷地の区画と関係する溝であるかもしれない。

第１～４号溝跡土層説明

第Ⅰ層：淡灰褐色土層（現耕作土。）
第Ⅱ層：淡黄灰褐色土層（第Ⅰ層田床。）
第Ⅲ層：暗灰褐色土層（中世水田層。）
第Ⅳ層：暗茶褐色土層（古代土層。）

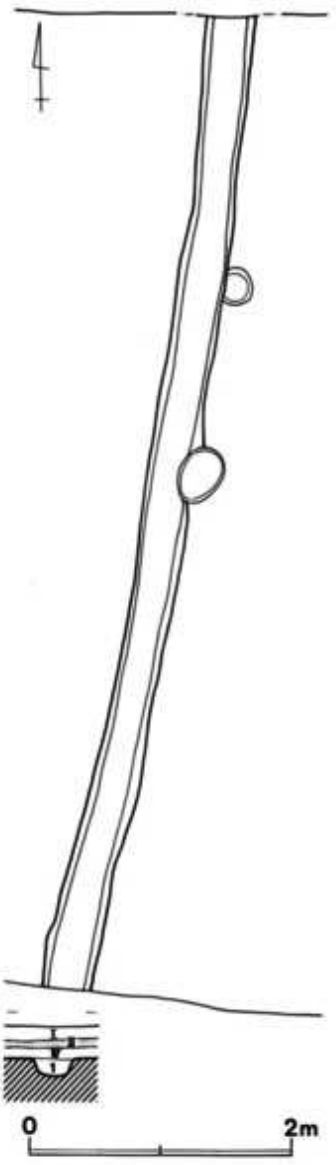
＜第１・２号溝跡＞
第１層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：灰色土層（鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：灰色土層（ローム粒子を均一に、鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：黒灰色土層（ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

＜第３号溝跡＞
第５層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、Ａ軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第６層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

＜第４号溝跡＞
第７層：暗灰褐色土層（マンガン塊を多量に、ローム粒子を均一に、Ｂ軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第５号溝跡土層説明

第Ⅰ層：淡灰褐色土層（現耕作土。）
第Ⅱ層：淡黄灰褐色土層（第Ⅰ層田床。）
第Ⅳ層：暗茶褐色土層（古代土層。）
第１層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



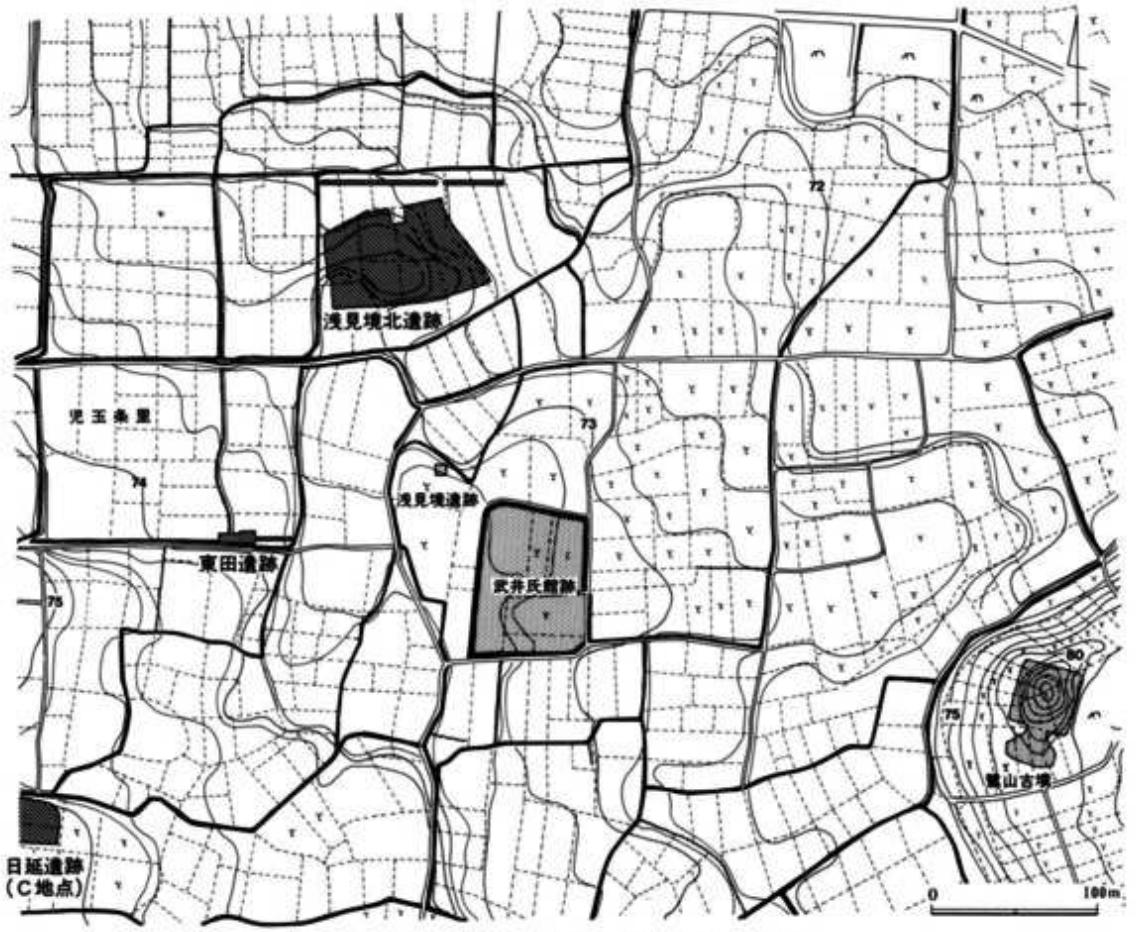
第182図　第５号溝跡

第５号溝跡（第182図）

調査区の中央部に位置し、重複する第６号溝跡と第２号掘立柱建物跡に切られている。この他中世の第１号掘立柱建物跡や第３号掘立柱建物跡とも重複しているが、覆土の状態からは本溝跡の方が古いと考えられる。流路は、調査区内では直線的にほぼ南北方向に向いている。規模は、溝の上幅が30cmの均一な幅で、確認面からの深さは15cmを測る。壁は直線的に若干傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、ローム粒子や鉄斑を微量含む黒褐色土（第１層）を主体としている。本溝跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態や第Ⅳ層下から検出されていることから、古代の所産と考えられる。

第６号溝跡（第173図）

調査区中央部の南端に位置し、重複する第３号掘立柱建物跡や第４号溝跡と第５号溝跡を切り、第３号溝跡に切られている。本溝跡は、東西方向の条里坪界線にほぼ沿うものであるが、溝の上幅が20cm前後の小規模な溝で、覆土中にＡ軽石を均一に含む近世後半以降でも比較的新しい時期のものである。



第183図　遺跡周辺の旧地形と発掘調査位置

第Ⅴ章　浅見境北遺跡の発掘調査

第1節　遺跡の概要

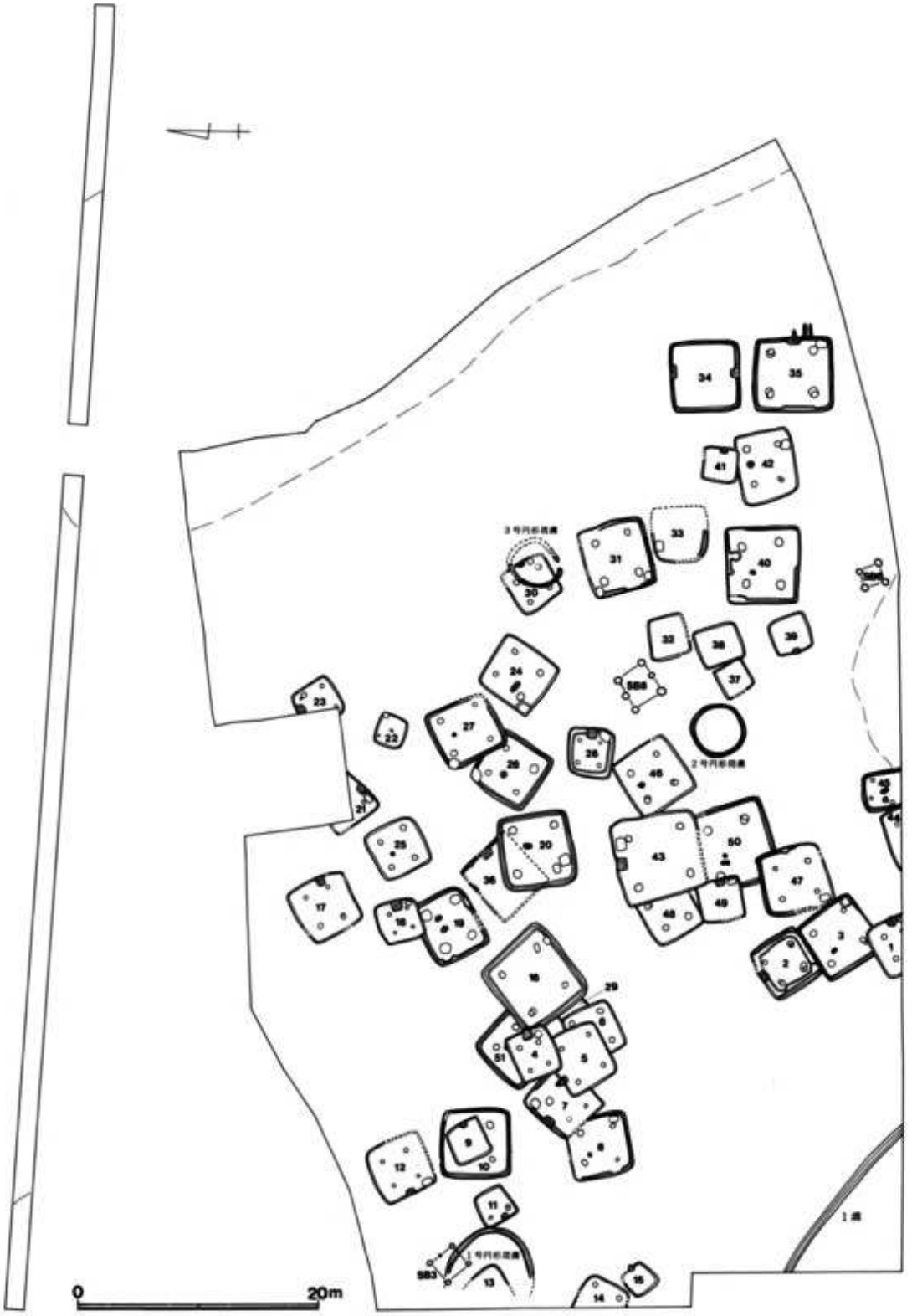
本遺跡は、古墳時代の集落跡と中世の屋敷跡を主体とする遺跡で、女堀川中流域右岸の標高73mを測る平坦な微高地上に立地している。本遺跡の周辺には、同時代の遺跡が多く存在しており、南側約140mには本遺跡と連続する可能性がある東田遺跡(本書第Ⅳ章)、南西側には幅50mの帯状の窪地を挟んで、送電線鉄塔建設に伴って発掘調査された古墳時代後期集落跡の浅見境遺跡(1986年調査)と、長方形に堀が囲繞する「武井氏館跡」(菅谷1981)、さらに約400mの残丘上には本遺跡を見下ろすように、古墳時代前期の前方後方墳である鷺山古墳(坂本1986)が立地している。また、周囲の現地表面には整然とした1町四方の方格地割りが連続する条里形地割りが広範囲に見られるが、本遺跡の東側ではすでに地割りがかなり崩れていたようである(第183図)。

発掘調査は、水田化のために削平されるA地点と、小排水路建設に伴うB地点の2箇所で実施している。調査地点は、A地点が主に桑畑、B地点が水田として利用されていたが、いずれもすでに耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。A地点とB地点で検出された遺構は、竪穴式住居跡51軒・掘立柱建物跡15棟・円形周溝遺構3基・井戸跡8基・土壙約50基・溝状土構25基・溝跡16条である。

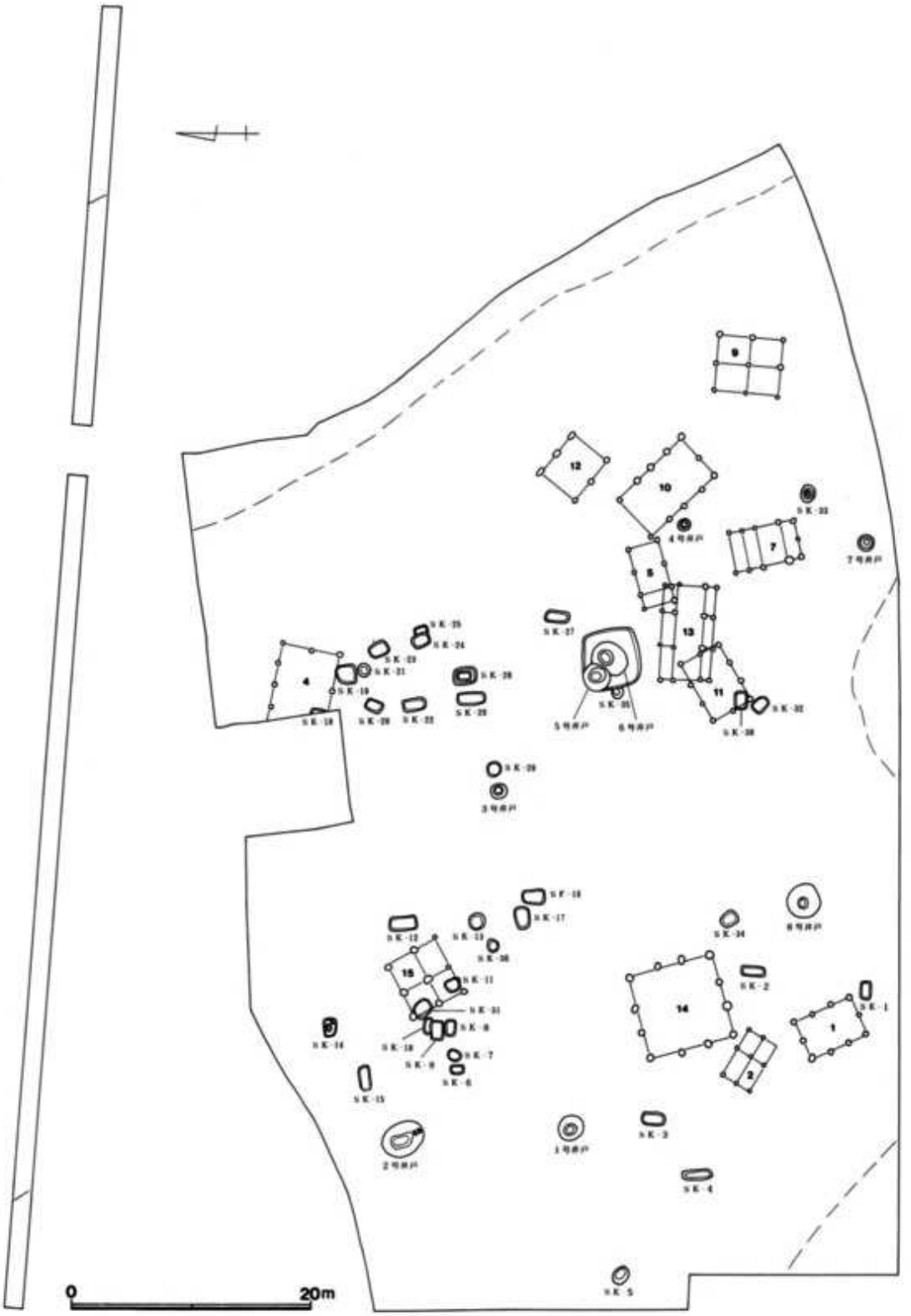
古墳時代の遺構(第185図)は、住居跡51軒・掘立柱建物跡3棟・円形周溝遺構3基・溝跡1条であり、これらは前期から後期にかけて断続的に営まれている。前期の集落は、住居跡18軒であるが、同時期の住居跡の重複がいくつか見られ、2～3時期にわたって継続的に営まれた比較的小規模な集落であったと推測されるが、規模の大きな第1号円形周溝遺構も該期に遡る可能性がある。集落の出現時期は、女堀川沖積低地内に形成される前期集落の中でも早い方で、本遺跡の北側約800mに所在する叩き甕やS字甕C類を伴う川越田遺跡(富田・赤熊1985、恋河内1993)に近い時期と思われる。中期の集落は、第16号住居跡と第25号住居跡の2軒による単一時期の小規模な集落である。後期の集落は、住居跡30軒・掘立柱建物跡3棟・円形周溝遺構2基・溝跡1条(第1号溝跡)で、6世紀後半頃から7世紀中頃まで継続的に営まれ、女堀川沖積低地内の多くの集落と同様に、7世紀後半には廃絶されている。

中世の遺構は、掘立柱建物跡12棟・井戸跡8基・土壙35基・溝状土壙25基・溝跡3条であるが、A地点の調査区中央部付近には、該期のピットが非常に多数見られ、それらの中には礎石のような自然石を伴うものも多く、掘立柱建物跡を構成していたものもいくつかあると思われる。これらの遺構は、遺物を伴うものが少なく、細かな時期的様相は把握しずらいが、概ね13世紀～15世紀前半頃にわたって、掘立柱建物と井戸を主体にしたおそらく複数の屋敷による集落が営まれ(第186図)、集落が廃絶された15世紀後半以降には、東西南北方向に一致して長方形に囲繞するように配置された溝状土壙や溝(第325図)が掘削されて、現在に近い土地区画が形成され、屋敷地から畑地に土地の利用形態が変化したようである。遺物は、龍泉窯系青磁碗・常滑窯系甕・山茶碗窯系鉢と在地産の鉢や内耳鍋が出土しているが、量的には少なくすべて破片である。また、この他では第2号井戸跡や第5号土壙から馬歯が出土しており、何だかの儀式に供された可能性があるものとして注目される。

第184図　浅見境北遺跡A・B地点全体図



第185図　浅見境北遺跡古墳時代遺構配置図



第186図　浅見境北遺跡中世遺構配置図（建物・井戸・土壙）

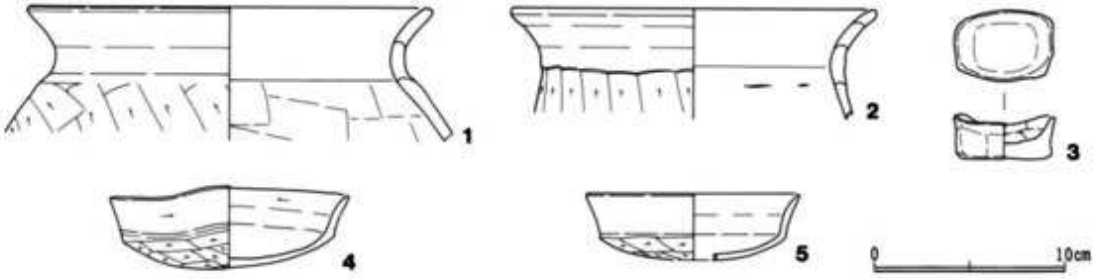
第２節　検出された遺構と遺物

１．竪穴式住居跡

第１号住居跡（第188図）

Ａ地点の調査区南端に位置し、重複する第２号住居跡を切っている。住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。また、住居跡の床面近くまで耕作による削平を受けているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

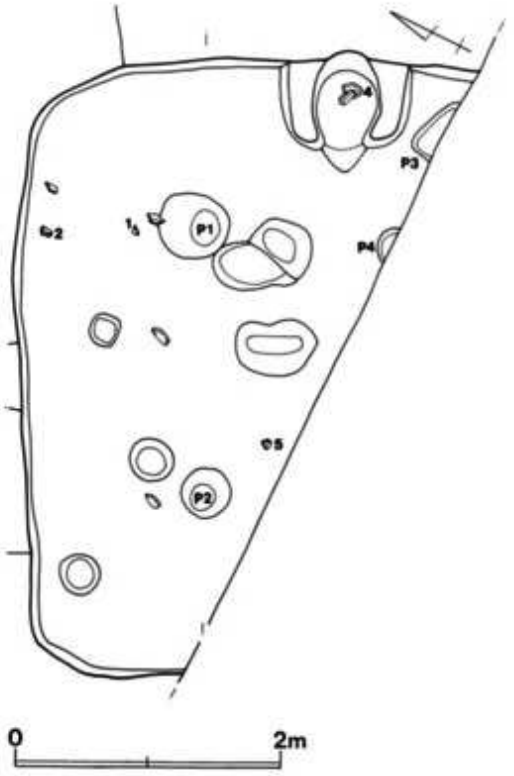
平面形は、コーナー部がやや丸みをもった方形かもしくは長方形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が4.65mあり、南北方向は最高3.50mまで測れる。主軸方位は、ほぼN－64°－Eをとるものと思われる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で14cmある。床面は、第５層の黒褐色土と第６層の暗黄色土を平坦に埋め戻した貼床式で、主柱穴に囲まれた住居中央部は堅緻であるが、主柱穴と壁との間の住居周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居内に10箇所見られるが、本住居跡に伴うと考えられるのはＰ１～Ｐ４の４箇所であり、他はすべて中世以降の可能性が高いものである。Ｐ１とＰ２は、住居の対角線上に配置される４本主柱穴の一部と思われ、直径40cm～50cmの円形に近い形態を呈し、床面からの深さはいずれも40cm程度ある。Ｐ３は、その位置と形態から貯蔵穴の一部と考えられる。Ｐ４は、直径30cm程度の円形を呈するものと思われ、深さは30cmを測る。その位置から主柱穴の可能性もあるが、明確なことは不明である。カマドは、住居東側壁の中央付近に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長92cm・最大幅1.02mを測る。袖は、暗白灰色粘土を床面上に直接盛り上げて構築している。燃焼部は、黒褐色土（第４層）を埋め戻して、床面よりも若干低い面（第３層）を燃焼面（火床）にしており、比較的良く焼けて赤色化している。出土遺物は、覆土中を主体に土器片が少量出土しただけである。

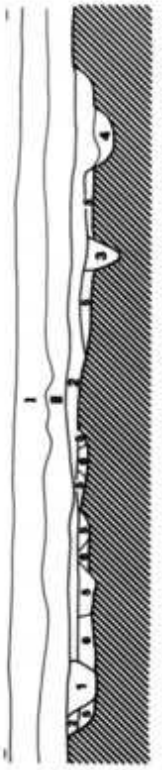


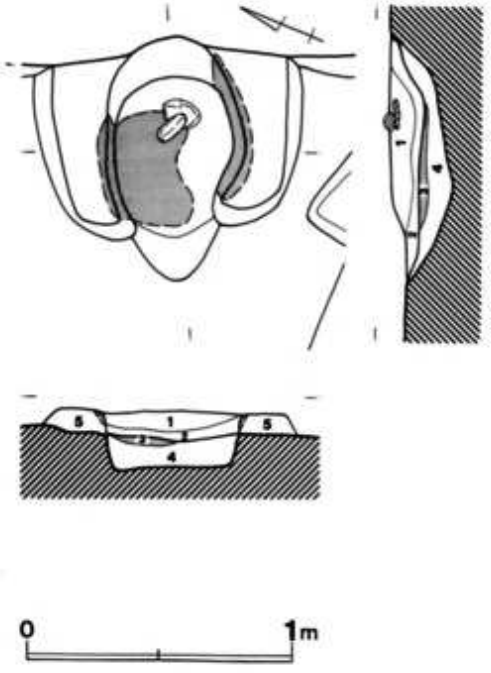
第187図　第１号住居跡出土遺物

第１号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径（21.0cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に浅い凹線を施す。胴部は強く張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。	片岩粒・赤色粒白色粒 内外－茶褐色	口縁部1/4。 床面付近。
2	甕	口縁部径（19.0cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部はやや張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒白色粒 内外－茶褐色	口縁部1/3。 床面付近。







第1号住居跡土層説明

第1層：暗灰色土層（ローム粒子・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒灰褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：暗黄色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第1号住居跡カマド土層説明

第1層：暗白灰色土層（白灰色粘土ブロックを多量に、焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗灰色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：赤褐色土層（焼土フロック・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを主体に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：暗白灰色粘土層（白灰色粘土ブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第188図　第1号住居跡

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	手捏土器	口縁部径 3.7×5.2 器高 2.3cm	手捏ね成形。器形は長方形ぎみの形態を呈する。口縁部は短く直線的に外傾し、底部は厚い平底を呈する。	外面未調整。内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	ほぼ完形。 覆土中。
4	坏	口縁部径 12.4cm 器高 4.3cm	口縁部は緩やかに外反し、体部との境に浅い凹線を施す。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－黒褐色 内－橙褐色	3/4。 外面黒斑あり。 器形は焼き歪みが激しい。 カマド内。
5	坏	口径(11.2) 器高(3.5)	口縁部は緩やかに外反し、体部との境は若干突出する。体部は浅く、底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/4。 床面付近。

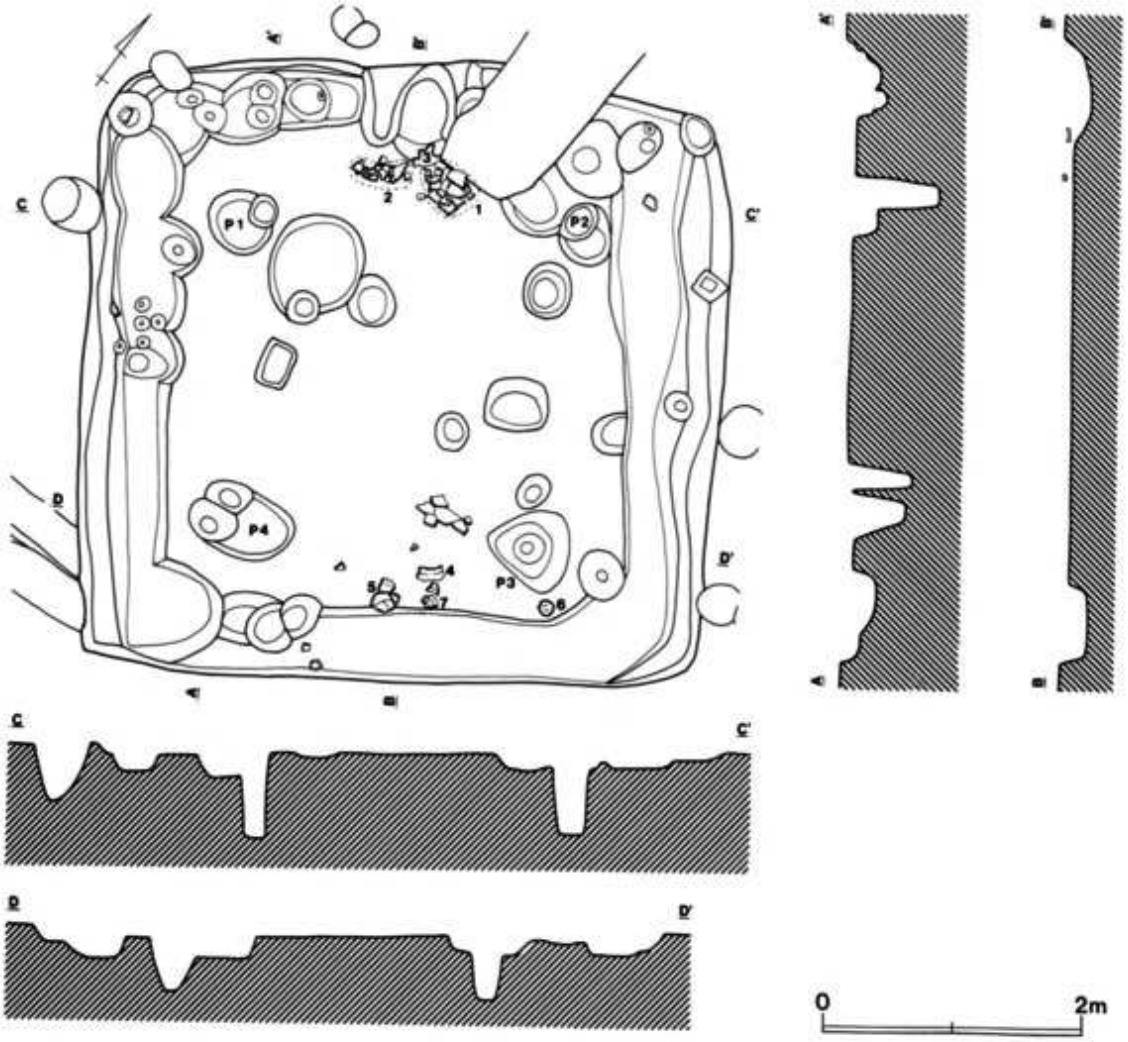
第2号住居跡（第189図）

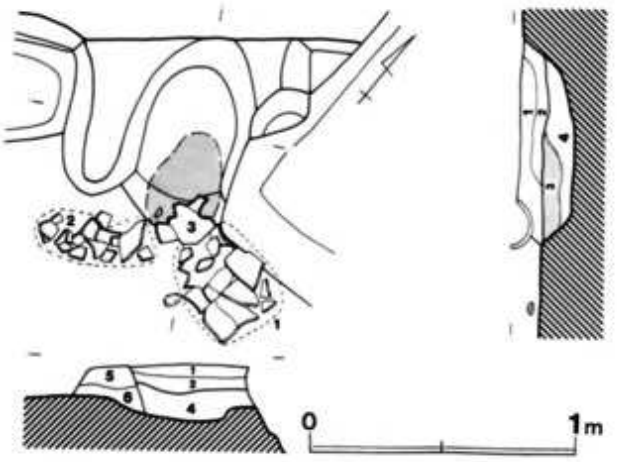
A地点の調査区中央部の南側に位置し、重複する第2号土壙に切られ、第3号住居跡を切っている。住居跡の床面近くまで耕作による削平を受けているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部に若干丸みをもつものが見られるが、比較的整った方形を呈している。規模は、北西から南東方向が4.74m、南西から北東方向が4.90mを測る。主軸方位は、N－33°－Wをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で8cmしか残存していない。壁際には幅広の周溝状を呈する掘り込みが見られる。これは覆土がやや軟弱な黒褐色土を主体にしていたが、底面は細かな凹凸が激しく、住居掘り方の貼床のあまい部分であった可能性がある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は非常に堅く締まっていた。本住居跡に伴うと考えられるピットは、4本主柱穴のP1～P4だけであり、他の多くは中世以降のものと思われる。主柱穴と考えられるP1～P4は、ほぼ住居の対角線上に位置するが、その配置は平行四辺形状に若干歪んでいる。いずれも上半部に比較的大きな掘り方をもち、その中央か片側に直径25cm前後の円形を呈する柱痕状のピットをもつ。確認面からの深さはいずれも60cm前後とかなり深い。カマドは、住居北西側壁の中央部に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長77cm・最大幅88cmを測る。袖は、灰白色粘土を主体とした第5層と第6層を盛り上げて構築している。燃焼部は、黒褐色土(第4層)を平坦に埋め戻して、ほぼ住居の床面と同じ高さ(第3層)を燃焼面(火床)にしている。出土遺物は、カマド焚口付近の床面上からNo.1とNo.2の甕が、住居南東側周辺部の床面上からNo.5の大形鉢やNo.6とNo.7の坏が出土している。

第2号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 20.2 器高 38.3 底径 5.1	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず、底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ及中位指ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	4/5。 外面黒斑あり。 床面直上。





第2号住居跡カマド土層説明

第1層：黒灰色土層（灰白色粘土粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒灰色土層（灰白色粘土ブロック・焼土粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

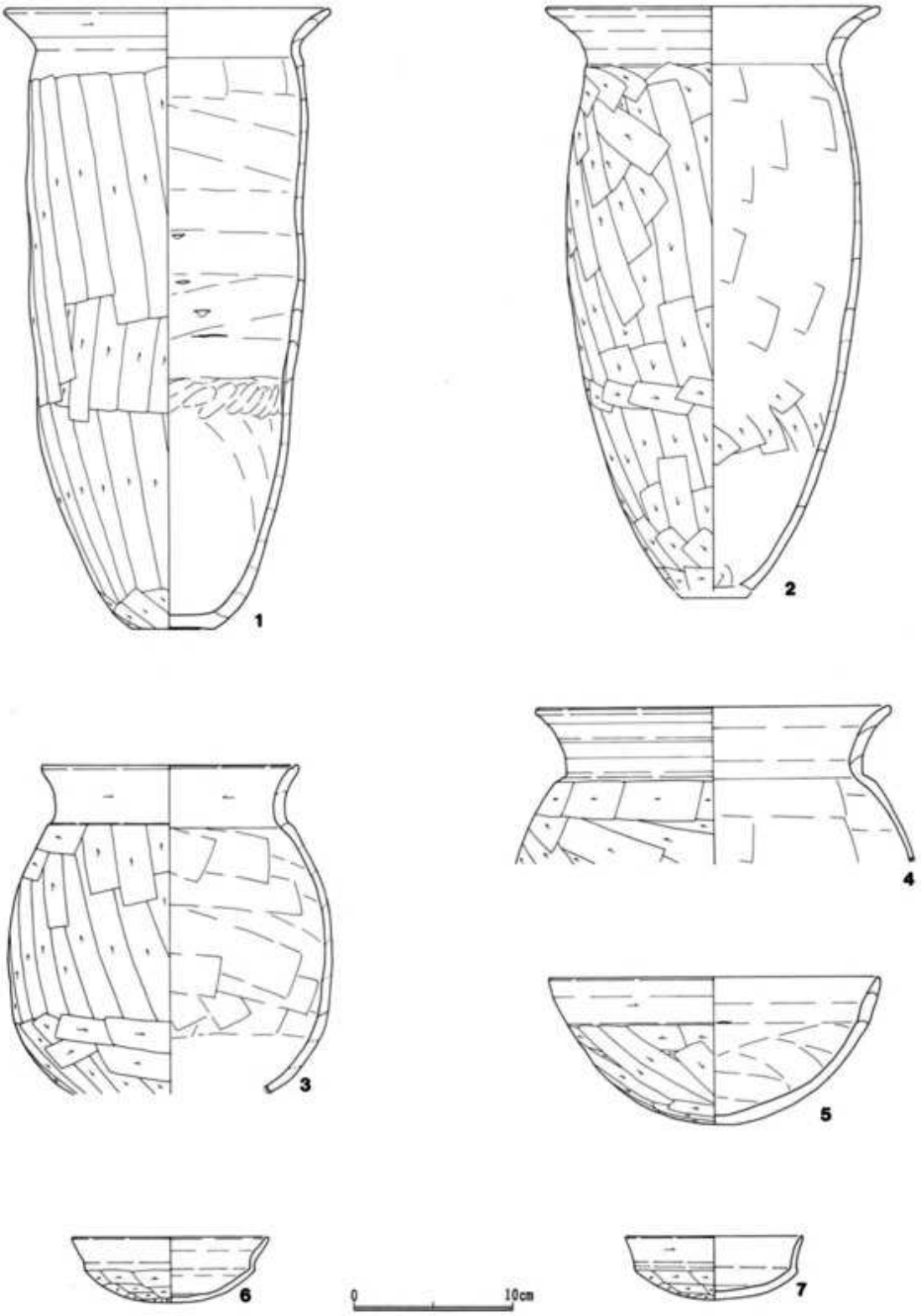
第3層：赤褐色土層（焼土ブロックを多量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第4層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：灰白色粘土層（灰白色粘土ブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第6層：暗灰白色土層（灰白色粘土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第189図　第2号住居跡



第190図　第２号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	甕	口縁部径 (20.8cm) 残存高 36.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境にヨコナデによる段をもつ。胴部は若干張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡褐色	1/3。 胴部上半と下半は接合しない。器形は図上復元。 床面直上。
3	甕	口縁部径 (16.0cm) 残存高 20.3 cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内側に浅い沈線を施す。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篦ナデ、下半ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	1/2。 床面直上。
4	甕	口縁部径 (22.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張る。	口縁部内外面軟質刷毛状工具によるヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗褐色	1/4。 床面直上。
5	鉢	口縁部径 20.6cm 器高 9.1cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部からそのまま直線的に外傾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。	白色粒 内外－淡橙褐色	3/4。 外面黒斑あり。 床面直上。
6	坏	口径 11.2 ～12.2 器高 4.1	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	ほぼ完形。 器形はやや歪む。 床面付近。
7	坏	口径 12.0 器高 3.9	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡赤褐色 内－明橙褐色	3/4。 床面付近。

第3号住居跡（第191図）

A地点の調査区中央部の南側に位置し、住居跡の南側コーナー部の上面を第1号住居跡に、北西側壁の上面を第2号住居跡に切られている。また、住居跡の東側は第47号住居跡と接している。

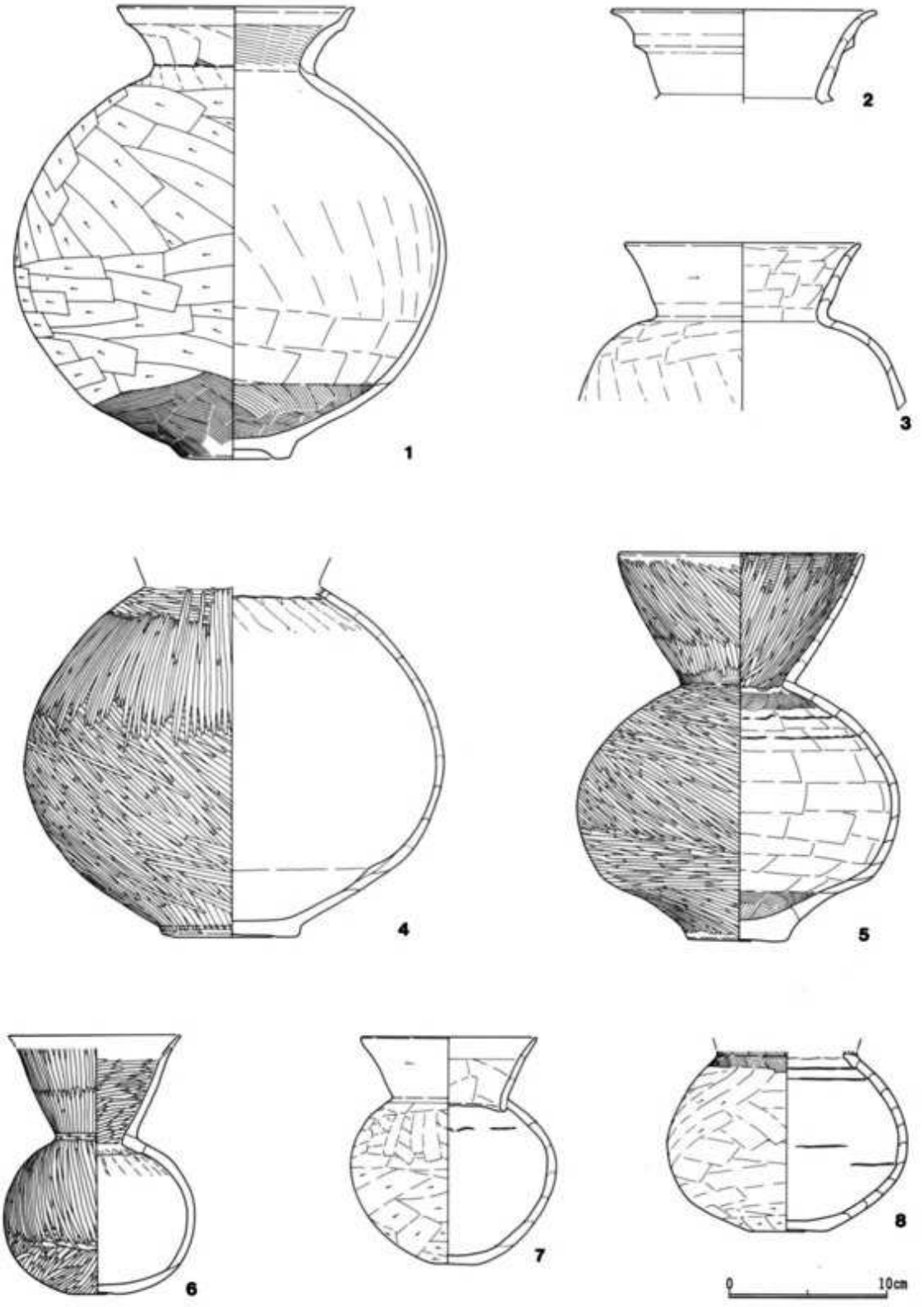
平面形は比較的整った方形を呈し、規模は北西から南東方向が5.50m、南西から北東方向が5.56mを測る。住居跡の主軸方位は、N－36°－Wをとる。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。各壁下には幅20cm前後で深さ7cm程度の比較的均一な形態の壁溝が巡っているが、住居の南東側壁の中央部から南側コーナー部にかけては途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居内には多数のピットが見られるが、本住居跡に伴うと考えられるものはP1～P9の9箇所であり、他はほとんどが中世以降のものである。P1～P4は、主柱穴と考えられるもので、住居の対角線上に配置されている。いずれも上半部に比較的大きな掘り方をもち、その中央か片側に寄った位置に直径20cm前後・深さ40cm～60cmの円形に近い形態の柱痕状のピットをもつ。P5は、主柱穴P3とP4の中間に位置するが、深さは10cmと浅いものである。住居中央部に位置するP6とP7は、直径40cm前後の円形に近い形態を呈し、深さは5cm程度で比較的浅い。P8とP9は、その形態や位置から貯蔵穴と考えられるものであるが、深さはいずれも10cm程度である。炉は、主柱穴に囲まれた住居中央部の西側にかなり寄った位置にある。床面が焼けているだけの地床炉であるが、炉の中央に長さ28cmの棒状の炉石を据えている。遺物は、多

量の土器と自然石を利用した砥石の破片が1個出土しているが、これらは住居中央部から北側の覆土中を主体に出土しており、住居廃絶後に投棄されたものである。本住居跡は、床面付近から多くの炭化材が出土していることから、火災によって消失したものと考えられる。

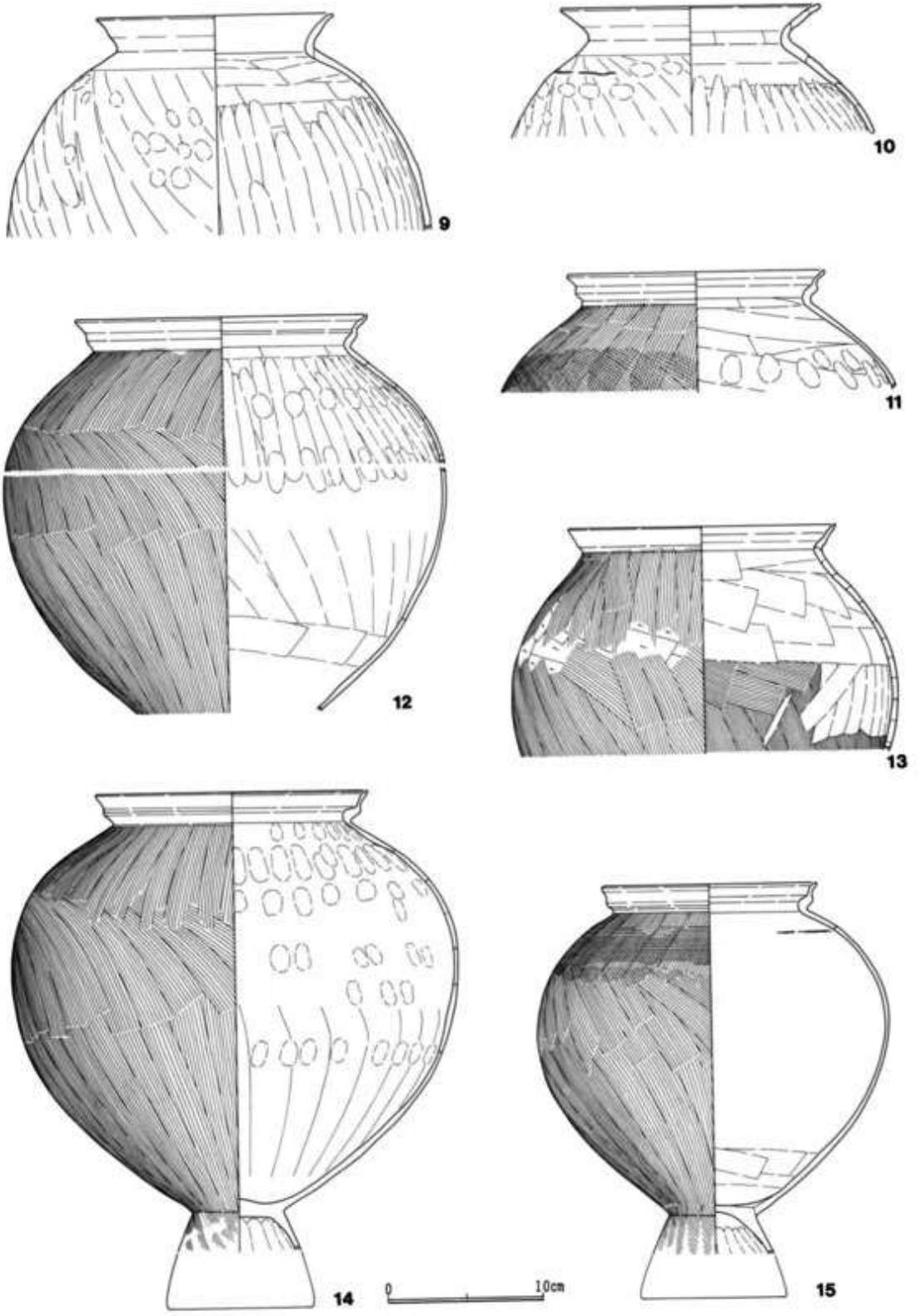
第191図　第3号住居跡

第3号住居跡土層説明

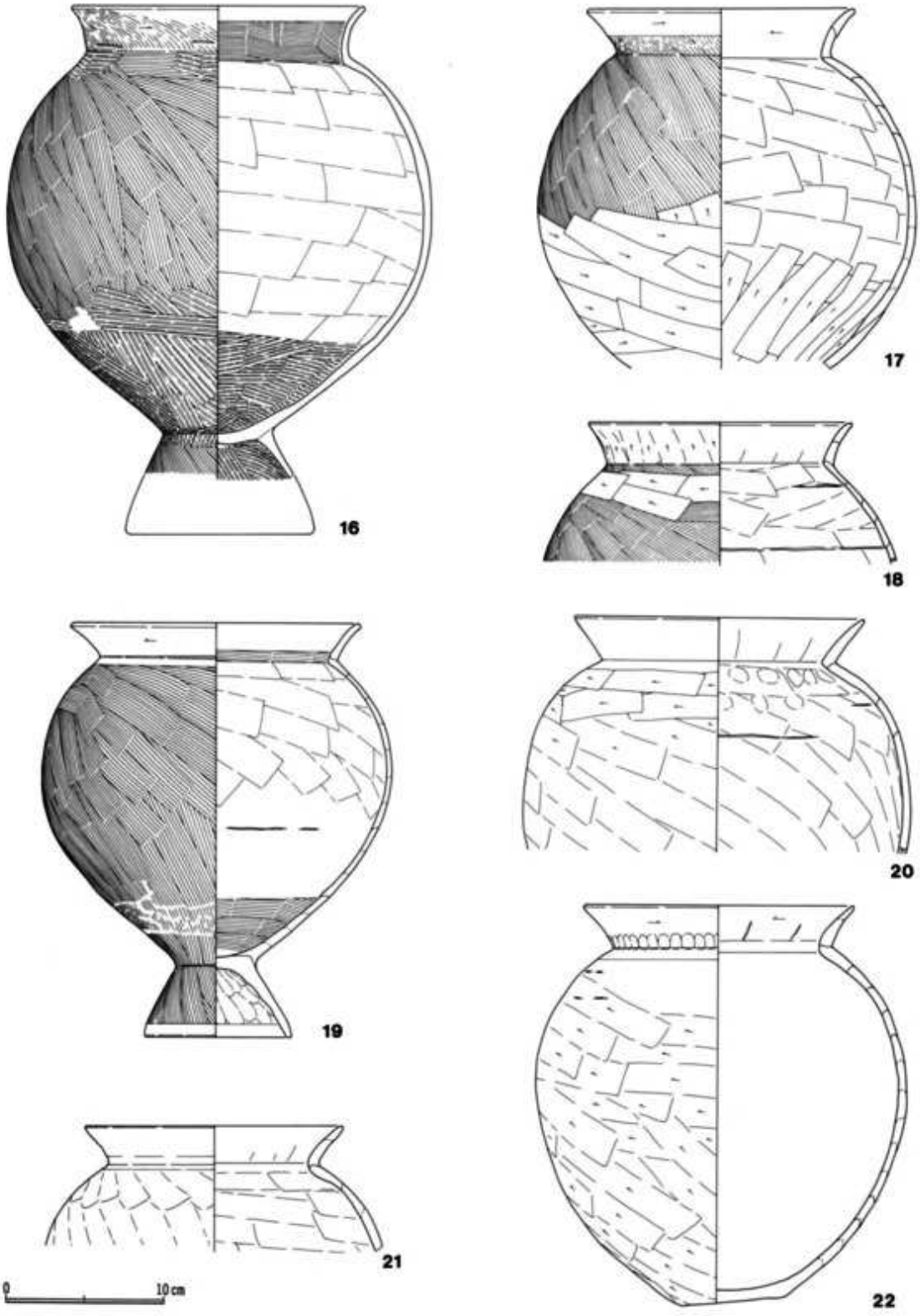
第1層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）



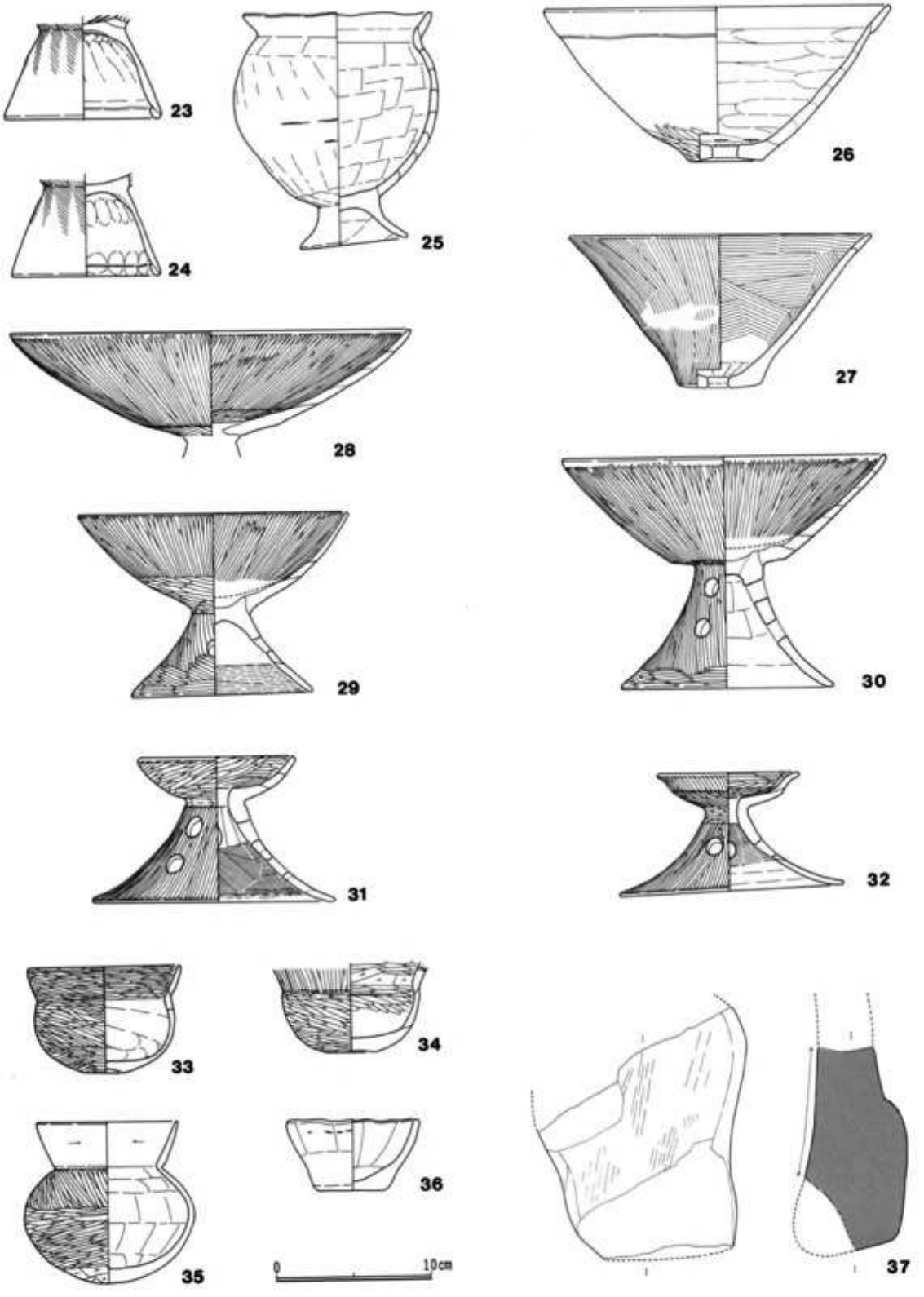
第192図　第３号住居跡出土遺物(1)



第193図　第３号住居跡出土遺物(2)



第194図　第３号住居跡出土遺物(3)



第195図　第３号住居跡出土遺物(4)

第3号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壷	口縁部径 14.8cm 器高 28.2cm 底部径 6.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は二重口縁を呈するが、上段は短い。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は突出し、輪台状の上げ底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ハケの後ナデ、内面ハケ。胴部外面ハケの後上半ケズリ、内面下半ハケの後上半篦ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－明橙褐色	ほぼ完形。 上半部は二次焼成を受けている。 覆土中。
2	壷	口縁部径 (16.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は粘土紐を外側に貼り付けて複合口縁にしている。	口縁部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗褐色	1/2。 覆土中。
3	壷	口縁部径 14.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、やや肩をもつ。	口縁部外面ヨコナデ、内面篦ナデ。胴部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色 内－淡褐色	3/4。口縁部外面の一部に二次焼成を受けている。 覆土中。
4	壷	残存高 21.7cm 底部径 8.6cm	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部はやや突出した平底を呈する。	胴部外面上半ハケの後ミガキ、下半ケズリの後ミガキ、内面ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・白色粒 外－明茶褐色 内－暗褐色	2/3。 覆土中。
5	壷	口径 15.4 器高 24.1 底径 6.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、下半に稜をもつ。底部は厚く突出する平底を呈する。	口縁部内外面ハケの後ミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面ハケの後篦ナデ。底部外面ナデ、内面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	4/5。 覆土中。
6	小形壷	残存高 15.3cm 底部径 2.7cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、球形を呈する。底部は若干窪む小さな平底。	口縁部内外面ミガキ。頸部内面シボリ目。胴部外面ミガキ、内面ナデ。	白色粒 口縁部内外－茶褐色 胴部内外－暗褐色	残存部完形。 胴部下半～底部は摩滅。 貯蔵穴上面。
7	小形壷	口径 11.0 器高 14.1 底径 2.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、球形を呈する。底部は小さな平底を呈する。	口縁部外面ヨコナデ、内面篦ナデの後上半ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	3/4。 覆土中。
8	小形壷	残存高11.2 底径 5.0	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、最大径を若干下位にもつ。底部は平底を呈す。	口縁部外面ハケ、内面ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ。内面ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	1/2。 外面黒斑あり。 覆土中。
9	甕	口縁部径 14.8cm 残存高 13.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、外面中位に若干稜をもつ。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篦ナデの後指ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗茶褐色 内－暗褐色	2/3。 覆土中。
10	甕	口縁部径 16.2cm 残存高 8.1cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、外面中位に若干稜をもつ。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面指ナデ、内面篦ナデの後指ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－暗茶褐色	4/5。 やや雑な作り。 覆土中。
11	甕	口縁部径 (16.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 外－暗褐色 内－淡褐色	1/3。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
12	甕	口縁部径 18.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面上半指ナデ下半篦ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	上半3/4、下半1/4。胴部上半と下半は接合しない。器形は図上復元。 覆土中。
13	甕	口縁部径 16.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや屈曲の弱い「S」字状を呈する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ハケの後部分的に篦ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡黄褐色	2/3。 外面黒斑あり。 覆土中。
14	台付甕	口縁部径 17.0cm 残存高 28.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面上半ナデ、下半篦ナデ。台部外面ハケの後ナデ、内面指ナデ。	片岩粒・白色粒 外－淡褐色 内面上半－淡褐色 内面下半－黒褐色	1/2。 覆土中。
15	台付甕	口縁部径 13.4cm 残存高 23.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向のハケの後肩部ヨコハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡褐色	2/3。 覆土中。
16	台付甕	口縁部径 18.2cm 残存高 28.2cm	粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。台部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ハケの後上半篦ナデ。台部内外面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	残存部ほぼ完形。 外面煤の付着あり。 覆土中。
17	甕	口縁部径 16.6cm 残存高 22.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部外面ハケの後ヨコナナデ、内面ヨコナデ。胴部外面上半ハケ下半ナデの後下半ケズリ、内面篦ナデの後下半ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明橙褐色	4/5。 外面黒斑及び煤の付着あり。 覆土中。
18	甕	口縁部径 (16.4cm) 残存高 8.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部外面ヨコナデの後ケズリ、内面篦ナデ。胴部外面ハケの後一部ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡橙褐色	1/3。 覆土中。
19	台付甕	口縁部径 18.0cm 器高 25.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は小さく、「ハ」の字状に開く。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面上半篦ナデ下半ハケ。台部外面ハケ、内面指ナデ。台端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	3/4。 外面中位煤の付着あり。 床面付近。
20	甕	口縁部径 (18.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に強く外反する。胴部は張り、やや肩をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗褐色	2/3。 覆土中。
21	甕	口縁部径 16.3cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	2/3。 覆土中。
22	甕	口径 16.8 器高 24.8 底径 6.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面丁寧なナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	4/5。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
23	台付甕	残存高 6.5cm	粘土紐積み上げ成形。台部は「ハ」の字状に開き、端部を内側に折り返す。	台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。	白色粒 内外－淡褐色	台部完形。 覆土中。
24	台付甕	残存高 6.5cm	粘土紐積み上げ成形。台部は「ハ」の字状に開き、端部を内側に折り返す。	台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。	白色粒 内外－淡褐色	台部完形。 覆土中。
25	台付甕	口縁部径 (12.0cm) 器高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾ぎみに外傾する。胴部はやや張り、最大径を上位にもつ。台部は低く、強く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面篦ナデ。台部内外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗茶褐色	1/2。 覆土中。
26	小形甕	口径(22.0) 器高 9.8 底径 4.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部は複合口縁を呈する。体部は内湾ぎみに開き、底部はやや窪む平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下端ケズリの後ミガキ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 外－淡茶褐色 内－明茶褐色	1/2。 外面黒斑あり。 覆土中。
27	小形甕	口径(19.2) 器高 9.7 底径(5.1)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に開き、口縁部はやや外反する。底部は平底を呈する。	体部内外面ナデの後ハケ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡橙褐色	1/4。 覆土中。
28	高坏	口縁部径 25.4cm	粘土紐積み上げ成形。坏部は下端に稜をもち、口縁部は内湾ぎみに開く。口唇部内側に斜行した面をもつ。	内外面ナデの後ミガキ。	片岩粒・白色粒 内外－茶褐色	4/5。 内外面とも剥落顕著。 床面付近。
29	高坏	口径 17.2 器高 11.6	粘土紐積み上げ成形。坏部は内湾しながら開く。脚部は低く外反ぎみに開く。	坏部内外面ミガキ。脚部外面ハケの後ミガキ、内面ハケの後下半ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	ほぼ完形。 脚部穿孔は3箇所。 床面直上。
30	高坏	口縁部径 20.6cm 器高 14.7cm	粘土紐積み上げ成形。坏部は下端に稜をもち、口縁部は内湾ぎみに開く。脚部はやや高く外反しながら開く。	坏部内外面ミガキ。口唇部内外面ヨコナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	ほぼ完形。 脚部穿孔は縦2個1組で3箇所。 床面直上。
31	器台	口径 10.0 器高 9.2	粘土紐積み上げ成形。器受部は内湾しながら開く。脚部は大きく外反する。	器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ハケの後上半篦ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－茶褐色	ほぼ完形。胴部穿孔は縦2個1組で3箇所。 床面付近。
32	器台	口縁部径 9.0cm 器高 7.7cm	粘土紐積み上げ成形。器受部は下半に稜をもち、口縁部は緩やかに外反する。脚部は大きく外反する。	器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ハケの後下半ナデ。	白色粒 内外－暗茶褐色	ほぼ完形。 器受部内面剥落顕著。 脚部穿孔は3箇所。 床面付近。
33	小形鉢	口径 9.8 器高 6.8 底径 2.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く内湾ぎみに外傾する。胴部はやや張り、底部は窪む小さな平底を呈する。	口縁部内外面ミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面指ナデ。底部外面ナデ。	白色粒 外－茶褐色 内－暗褐色	完形。 内面煤の付着あり。 覆土中。
34	小形壺口縁	残存高 5.7cm 底部径 2.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外傾する。胴部はあまり張らず、底部は若干窪む小さな平底を呈する。	口縁部外面ミガキ、内面ケズリの後ミガキ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデの後上半ミガキ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－茶褐色	3/4。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
35	小形直口壺	口縁部径 9.0cm 器高 10.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は丸底ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ミガキ、内面箆ナデの後上半指ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 外－淡茶褐色 内－暗灰褐色	完形。 二次焼成を受けている。 覆土中。
36	小形土器	口径 8.4 器高 4.5 底径 4.2	粘土紐積み上げ成形。体部は内湾ぎみに開き、底部は平底を呈する。	体部外面ナデ、内面箆ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	ほぼ完形。 覆土中。
37	砥石	残存長15.8 残存幅12.5 厚さ 6.4	自然石を利用。両端部を欠損している。	表面（1面）のみ良く擦られており、擦痕が見られる。		約2/3。 重さ（1443g） 床面付近。

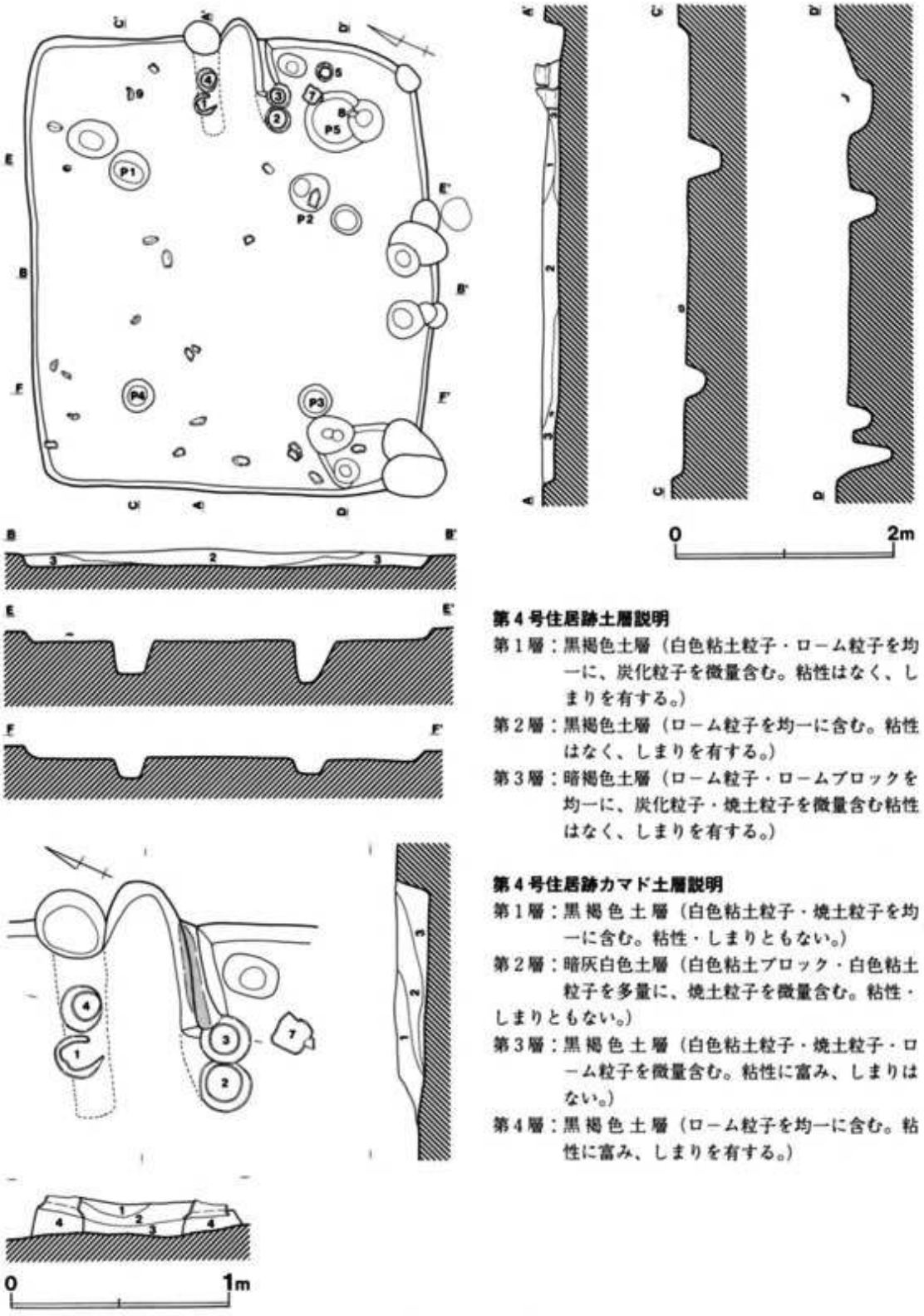
第4号住居跡（第196図）

A地点の調査区中央部の西側寄りに位置し、重複する第5号住居跡・第7号住居跡・第16号住居跡・第51号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は比較的整った長方形を呈し、規模は南西から北東方向が4.20m、南東から北西方向が3.76mを測る。住居跡の主軸方位は、N－64°－Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmある。床面は、暗褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体的にあまり堅緻ではない。本住居跡に伴うと考えられるピットは、P1～P5の5箇所で、その他はすべて中世以降のものである。P1～P4は、主柱穴でほぼ住居の対角線上に位置するが、その配置はやや歪んでいる。直径30cm～40cmの円形を呈し、深さは15cm～40cmある。P5は、その位置から貯蔵穴と考えられるもので、深さは22cmある。カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置し、壁に対してほぼ直角に、壁を若干掘り込んで構築されている。規模は、全長が約1.05m・最大幅は90cmと推測される。袖は、すでに左側の袖が崩壊していたが、黒褐色土を床面上に盛り上げ構築し、内部に甕を2個ずつ伏せて補強に使用している。燃焼部は、掘り方をもたず床面とほぼ同じ高さを燃焼面（火床）にしているが、あまり焼けていない。遺物は、カマド周辺から土師器の甕や坏が出土し、住居西側の床面上や床面付近からは長さ15cm程度の偏平な片岩が比較的多く散在して出土している。

第4号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 19.8cm 残存高 19.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境にヨコナデによる段をもつ。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－淡茶褐色 内－明茶褐色	2/3。 カマド袖。
2	甕	口縁部径 21.2cm 残存高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境にケズリによる段をもつ。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－淡褐色 内－暗茶褐色	上半部完形。 カマド袖。
3	甕	口縁部径 21.0cm 残存高 11.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境にヨコナデによる段をもつ。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	3/4。 カマド袖。



第4号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（白色粘土粒子・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む粘性はなく、しまりを有する。）

第4号住居跡カマド土層説明

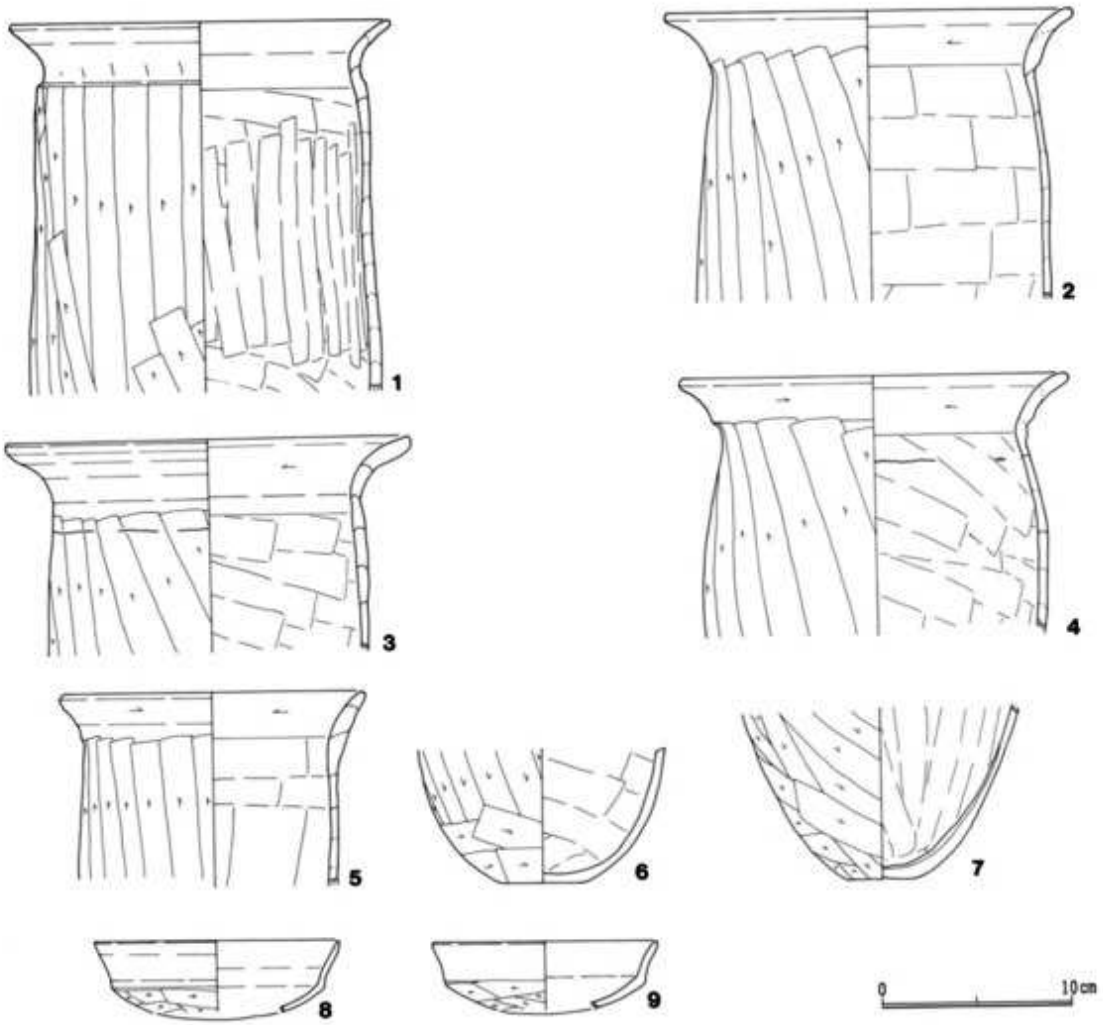
第1層：黒褐色土層（白色粘土粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗灰白色土層（白色粘土ブロック・白色粘土粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第3層：黒褐色土層（白色粘土粒子・焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第196図　第4号住居跡



第197図　第4号住居跡出土遺物

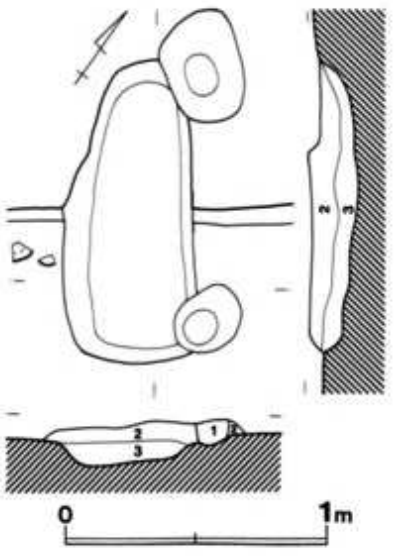
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	甕	口縁部径 20.2cm 残存高 13.5cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境にケズリによる段をもつ。胴部は若干張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡褐色	3/4。 カマド袖。
5	甕	口縁部径 15.8cm 残存高 10.1cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、胴部との境にケズリによる段をもつ。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	上半部完形。 床面直上。
6	甕	底部径 4.4cm	粘土紐積み上げ成形。底部は小さく薄い平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。底部外面ケズリ。	白色粒 外－淡灰褐色 内－淡橙褐色	1/3。 覆土中。
7	甕	底部径 3.6cm	粘土紐積み上げ成形。底部は小さな平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 内外－暗褐色	1/4。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	坏	口縁部径 12.8cm	口縁部は蛇行ぎみに外傾する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	口縁部1/2。貯蔵穴内。
9	坏	口縁部径 (11.8cm)	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	口縁部1/3。覆土中。

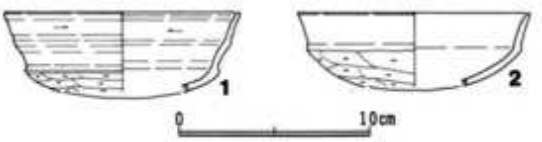
第５号住居跡（第200図）

Ａ地点の調査区中央部の西側寄りに位置し、重複する第４号住居跡に切られ、第６号住居跡と第７号住居跡及び第51号住居跡を切っている。すでに住居跡の床面近くまで耕作による削平を受けており、また住居跡内は中世以降の多数のピットに切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形ぎみの形態を呈しているが、若干逆台形状に歪んでいる。規模は、北西から南東方向が4.80m、南西から北東方向が5.23mある。住居跡の主軸方位は、N－32°－Wをとる。壁は、最高で５cm程度しか残存していない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体にやや軟弱である。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ４の４本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。直径30cm～45cmの円形を呈し、深さは最低15cm～最高50cmでばらつきが見られる。カマドは、住居北西側壁の中央からやや西側に寄った位置にあり、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長1.18m・幅1.02mを測る。袖は、すでに崩壊してその痕跡は見られなかったが、カマド内や周辺の覆土中に白色粘土ブロックが見られることから、おそらく白色粘土を使って構築されていたものと思われる。燃焼部は、住居の壁を掘り込んで作られており、第３層の黒褐色土を埋め戻して床面とほぼ同じ高さを燃焼面(火床)にしていたようである。遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。



第198図　第５号住居跡カマド



第199図　第５号住居跡出土遺物

第５号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗褐色土層（白色粘土ブロック・白色粘土粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第３層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第200図　第5・6号住居跡

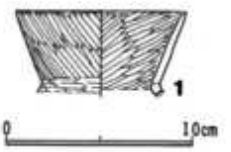
第5号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口縁部径 (12.2cm)	口縁部は蛇行ぎみに外傾し、外面中位に段をもつ。体部は浅く、口縁部との境は突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外－淡褐色	口縁部1/3。 覆土中。
2	坏	口縁部径 (12.0cm)	口縁部は緩やかに外反し、体部との境は若干突出する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	口縁部1/4。 覆土中。

第6号住居跡（第200図）

A地点の調査区中央部の西側寄りに位置し、重複する第5号住居跡に切られ、第29号住居跡を切っているようである。すでに住居跡の床面近くまで耕作による削平を受けており、また住居跡内は中世以降の多数のピットに切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、比較的整った方形を呈するようである。規模は、北西から南東方向が4.32m、南西から北東方向が4.34mある。壁は、最高で5cm程度しか残存していない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体にやや軟弱である。主柱穴は、P5～P6の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。直径40cm～75cmの楕円形ぎみの形態を呈し、深さはいずれも50cm程度ある。遺物は、覆土中から土器片が少量出土しただけである。



第201図　第6号住居跡出土遺物

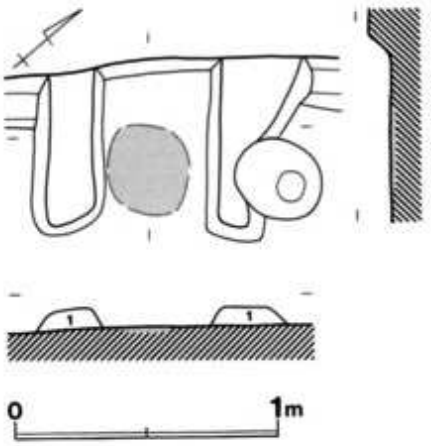
第6号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形壺口縁	口縁部径 (8.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部内外面ミガキ。胴部外面ミガキ、内面ナデ。	白色粒 内外－明茶褐色	口縁部1/2。 覆土中。

第7号住居跡（第202図）

A地点の調査区中央部の西側寄りに位置し、重複する第4号住居跡と第5号住居跡及び第1号井戸跡に切られ、第8号住居跡を切っている。住居跡の床面付近まで耕作による削平を受けており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、長方形ぎみの形態を呈しているが、南東側壁はやや開いている。規模は、北西から南東方向が4.76m、南西から北東方向が5.26mを測る。住居跡の主軸方位は、N－51°－Wをとる。壁は、最高で6cm程度しか残存していない。壁溝は、北西側と北東側の壁下の一部に見られ、全周せずに途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体にやや軟弱である。主柱穴は、P1とP2が該当するものと思われ、その位置から4本主柱穴と推測される。形態は、いずれも上半に大きな掘り方をもち、中心部に直径30cm・深さ50cmの楕円形に近い柱痕状のピットをもつ。P3は、貯蔵穴と考えられるもので、住居東側コーナー部に位置している。平面形は規模の大きな四角形を呈し、3段に深くなっている。床面からの深さ



第7号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

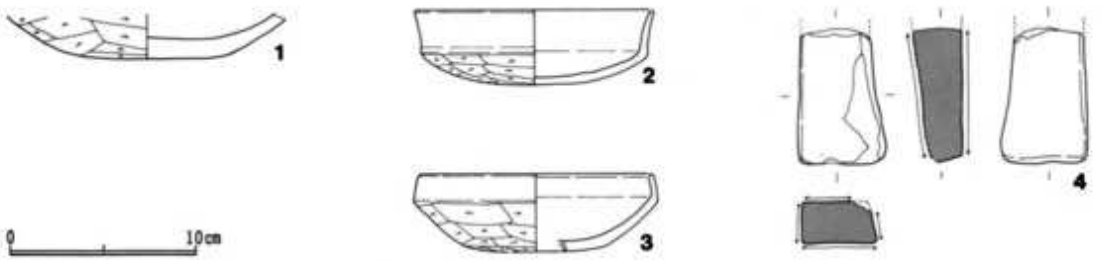
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7号住居跡カマド土層説明

第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第202図　第7号住居跡

は40cmある。カマドは、住居北西側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長70cm・最大幅1mを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、床面上に盛り上げて構築している。燃焼部は、比較的良く焼けているが、掘り方をもたず住居床面をそのまま燃焼面(火床)にしている。遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。



第203図　第7号住居跡出土遺物

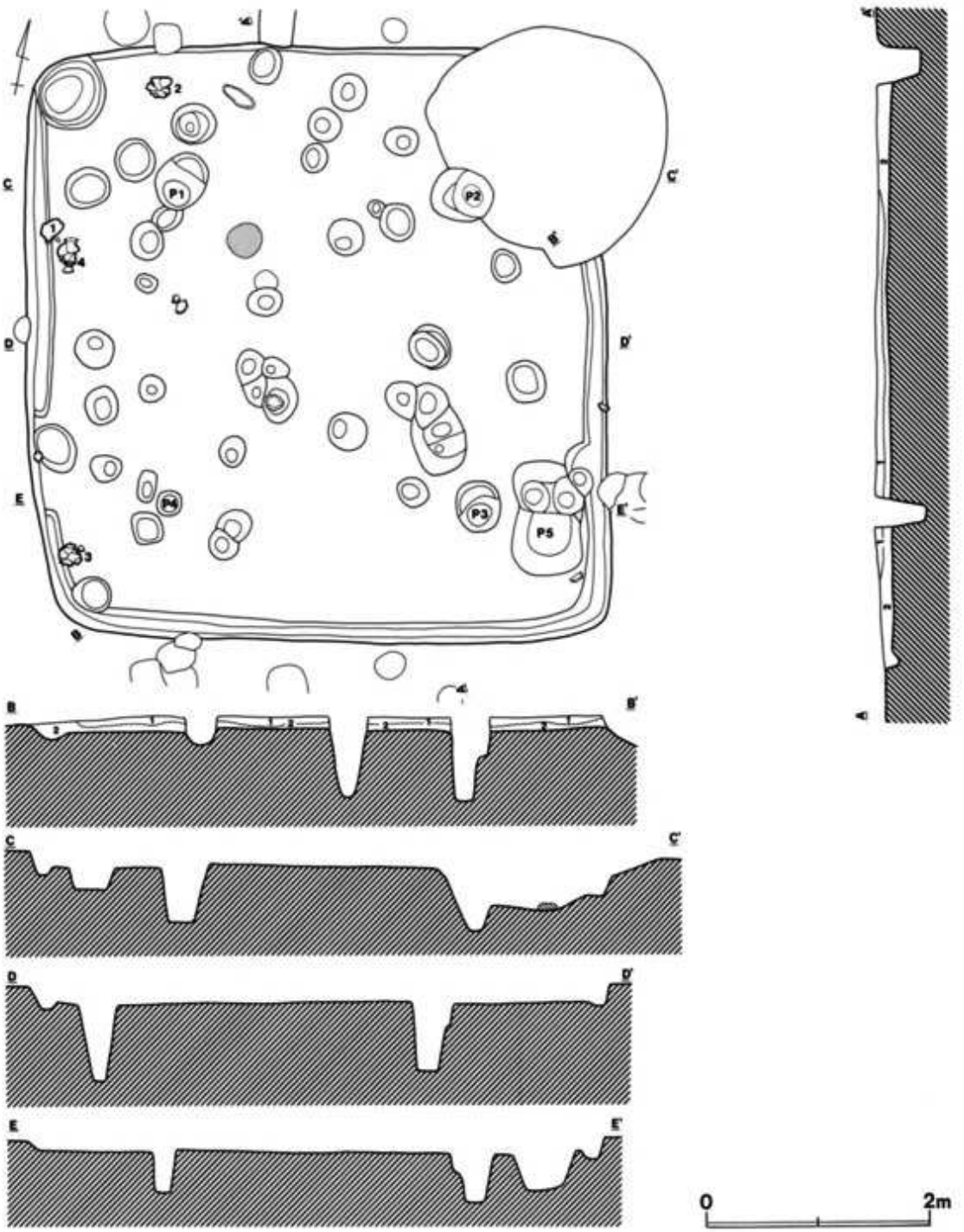
第7号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕		粘土紐積み上げ成形。底部は不安定な平底を呈する。	底部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－暗褐色	底部のみ。 覆土中。
2	坏	口径(12.4) 器高 3.9	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/2。 覆土中。
3	坏	口径(12.0) 器高 4.0	口縁部はやや短く直線的に内傾する。体部は深く、底部はやや丸みを帯びている。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 小石 内外－暗茶褐色	1/4。 内面斑点状剥落顕著。 覆土中。
4	砥石	長さ 7.0 幅 4.5 厚さ 2.5	自然石を断面長方形の柱状に加工。	表裏面及び両側面とも良く擦られている。	凝灰岩	約1/2。 重さ111g 覆土中。

第8号住居跡（第204図）

A地点の調査区西側に位置し、重複する第7号住居跡と第1号井戸跡及び第12号溝跡に切られている。住居跡内は中世以降の多数のピットに切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、南北方向が5.28m、東西方向が5.18mを測る。住居跡の主軸方位は、N－11°－Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で14cmある。壁溝は、北側壁以外の各壁下に見られるが、西側壁下では一部途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが、周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。長さ20cm～50cmの円形を呈し、床面からの深さはいずれも45cm前後ある。P5は、貯蔵穴と考えられるもので、比較的規模が大きく、住居南東側コーナー部付近に位置している。底面は広くやや丸みをもち、床面からの深さは30cmある。炉は、住居中央部の北西側寄りに2箇所並んで位置する。いずれも床面が焼けているだけの地床炉で、円形に良



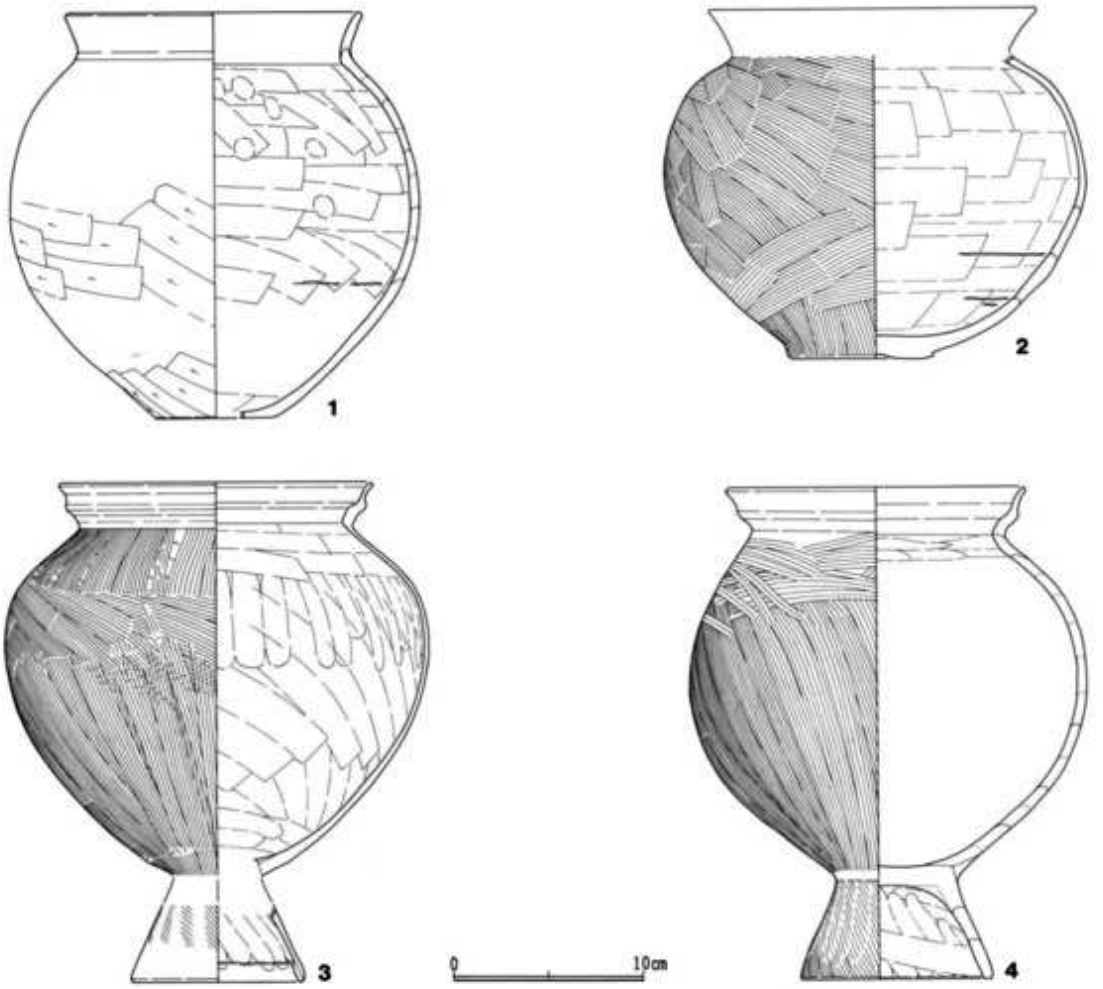
第204図　第8号住居跡

第8号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

く焼けて赤色化している。遺物は、住居西側壁際の床面上より、平底甕や台付甕が横転したような状態で出土している。土器以外では、住居北側の壁際床面付近より、長さ33cm・幅14cmの比較的大きく偏平な片岩が1個出土している。



第205図　第8号住居跡出土遺物

第9号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(15.4) 器高(21.0) 底径 6.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は突出せず薄い平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後中位と下端ケズリ、内面ナデの後上半箆ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。	片岩粒・白色粒 外－暗褐色 内－淡褐色	1/2。 外面煤の付着あり。 口縁部と胴部は接合しない。 器形は図上復元。 床面付近。
2	甕	残存高 15.7 底部径 7.5	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は若干突出する。	胴部外面ナデの後ハケ、内面箆ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	2/3。 床面直上。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	台付甕	口縁部径 (16.2cm) 推定高 (25.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は直線的に開き、端部を折り返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面篦ナデ及び中位指ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	1/3。 床面直上。
4	台付甕	口縁部径 15.6cm 器高 25.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや弱い「S」字状に屈曲する。胴部は張り最大径を中位にもつ。台部は直線開く。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面丁寧なナデ。台部外面ハケ、内面指ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	1/2。 S字状口縁台付甕の模倣品。外面下半は二次焼成を受けている。 床面付近。

第９号住居跡（第207図）

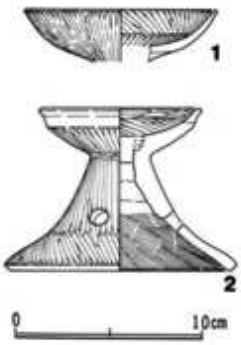
Ａ地点の調査区西側に位置し、重複する第12号溝跡に切られ、第10号住居跡を切っている。住居跡の床面近くまで耕作による削平を受けているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、比較的小規模で、南西から北東方向が3.32m、南東から北西方向が3.20mを測る。住居跡の主軸方位は、N－64°－Eをとる。壁は、７cm程度しか残存していない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体に比較的堅緻である。住居内にはピットが多く見られるが、本住居跡に伴うものか明確ではない。カマドは、住居北東側壁の中央やや南側寄りに付設されていたようである。すでに崩壊していたため規模や形態は不明であるが、壁際の床面上に焼けた部分とその両側に袖の痕跡と思われるやや色調の異なる部分が認められる。遺物は、古墳時代後期鬼高式土器の破片が少量出土しただけである。

第10号住居跡（第207図）

Ａ地点の調査区西側に位置し、住居跡の中央部を重複する第９号住居跡と第12号溝跡に切られ、住居北東側コーナー部を近世後半以降の土壙に切られている。耕作により住居跡の床面間際まで削平されているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

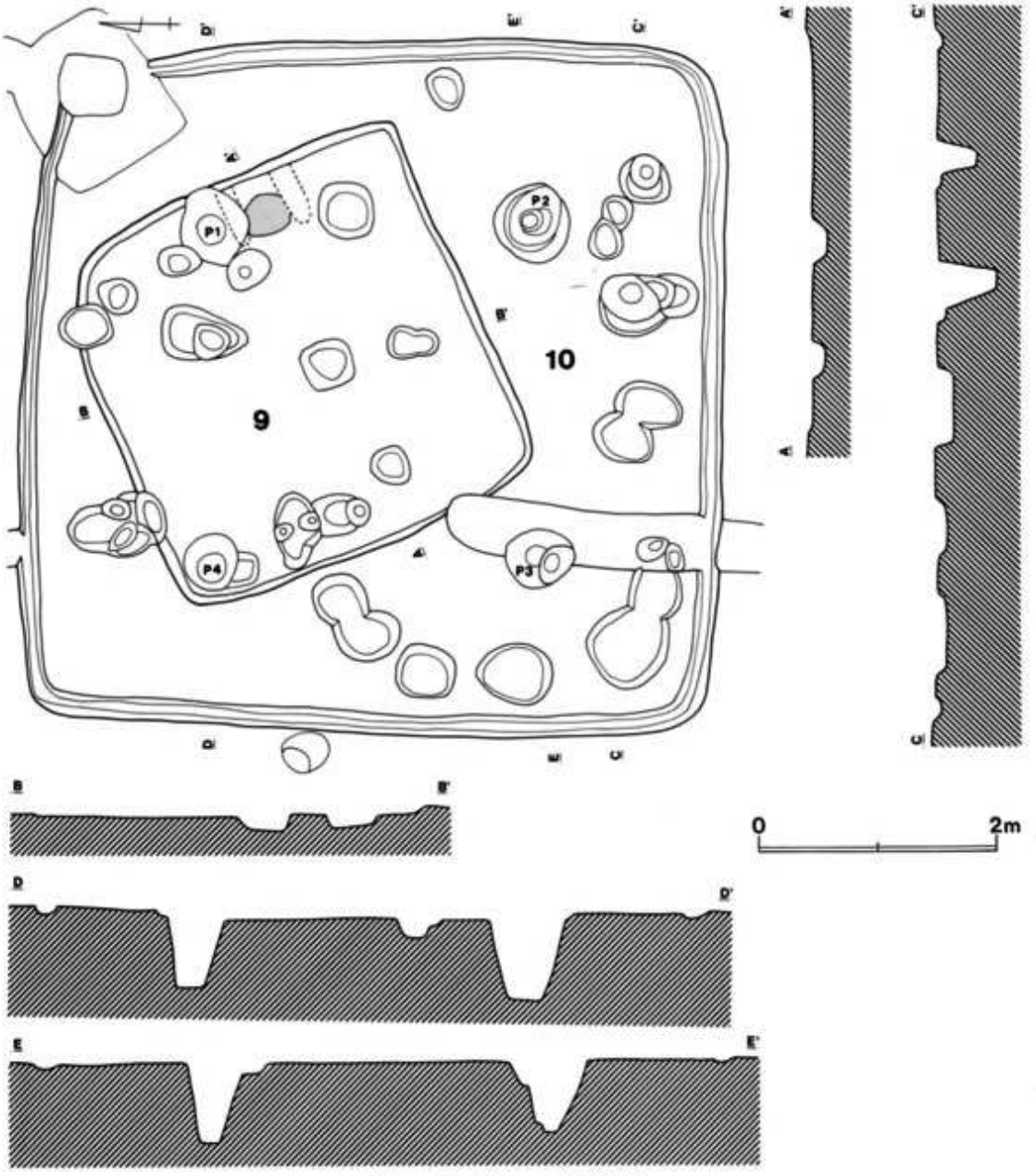
平面形は、コーナー部が若干丸みをもつ方形を呈している。規模は、南北方向が5.84m、東西方向が5.78mを測る。壁は、ほとんど残存していないため明確ではないが、各壁下には幅15cm・深さ４cm程度の壁溝が途切れずに全周するようである。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが、周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ４の４本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。直径45cm～65cmの円形を呈する比較的大きな掘り方をもち、深さは60cm～70cmある。遺物は、床面付近より土器片が少量出土しただけである。



第206図　第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	器台	口縁部径 (10.0cm)	粘土紐積み上げ成形。器受部は内湾ぎみに開く。	器受部内外面ミガキ。	片岩粒 内外－明橙褐色	器受部1/3。 床面付近。
2	器台	口縁部径 (8.4cm) 器高 8.4cm	粘土紐積み上げ成形。器受部は下端に稜をもち、口縁部は短く緩やかに外反する。脚部は大きく外反する。	口縁部外面ヨコナデ。器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ハケ。	片岩粒・白色粒 内外－暗茶褐色	1/4。 脚部の円孔は3箇所と思われる。 床面付近。

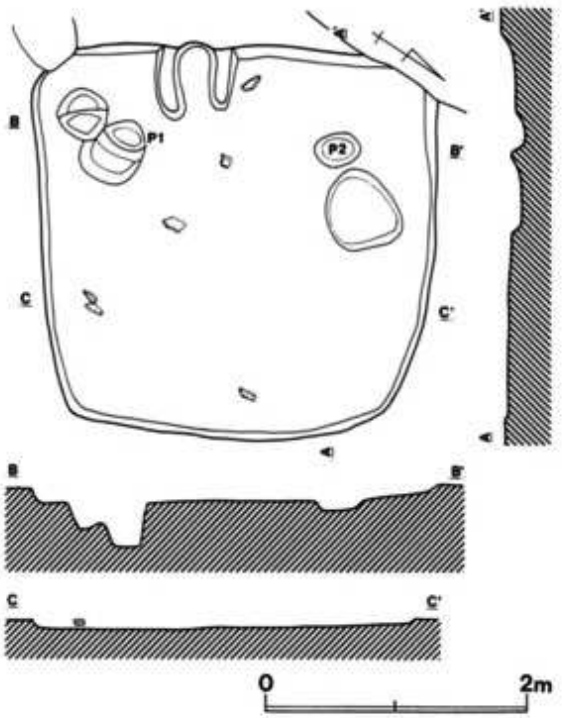


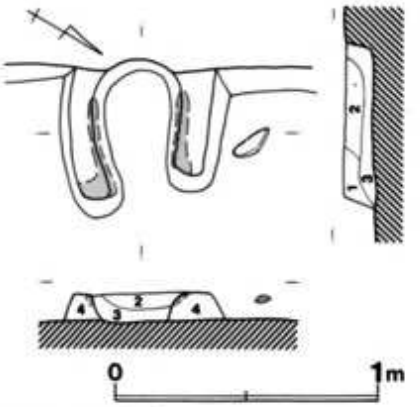
第207図　第9・10号住居跡

第11号住居跡（第208図）

A地点の調査区西側に位置し、重複する第1号円形周溝遺構を切っている。耕作により住居跡の床面近くまで削平されを受けているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ方形を呈している。規模は、南西から北東方向が3.04m、北西から南東方向が3.12mを測る。住居跡の主軸方位は、N−120°−Wをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で10cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体に堅緻である。P1とP2は、長さ35cmの楕円形に近い形態を呈し、深さは34cmと7cmある。いずれも住居の対角線上にあり、住居の北東側にはピットが見られないが、4本主柱穴の一部であった可能性も考えられる。カマドは、住居南西側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長60cm・最大幅62cmある。袖は、灰白色粘土（第4層）を床面上に盛り上げ、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁

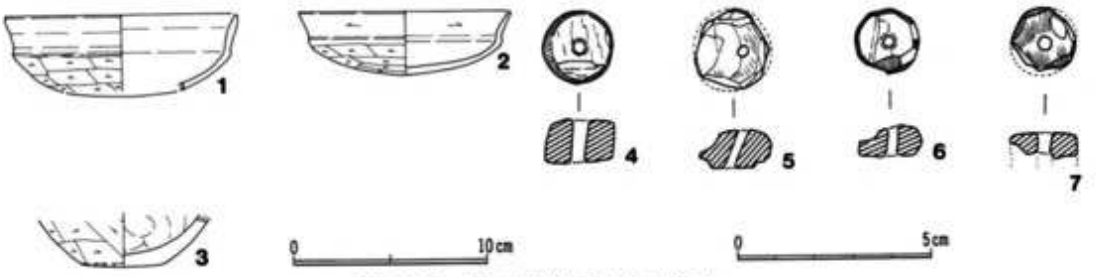




第11号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粘土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：暗灰白色土層（灰白色粘土ブロック・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：灰白色粘土層（灰白色粘土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第208図　第11号住居跡



第209図　第11号住居跡出土遺物

を掘り込まない形態で、床面をそのまま燃焼面(火床)にしている。遺物は、床面付近より少量の土器片と石製の玉が4個出土している。この他では、住居東側の壁際床面上に長さ15cm位の片岩が3個やや離れた位置に見られる。

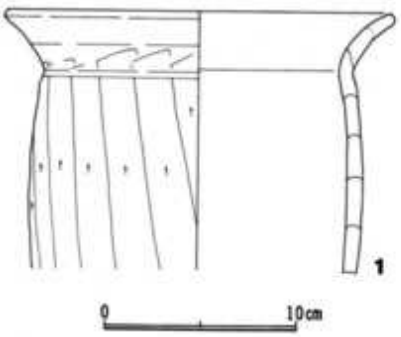
第11号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口縁部径 12.0cm	口縁部は直線的に外傾し、体部との境は突出する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	3/4。 覆土中。
2	坏	口径(11.0) 器高 3.2	口縁部は短く緩やかに外傾する。体部は浅く底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－暗橙褐色 内－橙褐色	1/2。 覆土中。
3	甕	底部径 4.4cm	粘土紐積み上げ成形。底部は小さく、不安定な平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－橙褐色	2/3。 覆土中。
4	石製玉	直径 1.8 高さ 1.1	比較的大きなもので、上下両面とも平坦をなしている。	上下両面とも未調整。側面研磨。	片岩	完形。重さ9g。 床面上。
5	石製玉	直径 1.9 高さ 1.0	比較的大きなもので、上下両面とも一部剥離しているが平坦をなしている。	上下両面とも未調整。側面は剥落しているため不明。穿孔は斜めに施されている。	片岩	一部剥離。 重さ5g。 床面上。
6	石製玉	直径 1.6 高さ 0.8	比較的大きなもので、上下両面とも平坦をなしている。	上下両面とも未調整。側面雑な研磨。	片岩	完形。重さ2g。 床面上。
7	石製玉	直径 1.7	比較的大きなもので、下半は剥離している。	上面及び側面研磨。	片岩	約1/2。重さ1g。 床面上。

第12号住居跡（第211図）

A地点の調査区北西側に位置し、重複する第2号井戸跡と第4号溝跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面間際まで削平されているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

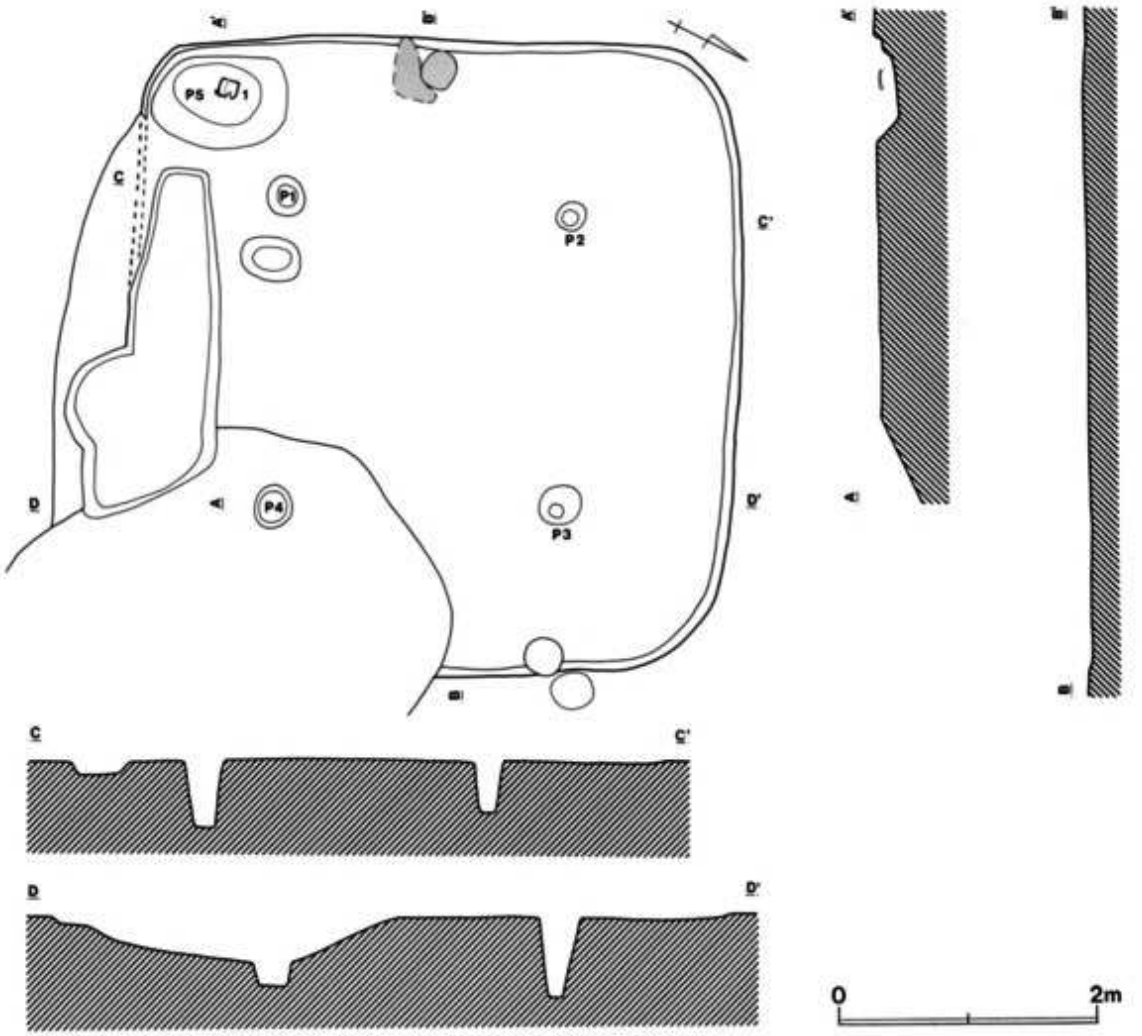
平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈しいる。規模は、南西から北東方向が4.90m、南東から北西方向が4.75mを測る。住居跡の主軸方位は、N－117°－Wをとる。壁は、2cm～3cmしか残存していないため、明確ではない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体にやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。直径20cm～30cmの円形を呈し、深さは40cm～60cmある。P5は、貯蔵穴と考えられるもので、住



第210図　第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (20.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡褐色	1/4。 貯蔵穴上面。

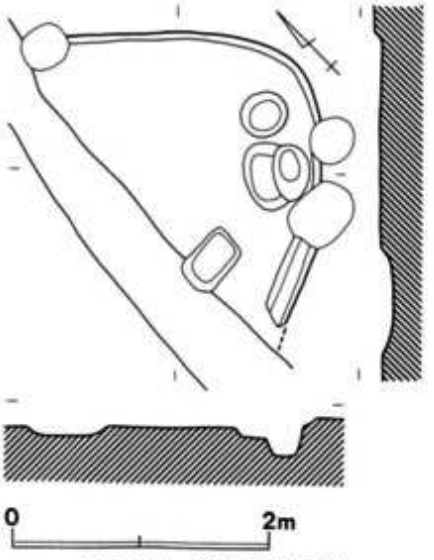


第211図　第12号住居跡

居南側コーナー部に位置している。106cm×72cmの楕円形ぎみの形態を呈し、深さは18cmで比較的浅い。カマドは、住居南西側壁の中央に位置している。すでに崩壊していたため規模や形態は不明であるが、燃焼面の焼けた部分とその左側の床面上に袖の構築材の灰白色粘土の痕跡が認められる。遺物は、土器片が少量出土しただけであるが、貯蔵穴内よりNo.1の甕の破片が出土している。

第13号住居跡（第212図）

A地点の調査区西端に位置し、重複する第4号溝跡に切られている。遺構の遺存状態は劣悪で、すでに住居跡の大半は耕作により削平されており、住居跡の東側コーナー部付近しか残存していなかった。



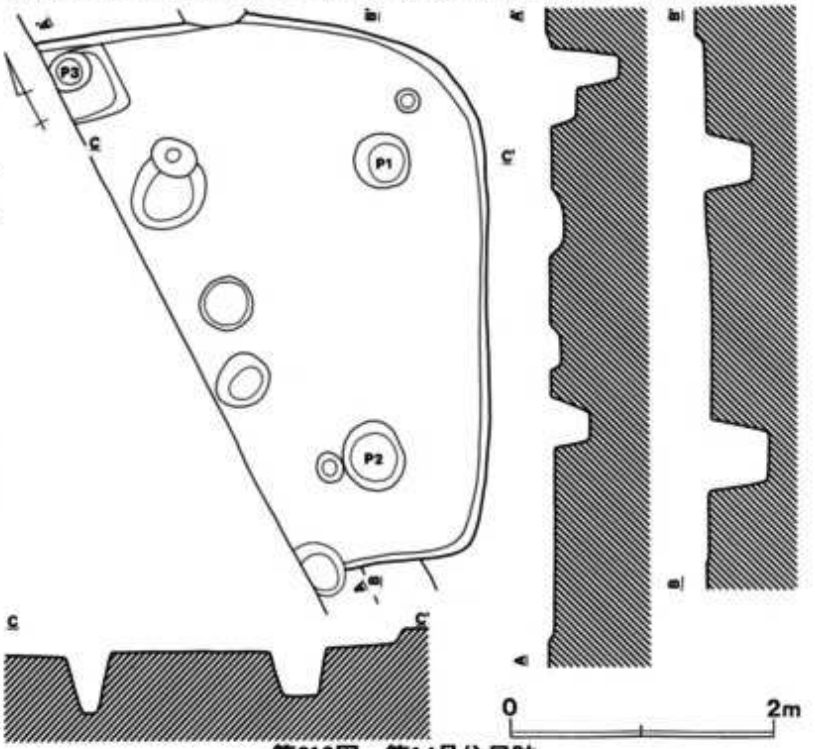
第212図　第13号住居跡

壁は、最高で8cm程度残存しており、南東側壁の壁下には一部壁溝が見られる。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式と思われ、住居周辺部のためかやや軟弱である。住居内及びその周辺にあるピットは、すべて本住居跡に伴うものではなく、中世以降のものである。遺物は、覆土中より古墳時代後期鬼高式土器の破片が数片出土しただけである。

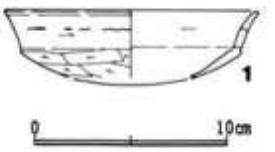
第14号住居跡（第213図）

A地点の調査区西端に位置し、重複する第4号溝跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、住居跡の西側半分が調査区外に位置しているため明確ではないが、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形かあるいは長方形を呈するものと思われる。規模は、南西から北東方向が4.24m、北西から南東方向は3.46mまで測れる。壁は、最高で12cm程あり、緩やかに立ち上がっている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが、周辺部はやや軟弱である。本住居跡に伴うピットは、P1～P3の3箇所である。P1とP2は、その位置から主柱穴と考えられるもので、おそらく住居の対角線上に配置される4本主柱穴の一部と推測される。直径40cm～50cmの円形を呈し、深さは36cm～46cmある。P3は、北東側壁の壁際に位置し、方形もしくは長方形の掘り込みの端に、直径30cm・深さ55cmの円形のピットを伴っている。その位置や形態から入口部の施設とも思われるが、住居跡の全容が不明であるため明確ではない。遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。



第213図　第14号住居跡



第214図　第14号住居跡出土遺物

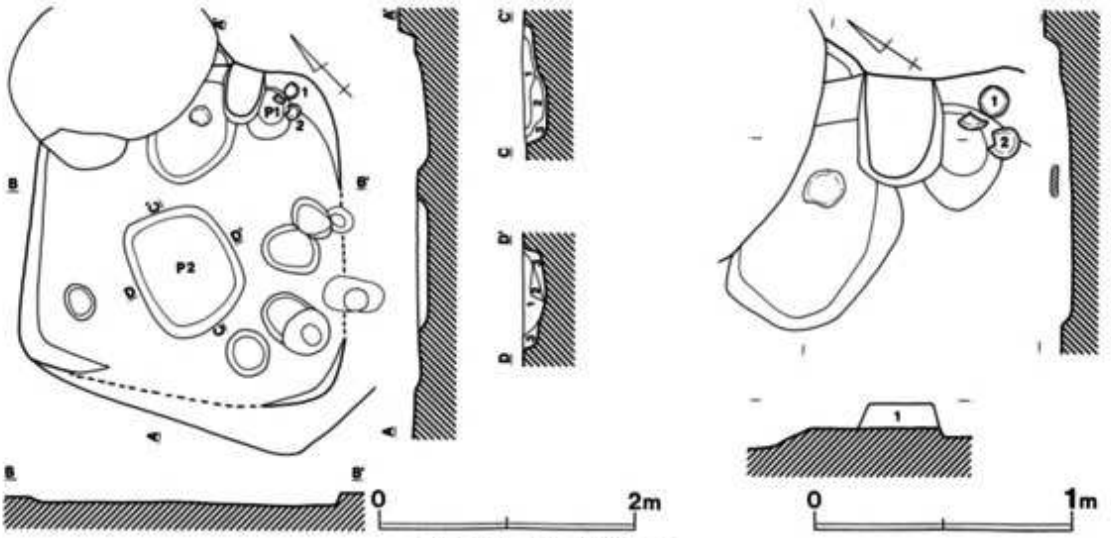
第14号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口縁部径（13.2cm）	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/4。覆土中。

第15号住居跡（第215図）

A地点の調査区西端に位置する。住居跡の北側コーナー部を第5号土壙に、住居跡の南側を第3号溝跡に切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ方形ぎみの形態を呈している。規模は、北東から南西方向が2.60m、北西から南東方向が2.52mを測る。住居の主軸方位は、ほぼN−47°−Eをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、北東側壁で最高18cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体にやや軟弱である。本住居跡に伴うピットは、カマド右側の住居東側コーナー部に位置するP1だけである。深さは10cm程度であるが、その位置から見て小規模な貯蔵穴であった可能性もある。カマドは、住居北東側壁の中央部に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。カマドの北側半分を第5号土壙に切られているため全容は不明であるが、残存長は112cmある。袖は、白色粘土やロームブロックを含む暗灰白色土を床面上に盛り上げて構築している。燃焼部は、床面よりも5cm程度低く、中央部には底面から5cm浮いて自然石が1個ある。



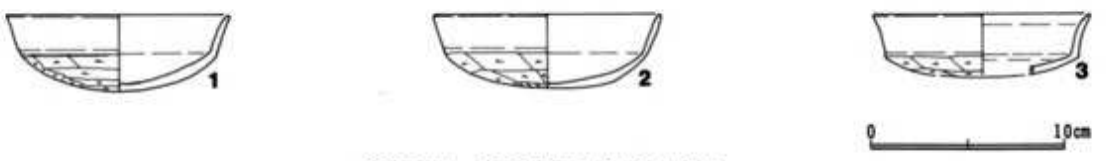
第215図　第15号住居跡

第15号住居跡床下土壙（P2）土層説明

第1層：暗褐色土層（ロームブロック・白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：白色粘土層（白色粘土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第15号住居跡カマド土層説明

第1層：暗灰白色土層（白色粘土ブロック・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第216図　第15号住居跡出土遺物

煙道部は、住居壁外に若干延びる部分が見られるだけである。本住居跡の中央部には、100cm×80cmの床下粘土土壙(P2)が1基ある。土壙内には、カマド構築材と類似した白色粘土が多量に見られるが、土壙上面には明確な貼床はされていない。遺物は、比較的少ないが、住居東側コーナー部の覆土中より、完形に近い土師器坏が壁上から落ち込んだような状態で出土している。

第15号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 11.6 器高 3.9	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	完形。 覆土中。
2	坏	口径 11.8 器高 3.8	口縁部は直線的に外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒 内外－淡橙褐色	ほぼ完形。 覆土中。
3	坏	口径(11.2) 推定高(3.3)	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－橙褐色	1/4。 覆土中。

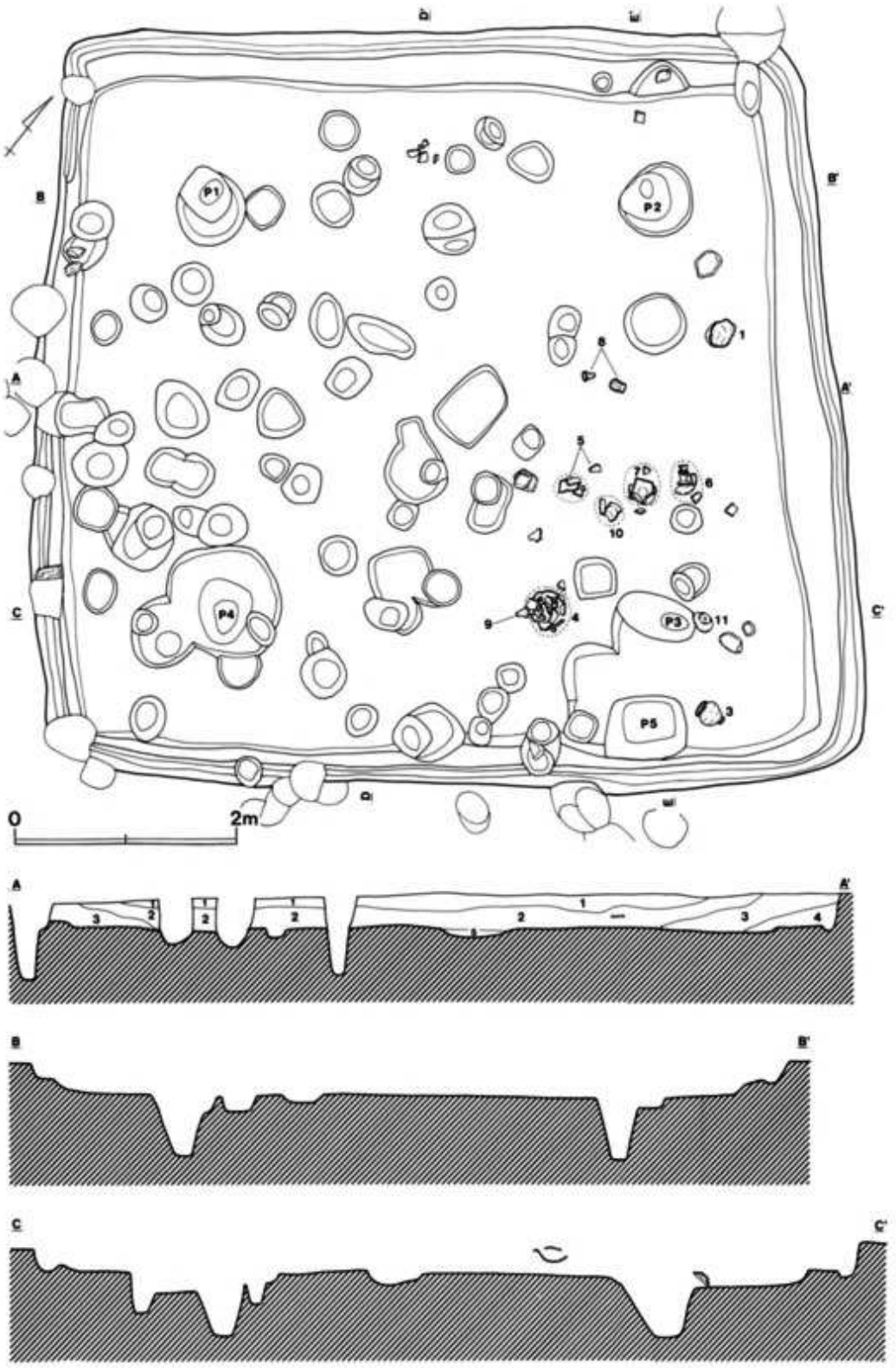
第16号住居跡（第217図）

A地点の調査区中央部のやや東側寄りに位置し、重複する第4号住居跡に切られ、第29号住居跡と第51号住居跡を切っている。本住居跡は、住居内を多数の中世以降のピットに切られているが、遺存状態は比較的良好な方である。

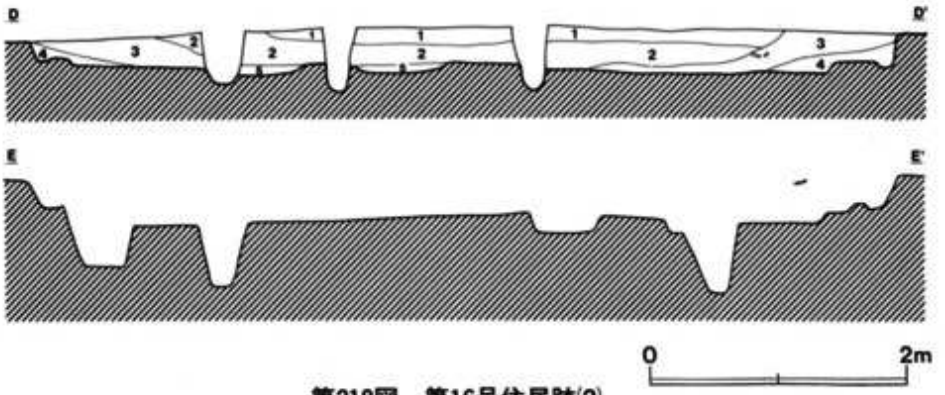
平面形は、長方形を基調にしているが、若干台形ぎみである。規模は、南西から北東方向が7.32m、北西から南東方向が6.68mある。住居の主軸方位は、N－50°－Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で30cmある。各壁下には幅20cm・深さ4cm程度の比較的均一な壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式であるが、壁際は5cm～10cm程地山ローム土を平らに掘り残してテラス状に一段高くしている。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、長さ50cm～70cmの円形もしくは楕円形を呈する比較的規模の大きな柱穴掘り方で、床面からの深さはいずれも50cm程度ある。貯蔵穴は、南東側壁際の東側コーナー部寄りに位置するP5で、74cm×56cmの長方形ぎみの形態を呈している。底面は平坦で深さは40cmある。炉やカマドは、確認されなかった。遺物は、比較的撹乱の少ない住居跡東側の覆土中から土器が多く出土している。これらの土器は、古墳時代中期の和泉式土器が主体であり、本住居跡の時期に近い土器と考えられるが、一部東側コーナー部の覆土上面からは古墳時代前期の完形に近いS字状口縁台付甕が単独で出土している。また、No12の柱状の砥石は、本住居跡に伴うものではなく、住居跡内に多数見られる中世以降のピットの覆土中から出土したものである。

第16号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗茶褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



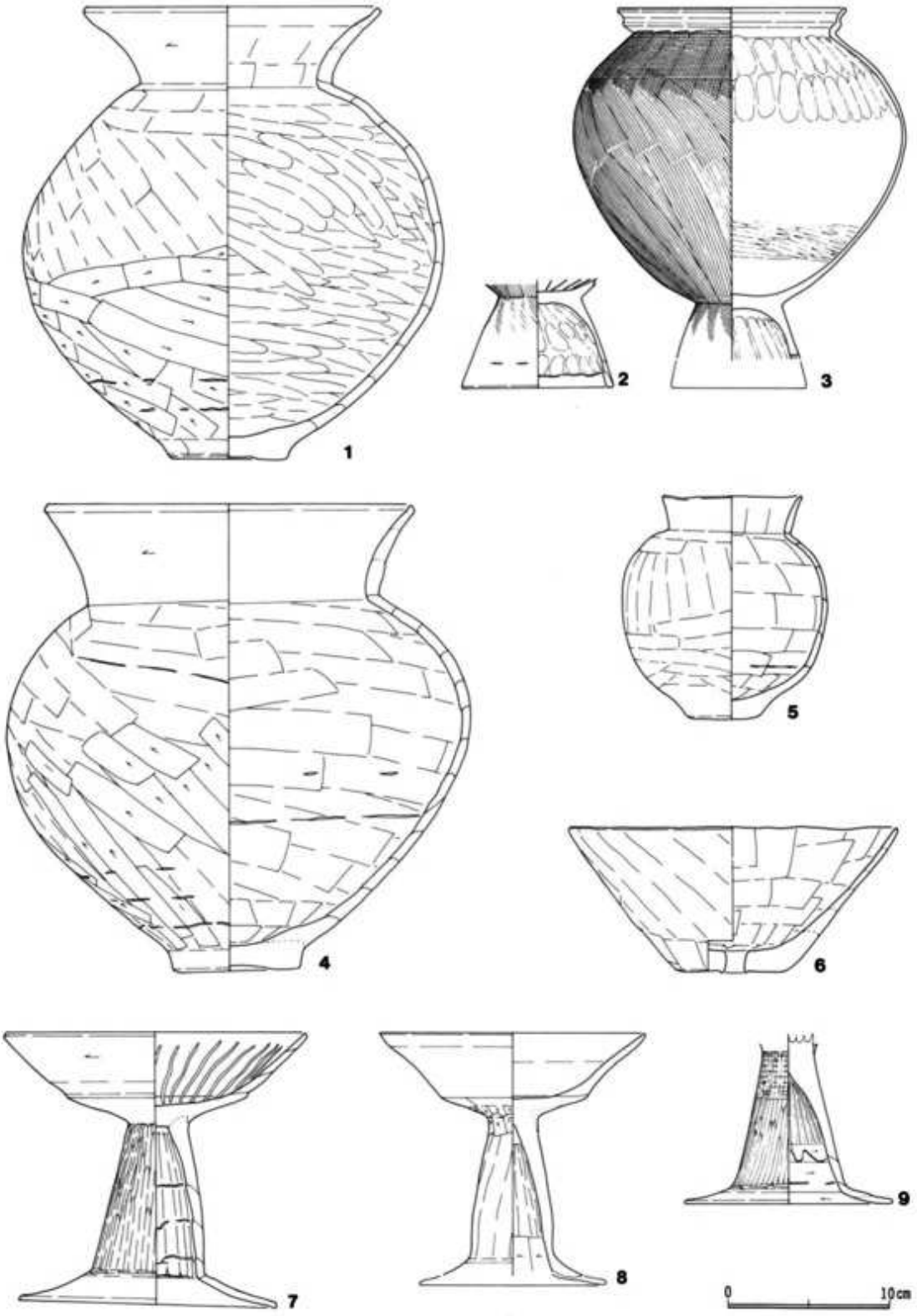
第217図　第16号住居跡(1)



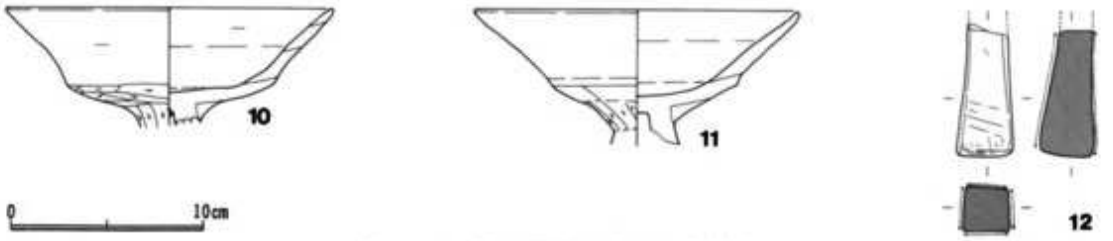
第218図　第16号住居跡(2)

第16号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壷	口縁部径 (18.5cm) 器高 27.9cm 底部径 7.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は狭い平坦面をもつ。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は突出した平底を呈する。	口縁部外面ヨコナデ、内面篦ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ。内面指ナデ。底部外面ナデ。	白色粒 内外－淡茶褐色	1/2。 覆土中。
2	台付甕	残存高 9.4cm	粘土紐積み上げ成形。台部は内湾ぎみに開き、端部は内側に折り返す。	胴部外面ハケ、内面篦ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/2。 覆土中。
3	台付甕	口縁部径 14.2cm 残存高 21.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗褐色	3/4。 外面二次焼成により一部赤色化。 覆土中。
4	広口壷	口縁部径 (23.0cm) 器高 28.8cm 底部径 7.9cm	粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は狭い平坦面をもつ。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。底部は厚く突出し、若干窪む平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	3/4。 覆土中。
5	小形甕	口径(8.6) 器高(13.8) 底径 4.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部はやや張り、最大径を中位にもつ。底部は突出し、やや不安定な平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	3/4。 外面黒斑あり。 外面は一部二次焼成を受けている。 覆土中。
6	小形甕	口径 20.4 器高 9.0 底径 6.6	粘土紐積み上げ成形。体部は若干内湾ぎみに開く。底部は厚く平底を呈する。	体部内外外面ナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	ほぼ完形。 外面黒斑あり。 覆土中。
7	高坏	口縁部径 18.8cm 器高 17.0cm	粘土紐積み上げ成形。脚部輪積み。坏部は下端に稜をもち、口縁部は内湾ぎみに開く。脚部は高く、脚端部は外反ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデの後内面放射状暗文。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面指ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡茶褐色	4/5。 一部二次焼成を受けている。 覆土中。



第219図　第16号住居跡出土遺物(1)



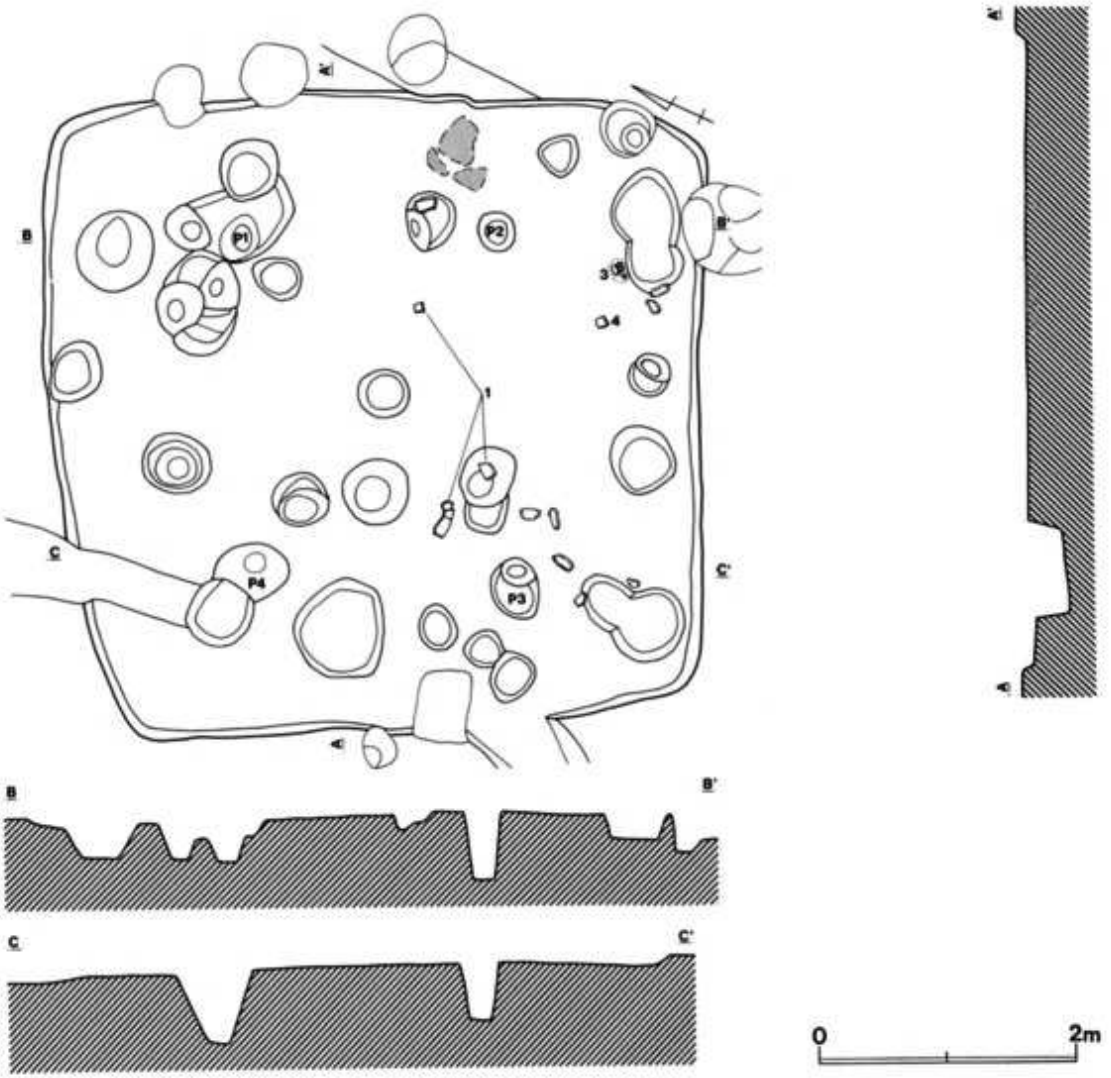
第220図　第16号住居跡出土遺物(2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	高坏	口縁部径 (16.6cm) 残存高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。坏部は下端に稜をもち、口縁部は外反しながら開く。脚部は高く、脚端部は外反ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚部外面ナデ、内面シボリの後下端ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	2/3。 覆土中。
9	高坏	残存高 10.5cm	脚部輪積み成形。脚部はやや高く、脚端部は直線的に大きく開く。	脚部外面ミガキの後上半ヨコナデ、内面シボリの後ケズリ。脚端部内外ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	脚部のみ。 覆土中。
10	高坏	口縁部径 17.0cm	粘土紐積み上げ成形。坏部は外反ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部及び脚部外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 内外－淡褐色	坏部3/4。 覆土中。
11	高坏	口縁部径 16.8cm	粘土紐積み上げ成形。坏部は外反ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	坏部ほぼ完形。 床面上。
12	砥石	残存長 6.9 幅 2.9 厚さ 2.7	自然石を断面方形の柱状に整形。	表裏面及び両側面とも良く擦られており、端面にも擦痕が見られる。	凝灰岩	1/2。重さ88g。 覆土中。

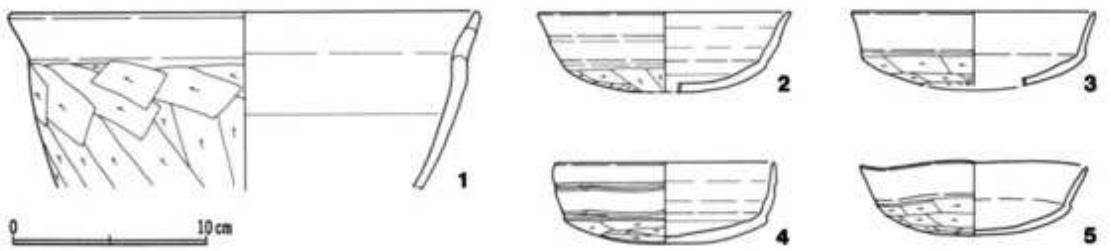
第17号住居跡（第221図）

A地点の調査区中央部の北側に位置し、重複する第4号溝跡と第10号溝跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されており、また住居内を中世以降のピットに多数切られているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもった方形に近い形態を呈している。規模は、北東から南西方向が4.95m、北西から南東方向が5.02mを測る。住居の主軸方位は、N－63°－Eを向いている。壁は、緩やかに立ち上がり、最高で10cm程残存している。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが、周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、直系30cm～60cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さは30cm～55cmある。カマドは、住居北東側壁中央の南側寄りに位置していたようであり、壁際の床面上に燃焼面の焼けた部分が見られる。カマド本体はすでに崩壊していたが、周辺にはカマド構築材の一部であったと思われる白色粘土塊が散乱していた。貯蔵穴と考えられるようなピットは検出されていない。遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。土器以外では、住居南側周辺部の床面付近から、長さ15cm程度の偏平な片岩が3個と、南東側壁際の床面付近から同様の片岩が2個出土している。



第221図　第17号住居跡



第222図　第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径 24.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直線的に外傾する。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	上半部のみ。 外面黒斑あり。 床面付近。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	坏	口径(13.2) 器高 4.1	口縁部は蛇行ぎみに外反し、外面中位に沈線を施す。体部は浅く、底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	1/3。 覆土中。
3	坏	口径 12.6	口縁部は若干外反ぎみに外傾する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－橙褐色	2/3。 床面付近。
4	坏	口縁部径(11.4cm) 器高 4.2cm	口縁部はやや内湾ぎみに外反し、外面中位と下端に半裁竹管状工具による沈線を施す。体部は浅く、丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外－淡褐色	1/4。 底部外面黒斑あり。 覆土中。
5	坏	口径 11.8 器高 3.8	口縁部は直線的に外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－橙褐色	1/3。 覆土中。

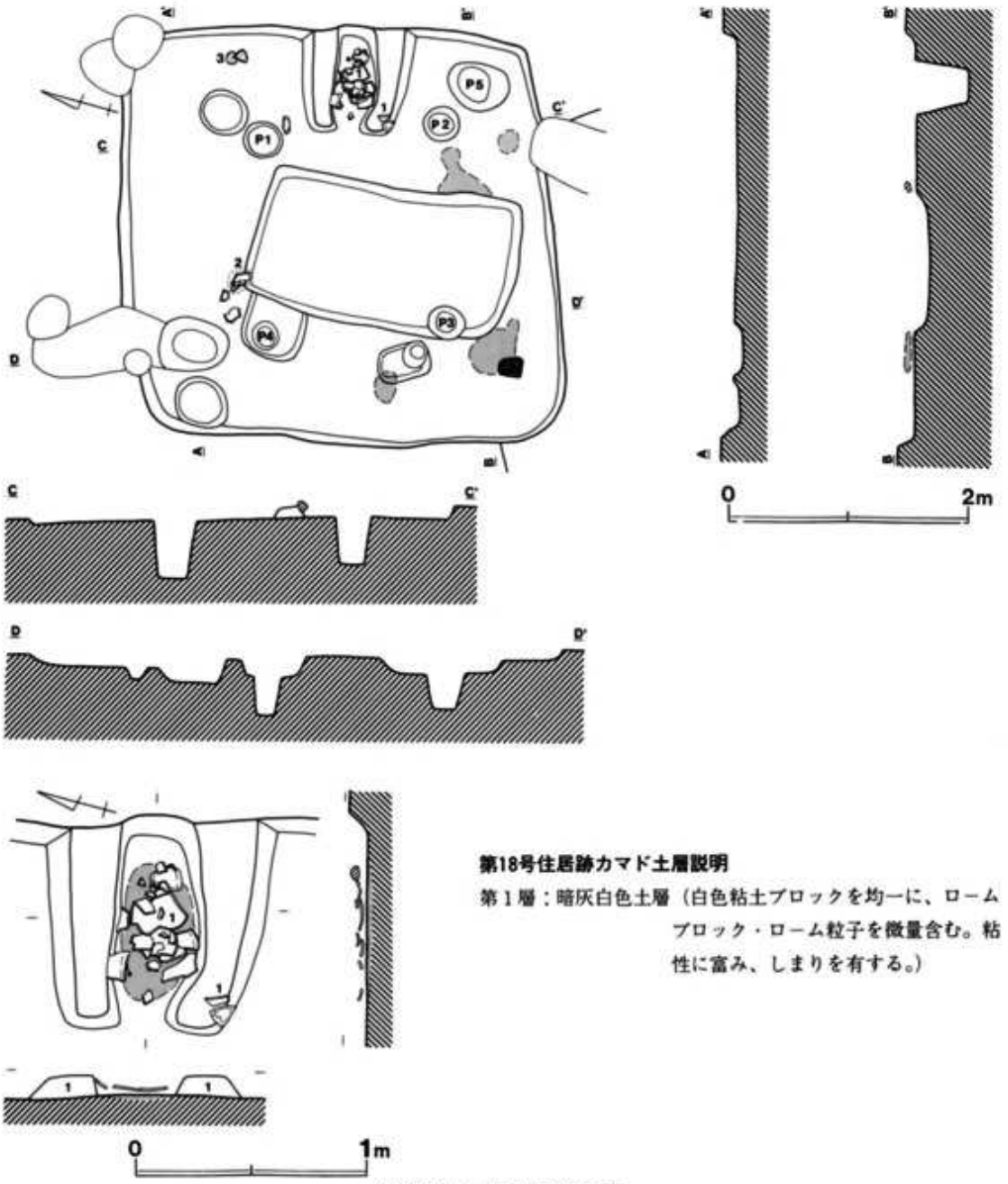
第18号住居跡（第223図）

A地点の調査区中央部の北側に位置し、住居跡の中央部を第12号土壙に切られ、南側で重複する第19号住居跡切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもった方形を呈しているが、やや平行四辺形状に歪んでいる。規模は、東西方向が3.58m、南北方向が3.70mを測る。住居の主軸方位は、N－72°－Eをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、最高で13cm程残存している。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体にやや凹凸があり比較的堅緻である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、直径20cm～30cmの円形を呈し、深さはいずれも45cm前後ある。P5は、カマド右側の南東コーナー部に位置しており、貯蔵穴と考えられる。52cm×40cmの楕円形ぎみの形態を呈し、底面は平坦で深さは43cmある。カマドは、住居東側壁の中央やや南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長92cm・最大幅96cmを測る。袖は、白色粘土を主体とする暗灰白色土を床面上に盛り上げて構築している。燃焼部は、住居の床面をそのまま燃焼面(火床)にしており、非常によく焼けて赤色化している。遺物は、カマド内や床面上より甕や坏などの土器が出土しているが、この中で特に須恵器鉢の出土は注目される。また、住居跡の覆土中には、焼土塊や炭化材が見られるが、住居自体には焼失した痕跡が認められないことから、これらは住居跡の埋没中に投げ込まれたものと推測される。

第18号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 20.6 器高 35.5 底径 5.3	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境にケズリによる段をもつ。胴部は張らず、底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半箆ナデ・下半ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・白色粒 小石 内外－明橙褐色	ほぼ完形。 二次焼成により、かなり荒れている。 カマド内。
2	甕	残存高 20.7 底径 5.4	粘土紐積み上げ成形。胴部は張らず、底部は平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面上半箆ナデ・下半ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－暗茶褐色 内－暗橙褐色	1/3。 床面付近。

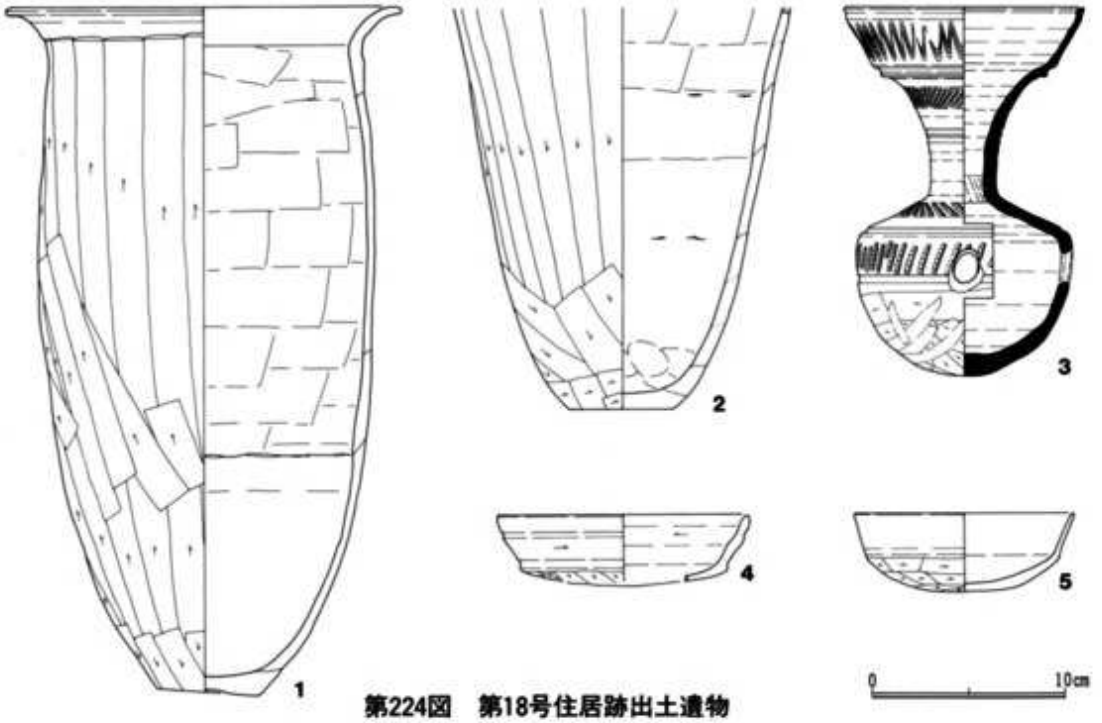


第18号住居跡カマド土層説明

第1層：暗灰白色土層（白色粘土ブロックを均一に、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第223図　第18号住居跡

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	須恵器 甕	口縁部径 (12.4cm) 器高 19.0cm	ロクロ上での成形。口縁部は複合口縁を呈し、口唇部はやや肥厚する。頸部は細く、外面中位に2本の沈線を施す。胴部は肩が張り、中位に穿孔をもつ。底部は丸底を呈する。	内外面とも回転ナデ。胴部外面下半ケズリの後ナデ。口縁部外面には、波長が短く振幅の長い櫛描波状文。頸部及び胴部上半の外面には、櫛歯状工具による連続刺突文。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰褐色	口縁部1/3、胴部完形。 施文方向は右回り。 床面直上。



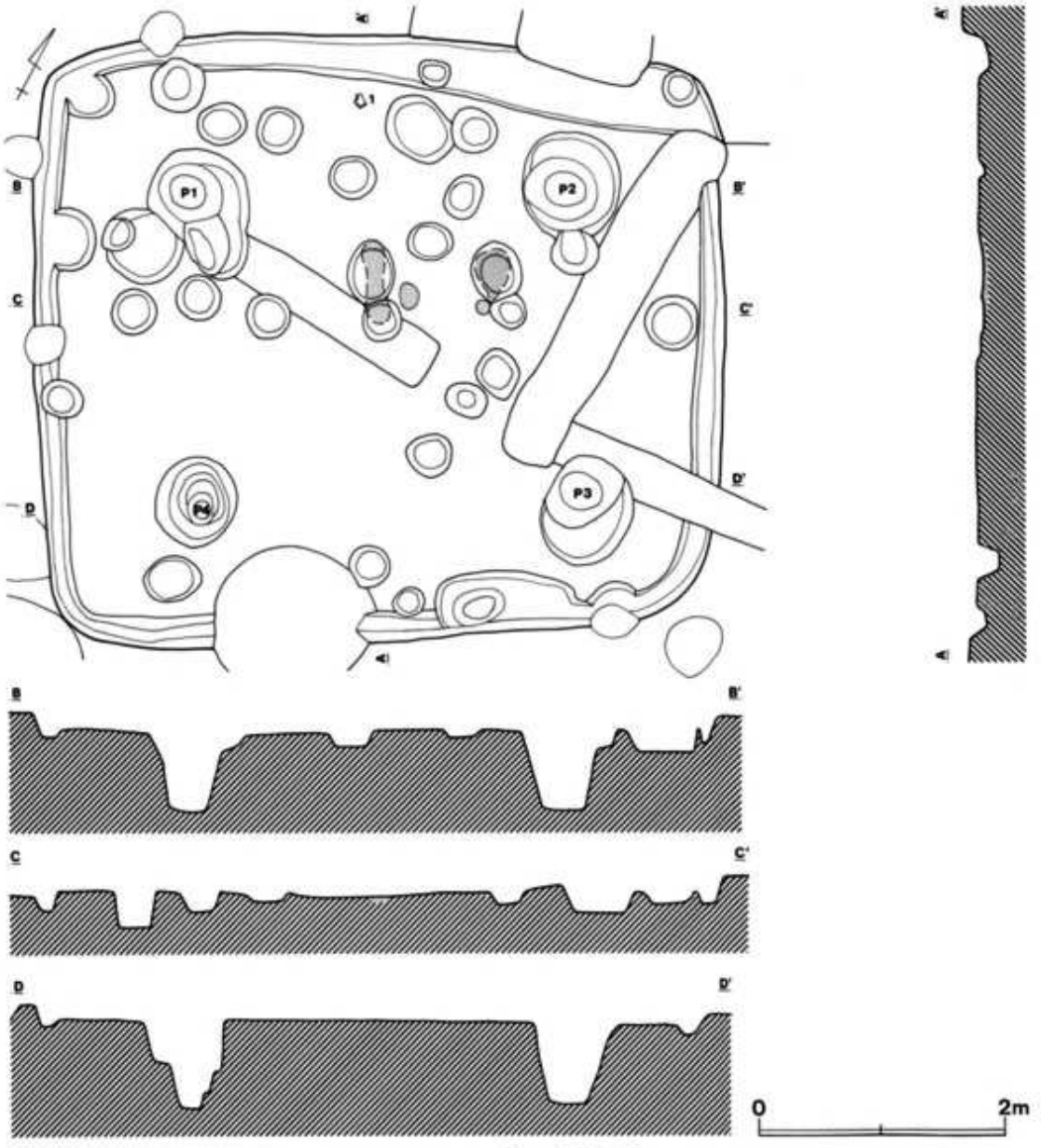
第224図　第18号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	坏	口縁部径 (12.8cm)	口縁部は蛇行ぎみに外傾し、外面中位と下端に沈線を施す。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	1/5。 覆土中。
5	坏	口径 11.4 器高 4.1	口縁部はやや外反ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗橙褐色	2/3。 覆土中。

第19号住居跡（第225図）

A地点の調査区中央部の北側に位置し、重複する第10号溝跡・第12号土壙・第13号土壙・第18号住居跡・第15号掘立柱建物跡などに切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもった長方形を呈している。規模は、北西から南東方向が5.00m、南西から北東方向が5.72mを測る。住居の主軸方位は、N－28°－Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で14cm程残存している。各壁下には幅20cm前後・深さ5cm～10cmの壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、いずれも上半が直径70cm～80cmの円形を呈する大きな掘り方をもち、下半は直径40cm～60cmの円形に深くなっている。深さはいずれも70cm前後ある。炉は、住居中央部の北側寄りと北東側寄りの2箇所にあり、前者は2個連結している。いずれ



第225図　第19号住居跡

第226図　第19号住居跡出土遺物

も床面を若干掘り窪めた地皿炉で、底面は良く焼けて赤色化している。また、これらの炉の間にも床面が焼けて赤色化した部分が見られるが、その範囲は小規模である。遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。

第19号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口縁部径 23.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾し、脚部は外反ぎみに開く。	口縁部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ハケの後ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	坏部2/3、脚部4/5。穿孔は3箇所。覆土中。
2	高坏	残存高 6.8cm	粘土紐積み上げ成形。脚部は低く、大きく外反する。	脚部外面ミガキ、内面ナデの後上半ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗橙褐色	1/4。穿孔は縦2個1組で3箇所。覆土中。

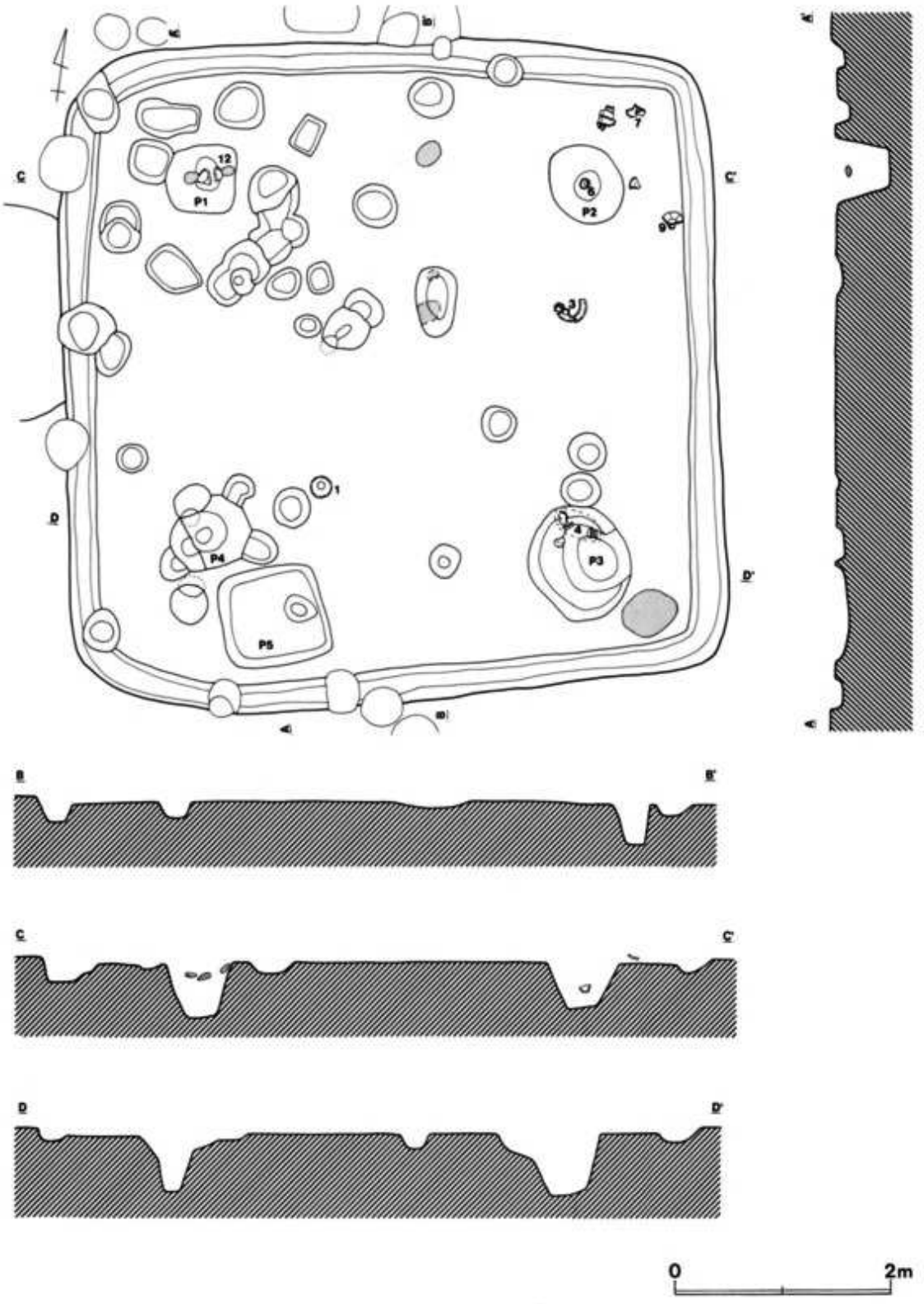
第20号住居跡（第227図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第18号土壙と第36号住居跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面付近まで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

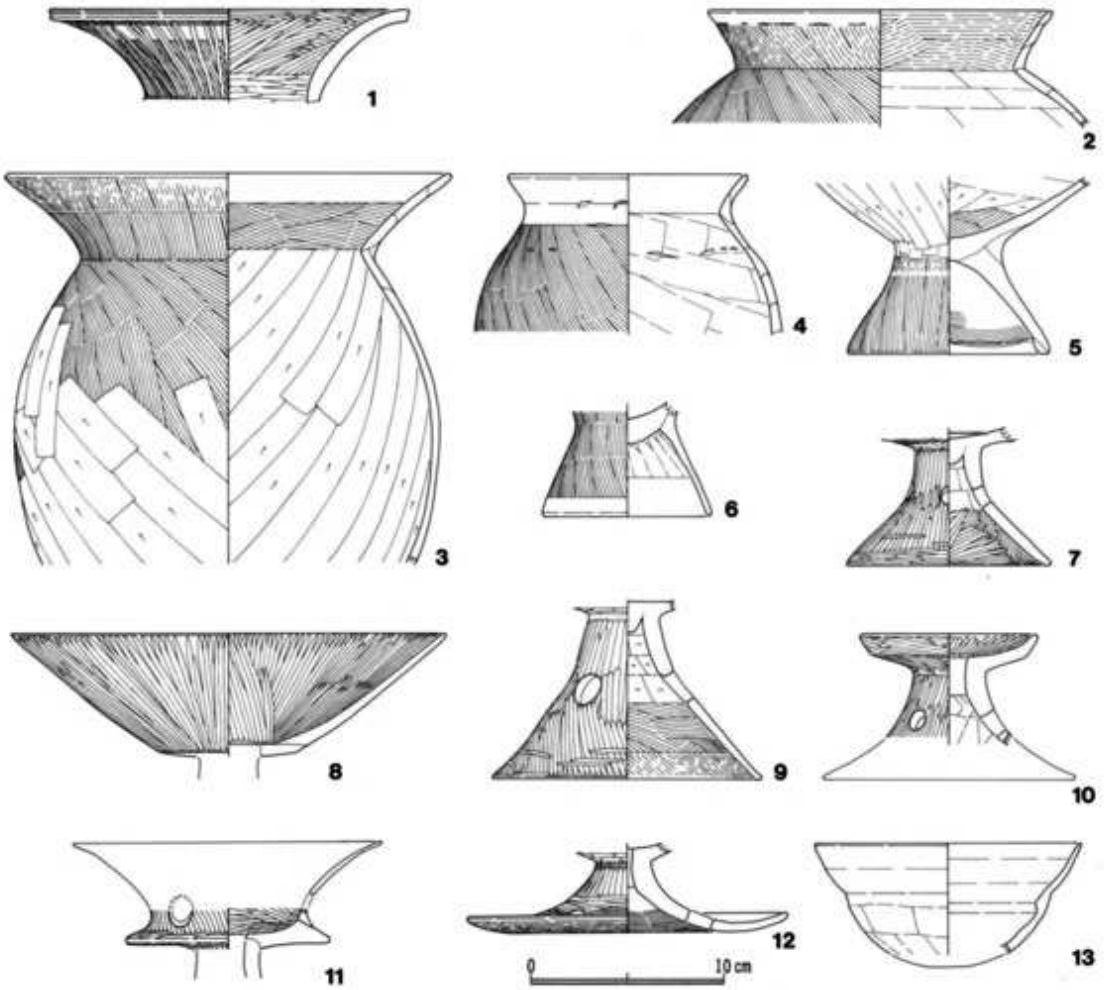
平面形は、コーナー部が丸みをもつ比較的整った方形を呈している。規模は、南北方向が6.24m、東西方向が6.12mを測る。住居の主軸方位は、N－10°－Wをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、最高10cm程残存している。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、いずれも上半が直径70cm～90cmの不整円形を呈する大きな掘り方をもち、深さは45cm～60cmある。P1の覆土上面には、長さ10cm程度の自然石と焼土塊が見られ、P2内からは土器の破片が出土している。P5は、南側壁際のやや西側寄りに位置しており、貯蔵穴と考えられる。98cm×92cmの方形ぎみの形態を呈し、底面は平坦で深さは13cmで、東側に浅いピットを伴っている。炉は、住居中央部のやや北寄りに位置する。65cm×38cmの楕円形を呈する浅い掘り込みをもつ地皿炉で、部分的に焼けて赤色化している。この他、炉の北側の主柱穴間の床面にも円形に焼けた部分がある。遺物は、床面上や覆土中より土器が出土しているが、いずれも破片であり完形品はない。この中でNo1の壷の口縁部は、床面上に正位に置かれていたもので、台に転用された可能性が高い。この他では、住居南東側コーナー部に焼土が見られるが、これは住居廃絶後の覆土埋没過程中に投棄されたかあるいは流れ込んだものである。

第20号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壷	口縁部径 18.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は凹線を施した平坦面をもつ。	口縁部外面ハケの後ミガキ、内面ミガキ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－淡茶褐色 内－明橙褐色	口縁部完形。口縁部内面は二次焼成を受けている。床面直上。
2	甕	口縁部径 (17.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや緩やかに外反し、胴部は張る。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面箆ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	口縁部1/4。 覆土中。



第227図　第20号住居跡



第228図　第20号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	甕	口径 23.2 残存高 20.1	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや長く緩やかに外反する。胴部はやや張る。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ケズリ、内面ケズリ。	赤色粒・白色粒 外－淡褐色 内－黄褐色	2/3。 床面直上。
4	小形甕	口縁部径 (12.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	口縁部1/2。 覆土中。
5	台付甕	残存高 9.1cm	粘土紐積み上げ成形。台部はやや内湾ぎみに開き、端部は内側に折り返す。	胴部外面ケズリ、内面ハケの後ナデ。台部外面ハケ、内面ナデの後一部ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	台部3/4。 覆土中。
6	台付甕	残存高 5.8cm	粘土紐積み上げ成形。台部はやや内湾ぎみに開く。	台部外面ハケ、内面指ナデ。台端部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 内外－明橙褐色	台部のみ。 P2内。
7	高坏	残存高 7.1cm	粘土紐積み上げ成形。脚部は中位から外反ぎみに開き、中位に円孔を4箇所もつ。	坏部外面ハケ、内面ナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデの後下半ミガキ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	脚部1/2。 坏部内面に沈線が巡る。 覆土中。
8	高坏	口縁部径 22.4cm	粘土紐積み上げ成形。坏部は稜をもち、口縁部は内湾ぎみに大きく開く。	坏部内外面ミガキ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	坏部3/4。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
9	高坏	残存高 9.2cm	粘土紐積み上げ成形。脚部は外反ぎみに開き、中位に比較的大きな円孔を3箇所もつ。	坏部外面ミガキ、内面ナデ。脚部外面上端ケズリの後ミガキ、内面ハケの後上端ケズリ・下端ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	脚部完形。 坏部内面に沈線が巡る。 床面直上。
10	器台	口縁部径（9.2cm）	粘土紐積み上げ成形。器受部は稜をもち、口縁部は短く外傾する。脚部は外反。	器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	器受部1/3。 覆土中。
11	器台		粘土紐積み上げ成形。器受部下端は水平に突出する。	器受部内外面ミガキ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	器受部下半のみ。 円孔は3箇所。覆土中。
12	器台	残存高 4.6cm 脚端部径 16.6cm	粘土紐積み上げ成形。脚部は低く、大きく外反しながら開き、端部は反り返る。	器受部外面ミガキ、内面ナデ。脚部外面ハケの後ミガキ、内面ハケ。脚端部内外面ハケの後ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－茶褐色	脚部3/4。 円孔は3箇所。 P1内。
13	小形鉢	口縁部径（13.8cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。体部は浅い。	内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－明橙褐色 内－淡褐色	1/4。二次焼成により器面は荒れている。 覆土中。

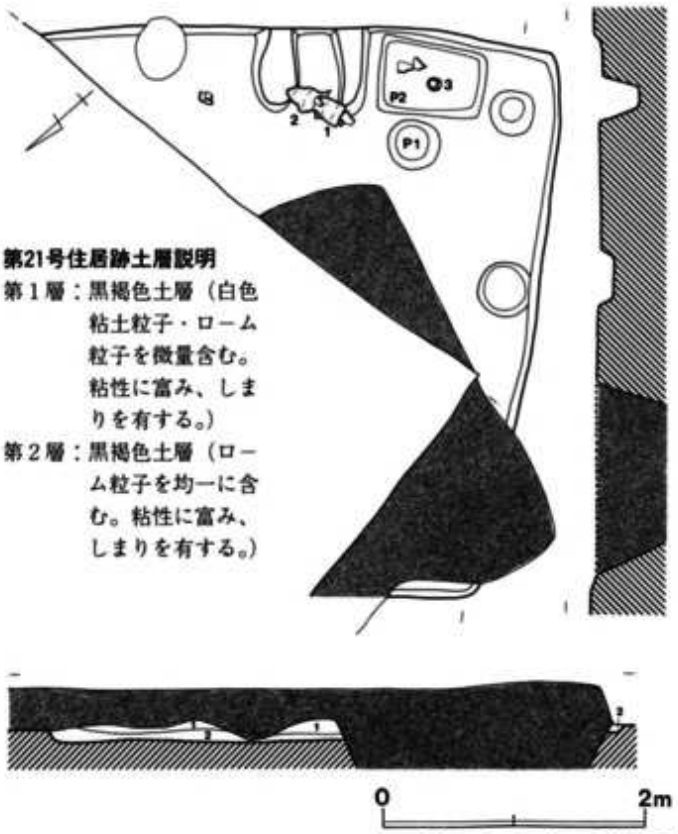
第21号住居跡（第229図）

A地点の調査区北端に位置する。本住居跡は、旧送電線鉄塔建設によって住居の北側半分を破壊されているため、遺構の全容は不明である。

平面形は、比較的整った方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、南東から北西方向が4.35m、南西から北東方向は4.00mまで測れる。住居の主軸方位は、N－140°－Eをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、最高で8cm程残存している。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体的に堅緻である。P1は、直径40cmの円形を呈し、深さは10cm程度のものであるが、その位置から主柱穴の可能性も考えられる。P2は、カマド右側の住居南側コーナー部寄りに位置し、貯蔵穴と考えられるものである。形態は、80cm×58cmの長方形を呈し、底面は広く平坦で深さは14cmある。カマドは、住居南東側壁の中央付近に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長が67cm・最大幅は90cmある。袖は、灰白色粘土を主体にして、床面上に盛り上げて構築しているが、焚口の天井部にはNo1とNo2の甕を入れ子状に繋げて補強に使用していたようである。燃焼部は、住居の床面とほぼ同じ高さを燃焼面（火床）にしており、良く焼けて赤色化している。遺物は、焚口の天井部の補強に使用された甕の他に、貯蔵穴上面より完形の広口短頸壺が出土している。

第21号住居跡出土遺物観察表

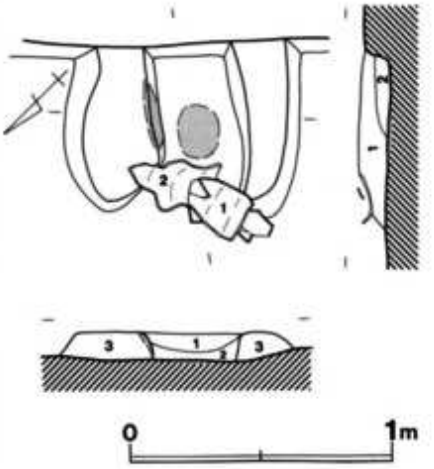
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(19.6) 残存高 32.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篦ナデ・下半ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗茶褐色	1/3。 カマド焚口。
2	甕	口径(18.0) 残存高 33.0	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篦ナデ・下半ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	1/4。 カマド焚口。



第21号住居跡土層説明

第１層：黒褐色土層（白色粘土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



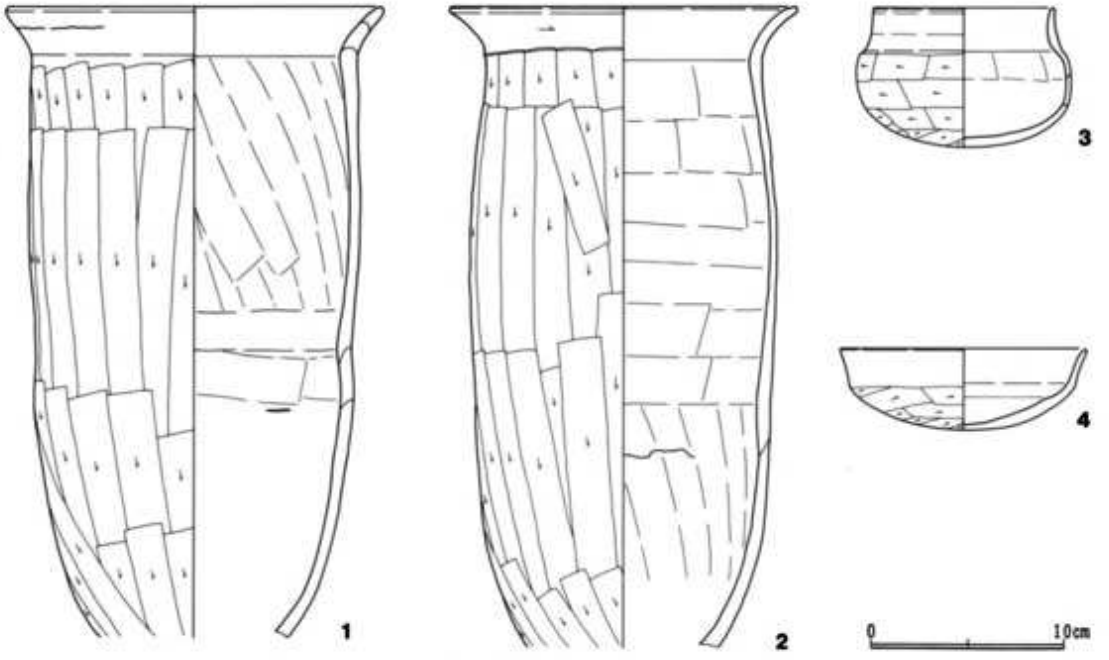
第21号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：黒褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗灰白色土層（灰白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第229図　第21号住居跡



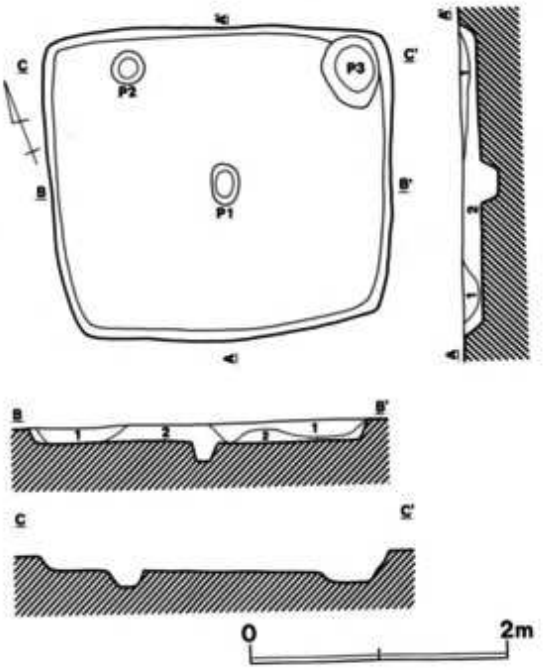
第230図　第21号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	広口短頸壷	口縁部径 9.4cm 器高 7.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外反ぎみに内傾する。胴部は偏平ぎみで、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	ほぼ完形。 貯蔵穴上面。
4	坏	口径 12.8 器高 4.2	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	3/4。 覆土中。

第22号住居跡（第231図）

A地点の調査区中央部の北側に位置する。本遺構は、他の一般的な住居跡に比べて規模が小さく、炉やカマド等の生活の痕跡が見られないことから、厳密には竪穴状遺構とすべきものである。

平面形は、比較的整った長方形を呈している。規模は、北西から南東方向が2.70m、北東から南西方向が2.40mを測る。遺構の長軸方位は、N－111°－Eを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で16cm残存している。床面は、地山ローム土平らに削った直床式で、全体に細かな凹凸が見られるが、比較的堅く締まっている。ピットは3箇所検出されているが、いずれも深さが10cm程度の浅いものでその性格は不明である。遺物は、覆土中より古墳時代後期の鬼高式土器の破片が数片出土しただけである。



第231図　第22号住居跡

第22号住居跡土層説明

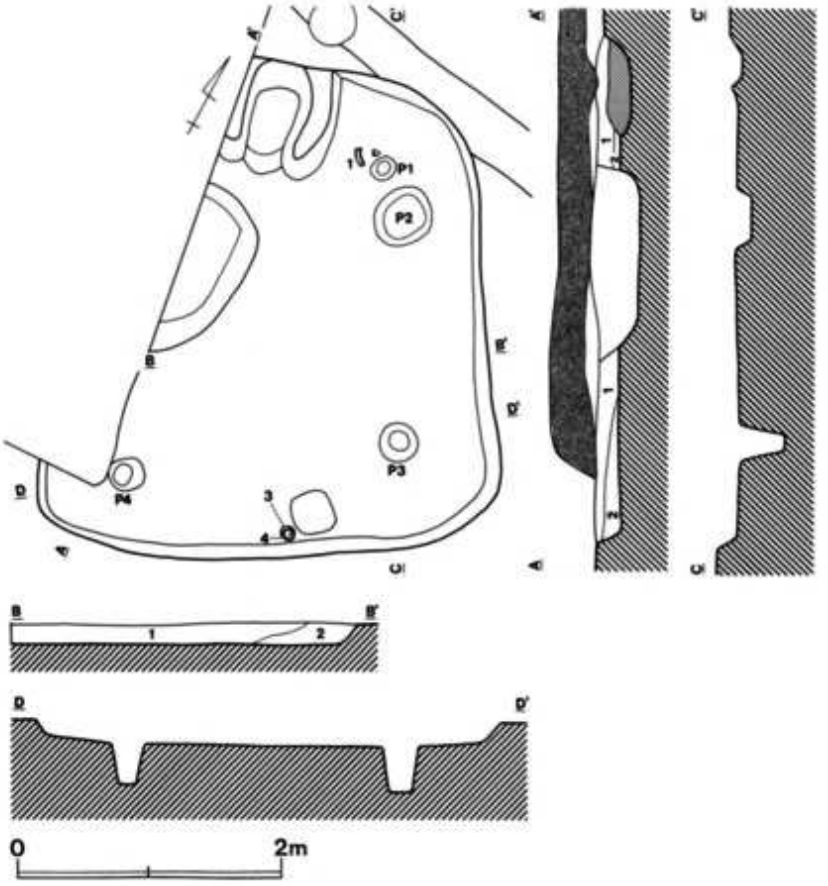
第1層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第23号住居跡（第232図）

A地点の調査区北側に位置し、重複する第18号土壙・第4号掘立柱建物跡・第6号溝跡に切られている。本住居跡の西側半分は、旧送電線鉄塔建設によって破壊されているため、遺構の全容は不明である。

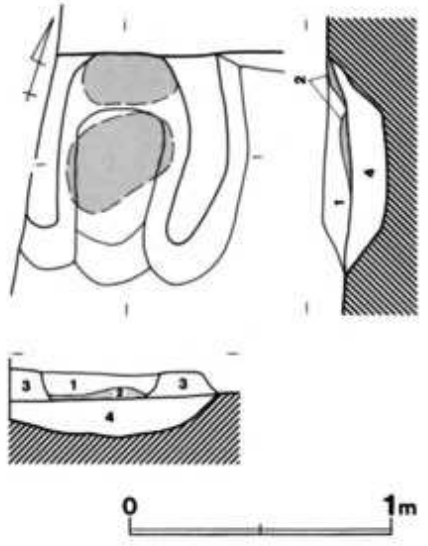
平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈していたようである。規模は、北西から南東方向が3.85m、南西から北東方向が3.60mを測る。住居の主軸方位は、N－30°－Wをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、最高で20cm程残存している。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。P



第23号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第23号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（白色粘土ブロック・焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

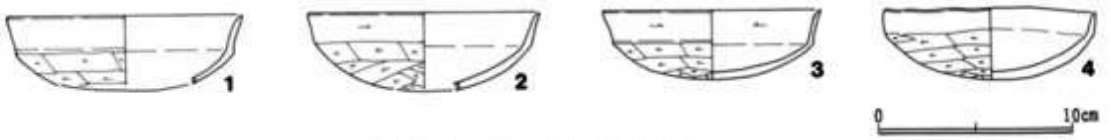
第２層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗灰白色土層（灰白色粘土フロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第232図　第23号住居跡

1・P3・P4は主柱穴と考えられ、ほぼ住居跡の対角線上に配置されているようである。形態は、直径20cm～30cmの円形を呈し、深さはいずれも30cm程度ある。カマドは、住居北西側壁の中央付近に位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長が86cm・幅は90cmまで測れる。袖は、灰白色粘土を壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、掘り方に黒褐色土(第4層)を埋め戻して、住居の床面とほぼ同じ高さを燃焼面(火床)にしている。遺物は、カマド東側や住居南東側壁際の床面付近より、完形に近い土師器坏が出土している。



第233図　第23号住居跡出土遺物

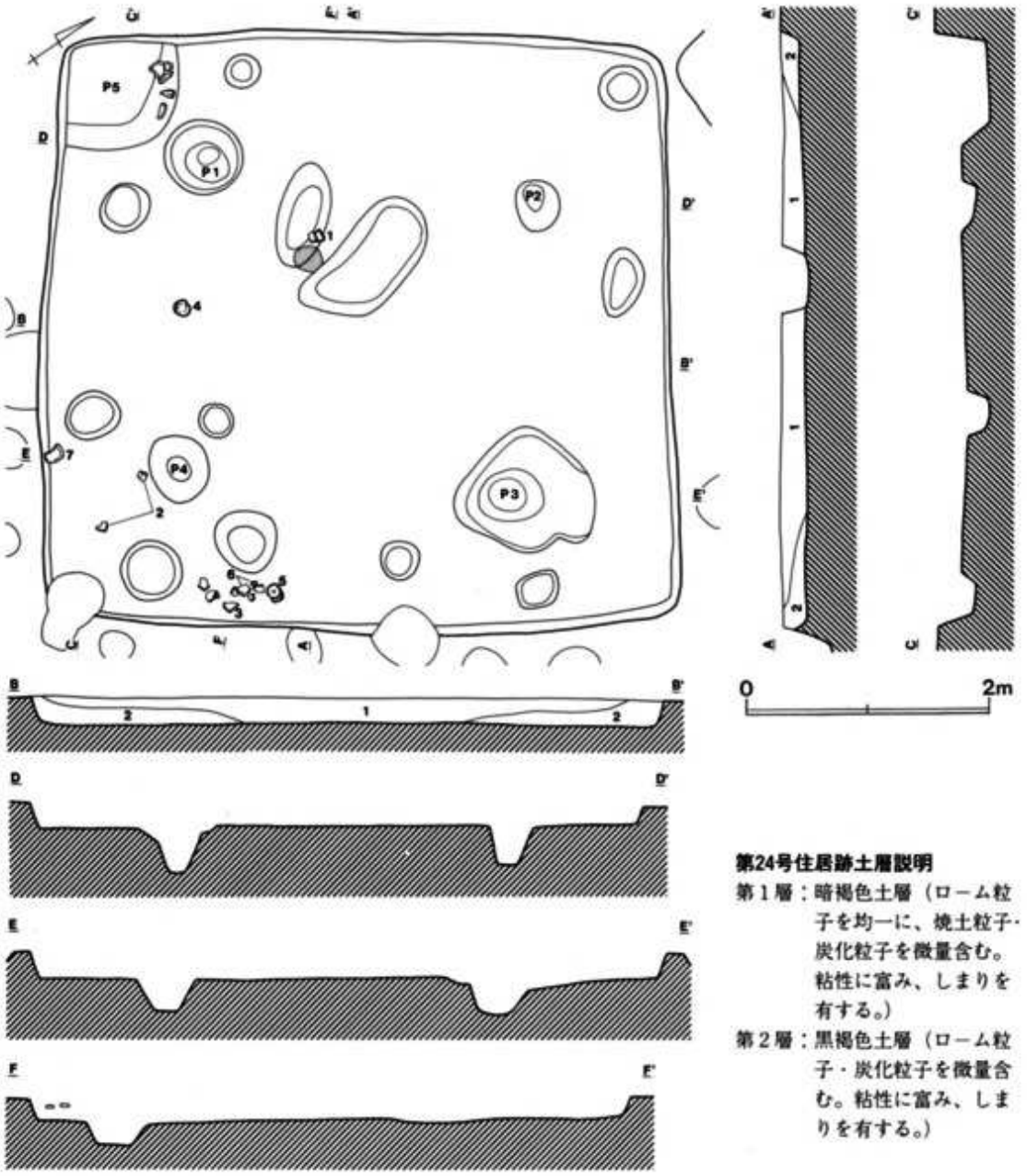
第23号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口縁部径 (12.2cm)	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外－橙褐色	1/2。 床面直上。
2	坏	口径　12.0 器高　4.0	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡褐色	2/3。 覆土中。
3	坏	口径　11.4 器高　3.6	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外－橙褐色	完形。 床面直上。
4	坏	口径　10.8 器高　3.7	口縁部はやや短く直立する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－橙褐色	完形。 床面直上。

第24号住居跡（第234図）

A地点の調査区中央部のやや東寄りに位置し、北西側には第27号住居跡と第28号住居跡が近接している。遺構の遺存状態は、比較的良い方である。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、北西から南東方向が5.02m、南西から北東方向が5.34mを測る。住居の主軸方位は、N－53°－Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で22cm残存している。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体的に堅緻である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、長さ40cm～60cmの円形か楕円形を呈し、深さは26cm～37cmある。貯蔵穴(P5)は、住居西側コーナー部に位置し、比較的規模の大きな方形ぎみの形態を呈している。深さは24cmあり、底面は広く平坦である。炉は、住居中央部のやや東側寄りに位置する。88cm×42cmの楕円形を呈する浅い掘り込みを伴う地皿炉で、南端が一部焼けて赤色化している。遺物は、床面上や覆土中より土器が出土しているが、完形品は少ない。土器以外では、住居南西側壁際の床面付近より砥石(No.7)が1個出土し、貯蔵穴の上面より片岩が5個かたまって出土している。



第24号住居跡土層説明

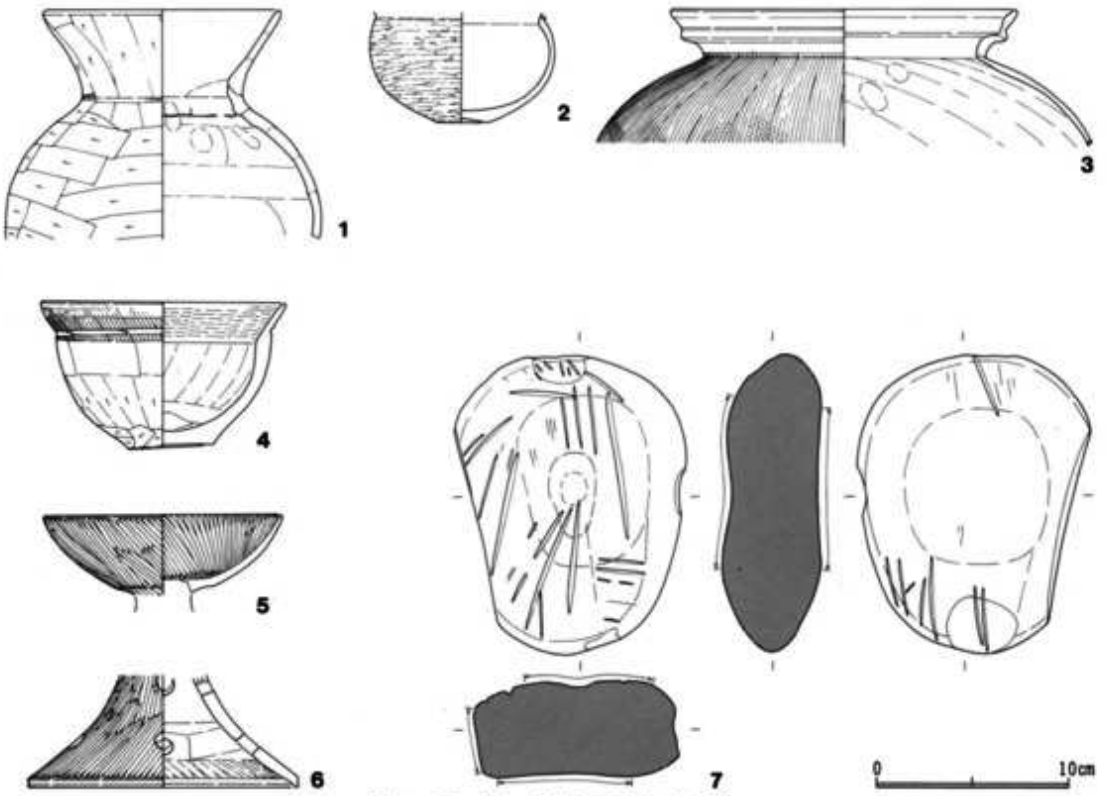
第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第234図　第24号住居跡

第24号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口縁部径（12.3cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張る。	口縁部外面ハケの後ケズリ、内面ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗橙褐色	1/4。 二次焼成を受けている。 炉上面。
2	小形壺	残存高5.7 底部径2.5	粘土紐積み上げ成形。胴部はやや張り、底部は窪んだ小さな平底を呈する。	胴部外面ミガキ、内面ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	3/4。 床面付近。

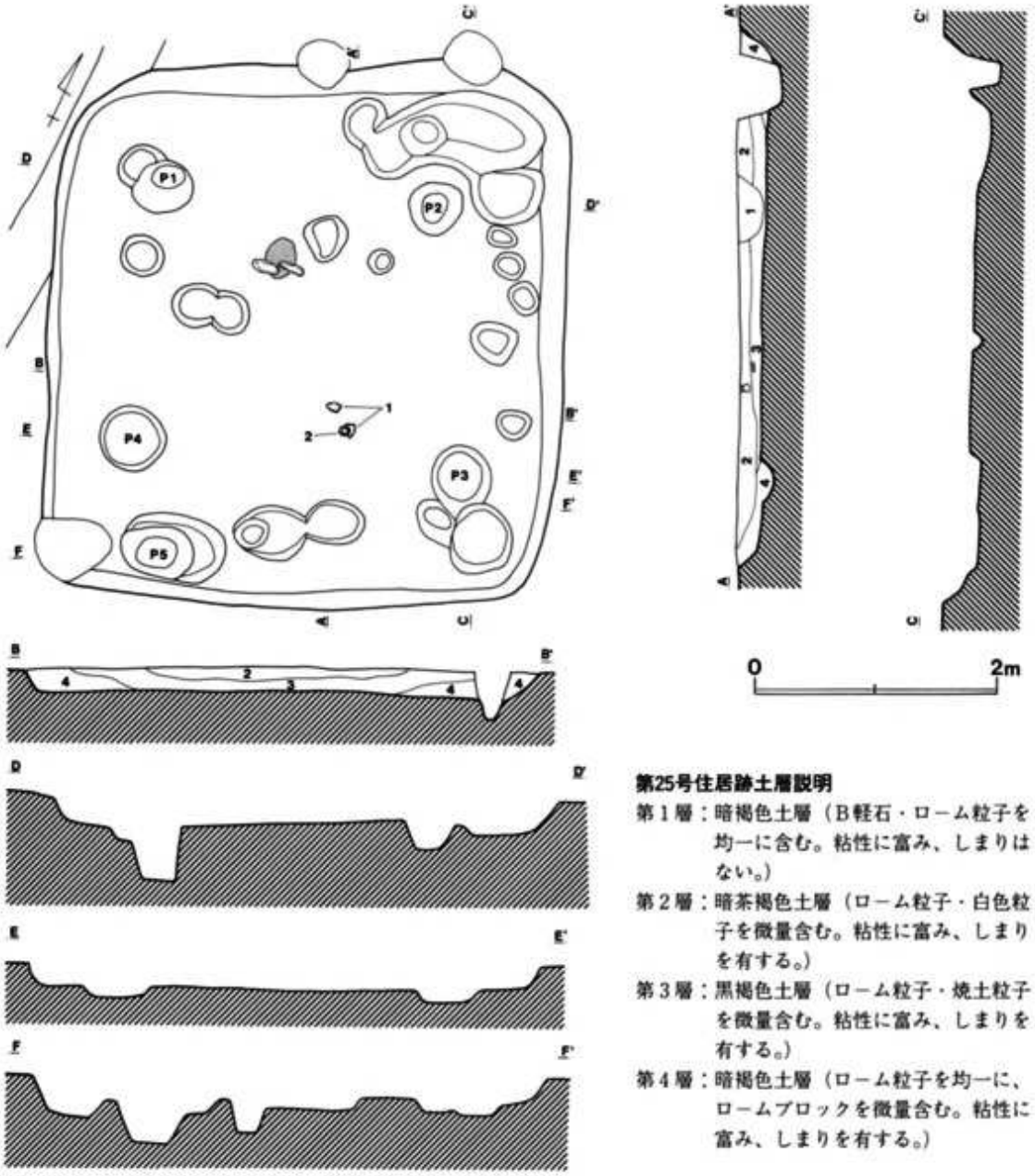


第235図　第24号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	甕	口縁部径 (18.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/4。 覆土中。
4	小形鉢	口径　12.7 器高　7.6 底径　4.3	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張らず、底部は平底を呈する。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	ほぼ完形。 内面黒斑あり。 床面付近。
5	高坏	口縁部径 12.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開、坏部は下端に稜をもつ。	口縁部内外面ミガキ。坏部外面ケズリの後ミガキ。	白色粒 内外－茶褐色	坏部のみ。 床面付近。
6	高坏	残存高 5.8cm	粘土紐積み上げ成形。脚部は外反しながら開き、脚端部は平坦面に凹線を施す。	脚部外面ミガキ、内面ナデ。脚端部ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	1/4。 円孔は穿孔途中で4箇所。 覆土中。
7	砥石	長さ　15.4 幅　12.0 厚さ　5.2	自然石を利用しているが、側面の片側を直線的な平坦面に加工し、表面中央部は窪んでいる。	表裏面の中央部と片側側面は良く擦れている。表裏面に刃物による刻線状の傷が多く見られる。	砂岩。	完形。 重さ1051g 床面付近。

第25号住居跡（第236図）

A地点の調査区中央部の北側に位置し、重複する第10号溝跡に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良い方である。



第25号住居跡土層説明

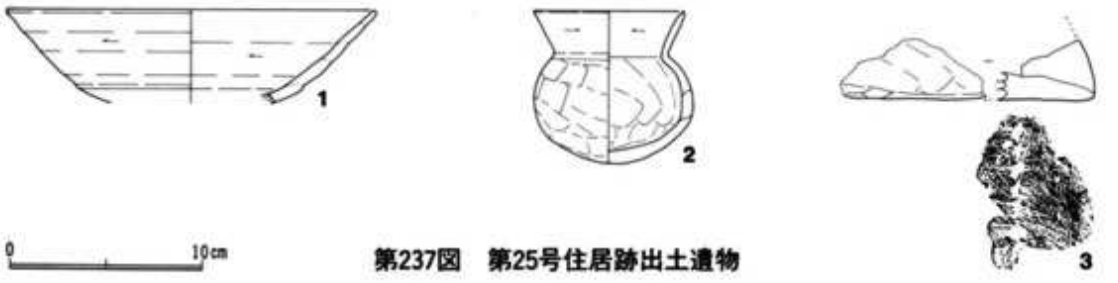
第１層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗茶褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第236図　第25号住居跡



第237図　第25号住居跡出土遺物

平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈している。規模は、北西から南東方向が4.51m、南西から北東方向が4.32mを測る。住居の主軸方位は、N−28°−Wをとる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは最高で28cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居のほぼ対角線上に配置されている。形態は、直径40cm～50cmの円形を呈し、深さはP1とP2が44cmと25cmあるのに対して、P3とP4はいずれも10cm程度で浅くなっている。貯蔵穴(P5)は、住居南側コーナー部付近に位置している。86cm×52cmの楕円形を呈し、深さは38cmある。炉は、住居中央部のやや北西寄りに位置する。床面が焼けているだけの地床炉であるが、炉の南端には長さ20cm程度の棒状の片岩を2個横に並べた炉石を伴っている。遺物は、覆土中より土器や土製品の破片が少量出土しただけである。

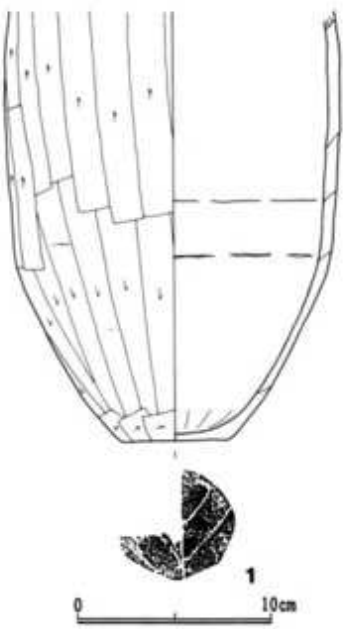
第25号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口縁部径(19.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外−茶褐色	口縁部1/2。 覆土中。
2	小形丸底壺	口径 7.8 器高 7.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外傾する。胴部は張り、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外−暗茶褐色	ほぼ完形。 覆土中。
3	土製品		粘土塊積み上げ。底面は広い平坦面をなし、側面は内傾している。	側面ナデ。底面は未調整で縄状の圧痕が見られる。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外−茶褐色	破片。 覆土中。

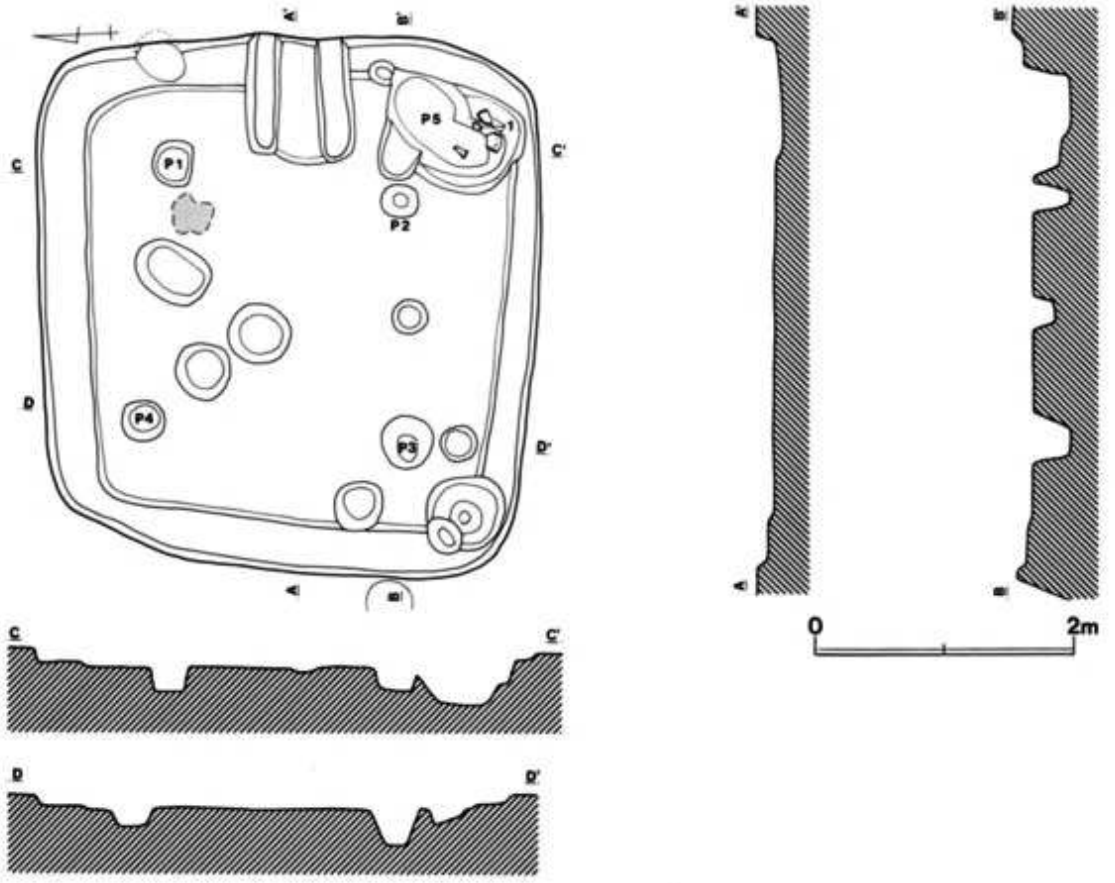
第26号住居跡（第239図）

A地点の調査区中央部に位置し、南側は第46号住居跡と接している。耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈している。規模は、東西方向が4.15m、南北方向が3.90mを測る。住居の主軸方位は、N−2°−Eをとる。壁は、緩やかに立ち上がり、最高で10cm程残存している。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式であるが、壁際は5cm程度平らに掘り残してテラス状に一段高くしている。全体的にやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、直径30cm～40cmの円形を呈し、深さは15cm～30cmある。貯蔵穴(P5)は、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置している。比較的規模の大きな不整形を呈し、二段に掘られている。底面は平坦で、深さは30cmある。カマドは、住居東側壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長が1.00m・最大幅は84cmを測る。袖は、灰褐色粘土を主



第238図　第26号住居跡出土遺物



第26号住居跡カマド土層説明

第１層：暗灰褐色土層（灰褐色粘土粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：灰褐色土層（灰褐色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第239図　第26号住居跡

体として、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の床面より一段低く、あまり焼けていない。遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。

第26号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	残存高 22.2 底部径 5.6	粘土紐積み上げ成形。胴部は張らず、底部は平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面木葉痕。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	1/2。 覆土中。

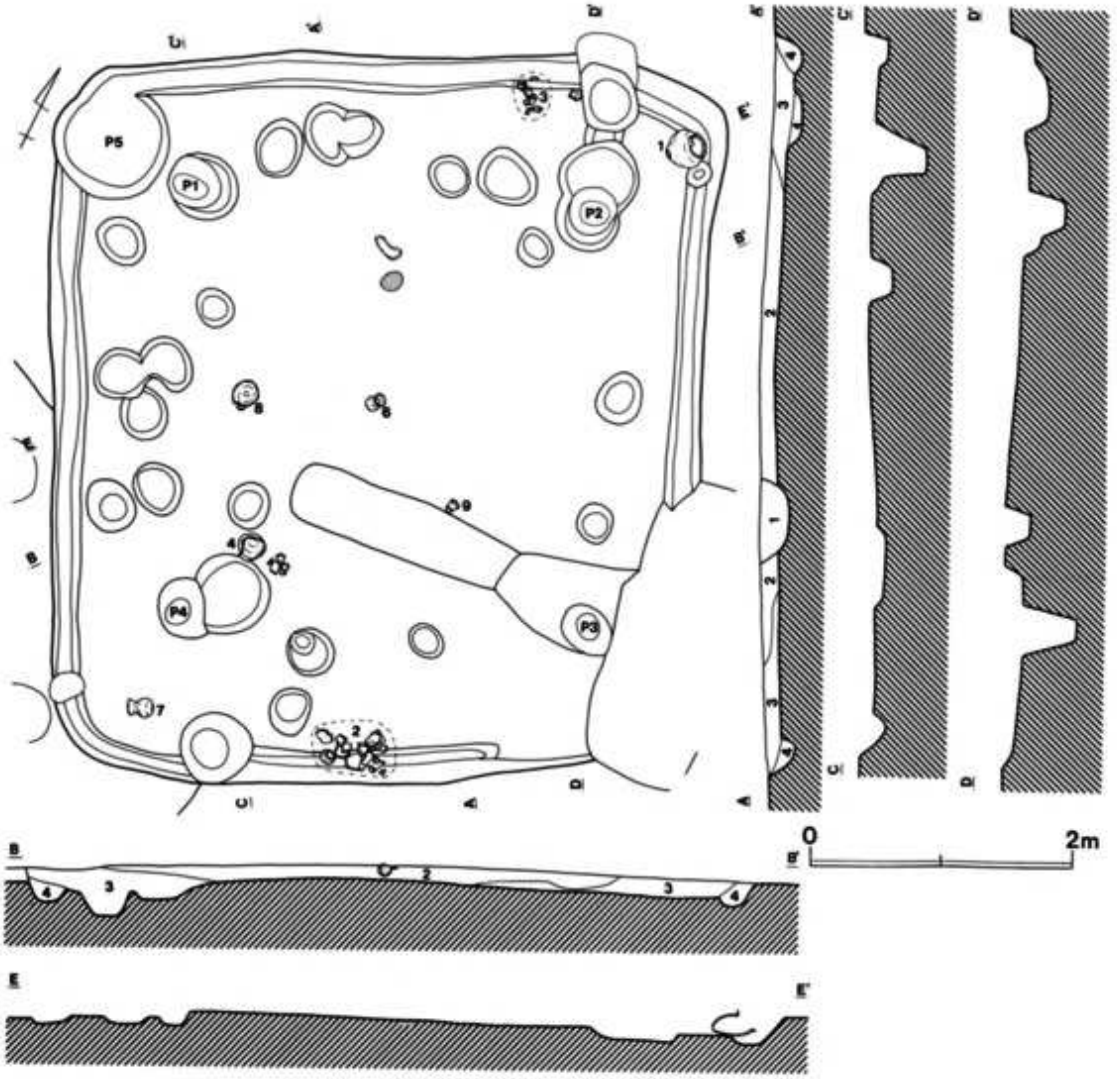
第27号住居跡（第240図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第26号土壙と溝状土壙に切られ、第28号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、比較的良い方である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈している。規模は、北西から南東方向が5.62m、南西から北東方向が5.02mを測る。住居の主軸方位は、N－26°－Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で18cmある。各壁下には幅25cm前後・深さ5cm～10cm程度の壁溝が巡っているが、住居東側コーナー部付近は途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居のほぼ対角線上に配置されている。形態は、直径45cm前後の円形もしくは楕円形を呈し、深さは40cm～60cmある。住居西側コーナー部に位置するP5は、貯蔵穴の可能性が高いと思われる。直径90cmの円形を呈し、深さは13cmある。底面は広く平坦である。炉は、住居中央部の北西寄りに位置する。床面が焼けているだけの地床炉であるが、その範囲は小規模である。炉の北西側の床面上には長さ20cm程度の棒状の焼けた石があり、炉石を伴っていたようである。遺物は、床面上より完形に近い土器が比較的多く出土している。また、覆土中には少量ながら和泉式土器の破片の混入が見られる。

第27号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口縁部径 17.2cm 器高 31.7cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は「ハ」の字状に開き、端部は内側に折り返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面篦ナデ。台部外面ナデの上半ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	ほぼ完形。 床面直上。
2	台付甕	口縁部径 17.0cm 器高 30.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は「ハ」の字状に開き、端部は内側に折り返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデの後口縁部との境にケズリを施す。台部外面ナデの後上半部分的にハケ、内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	3/4。 胴部内面にタール状の黒色付着物が見られる。 床面付近。
3	台付甕	口縁部径 13.0cm 残存高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	1/2。 床面付近。

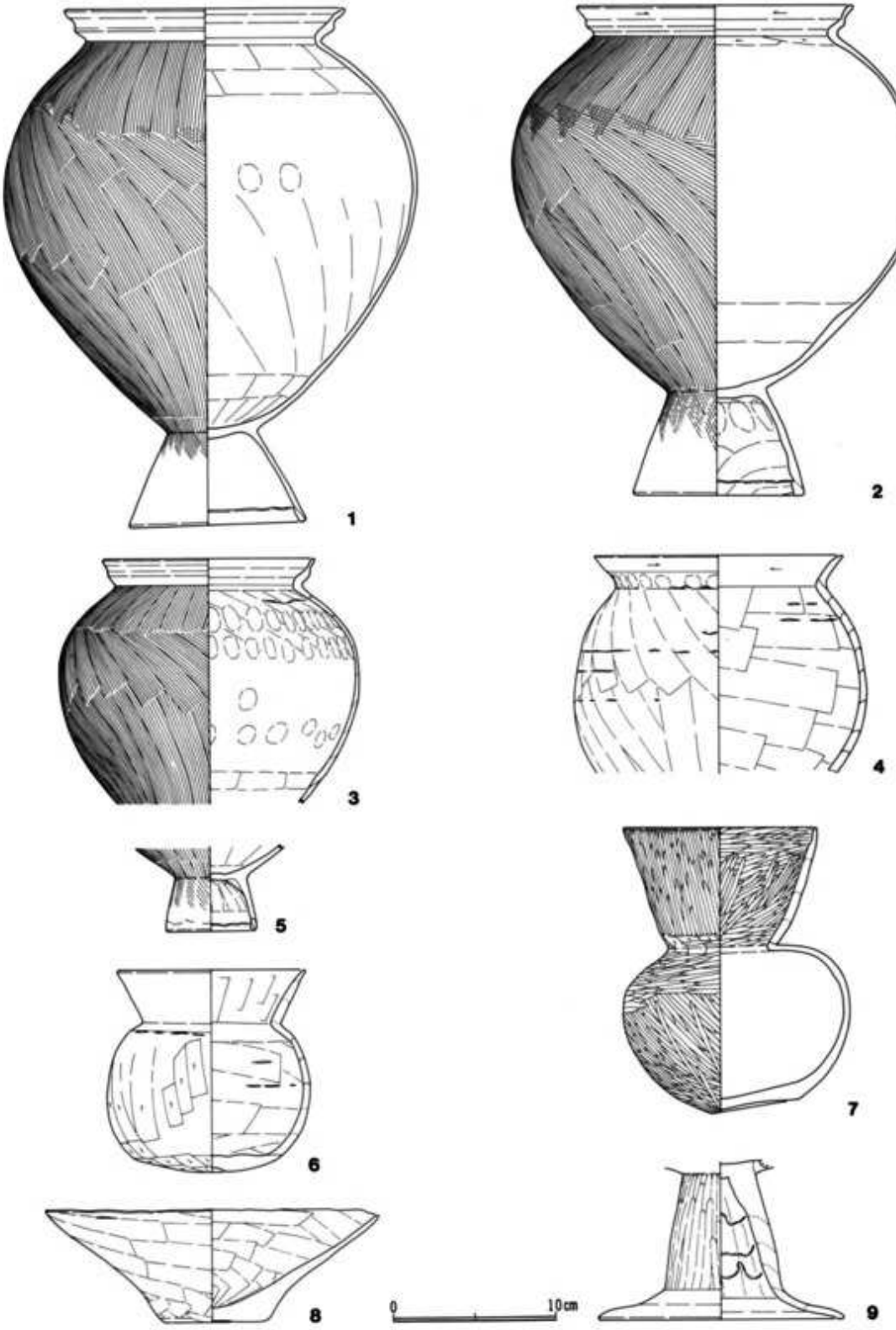


第240図　第27号住居跡

第27号住居跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	台付甕	口縁部径 15.2cm 残存高 13.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篦ナデ。	白色粒 内外－暗茶褐色	3/4。 床面付近。
5	台付甕	残存高 5.2cm	粘土紐積み上げ成形。台部はあまり外傾しない。端部は内側に折り返す。	胴部外面ハケ、内面篦ナデ。台部外面ナデの後上半の一部ハケ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡黄褐色	台部のみ。 覆土中。



第241図　第27号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	短頸壷	口縁部径 (11.6cm) 器高 12.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外反ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は丸底ぎみであるが、中央部は小さく窪む。	口縁部外面ヨコナデ、内面篦ナデ。胴部外面ナデの後部分的にケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 内外－明橙褐色	ほぼ完形。 外面黒斑あり。 床面付近。
7	直口壷	口径 11.8 器高 17.5 底径 5.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張り、底部は若干窪む平底を呈する。	口縁部内外面ミガキ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗茶褐色	ほぼ完形。 器形はかなり歪んでいる。 床面直上。
8	鉢	口径(20.4) 器高 6.9 底径 6.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部からそのまま内湾ぎみに開く。底部は突出した平底を呈する。	口唇部未調整。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－明茶褐色	2/3。 外面黒斑あり。 覆土中。
9	高坏	残存高 9.7cm	粘土紐巻上げ成形。脚部はやや短く太く、脚端部は内湾ぎみに大きく開く。	坏部内外面ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	白色粒 外－淡茶褐色 内－暗褐色	4/5。 覆土中。

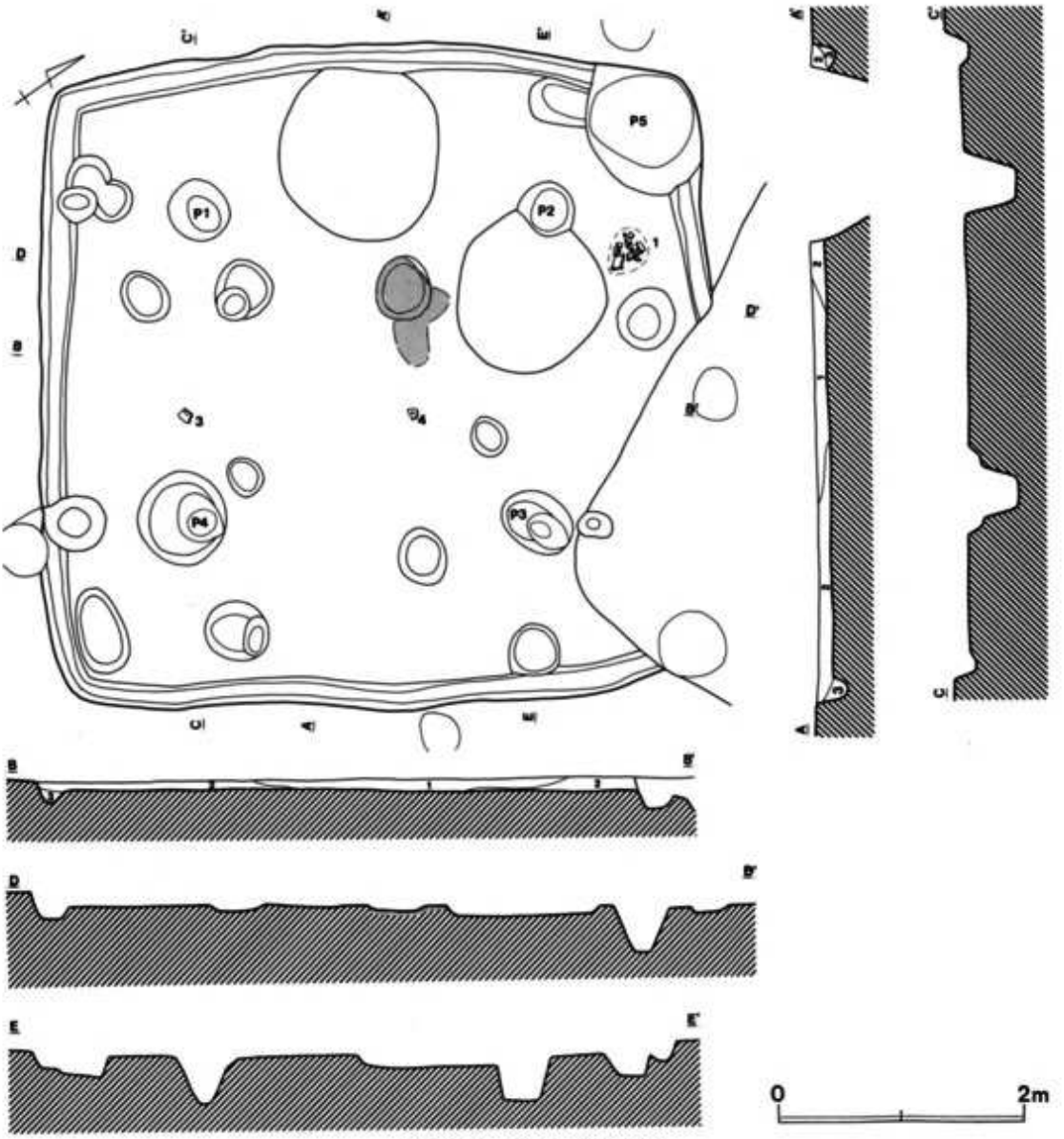
第28号住居跡（第242図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第27号住居跡・第29号土壙・第３号井戸跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、方形を呈しているが、南西側壁以外の壁には若干張りが見られる。規模は、北西から南東方向が5.37m、南西から北東方向が5.44mを測る。住居の主軸方位は、N－57°－Wをとる。壁は、壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で12cmある。各壁下には幅20cm前後・深さ５cm～10cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ４の４本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、直径50cm～70cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さはいずれも40cm前後ある。貯蔵穴は（Ｐ５）は、住居北側コーナー部に位置し、90cm×100cmの比較的規模の大きな不整円形を呈している。底面は広く平坦で、深さは26cmある。炉は、住居中央部のやや北西寄りに位置している。床面を若干掘り窪めた地皿炉で、全体に良く焼けて赤色化している。遺物は、覆土中や床面上から土器片が少量出土しただけである。

第28号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口縁部径 (16.2cm) 推定高 (29.5cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は内湾ぎみに開き、端部を内側に折り返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデの後上端篦ナデ。台部がナデの後上端ハケ、内面指ナデの後下半ナデ。	片岩粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－暗褐色	口縁部1/3。 胴部下半1/2。 胴部上半と下半は接合しない。器形は図上復元。外面煤の付着あり。 床面付近。

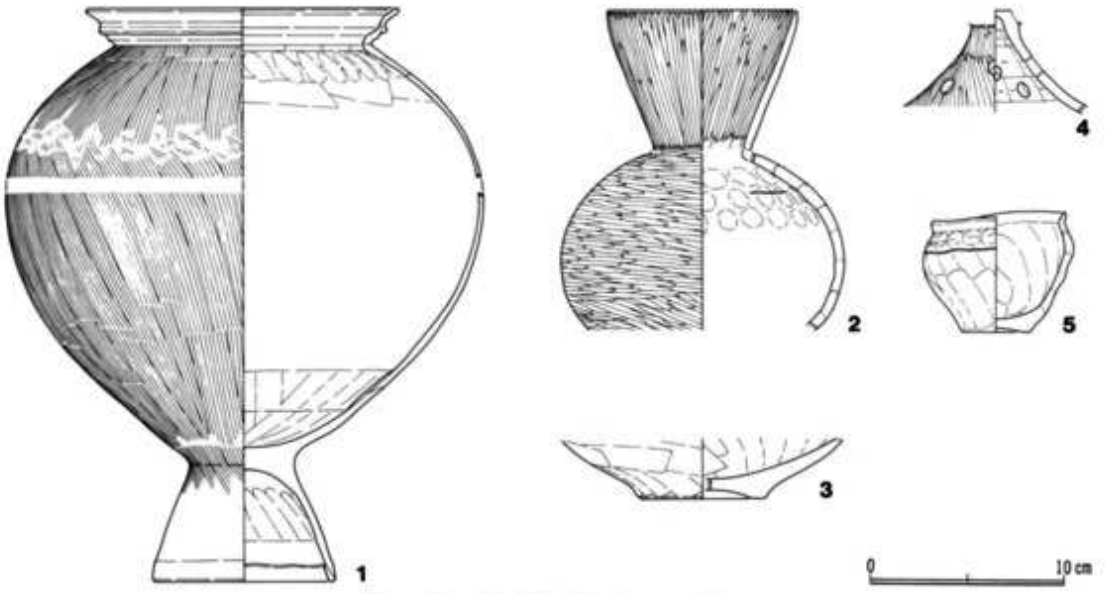


第242図　第28号住居跡

第28号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	直口壺	口縁部径（9.8cm） 残存高（16.4cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ミガキ。胴部外面ミガキ、内面ナデ。	白色粒 内外－茶褐色	口縁部1/4、胴部1/2。口縁部と胴部は接合しない。器形は図上復元。覆土中。

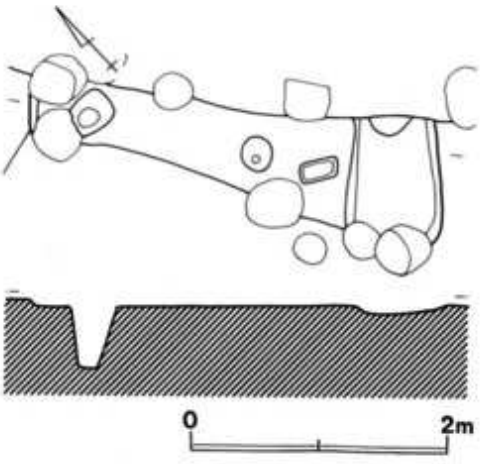


第243図　第28号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	壷	底部径（6.6cm）	粘土紐積み上げ成形。底部は突出し、中央部の窪む平底を呈する。	胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/2。 床面付近。
4	高坏	残存高 5.3cm	粘土紐積み上げ成形。脚部は外反しながら大きく開く。	脚部外面ミガキ、内面ナデの後ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	脚部上半のみ円孔は8孔で、上下2段に千鳥状に配列する。床面直上。
5	小形鉢	口径 6.9 器高 6.2 底径 3.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外傾する。胴部はやや張り、底部は中央部が若干窪む平底を呈する。	口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。	白色粒 外－淡茶褐色 内－黄褐色	2/3。 覆土中。

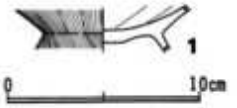
第29号住居跡（第244図）

A地点の調査区中央部のやや東側寄りに位置し、重複する第16号住居跡に住居の西側を切られている。また第6号住居跡とも重複しているが、新旧関係は明確にできなかった。すでに耕作によって住居跡の床面間際まで削平されており、遺構の遺存状態は劣悪である。住居跡の形態は不明であるが、規模は北西から南東方向が3.10mを測り、比較的小規模な住居であったと思われる。壁は、最高で5cm程度しか残存していないため明確ではない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中



第244図　第29号住居跡

央部は比較的堅緻であるが壁際の周辺部はやや軟弱である。住居内に見られるピットは、ほとんどが中世以降のもので、本住居跡に伴うピットは明確ではない。遺物は、古墳時代前期の土器片が数片出土しただけである。No.1のS字状口縁台付甕の破片は、床面付近から出土したものである。



第245図　第29号住居跡出土遺物

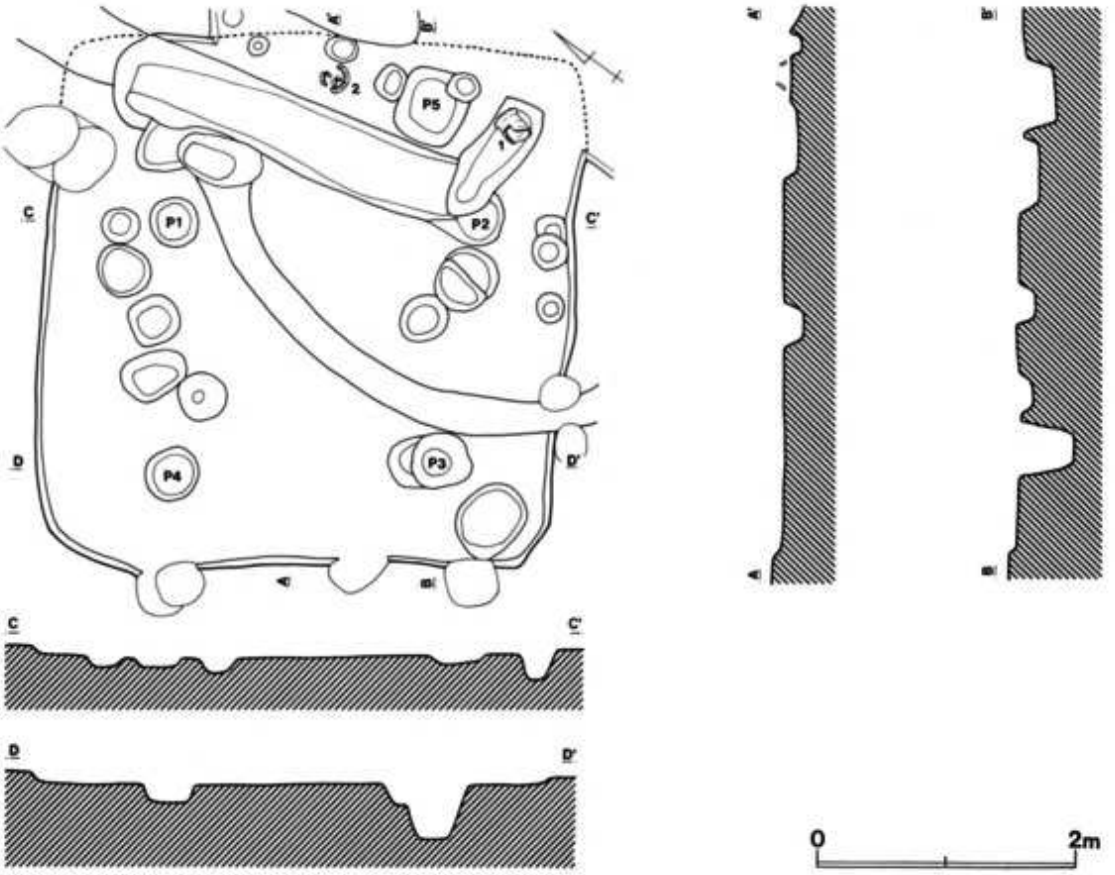
第29号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕		粘土紐積み上げ成形。台部はやや大きい。	胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ハケ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外－淡褐色	底部のみ。床面付近。

第30号住居跡（第246図）

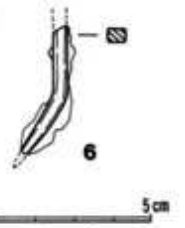
A地点の調査区東側に位置し、重複する第7号溝跡や第3号円形周溝遺構及び溝状土壙に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈するものと推測される。規模は、北東から南西方向が4.06m、北西から南東方向が4.10mを測る。住居の主軸方位は、N－57°－Eをとる。壁は、緩や

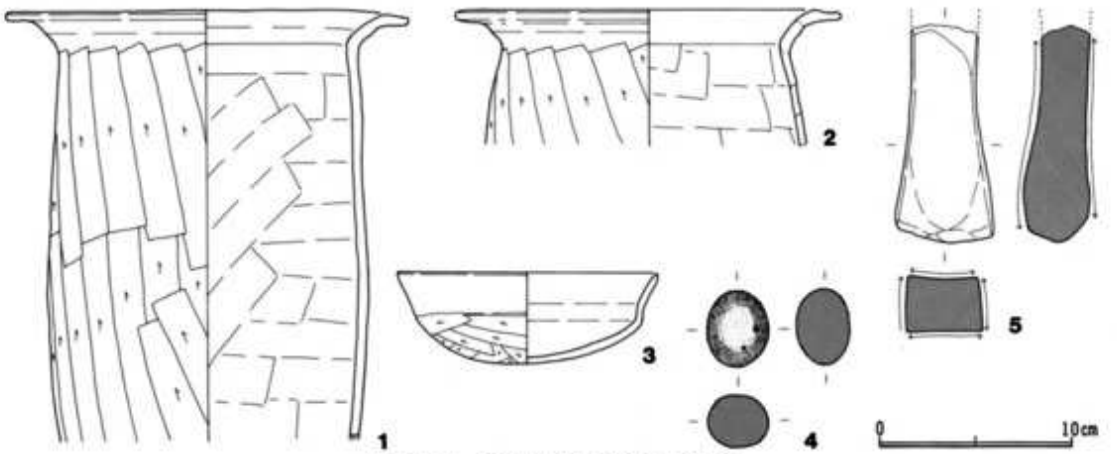


第246図　第30号住居跡

かに立ち上がり、最高で8cm程度残存している。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体的に堅緻である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴と思われ、住居のほぼ対角線上に配置されている。形態は、直径40cm前後の円形を呈し、深さは8cm～40cmとばらつきがある。カマド右側に位置するP5は、貯蔵穴の可能性が高いと思われ、55cm×50cmの整った方形を呈している。底面は広く平坦で、深さは25cmある。貯蔵穴の覆土中には、焼土粒子と炭化粒子が顕著に見られた。カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置していたものと推測される。すでにカマド自体は崩壊してその痕跡は確認できなかったが、床面上には焼土の分布が顕著に見られ、その右側の床面上に伏せてあったNo2の甕は、おそらく袖の補強に使用されたものではないかと思われる。遺物は、床面上や床面付近から土器が少量出土しているが、No1の甕は、住居東側コーナー分布付近のピット内から横転したような状態で出土している。また、土器以外では、磨石(No4)と破損した砥石(No5)が床面付近から出土している。No6の釘状の鉄製品については、出土状態が明確ではなく、本住居跡に直接伴うものか不明である。



第247図　第30号住居跡出土鉄製品



第248図　第30号住居跡出土遺物

第30号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 20.8 残存長 21.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外反する。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒 内外－明橙褐色	上半部のみ。 ピット内。
2	甕	口縁部径 19.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡茶褐色	3/4。 床面直上。
3	坏	口径 13.4 器高 4.7	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明橙褐色	3/4。 底部外面黒斑あり。 床面付近。
4	磨石	長さ 3.9 幅 3.2 厚さ 2.7	全体に丸く、若干楕円形ぎみの形態を呈する。	全体によく磨られており、側面の一部に敲打痕あり。	安山岩	完形。 重さ57g。 床面付近。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	砥石	残存長 11.20 最大幅 5.00 厚さ 3.40	自然石を断面長方形の柱状に加工。端部は撥状に開く。端部は未調整。	表裏面及び両側面とも良く擦られ、いずれの面も窪んでいる。	凝灰岩	約2/3。 重さ250g。 床面付近。
6	鉄製品	残存長 3.20 幅 0.41 厚さ 0.32	断面は長方形ぎみの形態を呈し、先端にに向かって細くなる。		鉄製	約1/2。 覆土中。

第31号住居跡（第249図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第16号掘立柱建物跡や第7号溝跡及び溝状土壙に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良い方である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ方形を呈している。規模は、北西から南東方向が5.74m、北東から南西方向が6.02mを測る。住居の南北方向は、N−16°−Wを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で22cmある。住居の北側壁以外の各壁下には、幅20cm前後・深さ5cm〜10cmの壁溝が見られるが、西側壁下は一部途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1〜P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、直径60cm前後の円形か楕円形を呈し、深さは35cm〜50cmある。貯蔵穴は、北西側コーナー部のP5と南西側コーナー部のP6の2箇所ある。P5は、比較的規模の大きな楕円形ぎみの形態で、深さは26cmあり、二段に掘られている。P6は、直径80cm前後の円形を呈し、深さは15cmある。炉は、住居中央部を南北方向に切る溝状土壙によって破壊された可能性が高く、残存する床面上では確認されなかった。遺物は、住居中央部や北西側コーナー部の貯蔵穴(P5)周辺から、完形に近い土器が比較的多く出土している。また、東側壁際からは壁にもたれたような状態で、刃物による傷痕と敲打痕をもつ敲石(No15)の破片が出土している。

第31号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口縁部径 15.8cm 器高 27.9cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。台部は直線的に開き、端部は内側に折り返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のハケの後肩部に横ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後上半に部分的な斜方向のハケ、内面指ナデ。	白色粒・黒色粒 内外−淡褐色	3/4。 胴部外面の中位に煤の付着あり。 床面付近。
2	甕	口縁部径 (17.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外−淡褐色	口縁部1/3。 覆土中。
3	台付甕	残存高 7.1cm	粘土紐積み上げ成形。台部内湾ぎみに開き、端部は内側に折り返す。	台部外面ナデの後上半に部分的な斜方向のハケ、内面上半指ナデ・下半ナデ。	白色粒 外−淡褐色 内−暗褐色	台部のみ。 床面付近。
4	台付甕	残存高 7.3cm	粘土紐積み上げ成形。台部内湾ぎみに開き、端部は内側に折り返す。	台部外面ナデの後上半に部分的な斜方向のハケ、内面上半指ナデ・下半ナデ。	白色粒 外−淡褐色 内−明橙褐色	台部のみ。 覆土中。

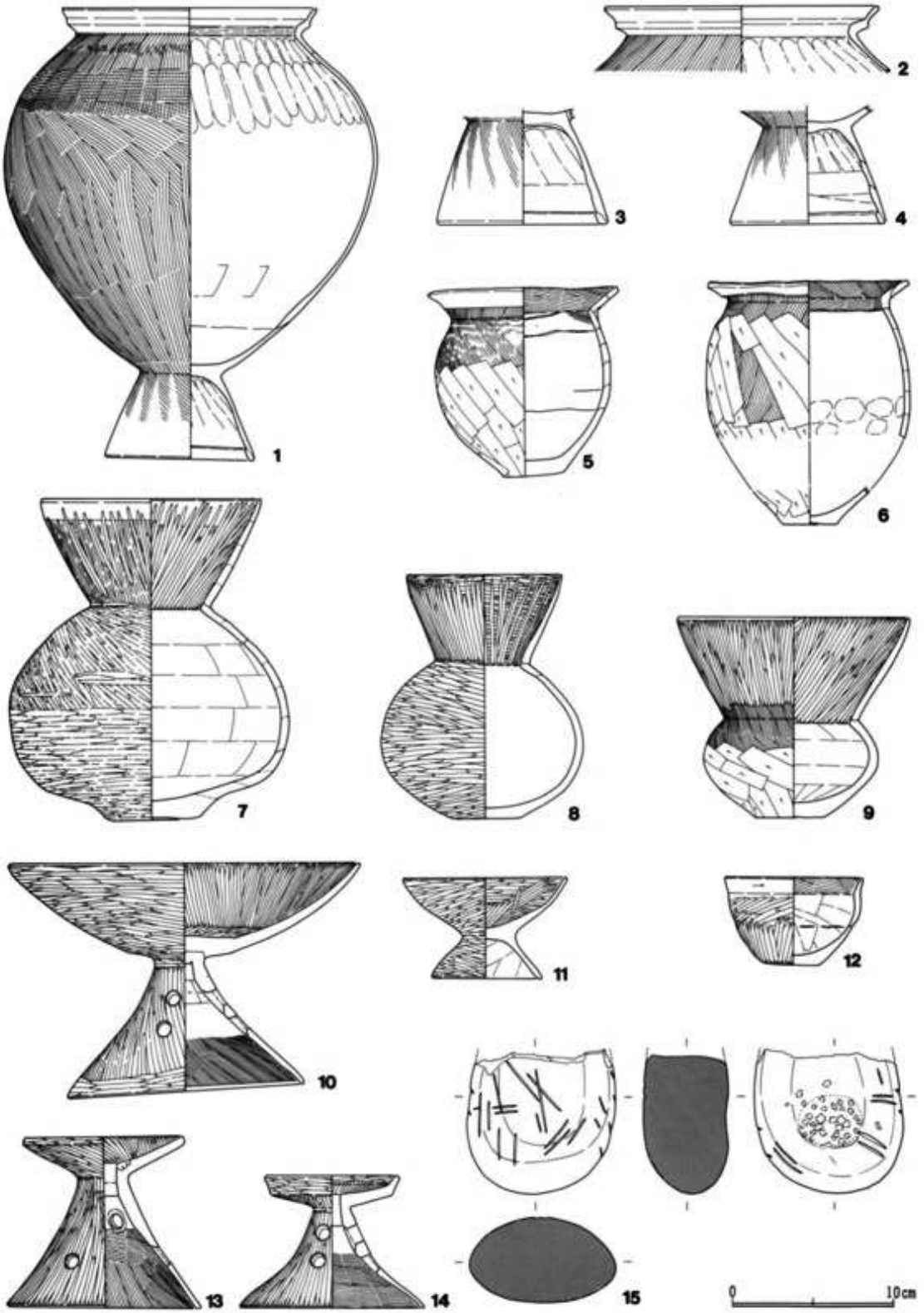
第249図　第31号住居跡

第31号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	小形甕	口径 11.8 器高 11.7 底径 3.7	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに外傾する。胴部は張り、やや上位に最大径をもつ。底部は平底。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケの後ナデ下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	白色粒 外－明茶褐色 内－黒褐色	完形。 P5内。

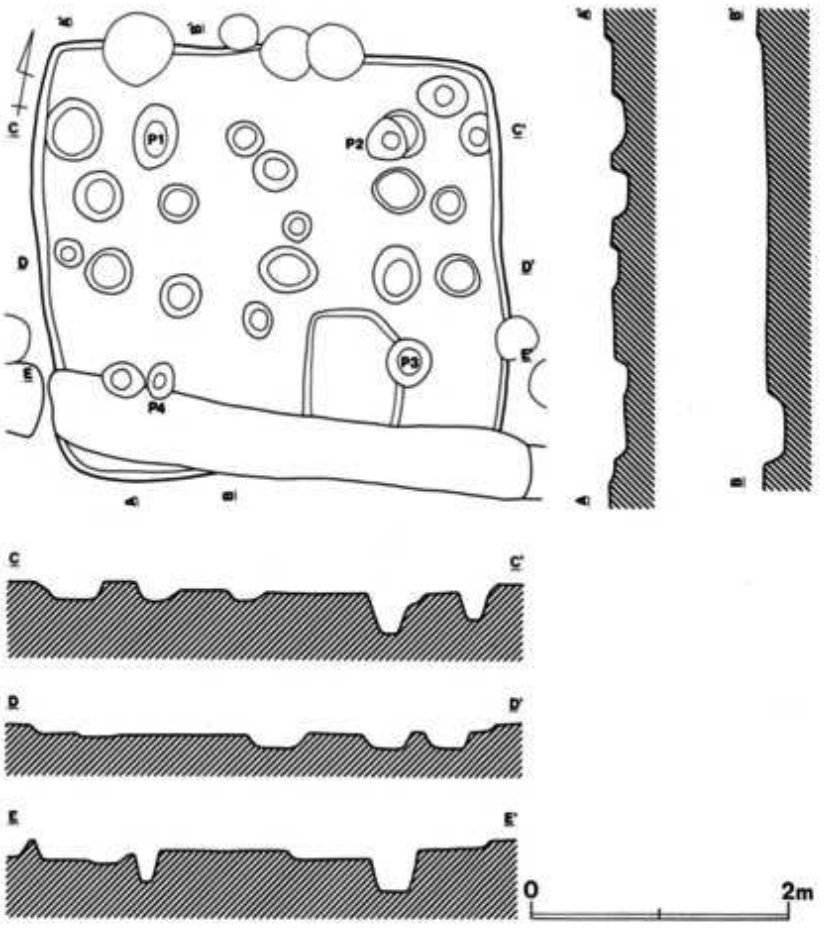


第250図　第31号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	小形甕	口径 12.4 推定高(15.0) 底径 3.4	粘土紐輪積み成形。口縁部は複合状を呈し強く外反する。胴部はやや張り、上位に最大径をもつ。底部は突出ぎみの平底を呈する。	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。	白色粒 外－暗茶褐色 内－暗褐色	3/4。 覆土中。
7	直口壷	口径 13.6 器高 19.8 底径 5.8	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、最大径を下位にもつ。底部は突出した平底を呈する。	口唇部ヨコナデ。口縁部外面ハケの後ミガキ、内面ミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	ほぼ完形。 P5内。
8	直口壷	口径 9.6 器高 15.1 底径 4.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は平底を呈す。	口縁部内外面ミガキ。胴部外面ミガキ、内面ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	完形。 P5内。
9	直口壷	口径 14.4 器高 12.4 底径 4.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は小さく、最大径を中位にもつ。底部は平底を呈する。	口縁部外面ハケの後ミガキ、内面ミガキ。胴部外面ハケの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	ほぼ完形。 外面黒斑あり。 床面直上。
10	高坏	口縁部径 21.8cm 器高 14.5cm	粘土紐積み上げ成形。坏部下端に稜をもち、口縁部は内湾しながら開く。脚部は大きく外反し、端部はやや内湾ぎみである。	坏部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ナデの後上端ケズリ・下半ハケ。脚端部内面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	ほぼ完形。 円孔は縦2個1組で3箇所。 床面付近。
11	小形高坏	口縁部径 10.2cm 器高 6.3cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は坏部から内湾しながら開く。脚部は低く、内湾ぎみに開く。	坏部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	2/3。 床面付近。
12	小形鉢	口径 8.6 器高 5.4 底径 3.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外傾する。胴部はあまり張らず、底部は平底。	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ミガキ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	白色粒 内外－暗茶褐色	ほぼ完形。 覆土中。
13	器台	口縁部径 10.0cm 器高 10.7cm	粘土紐積み上げ成形。器受部は若干内湾ぎみに開き、口唇部は広い。脚部は高く、外反ぎみに開く。	器受部内外面ミガキ。脚部外面ハケの後ミガキ、内面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	3/4。 円孔は上下とも3箇所ずつで、千鳥状に配している。 P5上面。
14	器台	口縁部径 8.4cm 器高 8.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直線的に外傾する。脚部は外反ぎみに大きく開くが、下半は内湾する。	器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	1/3。 円孔は縦2個1組で3箇所。 床面付近。
15	敲石	残存長 8.9 幅 9.1 厚さ 5.2 重さ 591g	断面楕円形で、丸みの強い自然石を利用。	表裏面及び側面の一部に、刃物による刻線状の傷がある。裏面中央部は、敲打により窪んでいる。	砂岩	約1/2。 床面直上。

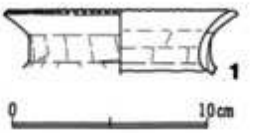
第32号住居跡（第251図）

A地点の調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第13号掘立柱建物跡と溝状土壙に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されており、また住居内を中世以降の多数のピットによって切られているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。



第251図　第32号住居跡

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が3.63m、南北方向が3.40mを測る。住居の南北方向は、N−12°−Wをとる。壁は、最高で7cm程度しか残存していないため、明確ではない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体的に堅緻である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、長さ30cm～60cmの円形か楕円形を呈し、深さは10cm～30cmある。住居内では炉は確認されなかったが、もともと炉を伴わなかった可能性が高い。遺物は、土器片が少量出土しただけである。



第252図　第32号住居跡出土遺物

第32号住居跡出土遺物観察表

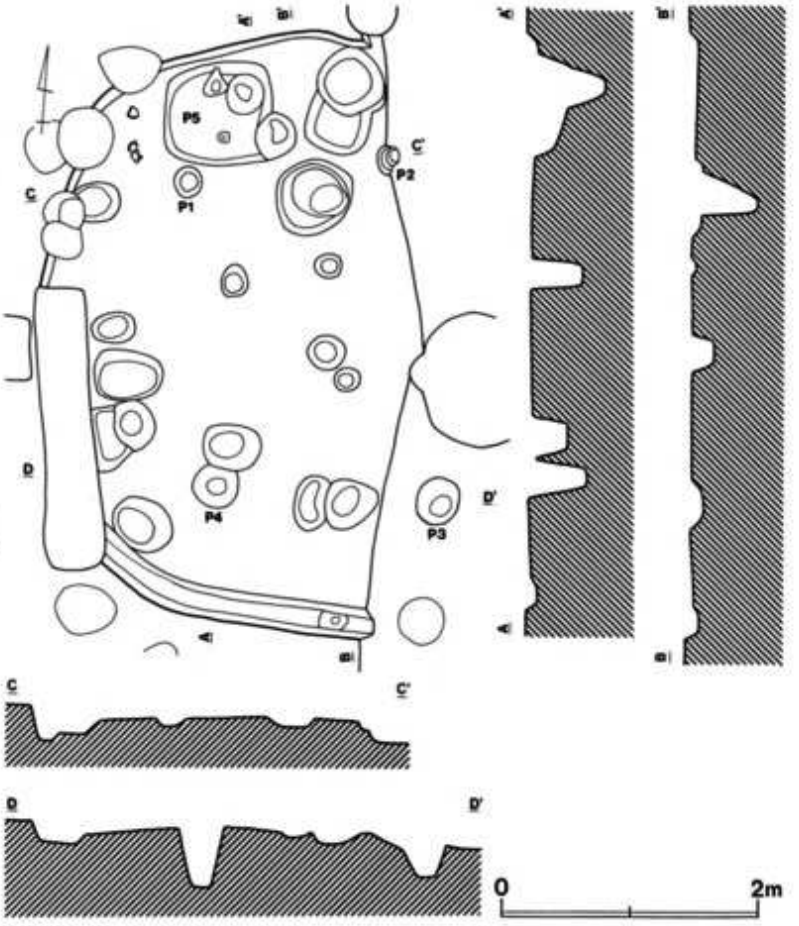
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径（12.0cm）	粘土紐積み上げ成形。頸部は直立ぎみで、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面篦ナデ。口唇部細かなキザミ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	1/2。 覆土中。

第33号住居跡（第253図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第4号溝跡や溝状土壙に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好ではなく、また住居跡の東側

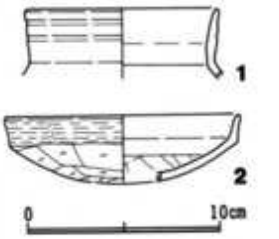
半分を第７号溝跡に切られているため、住居跡の全容は不明である。

平面形は、コーナー部の丸みが強い方形か長方形を呈していたものと思われるが、各壁には若干張りが見られる。規模は、南北方向が4.68m、東西方向は３mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で10cm程残存している。南側壁の壁下には幅25cm・深さ５cm程度の壁溝が巡っているが、他の壁下には見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。



第253図　第33号住居跡

本住居跡に伴うと考えられるピットは、Ｐ１～Ｐ５の５箇所である。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４は、その位置から主柱穴の可能性が考えられるもので、形態は直径25cm～35cmの円形を呈し、深さは５cm～45cmある。Ｐ５は、貯蔵穴と考えられるもので、住居の北西コーナー部付近に位置している。84cm×80cmの規模の大きな方形ぎみの形態を呈しており、底面は広く平坦で深さは23cmある。残存する住居内では、カマドの痕跡は確認できなかったが、貯蔵穴の位置から推測すると、住居の北側壁に付設されていた可能性が高いと推測される。遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。



第254図　第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	短頸壷	口縁部径(10.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直立し、外面に２条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/4。 覆土中。
2	坏	口径(12.2) 器高(3.4)	口縁部は短く直立ぎみに外反する。体部は浅い。	口縁部内外面軟質刷毛状工具によるヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗茶褐色	1/4。 覆土中。

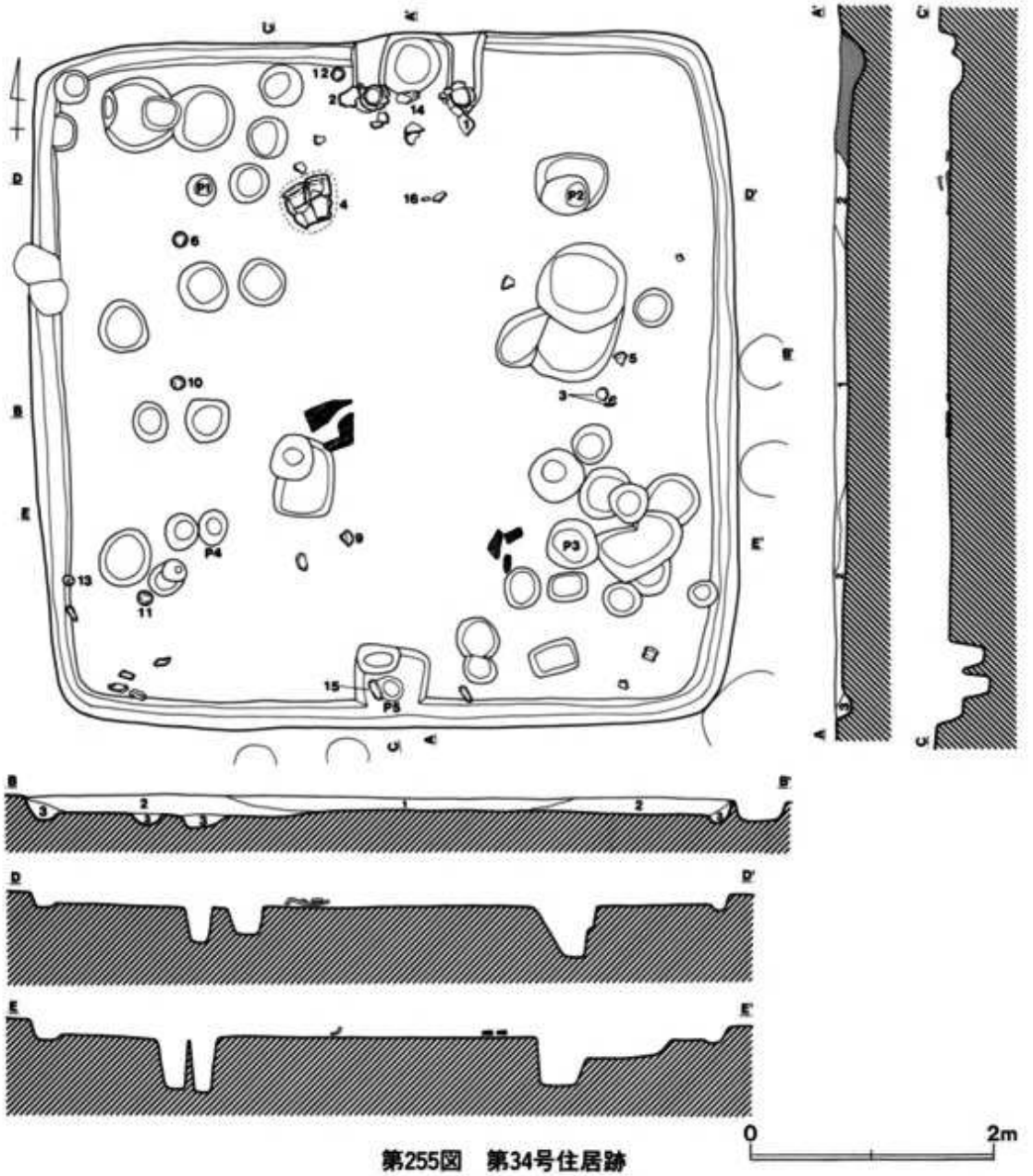
第34号住居跡（第255図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第9号掘立柱建物跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好ではない。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形を呈している。規模は、南北方向が5.77m、東西方向が5.91mを測る。住居跡の主軸方位は、N−3°−Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で12cm程残存している。各壁下には幅20cm前後・深さ5cm～8cmの壁溝が、途切れずに全周している。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、直径25cm～45cmの円形か楕円形を呈し、深さは30cm～40cmある。貯蔵穴は見られない。P5は、住居南側壁下の中央部に位置し、壁溝が方形に張り出した部分の真ん中にある。形態は、直径20cmの小規模な円形を呈し、深さは33cmある。このP5は、その位置や形態から見て、入口部の施設と考えられるが、その西側縁からは砥石(No15)が1個据えられたような状態で出土している。この他にも本住居跡に伴うと考えられるピットがいくつかあるが、その性格は不明である。カマドは、住居北側壁の中央やや東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長64cm・最大幅110cmを測る。袖は、灰白色粘土を主体にして、床面上に盛り上げて構築しているが、両袖の先端部にはNo1とNo2の甕を伏せて補強に使用している。燃焼部は、掘り方を黒褐色土(第4層)によって若干埋め戻し、住居床面よりもやや低い面を燃焼面(火床)にしていたようである。また、カマド内の焚口付近の中央部からは、土製支脚(No14)が横転した状態で出土している。遺物は、住居周辺部の床面上から、完形に近い大形甕や坏等が多く出土している。土器以外では、覆土中から土錘が2個出土している。また、住居南西側コーナー部の床面上からは、長さ15cm程度の片岩が4個まとまって出土し、その周辺にも同様の片岩がいくつか見られる。

第34号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 21.0 残存長 28.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外−明橙褐色	4/5。 外面黒斑あり。 カマド袖。
2	甕	口縁部径 22.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 外−暗茶褐色 内−黒褐色	3/4。 カマド袖。
3	甕	底部径 5.6cm	粘土紐積み上げ成形。底部は平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。 底部外面にケズリ。	白色粒・黒色粒 内外−淡褐色	2/3。 床面付近。
4	大形甕	口径 26.6 器高 30.8 底径 10.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず、底部は単孔。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外−淡茶褐色	完形。 外面黒斑あり。 床面直上。
5	鉢	口縁部径 (20.2cm)	口縁部は短く内傾する。体部は深い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外−淡橙褐色	1/5。 床面付近。
6	坏	口径 12.2 器高 4.3	口縁部は外反ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外−淡橙褐色	ほぼ完形。 外面黒斑あり。 床面直上。

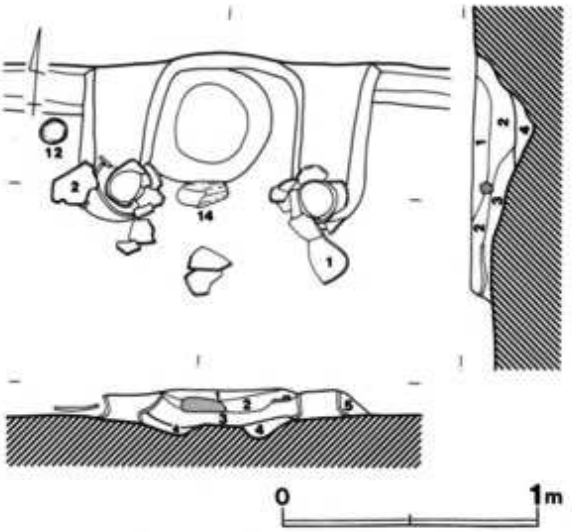


第255図　第34号住居跡

第34号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
7	坏	口径(12.0) 器高 4.0	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/4。 覆土中。



第34号住居跡カマド土層説明

第1層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（灰白色粘土ブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

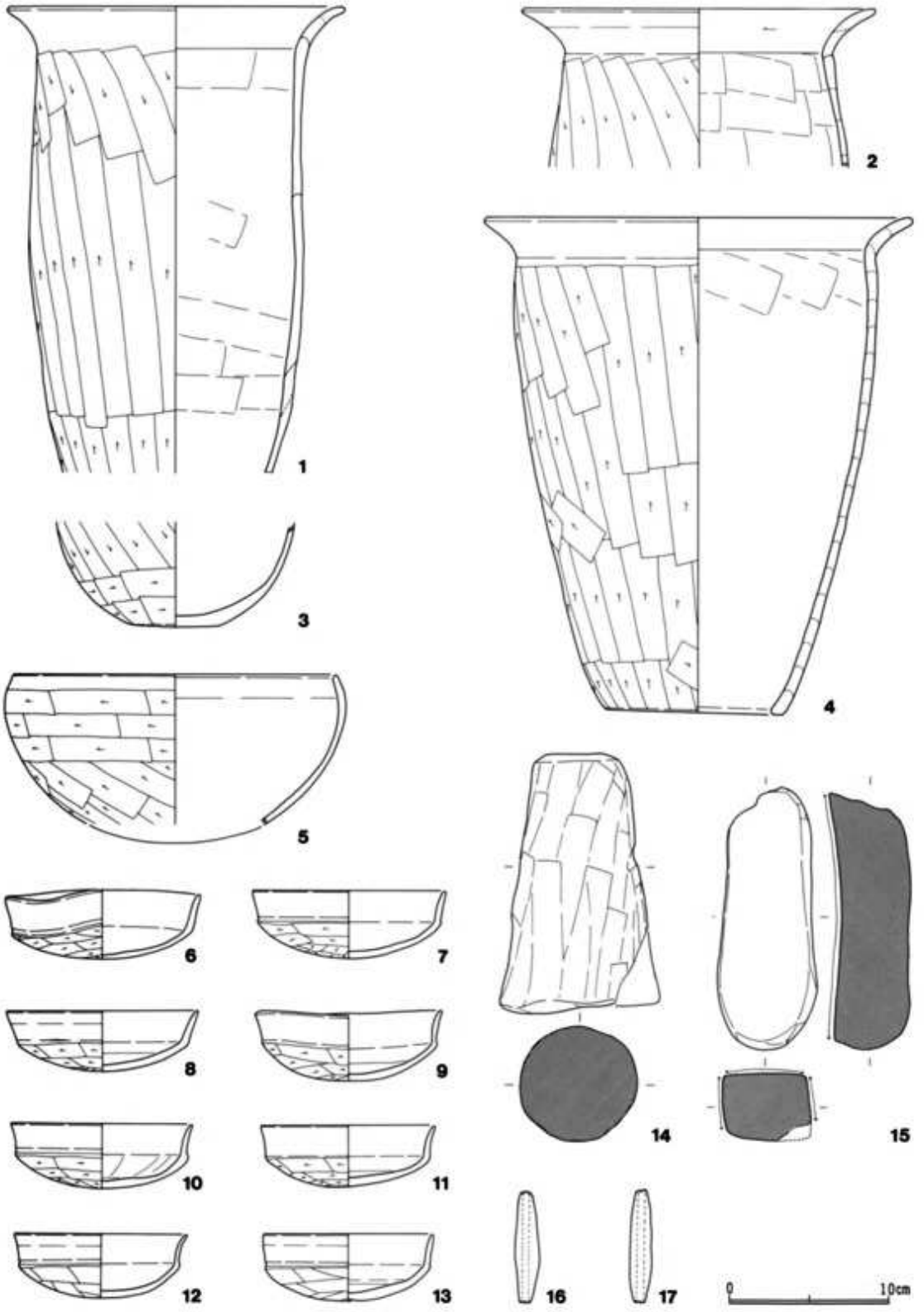
第3層：暗褐色土層（焼土粒子・灰白色粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：灰白色粘土層（灰白色粘土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第256図　第34号住居跡カマド

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	坏	口径(12.0) 器高 3.8	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/4。 覆土中。
9	坏	口径 11.6 器高 4.4	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/2。 床面付近。
10	坏	口径 11.3 器高 4.0	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	完形。 床面付近。
11	坏	口径 10.8 器高 3.8	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	完形。 床面付近。
12	坏	口径 10.8 器高 4.0	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	完形。 床面直上。
13	坏	口径 10.6 器高 4.2	口縁部は外反ぎみにやや外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	完形。 床面直上。
14	土製支脚	高さ 16.1cm 最大幅 8.5cm	粘土塊積み上げ成形。断面は円形をなし、上下両端とも平坦面をなす。側面形態は下に向かって広がる。	上下両端面ともナデ。側面縦方向の雑なナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	3/4。 二次焼成を受けている。 カマド内。
15	砥石	長さ 16.2 幅 6.2 厚さ 4.6	自然石を断面長方形の柱状に加工。上下両端部と裏面は未調整。	表面及び両側面は良く擦られて、中央部がやや窪んでいる。	凝灰岩	完形。重さ679g。 両側面と裏面に刃物痕。 P5縁。
16	土錘	長さ 6.9 幅 1.5	形態は棒状を呈し、中央部はやや厚く膨らんでいる。	外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色	完形。重さ21g。 覆土中。
17	土錘	長さ 7.0 幅 1.3	形態は棒状を呈し、中央部はやや膨らんでいる。	外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色	完形。重さ22g。 覆土中。



第257図　第34号住居跡出土遺物

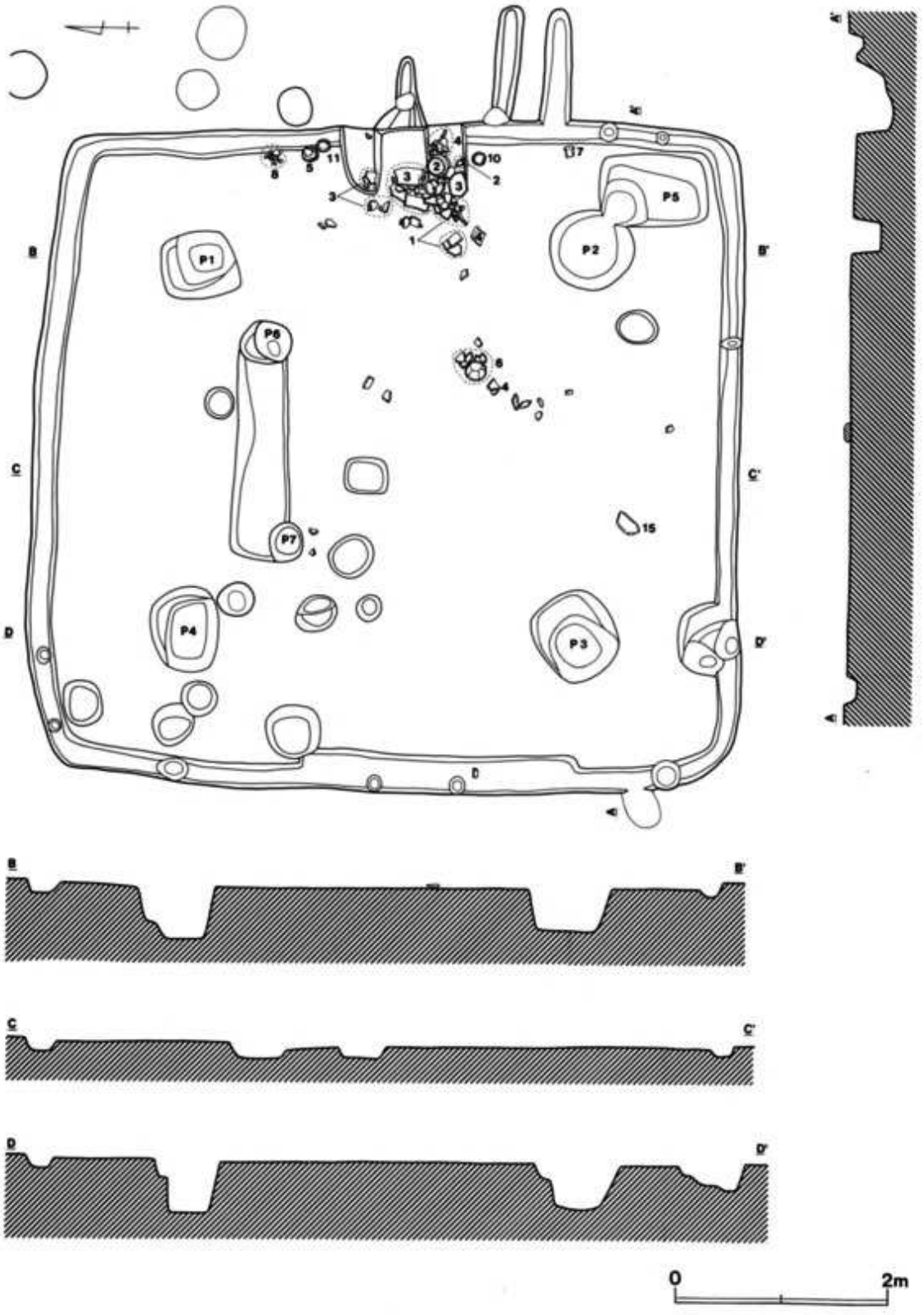
第35号住居跡（第258図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第9号掘立柱建物跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好ではない。

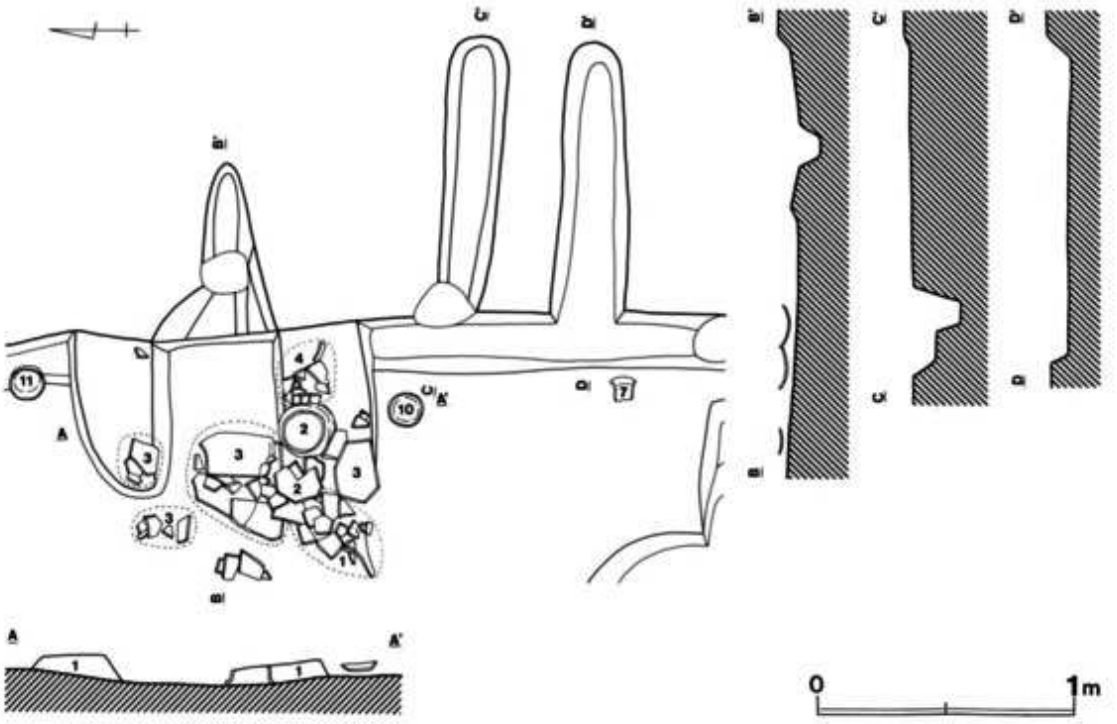
平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が6.62m、南北方向が6.32mを測る。住居の主軸方位は、N－90°－Eをとる。壁は、最高で7cm程度しか残存していないため、明確ではない。各壁下には幅20cm・深さ5cm～10cm程度の比較的均一な形態の壁溝が、途切れずに巡っているが、住居西側壁下の中央部は張り出し状に若干幅が広くなっている。また、壁溝の中には、深さ10cm程度の小ピットが部分的にいくつか見られる。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、長さ70cm～80cmの方形もしくは長方形を呈するものが主体で、深さは40cm～50cmと比較的そろっており、多くは二段掘られている。貯蔵穴（P5）は、カマド右側の住居南東コーナー部に位置し、1m×67cmの長方形を呈している。底面は広く平坦で、深さは30cmある。住居中央部の主柱穴P1とP4の間には、長さ2.20m・幅50cm・深さ12cmの長方形を呈する掘り込みがある。掘り込みの両端には、直径40cmの円形を呈し、床面からの深さが25cm程度のP6とP7のピットを伴っている。その性格については不明であるが、住居内の何だかの構造物に関係する施設と推測される。カマドは、住居東側壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。カマド南側には、壁外に延びる古いカマドの煙道が2本見られ、本カマドが住居構築当初から存在したものではなく、作り替えられたものであることが解る。規模は、全長130cm・最大幅114cmを測る。袖は、灰白色粘土ブロックやロームブロックを含む暗灰褐色土を、床面上に盛り上げて構築しており、袖の先端部や焚口の天井部には、甕を補強に使っていたようである。燃焼部は、住居床面より若干低く、あまり良く焼けていない。煙道部は、壁外に66cm程残存している。燃焼部よりも一段高く、壁外に向かって若干傾斜している。遺物は、カマド内やその周辺より甕や坏が、住居中央部の床面上より大形鉢が出土している。土器以外では、覆土中から石製紡錘車（No14）や土錘の破片（No12・13）が出土し、また住居南側の床面上には偏平でまな板状の台石（No15）が出土している。

第35号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 20.8 器高 35.5 底径 3.7	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内側に浅い沈線を施す。胴部はあまり張らず、底部は小さな平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後篦ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 黒色粒 内外－淡茶褐色	4/5。 カマド前。
2	甕	口縁部径 20.2cm 残存高 36.7cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内側は窪む。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	4/5。 カマド袖。
3	甕	口径 20.2 残存高 35.0	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－明茶褐色 内－茶褐色	4/5。 二次焼成により変れている。 カマド内。



第258図　第35号住居跡

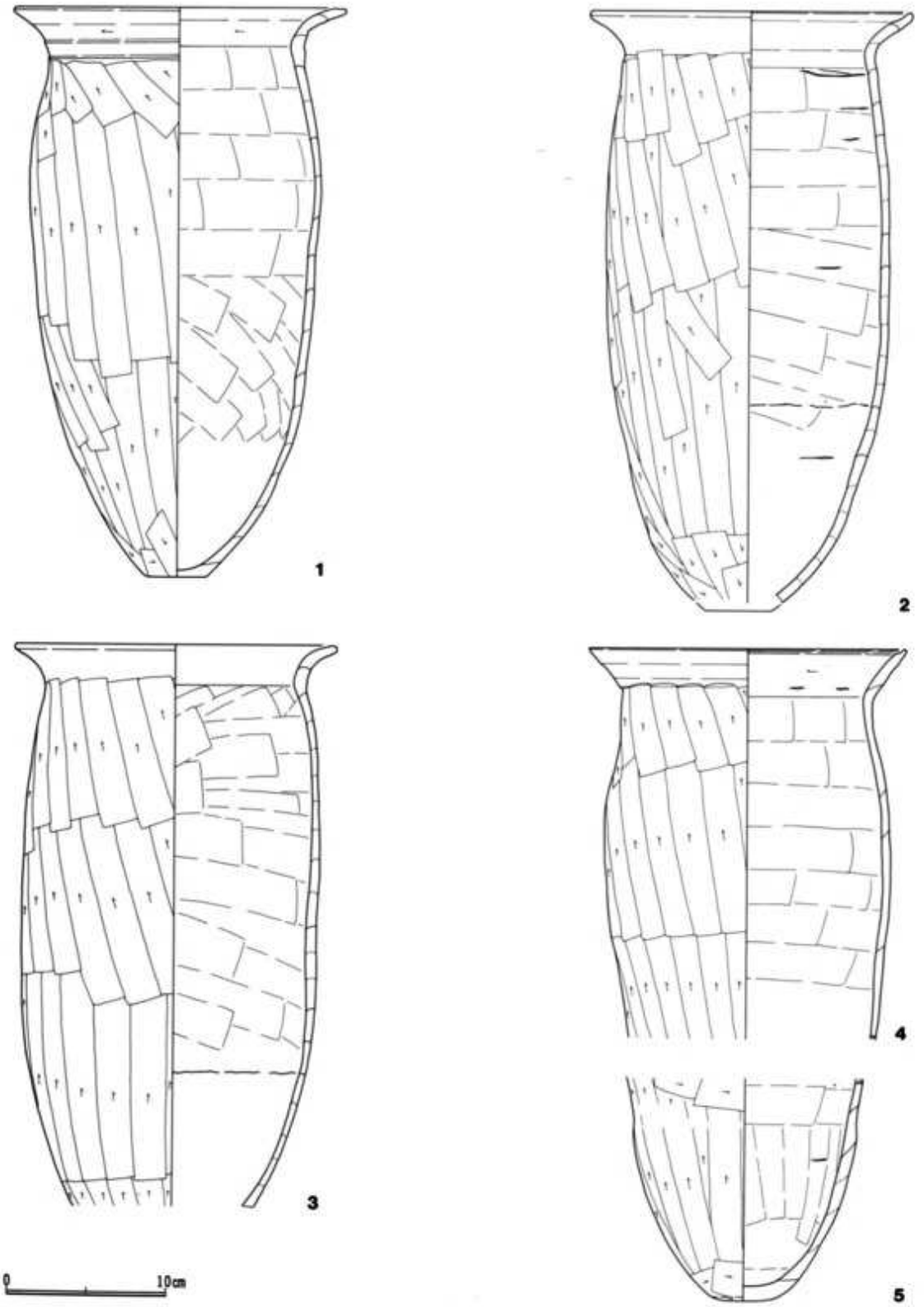


第259図　第35号住居跡カマド

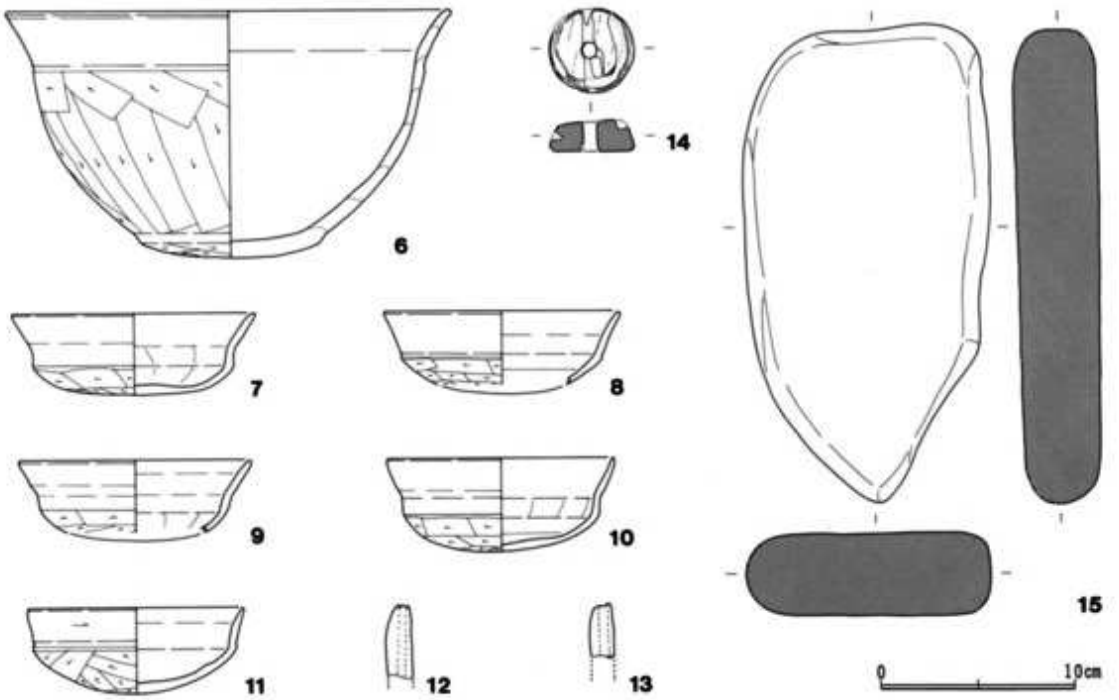
第35号住居跡カマド土層説明

第1層：暗灰褐色土層（灰白色粘土ブロックを均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	甕	口縁部径 19.8cm 残存高 24.3cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部内側に浅い沈線を施す。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡橙褐色	3/4。 二次焼成により変れている。 床面上。
5	甕	残存高 13.9 底径 4.0	粘土紐積み上げ成形。胴部はあまり張らず、底部は小さな平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面ナデの後篦ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 外－明茶褐色 内－淡茶褐色	1/2。 外面黒斑あり。 床面上。
6	大形鉢	口径(23.0) 器高 12.7 底径 9.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は内湾しながら開く。底部は突出した平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	1/3。 外面黒斑あり。 床面上。
7	坏	口径(12.6) 器高 4.2	口縁部は下半が直立し、上半は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/3。 床面上。
8	坏	口縁部径 (12.2cm)	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	1/3。 床面上。
9	坏	口縁部径 (12.0cm)	口縁部は蛇行ぎみに外傾する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	1/4。 覆土中。
10	坏	口径 11.8 器高 4.8	口縁部は下半が直立し、上半は内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	ほぼ完形。 床面上。



第260図　第35号住居跡出土遺物(1)



第261図　第35号住居跡出土遺物(2)

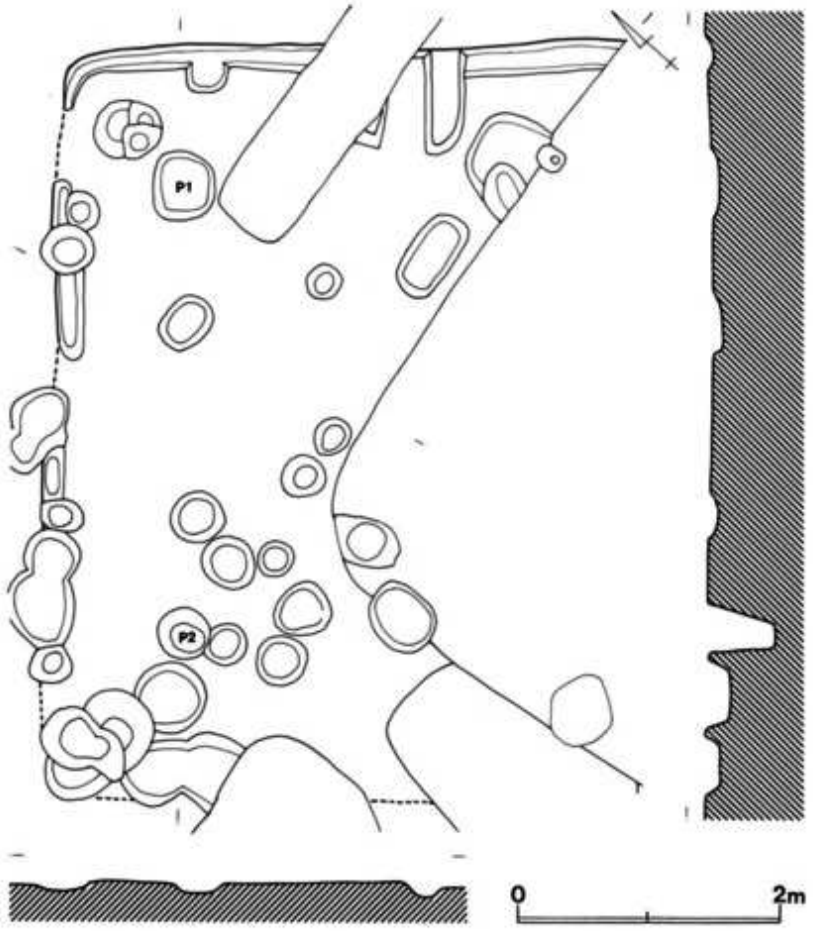
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
11	坏	口径 11.2 器高 4.4	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	4/5。 床面上。
12	土錘	残存長 3.8 幅 1.4	棒状を呈し、中央部は厚く膨らむ。	外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色	1/2。重さ8g。 覆土中。
13	土錘	残存長 2.8 幅 1.3	棒状を呈し、中央部は厚く膨らむ。	外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色	1/3。重さ6g。 覆土中。
14	石製紡錘車	直径 4.4 高さ 1.6	上下両面とも平坦面をなし、断面は偏平な台形を呈する。	表裏面及び側面とも研磨。	片岩	3/4。重さ25g。 床面上。
15	台石	長さ 24.3 幅 12.7 厚さ 4.2	自然石をそのまま利用。偏平な形態で、表裏とも比較的広い平坦面をなしている。	表裏面及び側面はかなり摩滅して滑らかであり、一部に擦痕が見られる。		完形。 床面上。

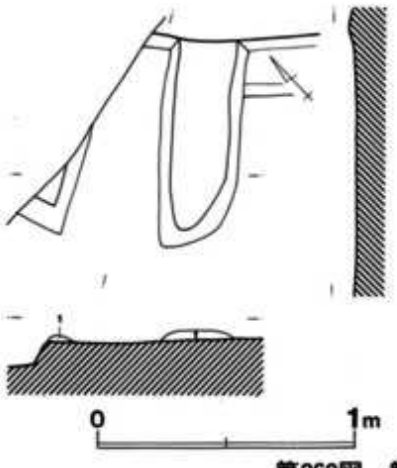
第36号住居跡（第262図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第16号土壙・第17号土壙・溝状土壙に切られ、第20号住居跡を切っている。すでに耕作によって住居跡の床面直下まで削平されているため、遺存状態はかろうじてその痕跡が伺える程度である。

平面形は、方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、北東から南西方向が約5.80m、北西から南東方向は4.35mまで測れる。住居の主軸方位は、N－50°－Eをとる。住居の北東側壁と北西側壁の壁下には、幅20cm前後の壁溝が巡っていたようである。床面は明確ではないが、住居周

辺部を埋め戻した貼床式であったようである。住居内には多数のピットがあるが、多くは中世以降のものである。Ｐ１とＰ２は、その位置から主柱穴の可能性もあるが、明確ではない。カマドは、住居北東側壁の中央付近に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長が80cm・幅は84cmまで測れる。袖は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を盛り上げて構築している。





第36号住居跡カマド土層説明

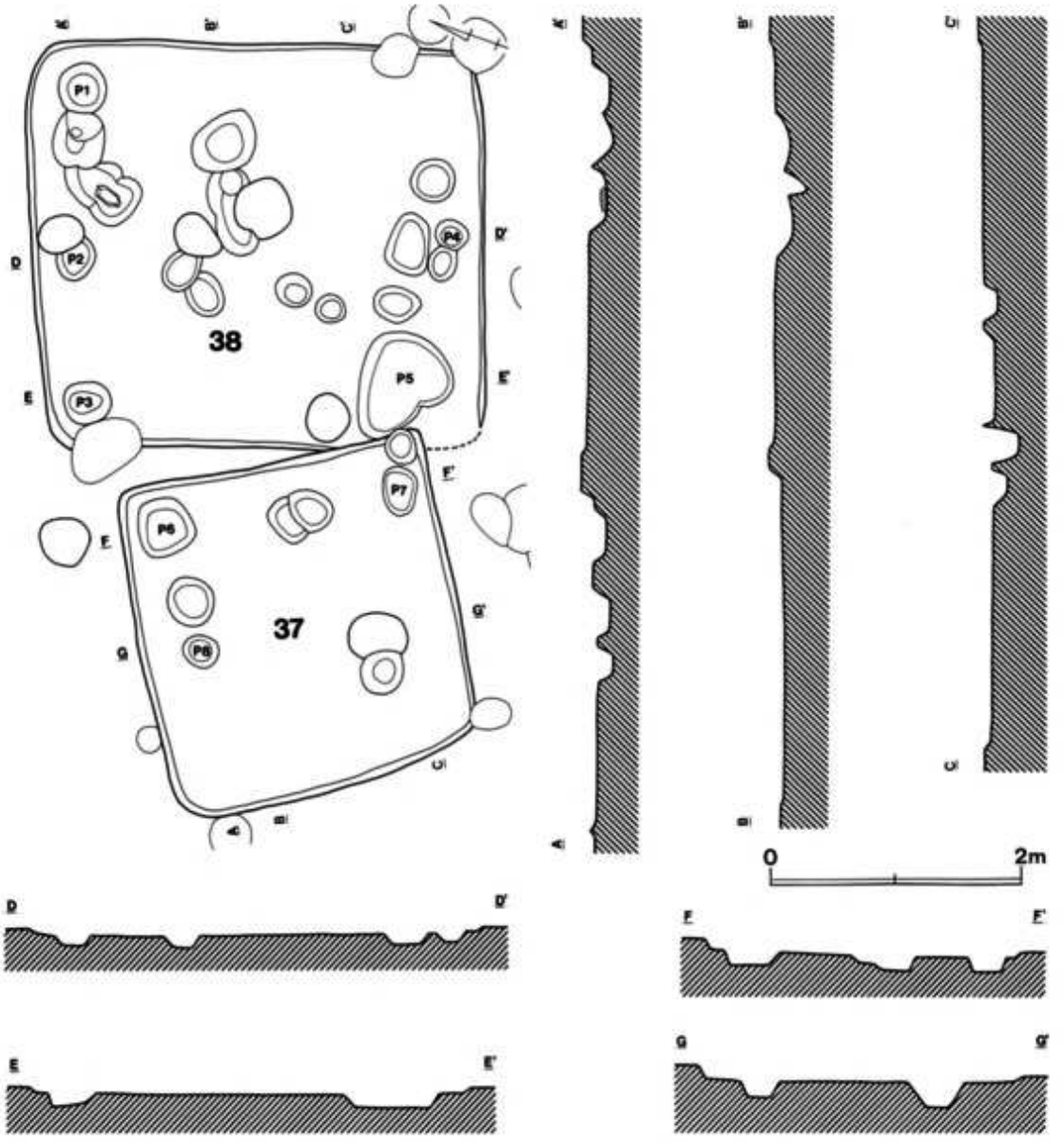
第１層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第262図　第36号住居跡

燃焼部は、掘り方をもたずあまり良く焼けていない。遺物は、鬼高式土器の破片が数片出土しただけである。

第37号住居跡（第263図）

A地点の調査区中央の南側寄りに位置し、重複する第30号土壙・第11号掘立柱建物跡・第37号住居跡に切られている。本遺構は、他の一般的な住居跡に比べて規模が小さく、また炉などの生活の痕跡が見られないことから、厳密には竪穴状遺構とすべきものである。遺存状態は、耕作による削平が強く及んでいるため、あまり良好とは言えない。



第263図　第37・38号住居跡

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、北西から南東方向が2.62m、北東から南西方向が2.68mを測る。壁は、最高で10cm程度しか残存していないため、明確ではない。床面は、地山ローム土を平坦に削った直床式で、全体的に細かな凹凸が見られるが、比較的堅く締まっている。本遺構に伴うと考えられるピットは、P1～P3の3箇所がある。形態や規模は様々であるが、深さはいずれも10cm程度の浅いものである。遺物は、覆土中より古墳時代前期の土器片が少量出土しただけである。

第38号住居跡（第263図）

A地点の調査区中央の南側寄りに位置し、重複する第11号掘立柱建物跡と第13号掘立柱建物跡に切られ、第37号住居跡を切っている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好ではない。

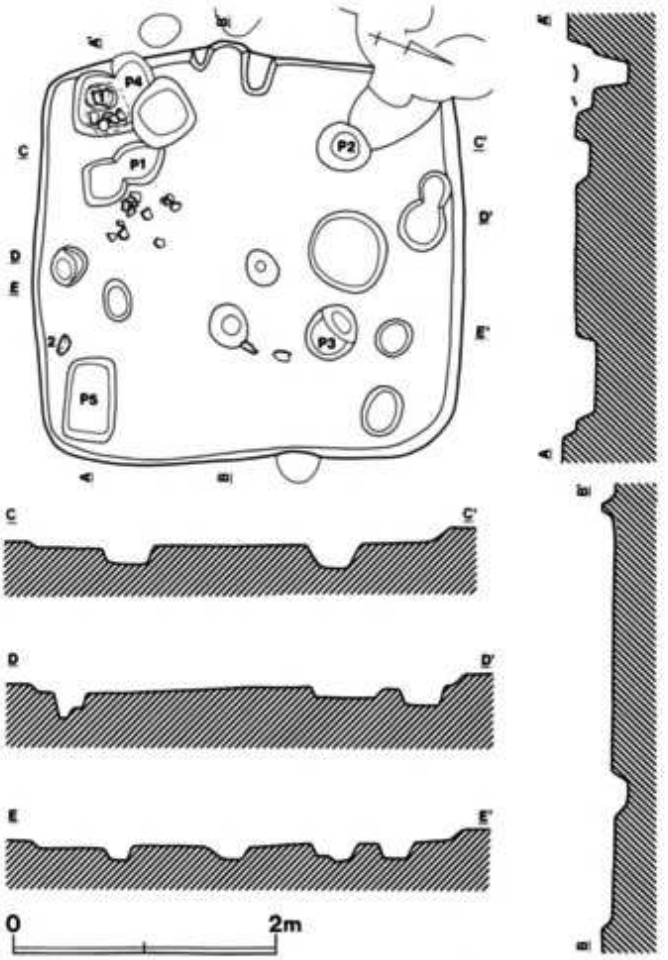
平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈している。規模は、北西から南東方向が3.70m、北東から南西方向が3.24mを測る。住居の長軸方向は、N－18°－Wをとる。壁は、最高で10cm程度しか残存していないため、明確ではない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体的にやや軟弱である。本住居跡に伴うと考えられるピットは、P1～P5の5箇所がある。住居北側と西側のコーナー部に位置するP1とP3は、直径37cmの円形を呈し、深さはそれぞれ15cmと10cmある。住居北西側壁際と南東側壁際のほぼ中央に位置するP2とP4は、直径30cmの円形を呈し、深さはいずれも7cm程度の浅いものである。このP1～P4は、P5は、住居南西側コーナー部に位置し、比較的規模の大きな不整形を呈している。底面は広く平坦で、深さは11cmと浅い。カマドや炉の痕跡は見られなかった。遺物は、覆土中より古墳時代後期の鬼高式土器の破片が少量出土しただけである。

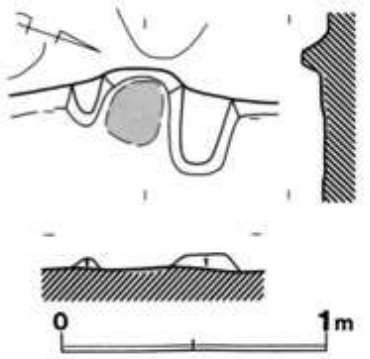
第39号住居跡（第264図）

A地点の調査区中央部の南側に位置する。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好ではない。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈している。規模は、南西から北東方向が3.16cm、南東から北西方向が3.32mを測る。住居の主軸方向は、N－108°－Wをとる。壁は、最高で10cm程度しか残存していないため、明確ではない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P3の3箇所が確認されており、住居の対角線上に配置されている。形態は、直径30cm～40cmの円形を呈し、深さはいずれも15cm前後である。P4は、住居南側コーナー部に位置し、長さ50cm程度の方形を呈していたようである。底面は広く平坦であるが、内部に円形の小ピットを伴う。深さは40cmあり、上面からはNo1の甕が出土している。P5は、住居東側コーナー部に位置し、63cm×40cmの長方形を呈している。底面は広く平坦で、深さは18cmある。このP4とP5は、位置や形態から見て、貯蔵穴の可能性が高いと考えられる。カマドは、住居南西側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。すでに崩壊が激しく、袖の一部が残存し

ていた程度で、規模は長さが42cm・幅が65cmまで測れる。袖は、灰白色粘土を床面上に盛り上げて構築しているが、両袖とも先端部は崩壊している。燃焼部は、住居の床面とほぼ同じ高さで、比較的良く焼けて赤色化している。遺物は、住居南東側の床面付近から土器が出土しただけである。

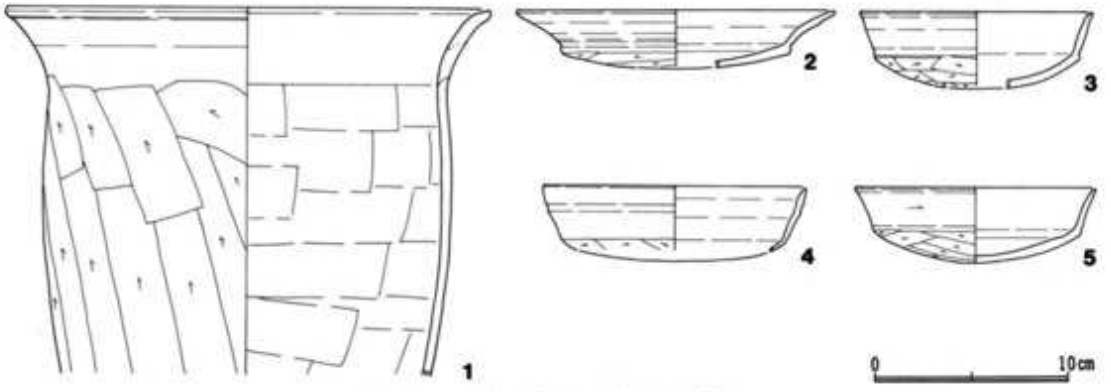




第39号住居跡カマド土層説明

第1層：暗灰白色土層（灰白色粘土ブロックを多量に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第264図　第39号住居跡



第265図　第39号住居跡出土遺物

第39号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 25.0 残存高 18.8	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡褐色	1/2。 P4上面。
2	皿	口径(16.6) 推定高(3.0)	口縁部は強く外反する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	1/2。 床面付近。
3	坏	口径(12.0) 推定高(4.0)	口縁部は外反ぎみに外傾する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	1/3。 覆土中。
4	坏	口縁部径 (13.6cm)	口縁部は蛇行ぎみに外傾し、外面中位に沈線による段をもつ。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 外－淡褐色 内－暗褐色	1/6。 覆土中。
5	坏	口径 12.4 器高 3.9	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	1/2。 覆土中。

第40号住居跡（第267図）

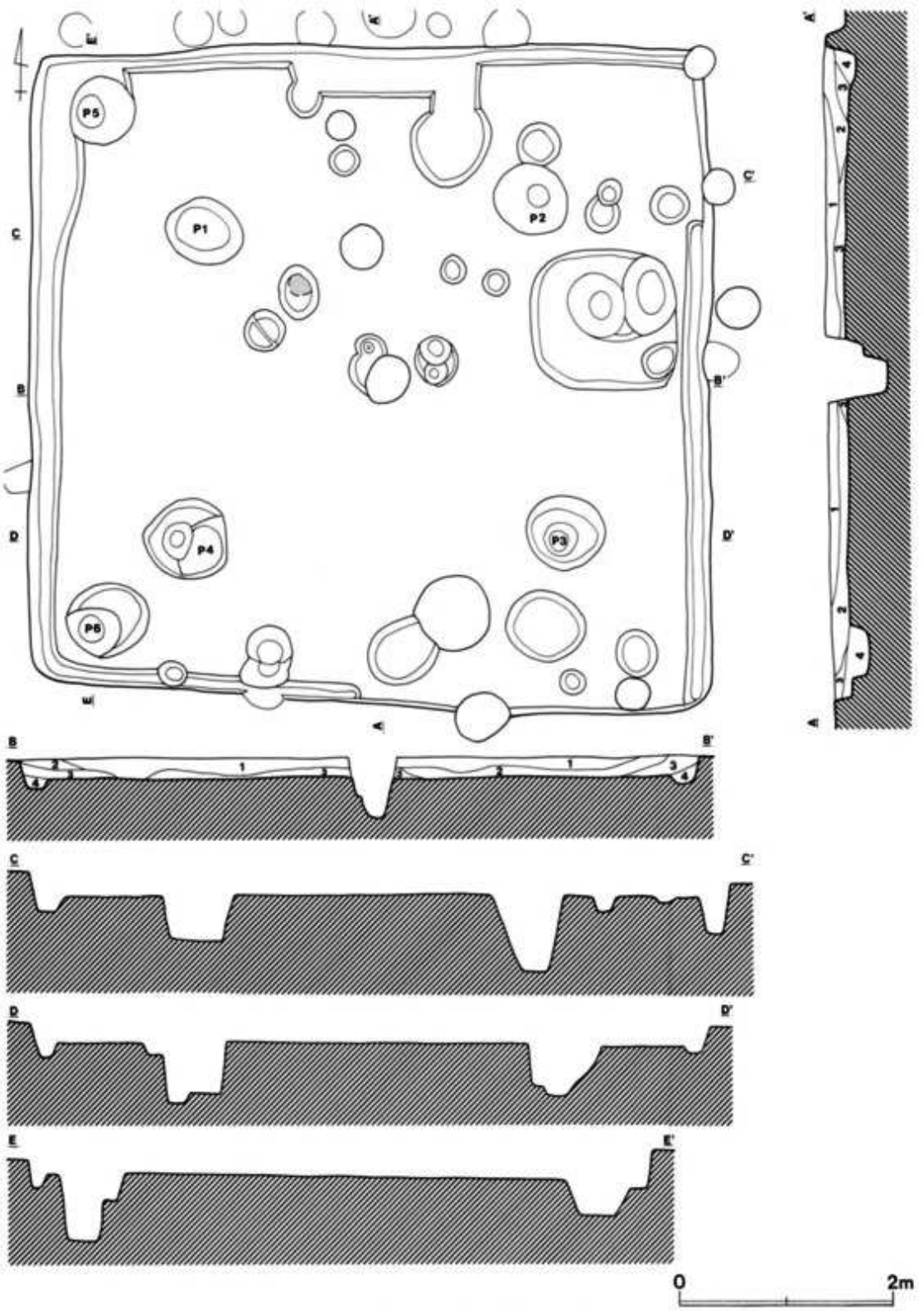
A地点の調査区東側に位置し、重複する第7号掘立柱建物跡に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良い方である。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、南北方向が6.18m、東西方向が6.35mを測る。住居の主軸方位は、N－1°－Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で25cmある。各壁の壁下には幅20cm前後・深さ5cm前後の壁溝が巡っているが、東側壁下と南側壁下では一部途切れている。また、北側壁の中央部では、張り出し状に幅が広くなっている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、直径60cm～70cmの円形を呈し、深さは40cm～70cmある。P5とP6は、それぞれ住居北西側と南西側のコーナー部に位置し、やや規模の大きな円形を呈している。深さは34cmと60cmあり、その位置や形態から貯蔵穴の可能性もある。住居東側壁際の中央付近には、比較的規模の大きな方形を呈する土壙状の掘り込みが見られるが、これは本住居跡に伴うものではなく、近世後半以降の撹乱である。炉は、住居中央部のやや北西側寄りに位置する。床面を若干掘り窪めた地皿炉で、良く焼けて赤色化している。遺物は、覆土中から土器片が少量出土しただけである。

第266図　第40号住居跡出土遺物

第40号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。
第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、とまりはない。）
第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



第267図　第40号住居跡

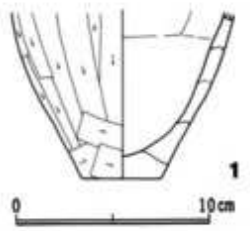
第40号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (17.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	白色粒 内外－黒褐色	1/4。 覆土中。
2	高坏	口縁部径 (25.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに強く開く。	口縁部内外面ミガキ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/4。 覆土中。

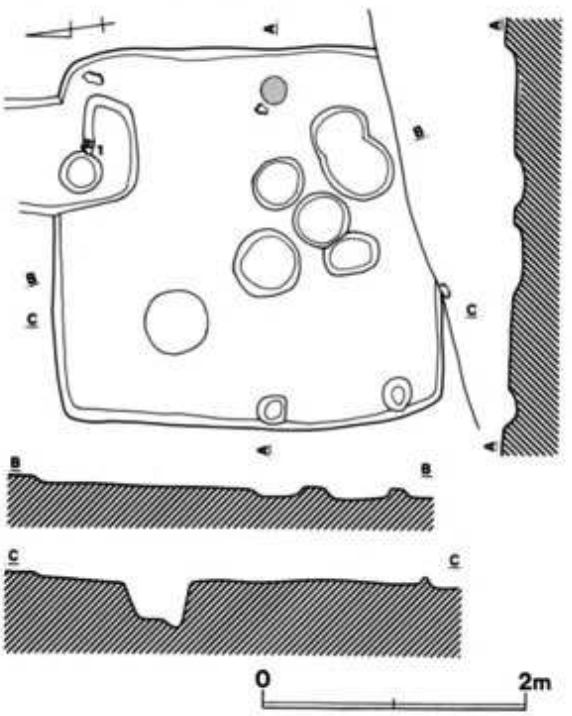
第41号住居跡（第269図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第10号掘立柱建物跡に切られ、第42号住居跡を切っている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が2.94m、南北方向が3.00mを測る。住居の主軸方位は、N－98°－Eをとる。壁は、最高で7cmしか残存していないため、明確ではない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。住居内にはピットがいくつか見られるが、中央部の規模がやや大きな円形を呈するものは中世以降のもので、本住居跡に伴うのは、住居西側壁際にある性格不明の2箇所の浅い小ピットだけである。カマドは、すでに残存していなかったが、住居東側壁際の中央付近に床面が円形に焼けて堅く赤色化した部分が見られることから、その箇所に付設されていたものと思われる。遺物は、覆土中から土器片が少量出土しただけである。



第268図　第41号住居跡出土遺物



第269図　第41号住居跡

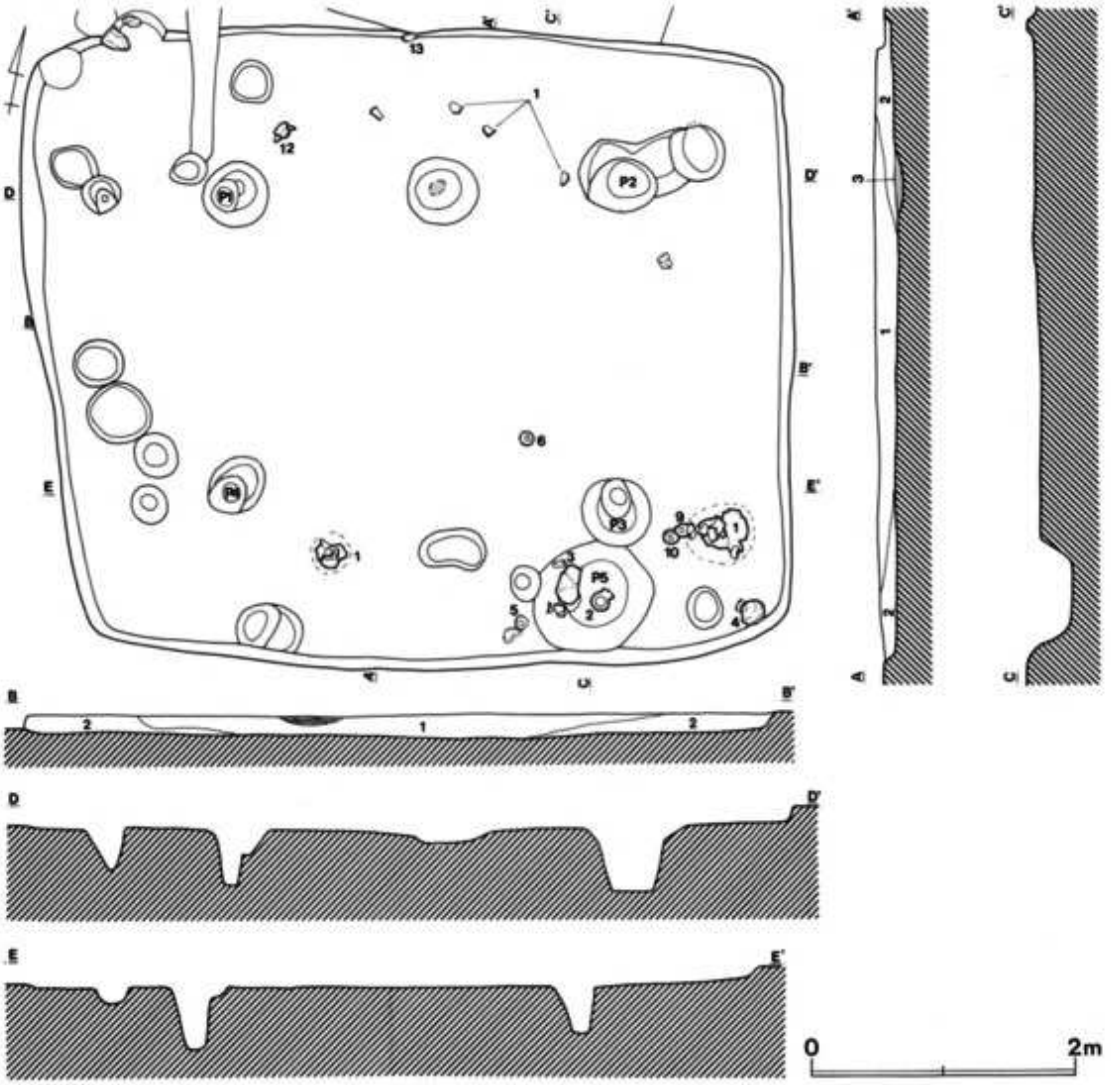
第41号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	残存高 8.6 底径 (4.0)	粘土紐積み上げ成形。胴部はあまり張らず、底部はやや厚い平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－暗褐色 内－淡褐色	1/4。 覆土中。

第42号住居跡（第270図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第7号溝跡と第41号住居跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈している。規模は、南北方向が4.90m、東西方向が5.94mを測る。住居の主軸方位は、N−11°−Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で12cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4



第270図　第42号住居跡

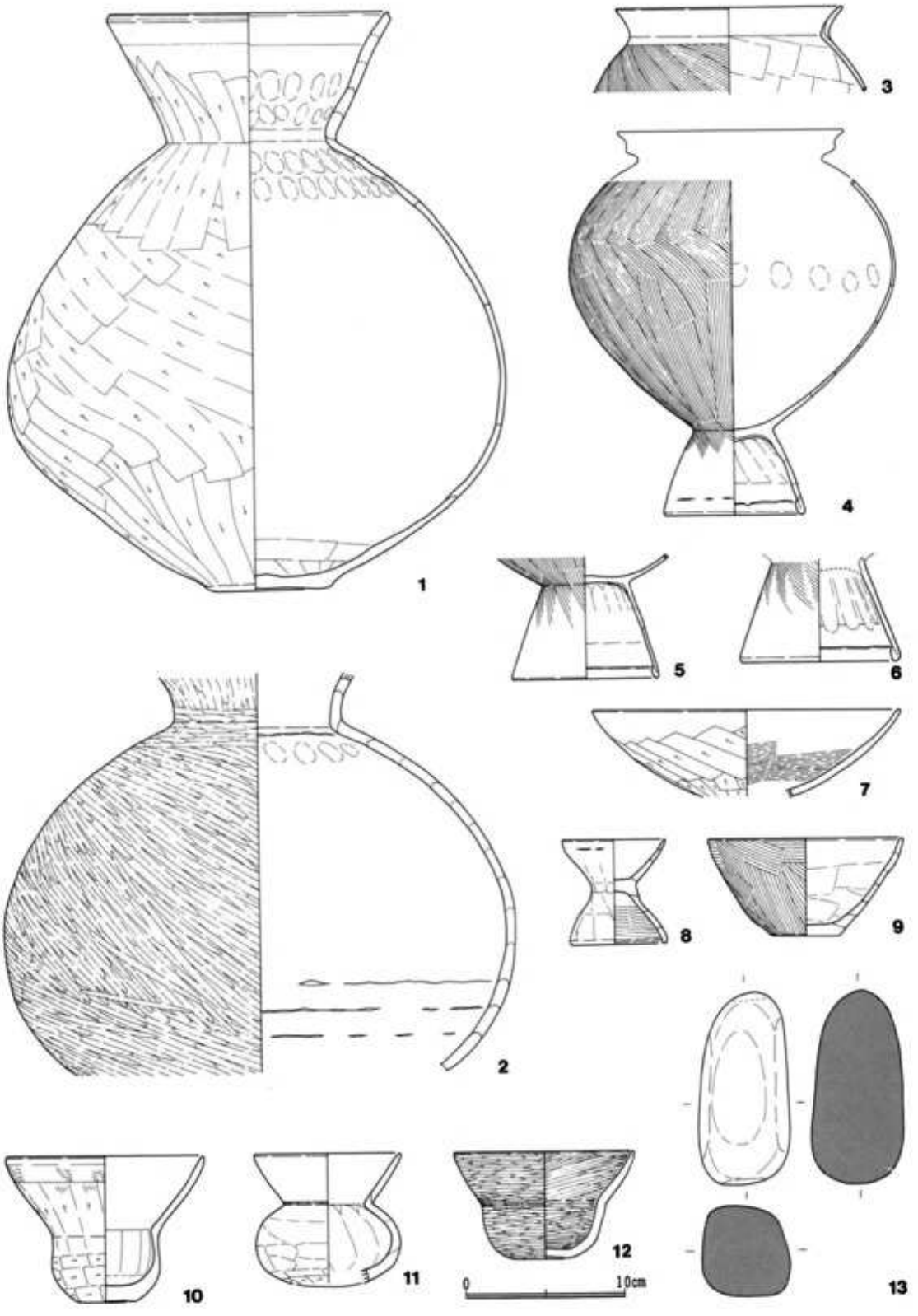
第42号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、直径50cm前後の円形もしくは楕円形を呈し、深さは40cm～50cmある。貯蔵穴(P5)は、住居南側壁際の中央から東側に寄った位置にある。96cm×84cmの不整円形を呈し、深さは20cmある。貯蔵穴内からはNo.2の壷の大形破片が出土している。炉は、住居中央部の北側寄りにあり、主柱穴P1とP2の中間に位置している。床面を円形に若干掘り窪めた地皿炉で、良く焼けて赤色化している。遺物は、住居南側の周辺部の床面直上や貯蔵穴内から土器が多く出土している。土器以外では、住居北側の壁際から棒状の磨石(No.13)が出土している。

第42号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壷	口縁部径 (17.8cm) 器高 36.0cm 底部径 8.1cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は面をもち凹線を施す。胴部は張り、最大径をやや下位にもつ。底部はやや突出した平底を呈する。	口縁部内外面ナデの後上半ヨコナデ、外面下半ケズリ。胴部外面ケズリの後上半雑なナデ、内面ナデ。底部外面ナデ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡褐色 内－暗褐色	3/4。 床面直上。
2	壷	残存高 24.9cm	粘土紐積み上げ成形。頸部は緩やかに外反する。胴部は強く張り、最大径を中位にもつ。	頸部外面ミガキ、内面ナデ。胴部外面ミガキ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－明橙褐色 内－暗茶褐色	1/3。 器表面は荒れている。 貯蔵穴内。
3	甕	口縁部径 (14.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/2。 貯蔵穴内。
4	台付甕	残存高 20.9cm	粘土紐積み上げ成形。胴部は最大径をやや上位にもつ。台部は内湾ぎみに開き、端部を内側に折り返す。	胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後上端ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/3。 台部は二次焼成より赤色化している。
5	台付甕	残存高 7.7cm	粘土紐積み上げ成形。台部は内湾ぎみに開き、端部を内側に折り返す。	胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後上端ハケ、内面ナデ。	白色粒 内外－淡褐色	3/4。 床面付近。
6	台付甕	残存高 6.4cm	粘土紐積み上げ成形。台部は直線的に開き、端部を内側に折り返す。	台部外面ナデの後上端ハケ、内面指ナデ。	白色粒 内外－暗褐色	台部のみ。 床面直上。
7	高坏	口縁部径 (19.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。	口縁部外面ナデの後下半ケズリ、内面ハケの後ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外－明茶褐色	1/4。 覆土中。
8	高坏	口径 (6.4) 器高 6.6	粘土紐積み上げ成形。坏部と脚部は同じ位の法量で、いずれも内湾ぎみに開く。	坏部内外面ナデ。脚部外面ナデ、内面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色 脚内－黒色	1/2。 覆土中。
9	椀	口径 12.2 器高 6.1 底径 4.3	粘土紐積み上げ成形。体部は内湾ぎみに開く。底部は平底を呈する。	体部外面ハケ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	完形。 床面直上。
10	小形鉢	口径 12.4 器高 9.1 底径 3.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに大きく開く。胴部はあまり張らず、底部は平底を呈する。	口縁部外面ハケの後下半ケズリ及びナデ・上半ヨコナデ。胴部及び底部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	完形。 外面黒斑あり。 床面直上。



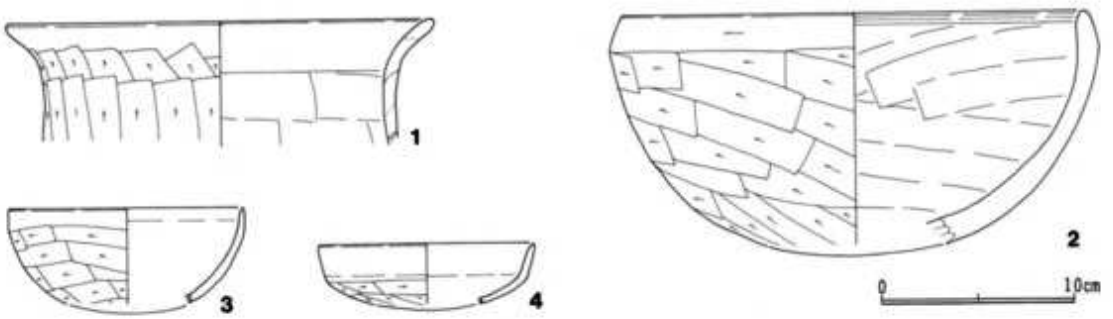
第271図　第42号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
11	小形鉢口縁	口径 9.2 残存高 8.1	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部はやや偏平ぎみに張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	2/3。 混入品。 覆土中。
12	小形鉢	口径 11.4 器高 6.7 底径 3.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張らず、底部は若干窪む平底を呈する。	外面ハケの後ミガキ、内面ミガキ。底部外面ミガキ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色 内－黒褐色	ほぼ完形。 床面直上。
13	磨石	長さ 12.0 幅 5.6 厚さ 5.5	平面及び側面の形態が楕円形に近く、断面が丸みをもつ方形ぎみの自然石を利用。	上下両端面及び各側面とも良く磨れている。	安山岩	完形。 重さ680g 床面付近。

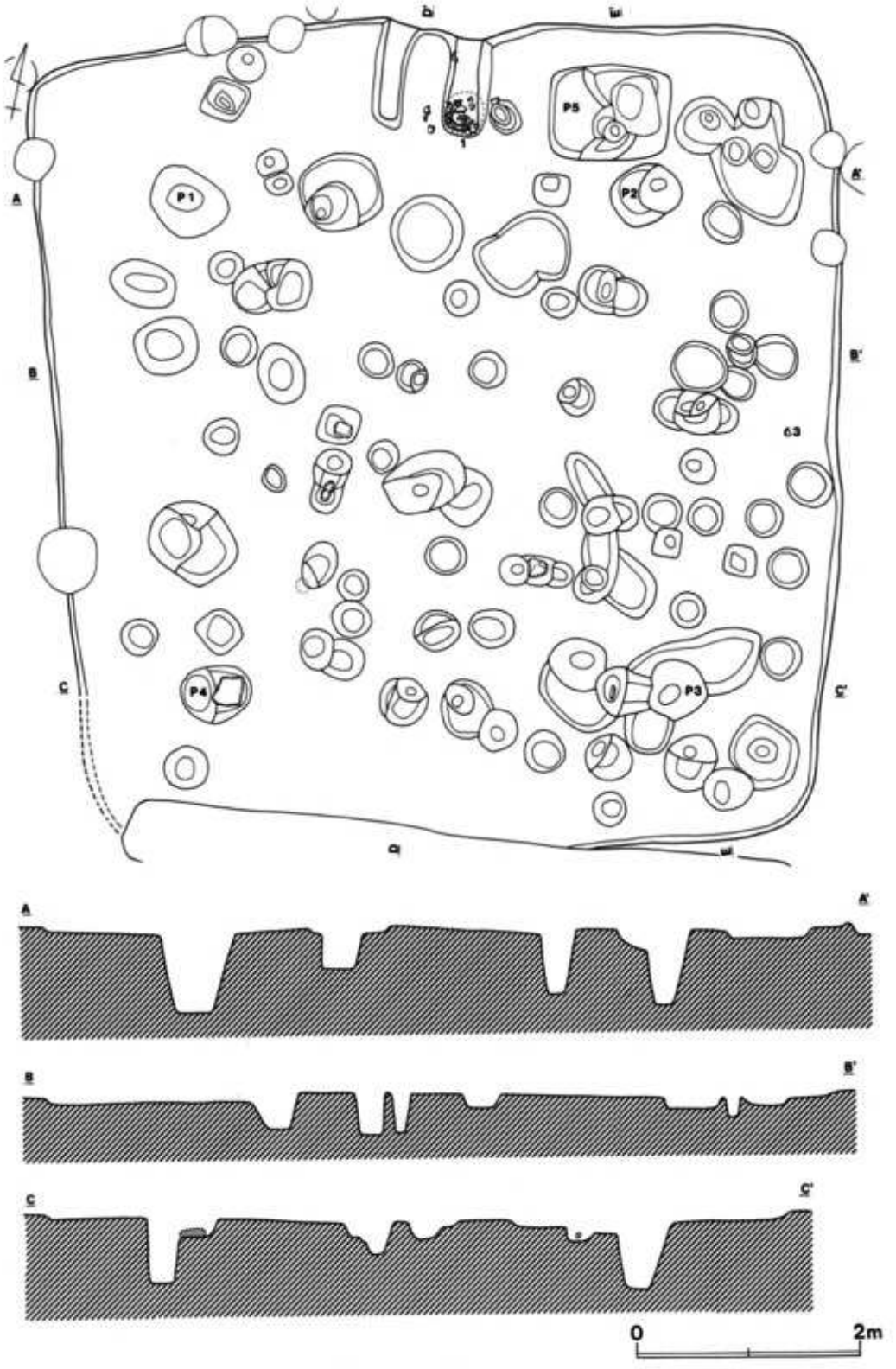
第43号住居跡（第273図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する溝状土壙や第49号住居跡に切られ、第46号住居跡と第48号住居跡及び第50号住居跡を切っている。すでに耕作によって住居跡の床面間際まで削平されており、また住居内を中世以降の多数のピットに切られているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

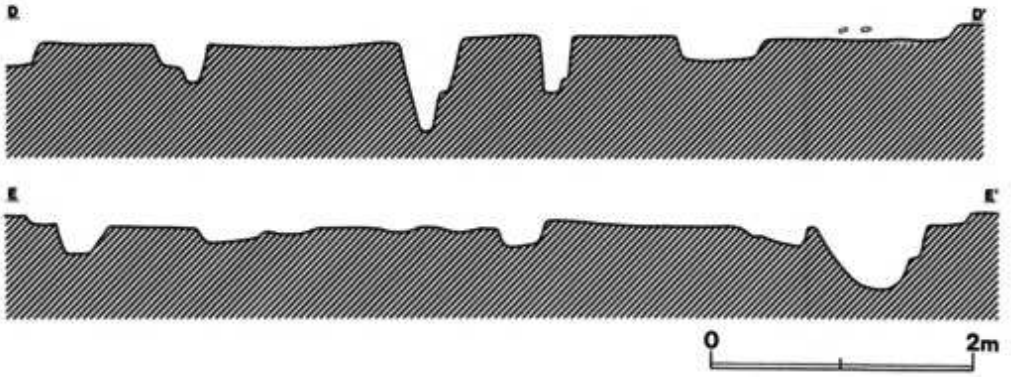
平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈している。規模は、今回検出された住居跡の中では最大で、南北方向が7.36m、東西方向が7.12mを測る。住居の主軸方位は、N－14°－Wをとる。壁は、最高で10cm程度しか残存していないため、明確ではない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、直径50cm～70cmの不整円形を呈し、深さは60cm～70cmある。貯蔵穴（P5）は、カマド右側に位置し、110cm×86cmの長方形を呈している。底面は凹凸が激しく、深さは50cmある。カマドは、住居北側壁の中央部に位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長94cm・最大幅105cmある。袖は、灰白色粘土ブロックを均一に含む暗灰白色土（第1層）を床面上に盛り上げて構築しており、右袖の先端部にはNo.1の甕を伏せて補強に使用している。燃焼部は、住居床面とほぼ同じ高さで、良く焼けて赤色化している。遺物は、カマド内や覆土中から土器の破片が比較的多く出土しているが、完形品はない。



第272図　第43号住居跡出土遺物

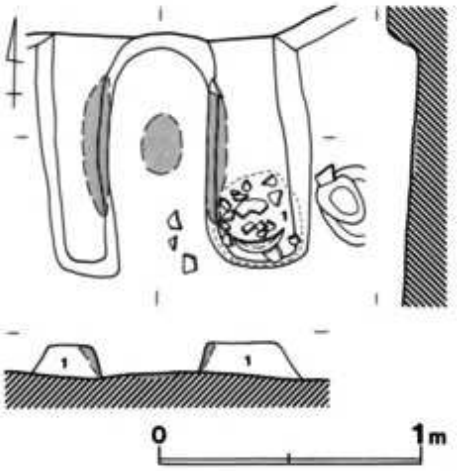


第273図　第43号住居跡(1)



第43号住居跡カマド土層説明

第1層：暗灰白色土層（灰白色粘土ブロックを均一に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第274図　第43号住居跡(2)

第43号住居跡出土遺物観察表

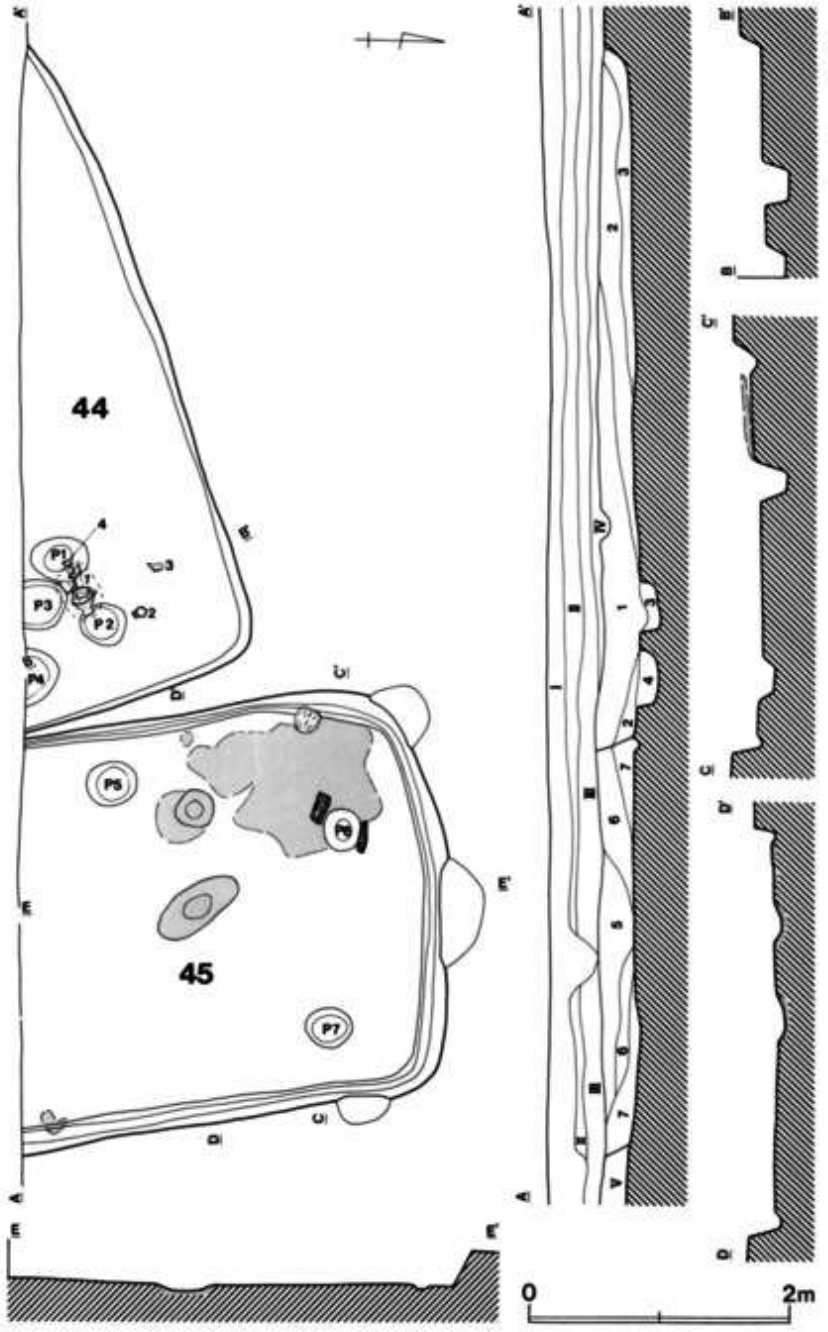
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 22.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－暗橙褐色 内－明橙褐色	1/2。 カマド袖。
2	鉢	口径(24.0) 残存高 11.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－茶褐色	1/4。 覆土中。
3	坏	口縁部径 (12.2cm)	口縁部は短く直立する。体部は深い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外－明橙褐色	1/3。 床面付近。
4	坏	口縁部径 11.2cm	口縁部はやや外反ぎみに外傾する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外－明橙褐色	1/3。 覆土中。

第44号住居跡（第275図）

A地点の調査区南端に位置し、重複する第45号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居跡の北側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形やや規模は不明であるが、コーナー部はやや丸みをもっている。壁は、直線的にやや傾斜

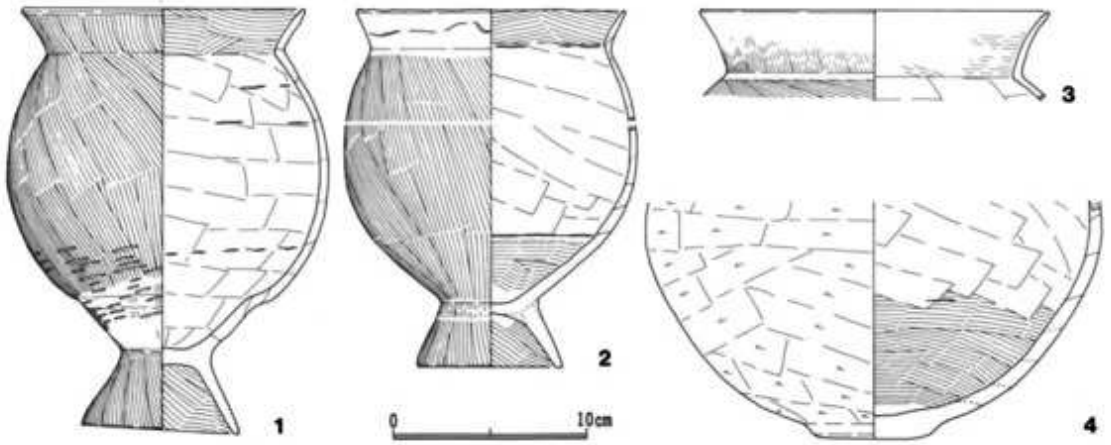
して立ち上がり、最高で30cmある。床面は、ローム ブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。ピットは4箇所検出されているが、この中のP1は深さが38cmあり、主柱穴の可能性もある。遺物は、土器が出土しているが、本住居跡に伴うものはP1内から出土したNo.4の壷だけであり、他の土器は、住居廃絶後に住居北東側コーナー部付近の覆土中に投棄されたものである。



第44・45号住居跡土層説明

第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）
第Ⅱ層：淡褐色土層（旧耕作土。）
第Ⅲ層：暗灰褐色土層（近世前半耕作土。）
第Ⅳ層：暗灰褐色土層（中世耕作土。）
第Ⅴ層：黒色土層（沖積土。）
第1層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ローム ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第7層：黒色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しきりを有する。）

第275図　第44・45号住居跡



第276図　第44号住居跡出土遺物

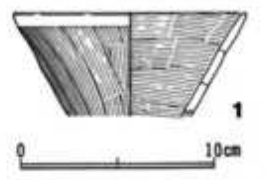
第44号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口縁部径 14.6cm 器高 21.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部はやや張り、下半に接合による稜をもつ。台部は小さく、「ハ」の字状に開く。	口縁部内外面ハケ。胴部外面上半ナデの後ハケ、下半接合部には部分的に叩きの痕跡が見られる。胴部内面篦ナデ。台部内外面ハケ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	ほぼ完形。 覆土中。
2	台付甕	口縁部径 (13.8cm) 推定高 (18.3cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部はやや張る。台部は低く、「ハ」の字状に開く。	口縁部外面ナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面ハケの後上半篦ナデ。台部内外面ハケ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－淡茶褐色 内－淡褐色	1/4。 胴部上半と下半に接合しない。器形は図上復元。 覆土中。
3	甕	口縁部径 (18.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁は緩やかに外反する。	口縁部内外面ハケの後ナデ。胴部外面ハケ、内面篦ナデ。	白色粒・黒色粒 外－黒褐色 内－淡茶褐色	1/4。 覆土中。
4	壷	残存高 12.1 底径 6.2	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、底部は突出した平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面ハケの後上半篦ナデ。底部外面ケズリ。	白色粒 内外－明茶褐色	1/3。 P1内。

第45号住居跡（第275図）

A地点の調査区南端に位置し、重複する第44号住居跡に切られている。遺存状態は、比較的良い方であるが、住居跡の南側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもった長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が3.13m、南北方向は3.60mまで測れる。住居の南北方向は、N−9°−Wを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で28cmある。各壁下には、幅15cm前後・深さ5cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、P5～P7の3箇所検出されている。いずれも直系30cmの円形を呈



第277図　第45号住居跡出土遺物

し、深さは10cm～20cmの浅いものである。炉は、住居中央部とその西側寄りの２箇所に位置する。いずれも床面を５cm程度掘り窪めた地皿炉で、非常に良く焼けて赤色化している。遺物は、住居北西側コーナー部付近の壁際の床面上より比較的大きな石が１個出土している。この他には、覆土中より古墳時代前期の土器片が少量出土しただけである。本住居跡は、床面付近に炭化材や多量の焼土が見られることから、火災によって焼失したものと考えられる。

第45号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	直口壺	口縁部径 (12.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部外面ハケの後上端ヨコナデ、内面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/4。 覆土中。

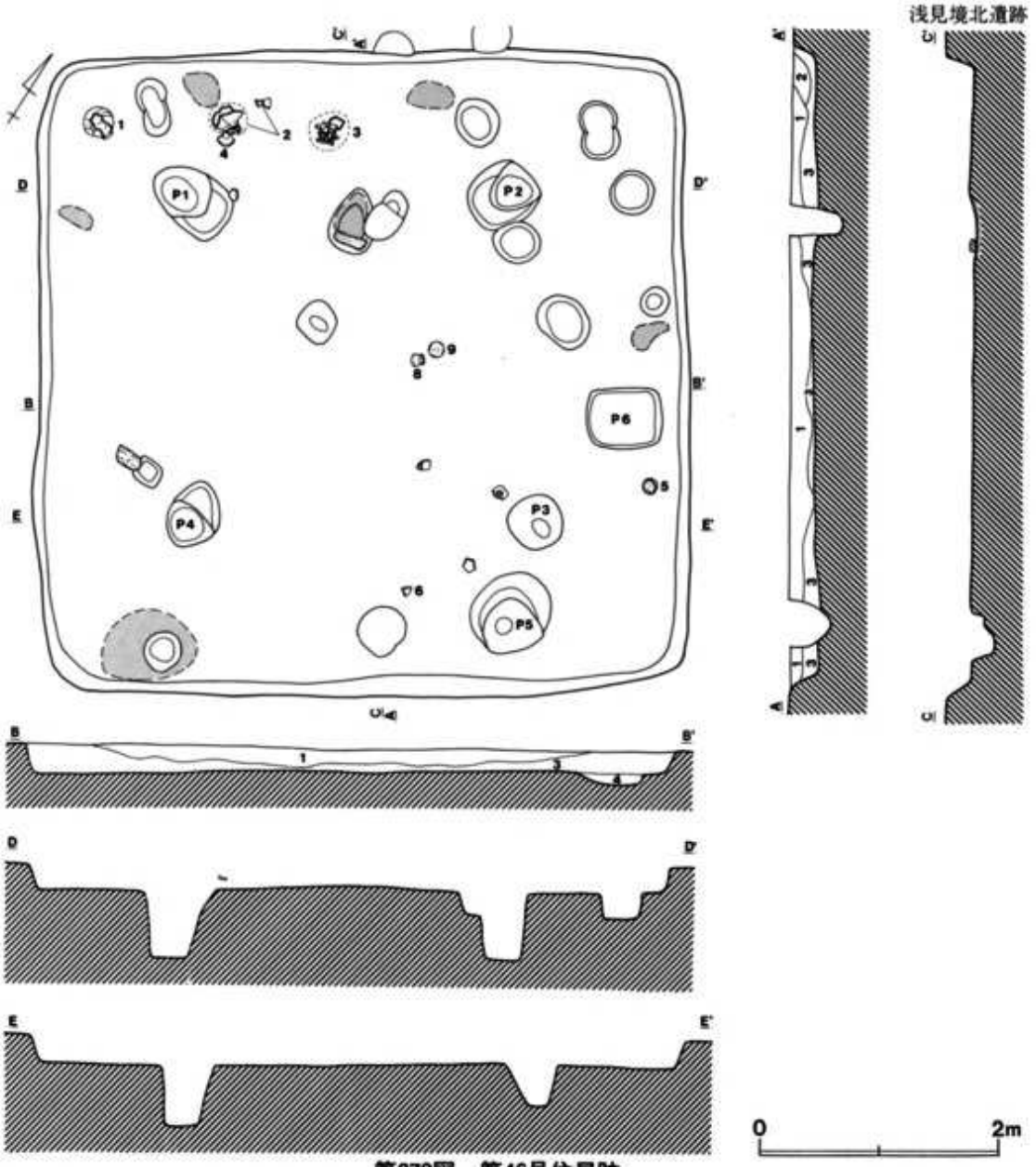
第46号住居跡（第278図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する溝状土壙や第43号住居跡に切られている。遺存状態は、比較的良い方である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ方形を呈している。規模は、北西から南東方向が5.33m、北東から南西方向が5.45mを測る。住居の主軸方位は、N－33°－Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で25cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ４の４本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、長さ45cm～70cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さは36cm～54cmある。Ｐ５は貯蔵穴の可能性が高いもので、住居東側コーナー部付近に位置し、直径68cm×60cmの不整円形を呈している。深さは60cmあり、二段に掘られているが底面は狭い。Ｐ６は、住居北東側壁際の中央付近に位置し、62cm×50cmの長方形を呈している。底面は広く平坦で、深さは７cm程度の浅いものである。炉は、住居中央部の北西側寄りにあり、主柱穴Ｐ１・Ｐ２間に位置している。床面を若干掘り窪めた地皿炉で、全体に良く焼けて赤色化している。炉の住居中央部側の端に、長さ30cm程度の炉石を据えている。遺物は、住居中央部や北西側周辺部の床面付近より、完形に近い土器が比較的多く出土している。また、本住居跡の覆土中には焼土が多く見られるが、住居自体に火災によって焼失したような形跡が見られないことから、住居廃絶後に投棄されたかあるいは流れ込んだものと推測される。

第46号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径　14.0 器高　23.1 底径　6.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外傾する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。底部は平底。	口縁部内外面ハケの後上半ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面上半篦ナデ・下半丁寧なナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	ほぼ完形。 底部外面に調整痕跡あり。 胴部外面下半煤付着。 覆土中。
2	台付甕	口縁部径 14.0cm 器高 22.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は平坦面をもつ。胴部は張り最大径を中位にもつ。台部は直線的に開く。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデの後部分的にケズリ。底部内面ハケ。台部外面篦ナデ、内面丁寧なナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	ほぼ完形。 胴部外面下半は二次焼成を受けて荒れている。 胴部外面黒斑あり。 床面付近。

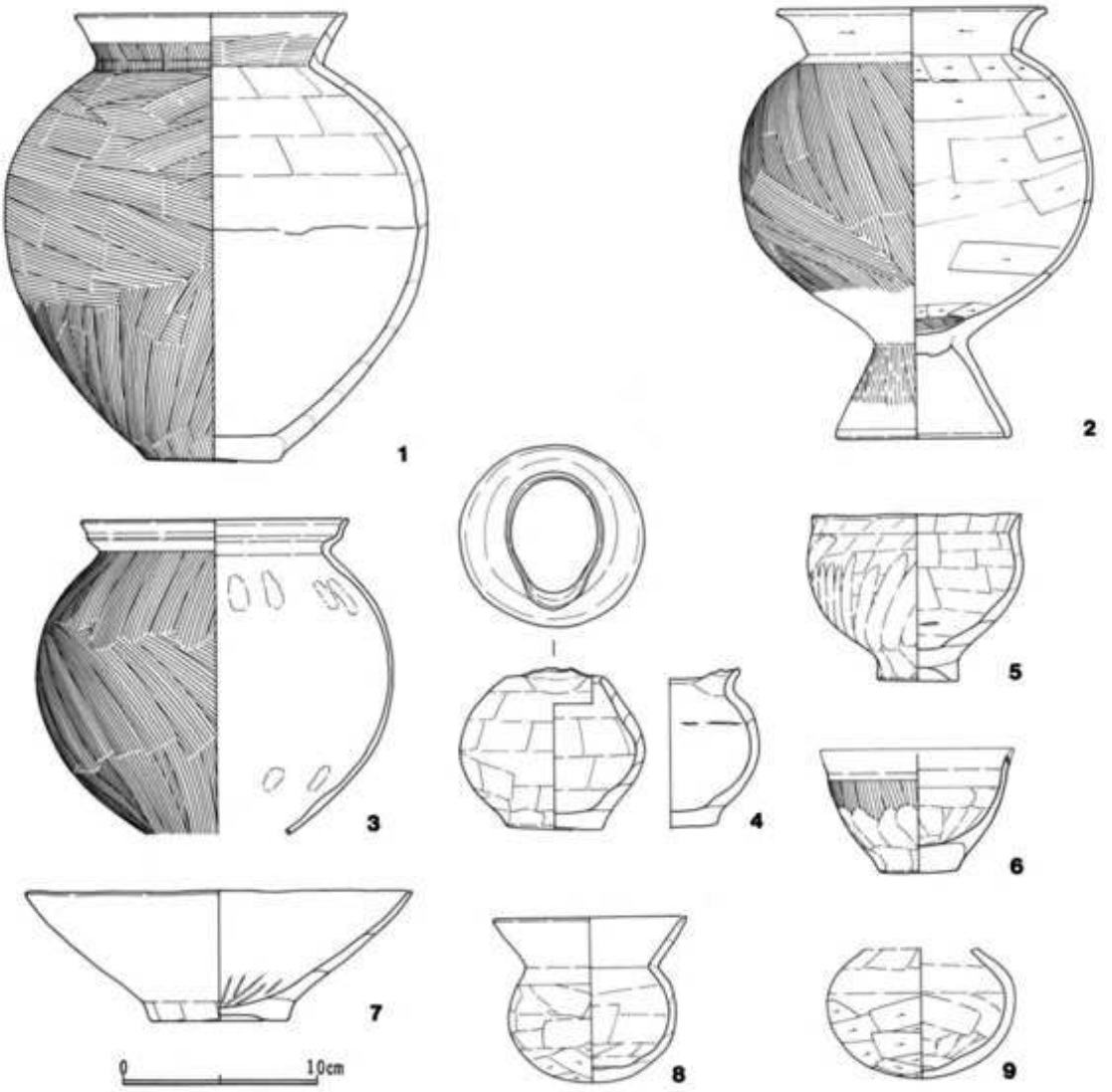


第278図　第46号住居跡

第46号住居跡土層説明

第１層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：黒褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	台付甕	口縁部径 13.8cm 残存高 16.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状を呈する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	2/3。 胴部外面下半は二次焼成を受けて変れている。 床面付近。
4	小形片口無頸壺	口径 5.0 器高 8.3 底径 5.0	粘土紐積み上げ成形。胴部胴部は最大径を中位にもつ。底部は平底を呈する。	胴部内外面箆ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	完形。底部外面に黒斑と籾圧痕跡あり。 床面付近。



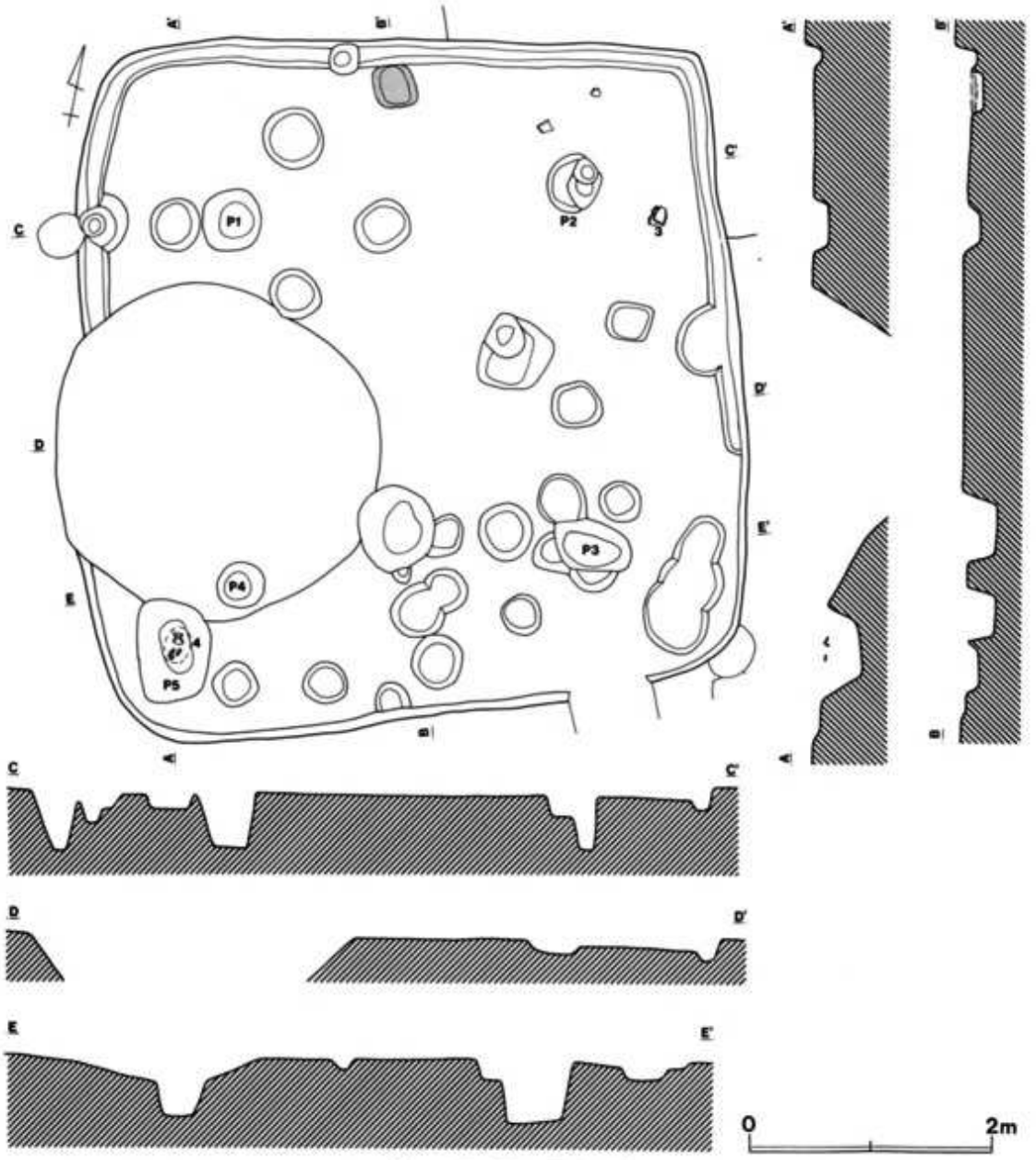
第279図　第46号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	高台付椀	口径 10.8 器高 8.6 高台径 4.2	粘土紐積み上げ成形。高台部貼り付け。口縁部は短く外傾する。体部は最大径をやや上位にもつ。	口縁部内外面未調整。体部外面篦ナデの後下半ナデ、内面篦ナデ。高台部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	ほぼ完形。 外面に黒斑あり。 床面付近。
6	小形椀	残存高 6.1 底径 4.1	粘土紐積み上げ成形。体部はあまり張らず、底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	1/2。 覆土中。
7	鉢	口径(20.0) 器高 6.7 底径 7.0	粘土紐積み上げ成形。体部はやや内湾ぎみに開き、底部は中央部が窪む平底。	内外面及び底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	体部1/5、底部2/3。 外面に黒斑あり。 覆土中。
8	小形直口壷	口径(10.0) 器高 8.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや短く直線的に外傾し、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面篦ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	3/4。 外面に黒斑あり。 床面付近。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
9	小形直口壷	残存高 6.7cm	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、やや偏平ぎみ。底部は丸底を呈する。	胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	胴部のみ。 外面に黒斑あり。 覆土中。

第47号住居跡（第280図）

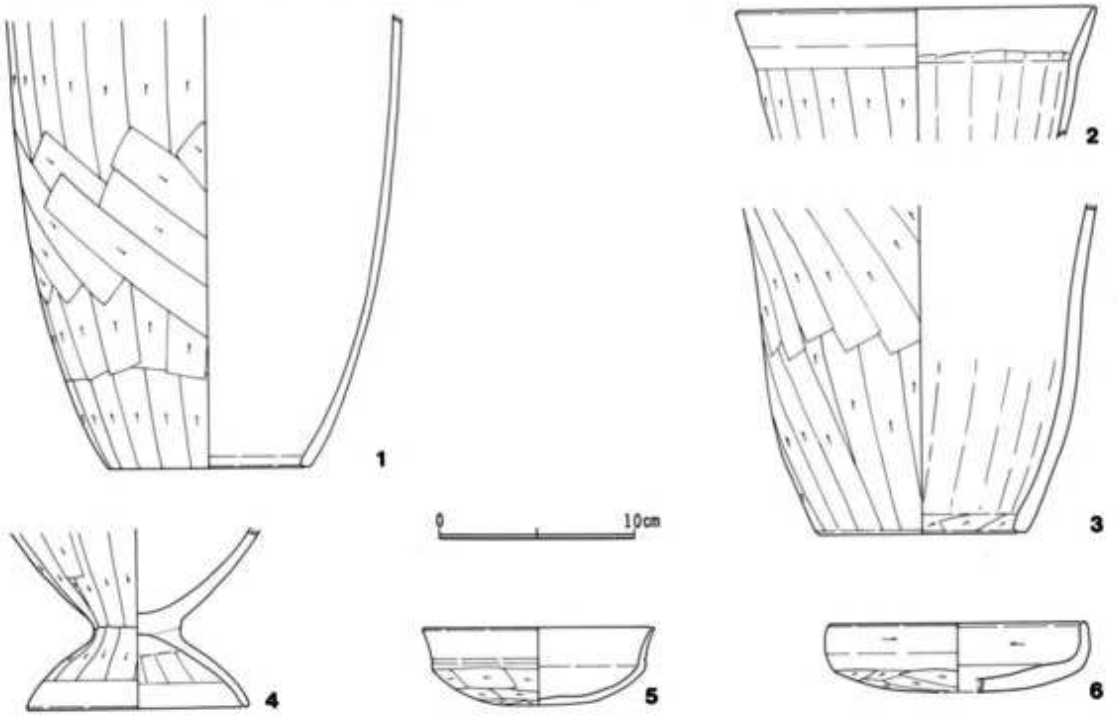
A地点の調査区中央部の南側に位置し、重複する第3号住居跡と第50号住居跡を切り、第8号井戸跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態は



第280図　第47号住居跡

あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈している。規模は、北西から南東方向が5.80m、北東から南西方向が5.62mを測る。壁は、最高で13cmしか残存していないため、明確ではない。住居南東側壁以外の各壁下には、幅20cm前後・深さ8cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、長さ40cm～70cmの円形か楕円形を呈し、深さは43cm～50cmある。貯蔵穴(P5)は、住居南側コーナー部に位置し、80cm×60cmの長方形ぎみの形態を呈している。底面は平坦で、深さは33cmある。貯蔵穴上面からは、No4の台付甕の破片が出土している。カマドは、残存していなかったが、住居北西側壁際中央付近の床面上に、一部焼けて赤色化している部分が見られる。その下に浅い掘り方をもつことから、カマド燃焼部の痕跡と考えられるが、貯蔵穴(P5)の位置から見ると、カマドは住居北西側壁中央から、第8号井戸跡に切られている南西側壁の中央付近に作り替えられたのではないかと思われる。遺物は、土器の破片が比較的多く出土しているが、貯蔵穴上面から出土したNo4の台付甕の破片以外は、すべて覆土中からの出土である。



第281図　第47号住居跡出土遺物

第47号住居跡出土遺物観察表

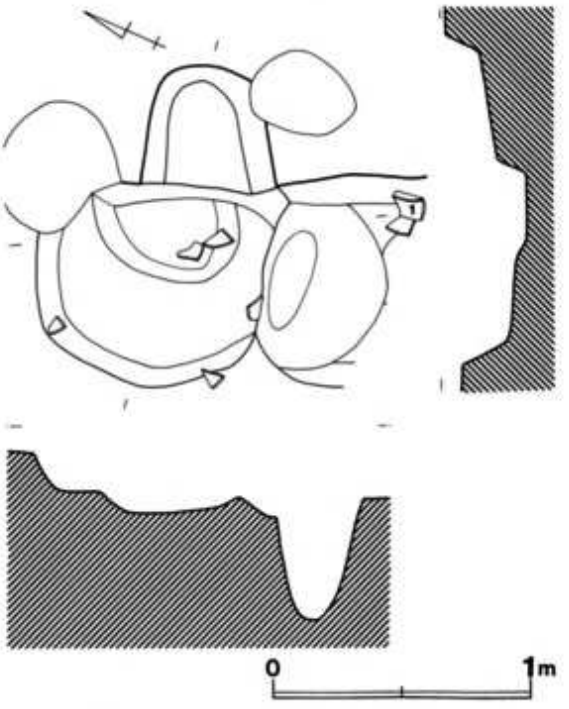
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大形甕	残存高 23.4 底径(10.4)	粘土紐積み上げ成形。胴部はあまり張らない。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－明橙褐色 内－淡茶褐色	1/4。外面は二次焼成を受けている。覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	甕	口縁部径 (18.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	1/3。 覆土中。
3	大形甕	残存高 16.9 底径 10.6	粘土紐積み上げ成形。胴部はあまり張らない。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部内側ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/2。 胴部外面に黒斑あり。 覆土中。
4	台付甕	残存高 9.3 台端径 11.4	粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。台部は内湾ぎみに大きく開く。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部外面ケズリ、内面篦ナデ。台端部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 外－暗茶褐色 内－淡褐色	台部完形。外面は二次焼成を受けている。 貯蔵穴上面。
5	坏	口径(12.0) 器高 4.0	口縁部は緩やかに外反し、体部との境に凹線を施す。体部は浅く、丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/2。 覆土中。
6	坏	口径(13.4) 器高 3.5	口縁部は内湾ぎみに立つ。体部は浅く、丸底を呈する。器肉は厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	1/4。 覆土中。

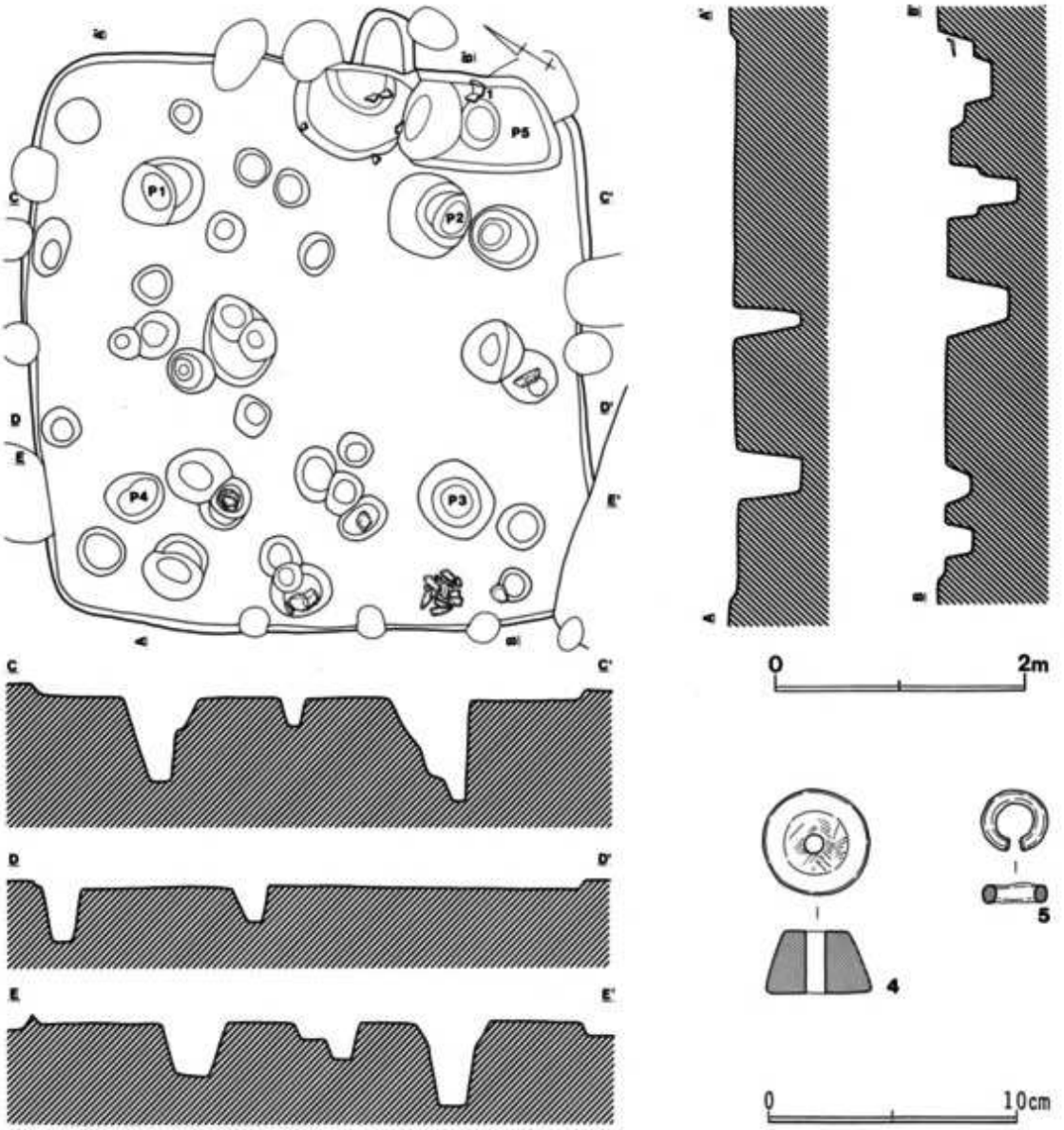
第48号住居跡（第283図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第43号住居跡と第49号住居跡に切られている。すでに耕作によって住居跡の床面近くまで削平されているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ方形を呈している。規模は、北東から南西方向が4.66m、北西から南東方向が4.63mを測る。住居の主軸方位は、N－56°－Eをとる。壁は、最高で8cmしか残存していないため、明確ではない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、長さ50cm～70cmの楕円形を呈し、深さは50cm～80cmある。貯蔵穴（P5）は、カマド右側の住居東側コーナー部に位置し、約120cm×80cmの長方形ぎみの形態を呈している。底面は広く平坦で、深さは25cmある。カマドは、住居北東側壁の中央やや南側寄りに位置する。すでにカマド自体は崩壊しており、掘り方と煙道部だけが残存している。煙道部は、住居壁外に45cm程やや傾斜しながら延びている。遺物は、床面直上から石製紡錘車と耳環が、覆土中より土器の破片が少量出土している。これら以外では、住居南西壁際の床面上に、長さ15cm前後の片岩が12個集積されたような状態で出土している。



第282図　第48号住居跡カマド



第283図　第48号住居跡

第48号住居跡出土遺物観察表

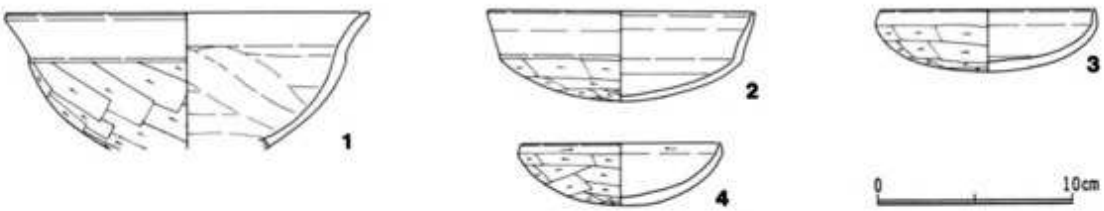
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形鉢	口径(15.0) 残存高 8.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに短く外反する。胴部は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	1/3。 覆土中。
2	甕	底部径 6.4cm	粘土紐積み上げ成形。底部は突出しない平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 外－淡橙褐色 内－淡褐色	底部のみ。 覆土中。
3	坏	口縁部径 (12.6cm)	口縁部分的には外反ぎみに直立する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/3。 覆土中。
4	石製紡錘車	直径4.2、高さ2.5、重さ57g。	上下面とも研磨、側面ケズリの後研磨。完形。			床面直上。
5	耳環	直径2.7、厚さ0.6、重さ10g。	表面は滑らかではなく、凹凸が顕著。銅製。完形。			床面直上。

第284図　第48号住居跡出土遺物

第49号住居跡（第286図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第43号住居跡・第48号住居跡・第50号住居跡を切り、第34号土壙に切られている。住居内は、多くの中世以降のピットに切られているが、遺存状態は比較的良い方である。

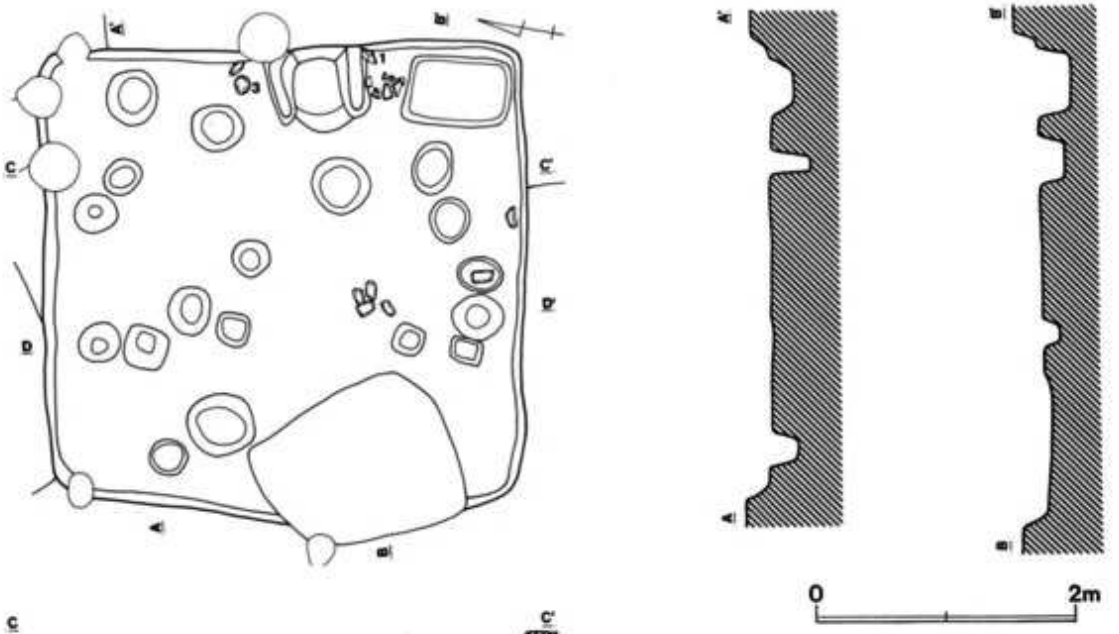
平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向3.62m、南北方向が3.72mを測る。住居の主軸方位は、N－78°－Eをとる。壁は、最高で20cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、明確ではない。貯蔵穴は、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置し、80cm×52cmの長方形を呈している。底面は広く平坦で、深さは25cmある。貯蔵穴内には、カマド崩壊土と考えられる白色粘土ブロックと焼土ブロックが比較的多く見られた。カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長64cm・最大幅80cmを測る。袖は、白色粘土を床面上に盛り上げて構築している。燃焼部は、掘り方に黒褐色土（第4層）を埋め戻して、住居の床面とほぼ同じ高さを燃焼面（火床）にしている。遺物は、カマド周辺の床面上より、鉢や坏の土器が出土している。土器以外では、住居中央部の南側寄りの床面上から、長さ15cm前後の石が4個かたまって出土している。

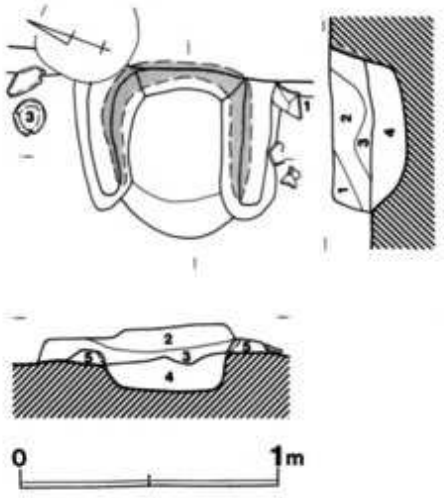


第285図　第49号住居跡出土遺物

第49号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径 (18.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。体部はやや浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡褐色	1/2。 床面付近。
2	坏	口径(13.8) 器高　4.6	口縁部はやや外反ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	1/3。 覆土中。





第49号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粘土粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（白色粘土ブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗赤褐色土層（白色粘土ブロック・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰白色土層（白色粘土ブロックを多量に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第286図　第49号住居跡

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	坏	口径 11.0 器高 3.2	口縁部は短く内傾する。体はやや深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－明橙褐色	完形。 床面付近。
4	坏	口径(10.2) 器高 3.2	口縁部は短く内傾する。体はやや深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡橙褐色	1/2。 覆土中。

第50号住居跡（第287図）

A地点の調査区中央部のやや南側寄りに位置し、重複する第43号住居跡・第47号住居跡・第49号住居跡及び溝状土壙に切られている。遺存状態は、比較的良い方である。

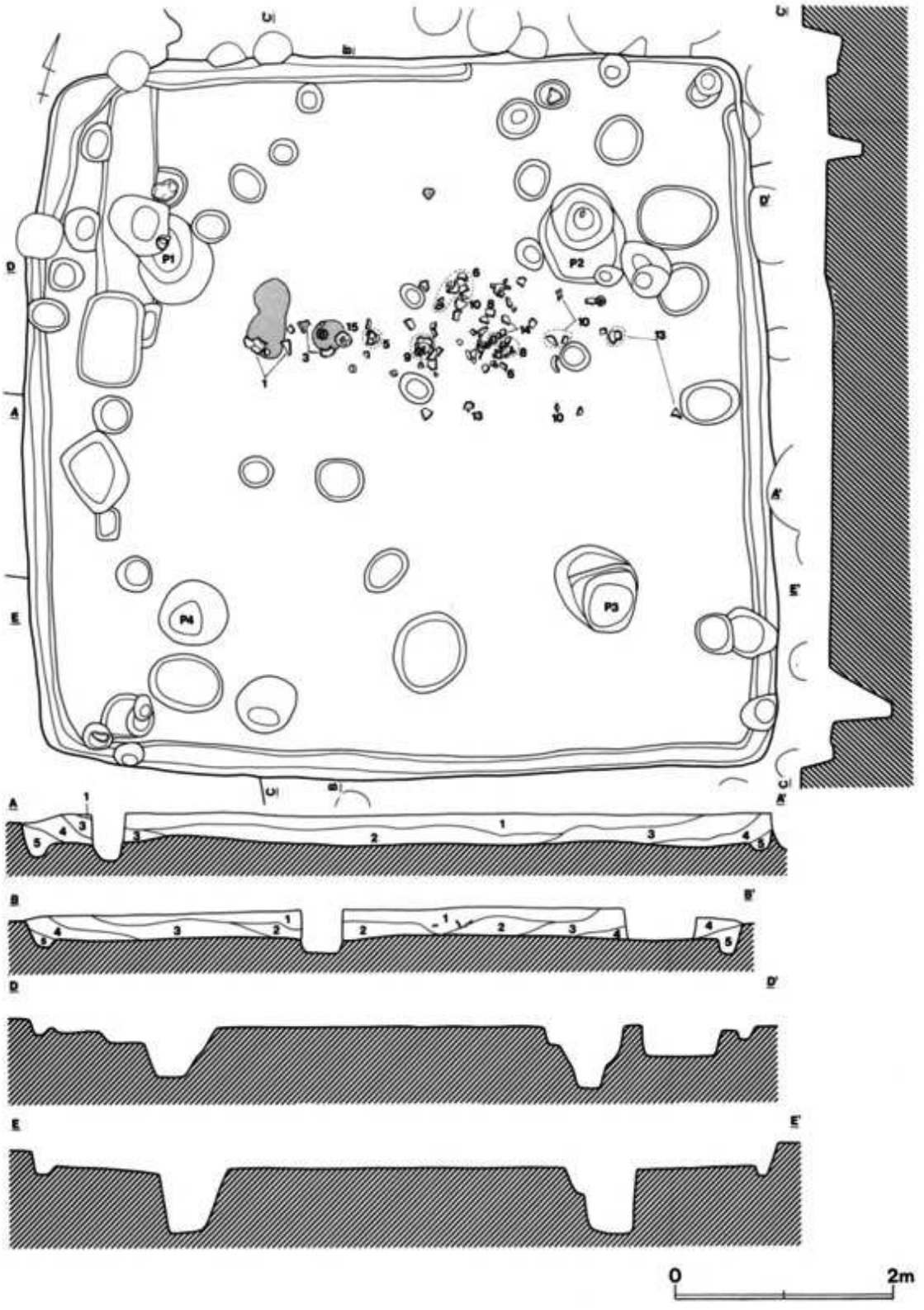
平面形は、コーナー部が丸みをもつ比較的整った方形を呈している。規模は、北西から南東方向が6.70m、北東から南西方向が6.96mを測る。住居の主軸方位は、N－19°－Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で28cmある。各壁下には、幅20cm前後・深さ10cm前後の壁溝が巡っているが、北西側壁下の西側は途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、上半が長さ80cm～90cmの比較的大きな掘り方をもち、その端に直径60cm前後の円形を呈し、深さ45cm～60cmの柱穴を掘っている。炉は、住居中央部の北西側寄りの位置に2箇所並んでいる。西側のやや規模の大きな炉は、床面を若干掘り窪めた地皿炉で、良く焼けて赤色化している。東側の炉は、床面が焼けているだけの地床炉である。遺物は、土器が比較的多く出土しているが、ほとんどが住居中央部北側寄りの覆土上層にまとまって出土したもので、直接本住居跡に伴うものではない。

第50号住居跡出土遺物観察表

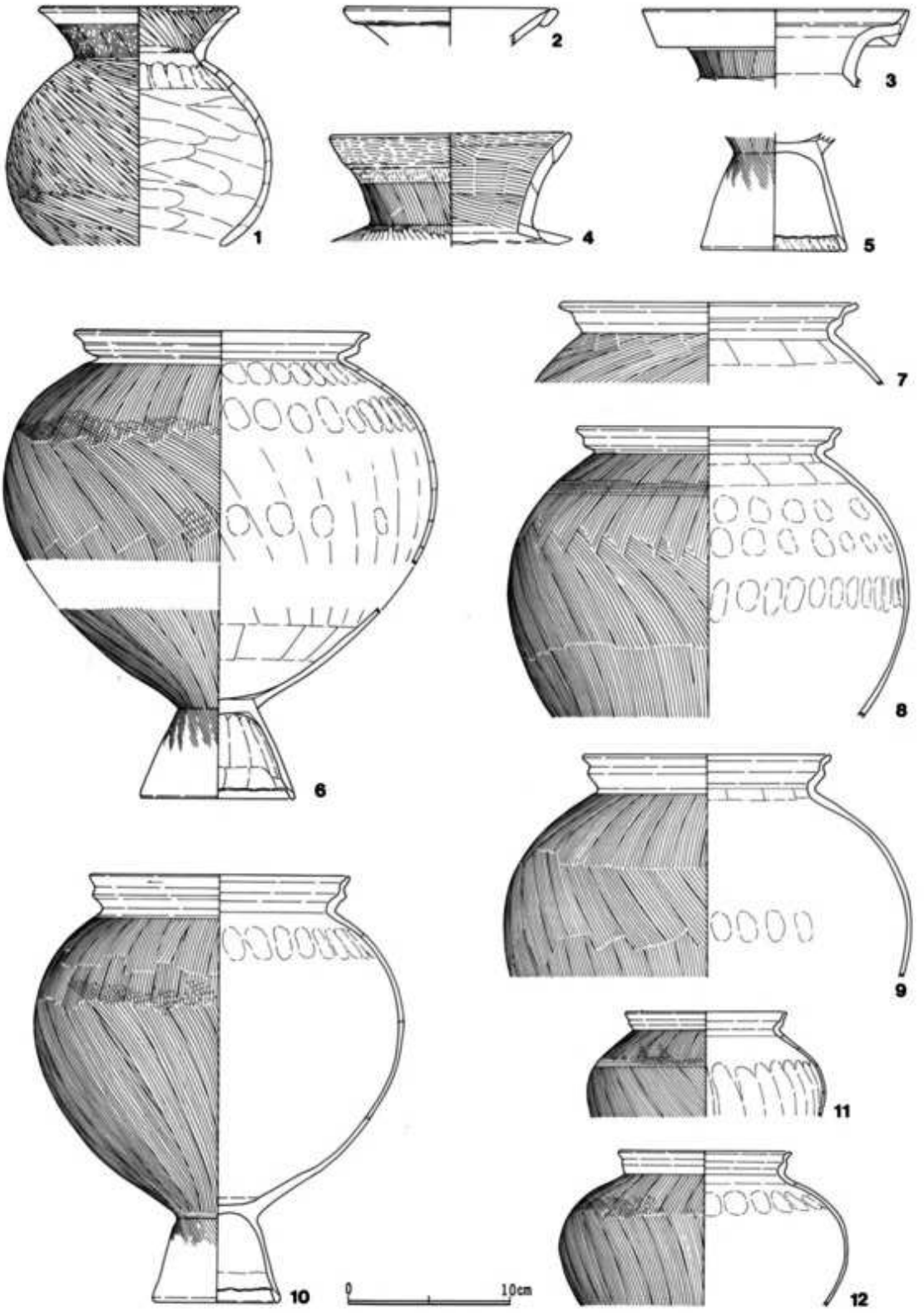
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口縁部径 (12.4cm) 残存高 14.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部外面ハケの後ナデ、内面ミガキ。頸部内面シボリ。胴部外面ミガキ、内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色 内－暗茶褐色	1/3。 口縁部外面に煤の付着あり。 覆土中。
2	壺	口縁部径 (13.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は幅狭の複合口縁を呈す。	口縁部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	口縁部1/3。 覆土中。
3	壺	口縁部径 16.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は幅広の複合口縁を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ハケ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－暗赤褐色 内－淡茶褐色	口縁部2/3。 二次焼成を受けている。 覆土中。

第50号住居跡土層説明

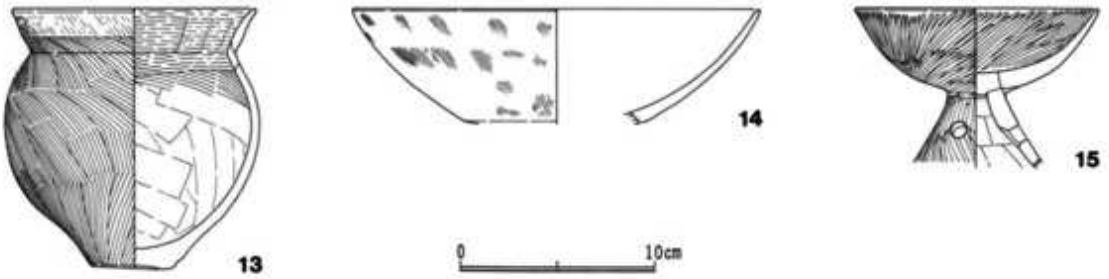
第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第287図　第50号住居跡



第288図　第50号住居跡出土遺物(1)



第289図　第50号住居跡出土遺物(2)

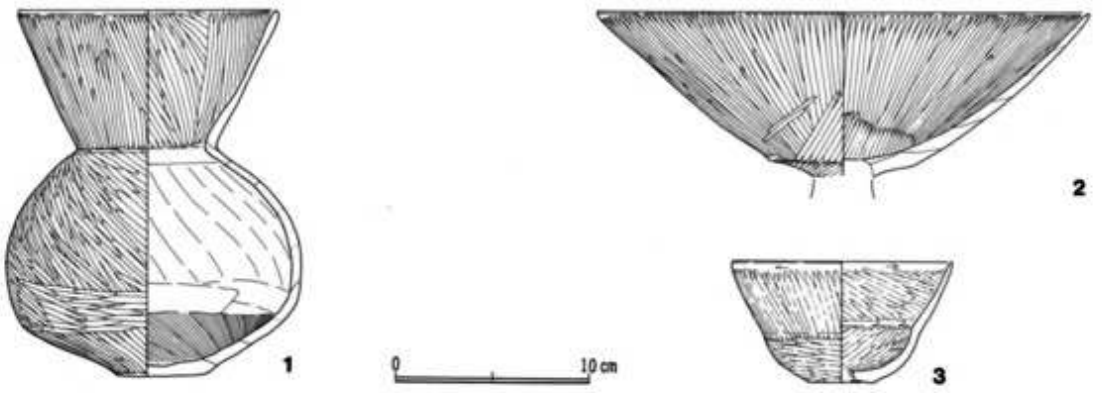
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	壺	口縁部径 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、やや肥厚して複合口縁状を呈する。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。頸部内外面ハケ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色 内－暗褐色	口縁部3/4。 口縁部外面煤の付着あり。 二次焼成を受けている。 覆土中。
5	台付甕		粘土紐積み上げ成形。台部は内湾ぎみに開き、端部を折り返す。	台部外面ナデの後上端部ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	台部のみ。 底部内外面砂付着。 覆土中。
6	台付甕	口縁部径 (18.4cm) 推定高 29.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲し、口唇部内側にやや窪む平坦面をもつ。胴部は最大径を中位にもつ。台部は内湾ぎみに開き、端部を折り返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後上半ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－暗褐色 内－淡茶褐色	1/4。 胴部外面に煤の付着あり。 覆土中。
7	甕	口縁部径 (18.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲し、口唇部内側にやや窪む平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－茶褐色	口縁部1/4。 覆土中。
8	甕	口縁部径 (16.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/5。覆土中。
9	甕	口縁部径 15.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	片色粒・赤色粒 外－明橙褐色 内－暗灰褐色	1/4。二次焼成を受けている。 覆土中。
10	台付甕	口縁部径 16.2cm 器高 26.5cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は最大径を中位にもつ。台部は「ハ」の字状に開き、端分は折り返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデのハケ、内面丁寧なナデ。台部外面ナデの後上半ハケ、内面ナデ。	片色粒・赤色粒 白色粒 内外－茶褐色	1/2。 覆土中。
11	小形甕	口縁部径 10.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデのハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/2。 覆土中。
12	小形甕	口縁部径 10.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状に屈曲する。胴部は最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデのハケ、内面ナデ。	片岩色・赤色粒 白色粒 内外－暗灰褐色	1/5。 二次焼成を受けている。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
13	小形甕	口径 12.6 器高 13.4 底径 4.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は平底を呈する。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	2/3。 覆土中。
14	高坏	口縁部径 (21.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開き、下端に稜をもつ。	口縁部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	口縁部1/4。 覆土中。
15	高坏	口縁部径 12.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。脚部は「ハ」の字状に開く。	口縁部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ケズリの後ナデ。	片岩色・白色粒 内外－明茶褐色	坏部ほぼ完形。 脚部下半欠失。 覆土中。

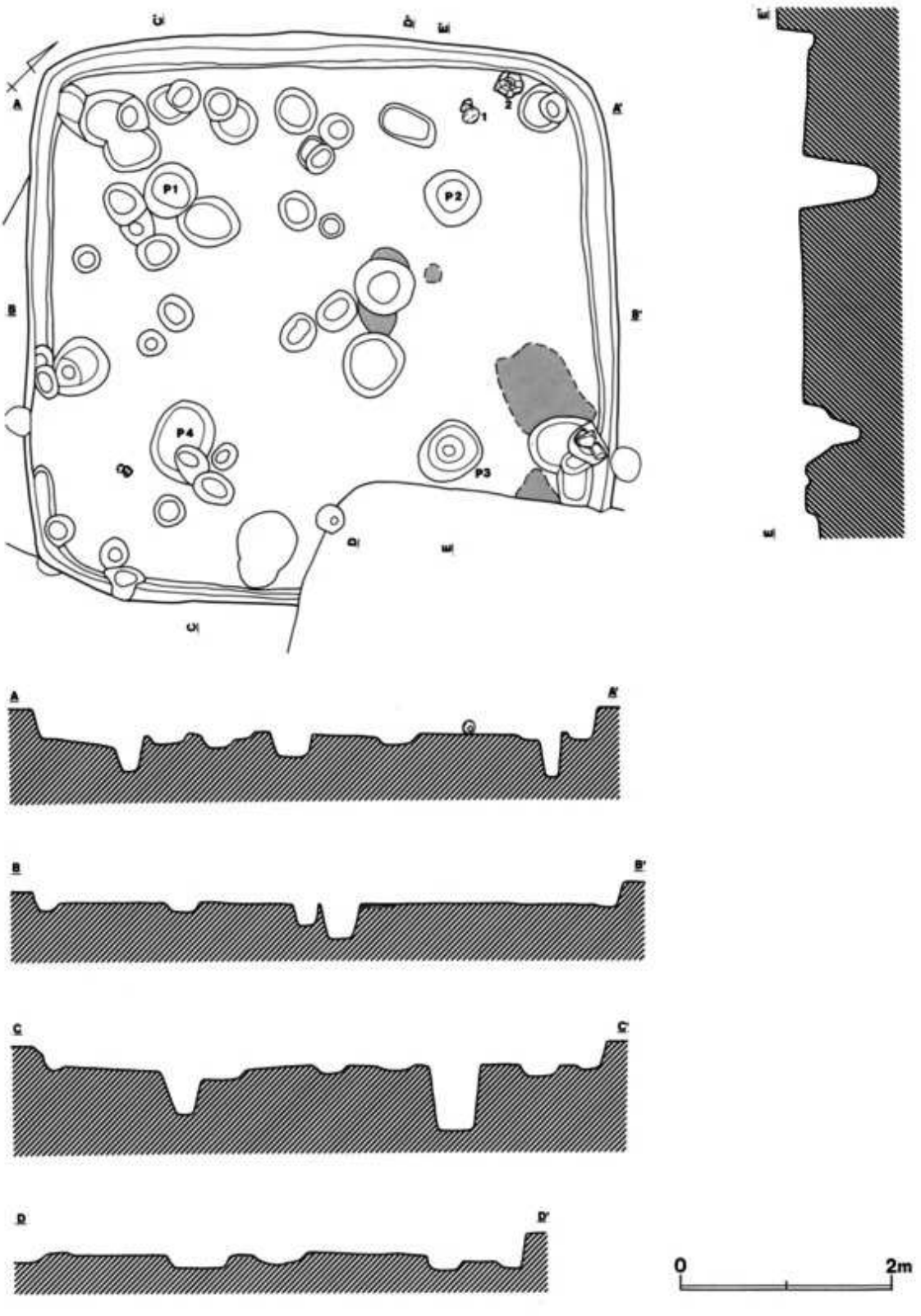
第51号住居跡（第291図）

A地点の調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第4号住居跡と第16号住居跡に切られている。遺存状態は、比較的良い方である。

平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈している。規模は、北東から南西方向が5.56m、北西から南東方向が5.35mを測る。住居の主軸方位は、N－54°－Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、最高で26cmある。各壁下には、幅20cm前後・深さ5cm～10cmの壁溝が巡っているが、住居南西側壁下で一部途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、P1～P4の4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、直径50cm～70cmの円形かあるいは楕円形を呈し、深さは40cm～70cmある。炉は、住居中央部の北東側寄りに位置している。床面が焼けているだけの地床炉で、非常に良く焼けて赤色化しているが、炉の中央部を中世のピットに切られている。遺物は土器が少量見られるが、いずれも覆土中からの出土である。また、住居北東側の壁際には多量の焼土が分布しているが、これらの焼土は覆土上層に堆積しており、住居廃絶後に、投棄されたか流れ込んだものである。



第290図　第51号住居跡出土遺物

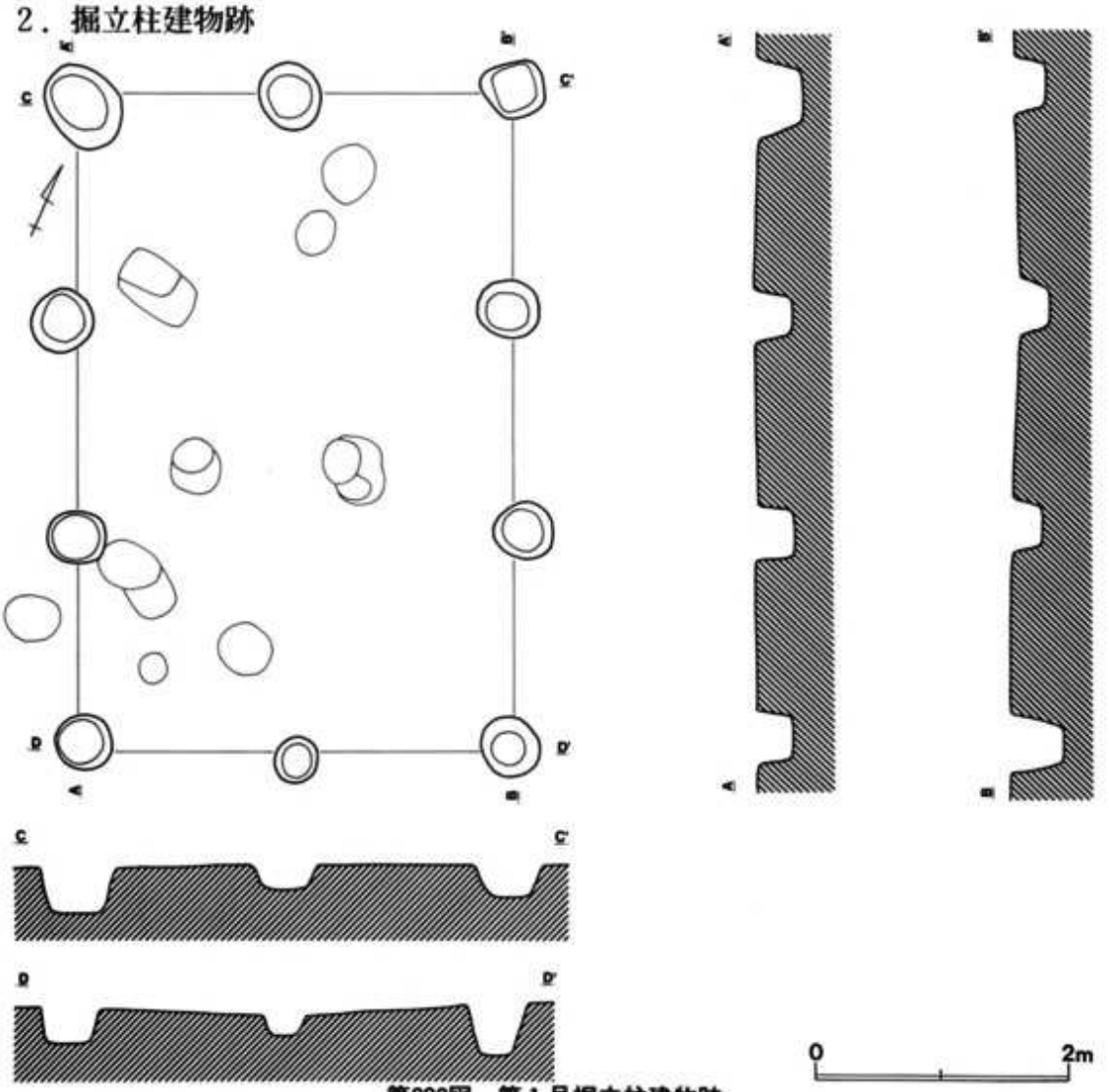


第291図　第51号住居跡

第51号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	直口壺	口径 13.4 器高 18.8 底径 4.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに開く。胴部は張り、最大径を下位にもつ。底部は平底を呈す。	口縁部内外面ミガキ。胴部外面ミガキ、内面ハケの後上半ナデ。底部外面ナデ、内面ハケ。	赤色粒・白色粒	ほぼ完形。 外面黒斑あり。 覆土中。
2	高坏	口縁部径 (25.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開き、下端に稜をもつ。	口縁部内外面及び坏部内外面ミガキ。	赤色粒・白色粒 外－淡茶褐色 内－明茶褐色	口縁部3/4。 覆土中。
3	小形鉢	口径(11.4) 器高 6.7 底径(3.2)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。体部は張らず、底部は平底。	口唇部内外面ヨコナデ。口縁部及び体部内外面ハケの後ミガキ。底部外面ミガキ。	白色粒 内外－淡茶褐色	1/2。底部外面に黒斑あり。 覆土中。

2．掘立柱建物跡



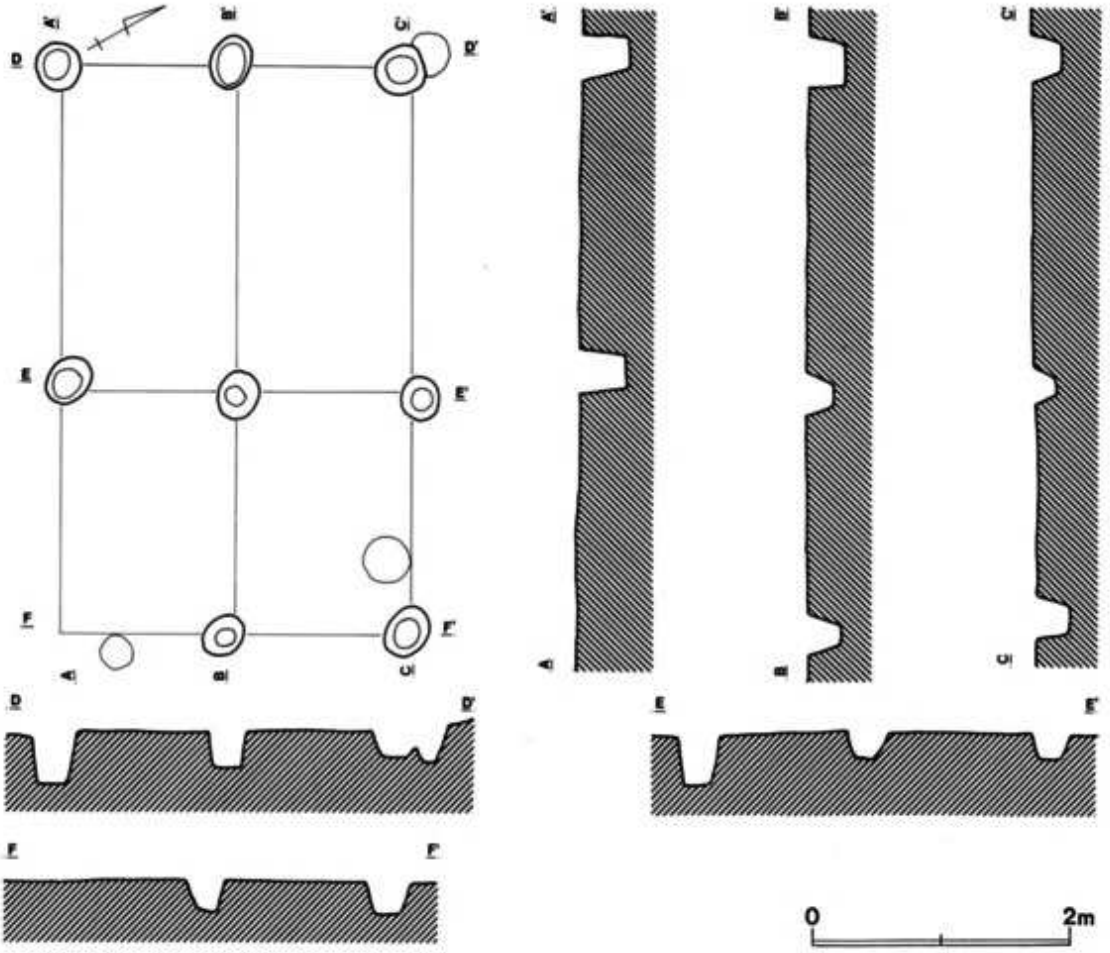
第292図　第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第292図）

A地点の調査区南側に位置し、重複する第2号溝跡に切られている。建物跡の形態は、北西から南東方向が3間、北東から南西方向が2間の長方形を呈する側柱式である。規模は、梁行が3.40m、桁行が5.10mを測る。建物跡の桁行方向は、N−25°−Wをとる。柱通りは比較的良く、柱心間は梁行・桁行とも1.70mの等間隔である。柱穴は、直径40cm～50cmの比較的規模の大きな円形を呈するものが主体で、深さはいずれも25cm～40cmあるが、梁行の真ん中の柱穴は桁行の柱穴に比べてやや浅くなっている。覆土は、B軽石やローム粒子を微量含む黒褐色土を主体にしており、柱痕は見られない。本建物跡の時期は、覆土中から古墳時代前期と後期の土器片が少量出土しているが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

第2号掘立柱建物跡（第293図）

A地点の調査区南側に位置し、重複する第2号溝跡に切られている。建物跡の形態は、南端の側柱穴を1箇所欠いているが、2間×2間の長方形を呈し、真ん中に中間柱をもつ総柱式と推測され

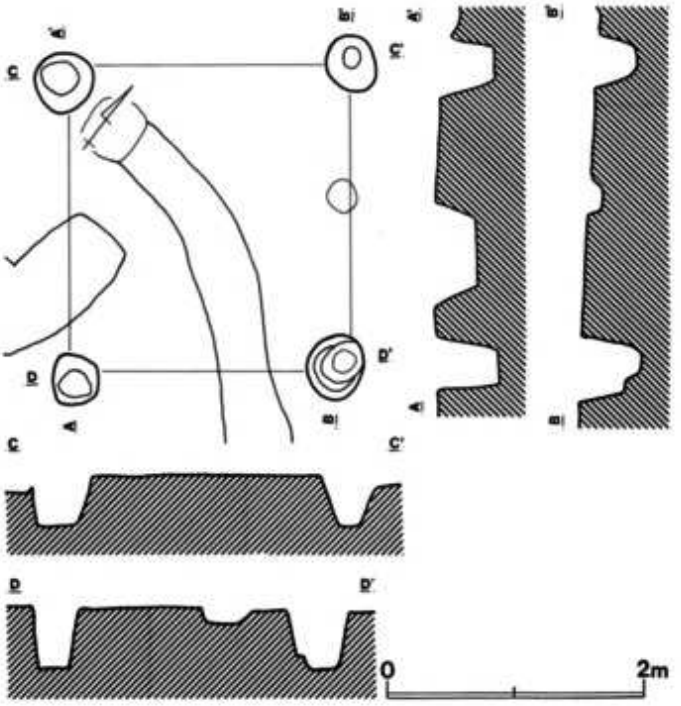


第293図　第2号掘立柱建物跡

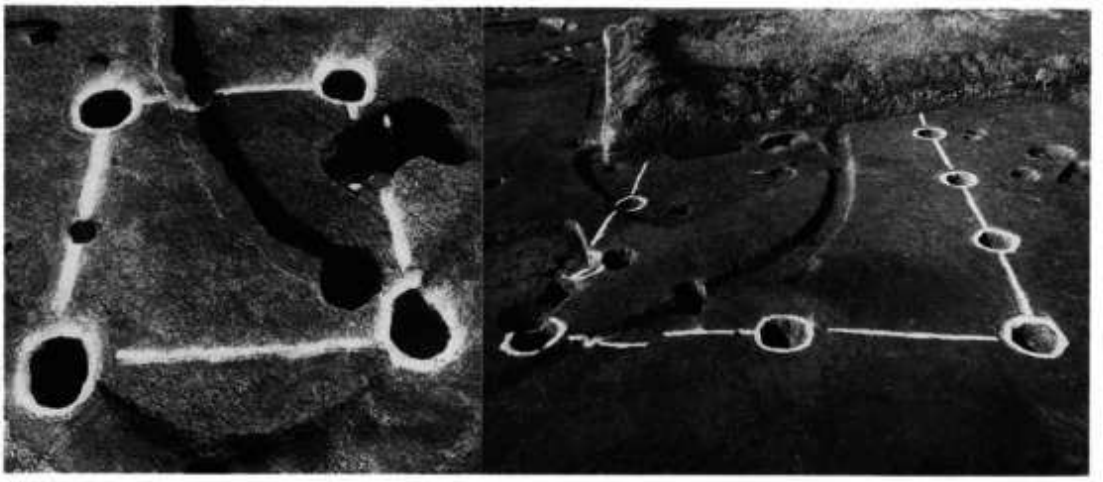
る。規模は、北西から南東方向が4.30m、北東から南西方向が2.60mを測る。建物跡の長軸方向は、N−60°−Wをとる。柱心間は、短軸方向が1.30mの等間隔であるが、長軸方向は2.50mと1.90mの不揃いである。柱穴は、直径30cm～35cm程度の比較的の小規模な円形を呈し、深さはいずれも20cm程度である。覆土は、B軽石やローム粒子を微量含む淡灰褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第294図）

A地点の調査区西端に位置し、重複する第4号溝跡に切られている。また、第2号円形周溝遺構とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。本遺構は、柱穴だけで構成されていることから一応建物跡としたが、周囲の住居跡を見ても解るように、本遺跡は耕作によりかなり削平されているため、床面下まで削平された竪穴式住居跡の4本主柱穴だけが残存したものである可能性も考えられる。形態は、1間×1間の方形を呈している。規模は、北西から南東方向が2.40m、北東から南西方向が2.20mを測る。建物跡の向きは、N−42°−Wをとる。柱穴は、直径40cm前後の円形を呈し、深さはいずれも45cm程度ある。覆土は、ロームブロックやローム粒子を微量含む黒褐色土で、覆土中からは鬼高式土器の破片が少量出土している。本建物跡は、覆土の状態や出土遺物より、古墳時代後期の可能性が高いと考えられる。

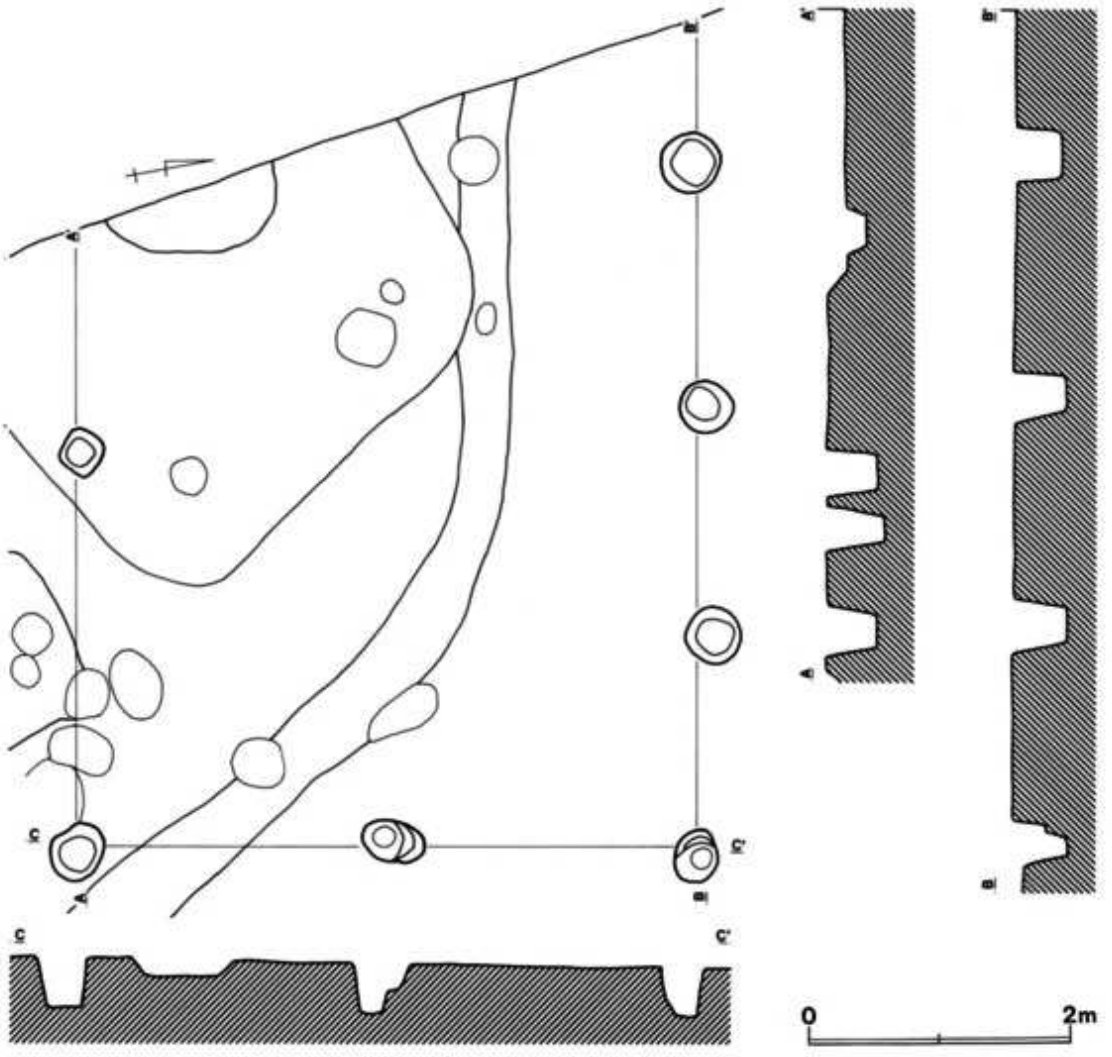


第294図　第3号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡（第295図）

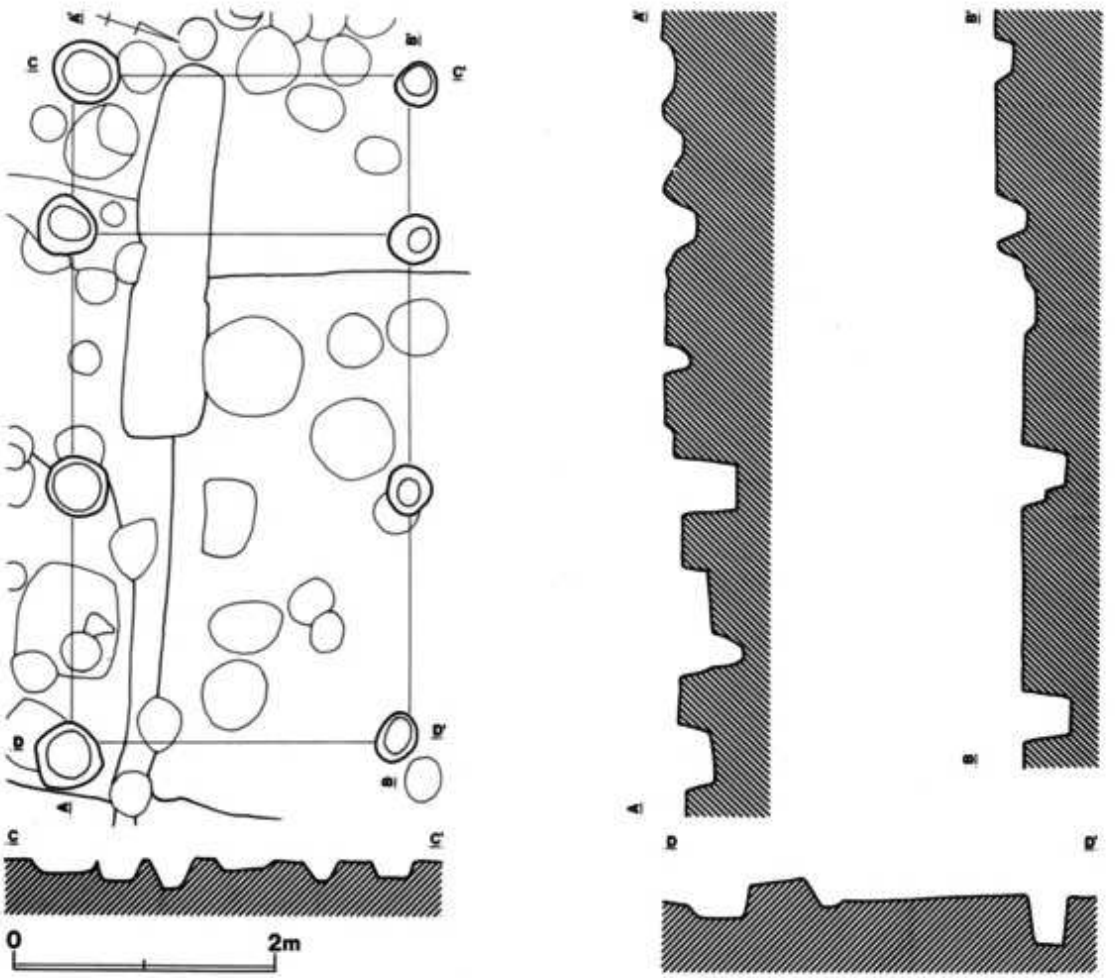
A地点の調査区北側に位置し、重複する第23号住居跡を切っている。本建物跡は、建物の西側が旧送電線鉄塔により破壊されているため、建物の全容は不明である。建物跡の形態は、南北方向が2間、東西方向が3間以上の長方形を呈する側柱式と推測されるが、桁行側の柱穴列は北側と南側では柱穴の本数や間隔が異なり、相互に対応していない。規模は、梁行が4.80m、桁行が5.40m以上ある。建物跡の桁行方向は、N−81°−Wをとる。柱通りは、桁行・梁行とも比較的良い。柱心間は、梁行が2.40mの等間隔であるが、桁行は北側がほぼ1.80mの等間隔で、南側は1間約3mを測る。柱穴の形態は、直径40cm前後の円形を呈するものが主体で、深さは30cm～40cmで比較的そろっており、底面は平坦である。覆土は、B軽石とロームブロックを含む暗灰褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。



第295図　第4号掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡（第296図）

Ａ地点の調査区東側に位置し、重複する第31号住居跡と第33号住居跡を切っている。また、第13号掘立柱建物跡や東西方向と南北方向に向く溝状土壙とも重複しているが、相互の新旧関係は遺構の切り合い部分がないため不明である。建物跡の形態は、東西方向が２間、南北方向がやや間隔の広い１間の長方形を呈する側柱式で、西側に庇を伴っている。規模は、東西方向が４ｍで西側の庇部分を含めると5.20mあり、南北方向は2.60mを測る。建物跡の桁行方向は、N−73°−Eをとる。柱通りは比較的良く、南北両側の側柱穴とも比較的良く対応して配置されている。柱心間は、梁行が１間2.60m、桁行が2.00mの等間隔で、庇部分は1.20mを測る。柱穴の形態は、北側と南側の柱穴列ではやや差異が見られ、北側の柱穴列が直径40cm弱の円形を呈しているのに対して、南側の柱穴列は直径50cm程度のやや規模の大きな円形を呈している。深さは30cm～50cmあるが、庇の柱穴は10cm程度でかなり浅くなっている。覆土は、Ｂ軽石とローム粒子を含む黒灰褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

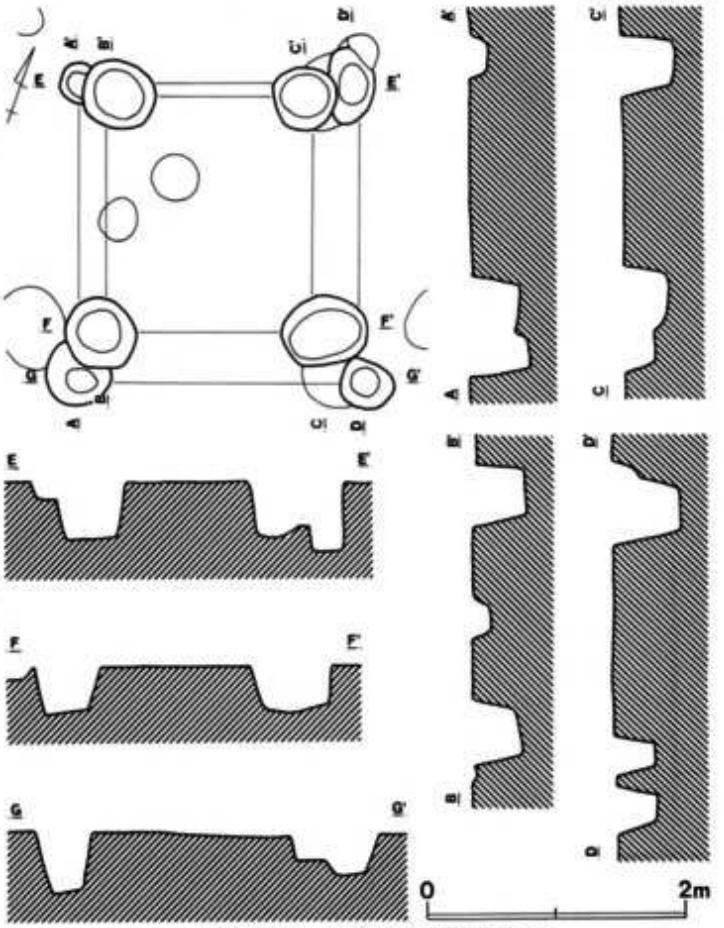


第296図　第５号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡（第297図）

A地点の調査区南端に位置する。

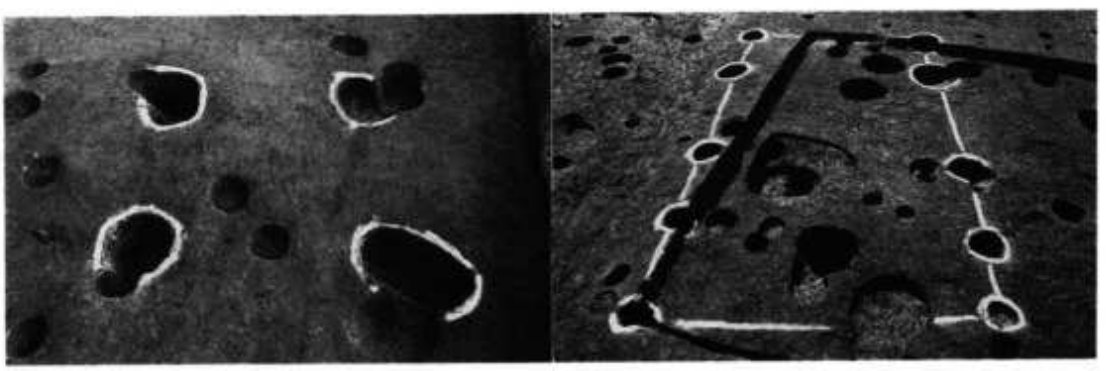
本建物跡は、同じ形態の建物が入れ子状に重複しているが、おそらく同一建物の立て替えと推測される。いずれの建物跡も、1間×1間の方形を呈し、建物跡の向きは、N−22°−Wを向いている。最初の古い建物跡は、規模が北西から南東方向1.80m、北西から南東方向1.60mで、柱穴の形態は長さ50cm～70cmの円形か楕円形を呈し、深さは35cm前後ある。立て替え後の新しい建物跡は、規模が北西から南東方向2.30m、北西から南東方向2.20mで一回り大きくなっているが、柱穴の形態は長さ30cm～60cmの円形か楕円形を呈し、深さは12cm～50cmである。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から古墳時代後期の鬼高式土器の破片が比較的多く出土している。本建物跡は、覆土の状態や出土遺物より、いずれも古墳時代後期の可能性が高いと考えられる。



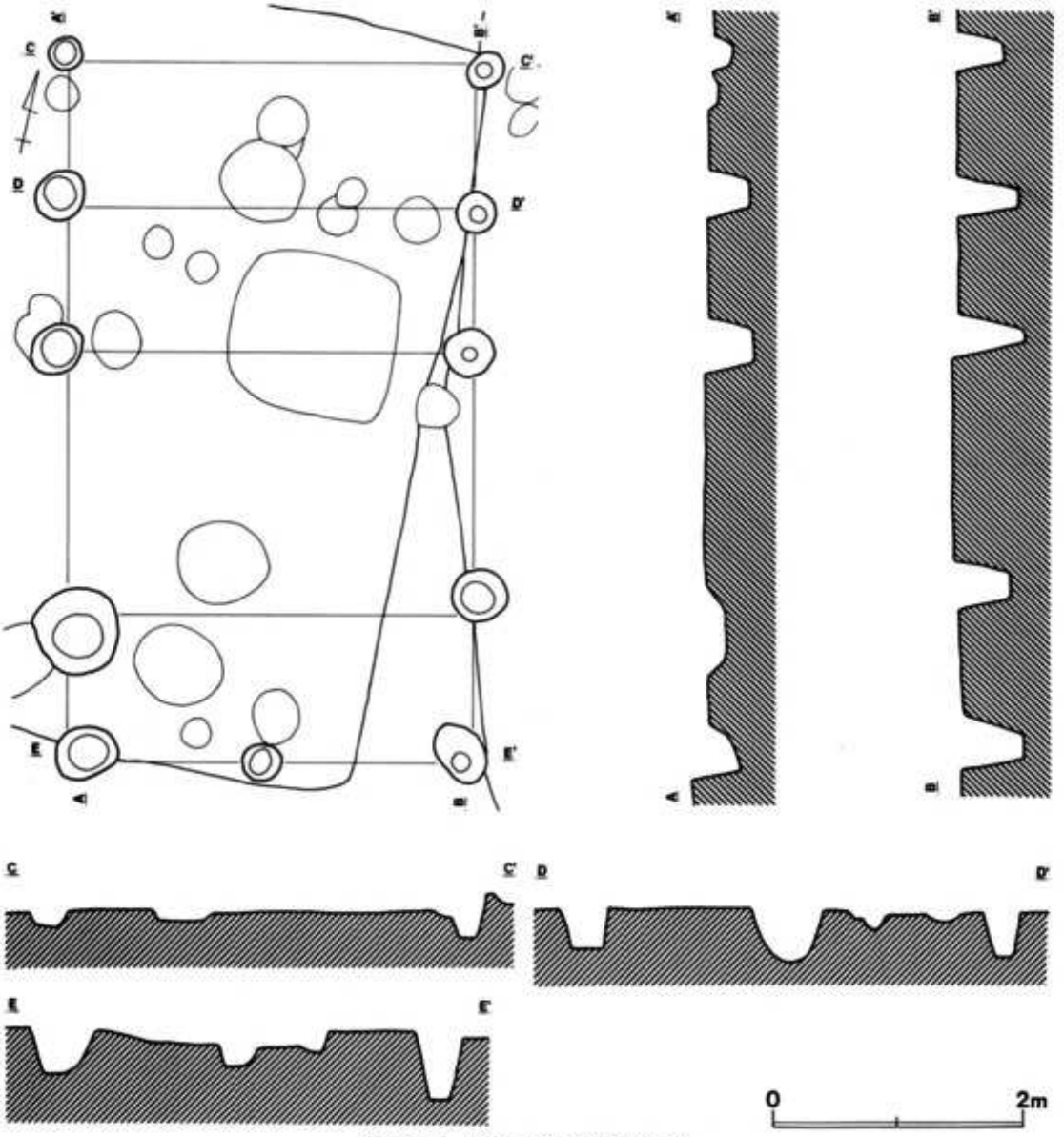
第297図　第6号掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡（第298図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第40号住居跡を切り、第7号溝跡に切られている。建物跡の形態は、南北方向に長い長方形を呈する側柱式であるが、南北両側の柱穴は間隔が狭く、おそらく複数の庇的構造をもつ建物と考えられる。規模は、南北方向が庇部分も含めると5.60m、東西



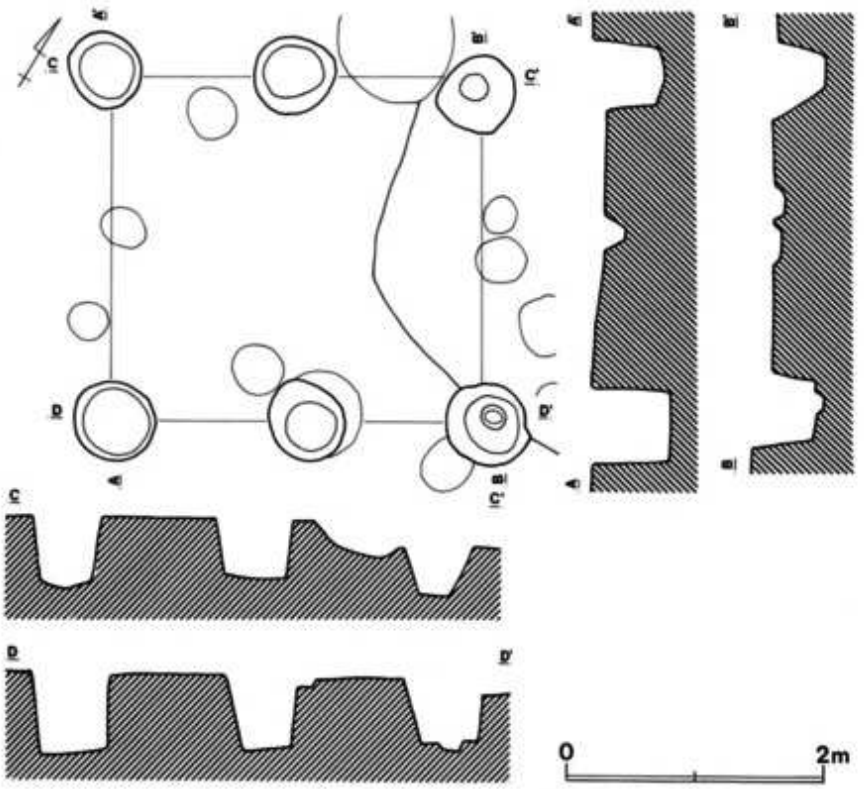
方向は3.20mある。建物跡の向きは、N−12°−Wを向いている。柱通りはやや悪く、蛇行ぎみに柱穴が並んでおり、東西両側の柱穴の対応も若干ずれが見られる。柱心間は、東西方向がほぼ1.60mの等間隔であるが、南北方向は真ん中の1間だけが約2mで間隔が広く、その南北両側はいずれも1.20mの狭い間隔になっている。柱穴の形態は、直径20cm～70cmの円形を呈するが、35cm前後のものが主体である。深さは20cm～50cmあるが、東西方向の中間柱は深さが15cm程度しかなく、他に比べて浅くなっている。覆土は、B軽石とローム粒子を含む暗灰褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、覆土中より古墳時代後期の土器破片が少量出土しているが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。



第298図　第7号掘立柱建物跡

第８号掘立柱建物跡（第299図）

Ａ地点の調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第６号井戸跡に切られている。建物跡の形態は、北西から南東方向が１間、南西から北東方向が間隔の狭い２間の方形を呈する側柱式で、南西から北東方向の柱心間は1.40mの等間隔である。規模は、北西から南東方向が2.70m、南西から北東方向が2.80mある。建物跡の向きは、N−36°−Wを向いている。柱穴の形態は、いずれも直径60cm前後の比較的規模の大きな円形を呈し、深さも60cm程度でそろっている。覆土は、ローム粒子や炭化粒子を含む黒褐色土を主体にし、覆土中からは古墳時代後期の鬼高式土器の破片が少量出土している。本建物跡の時期は、覆土の状態や出土遺物から古墳時代後期の所産と考えられる。



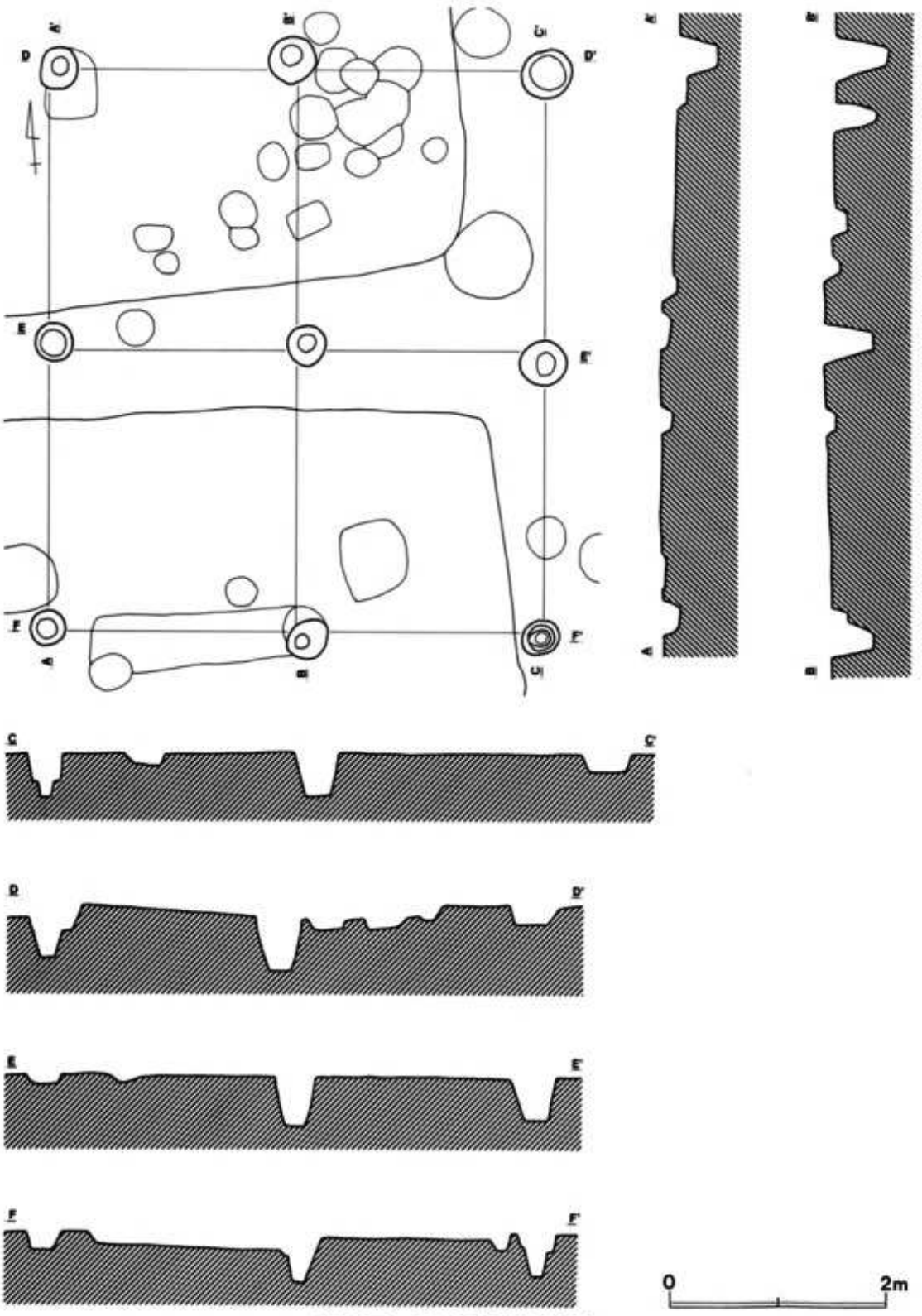
第299図　第８号掘立柱建物跡

第９号掘立柱建物跡（第300図）

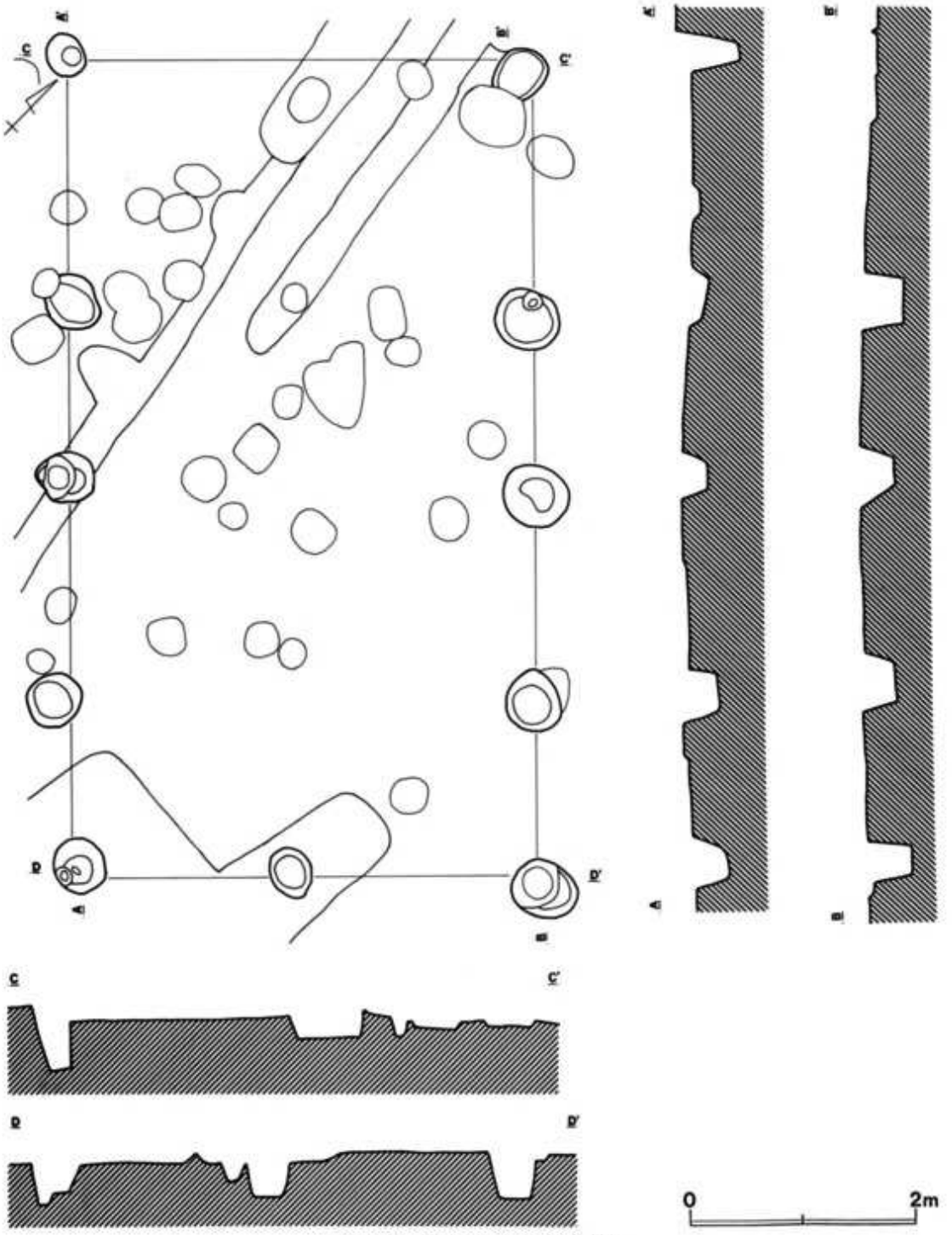
Ａ地点の調査区東側に位置し、重複する第34号住居跡と第35号住居跡を切っている。建物跡の形態は、東西方向２間、南北方向２間の長方形を呈し、真ん中に束柱をもつ総柱式である。規模は、南北方向が5.20m、東西方向が4.60mある。建物跡の向きは、N−4°−Eを向いている。柱心間は、南北方向が2.60m、東西方向が2.30mのいずれも等間隔で、東西方向に比べて南北方向の柱心間の方が長くなっている。柱穴の形態は、直径32cm～45cmの円形を呈し、深さは12cm～50cmでかなりばらつきがある。覆土は、Ｂ軽石とローム粒子を含む暗灰褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

第10号掘立柱建物跡（第301図）

Ａ地点の調査区東側に位置し、重複する第41号住居跡を切り、第７号溝跡に切られている。建物跡の形態は、北西からに南東方向が４間、北東から南西方向が２間の長方形を呈する側柱式である。



第300図　第９号掘立柱建物跡

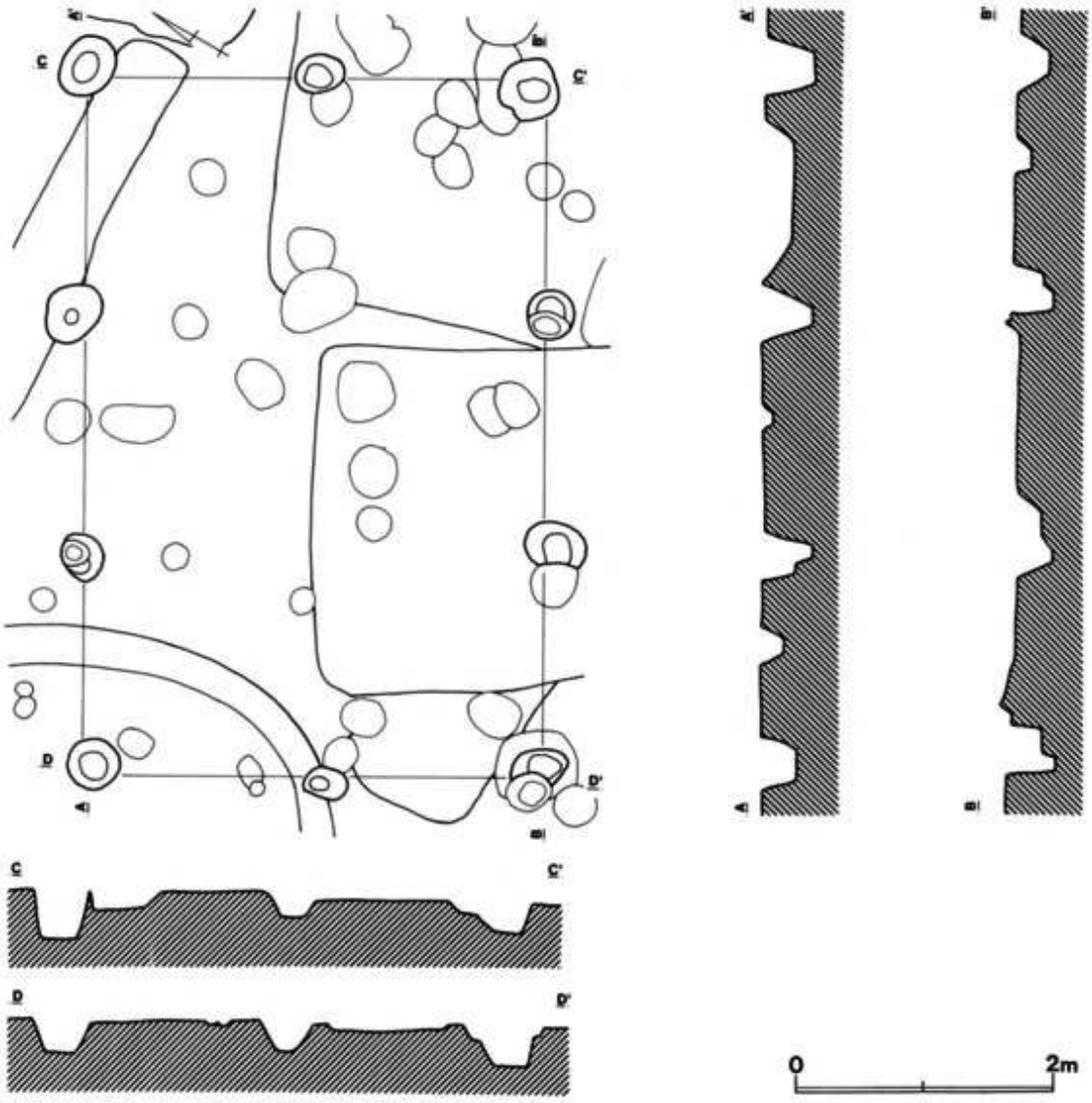


第301図　第10号掘立柱建物跡

規模は、梁行が4.20m、桁行が7.40mを測る。建物跡の桁行方向は、N−44°−Wをとる。柱通りは比較的良く、両側の桁行の柱穴の位置も良く対応している。柱心間は、梁行側は2.10mの等間隔であるが、桁行側は北西端から2.30m・1.60m・1.90m・1.60mと不揃いである。柱穴の形態は、直径40cm～50cmの円形を呈し、深さは4cm～60cmあるが、30cm～40cmのものが主体である。覆土は、B軽石とローム粒子を含む黒褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、覆土中から古墳時代後期の鬼高式土器の破片が少量出土しているが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

第11号掘立柱建物跡（第302図）

A地点の調査区中央の南側寄りに位置し、重複する第37号住居跡・第38号住居跡・第2号円形周溝遺構を切り、溝状土壙に切られている。建物跡の形態は、南西から北東方向が3間、南東から北西

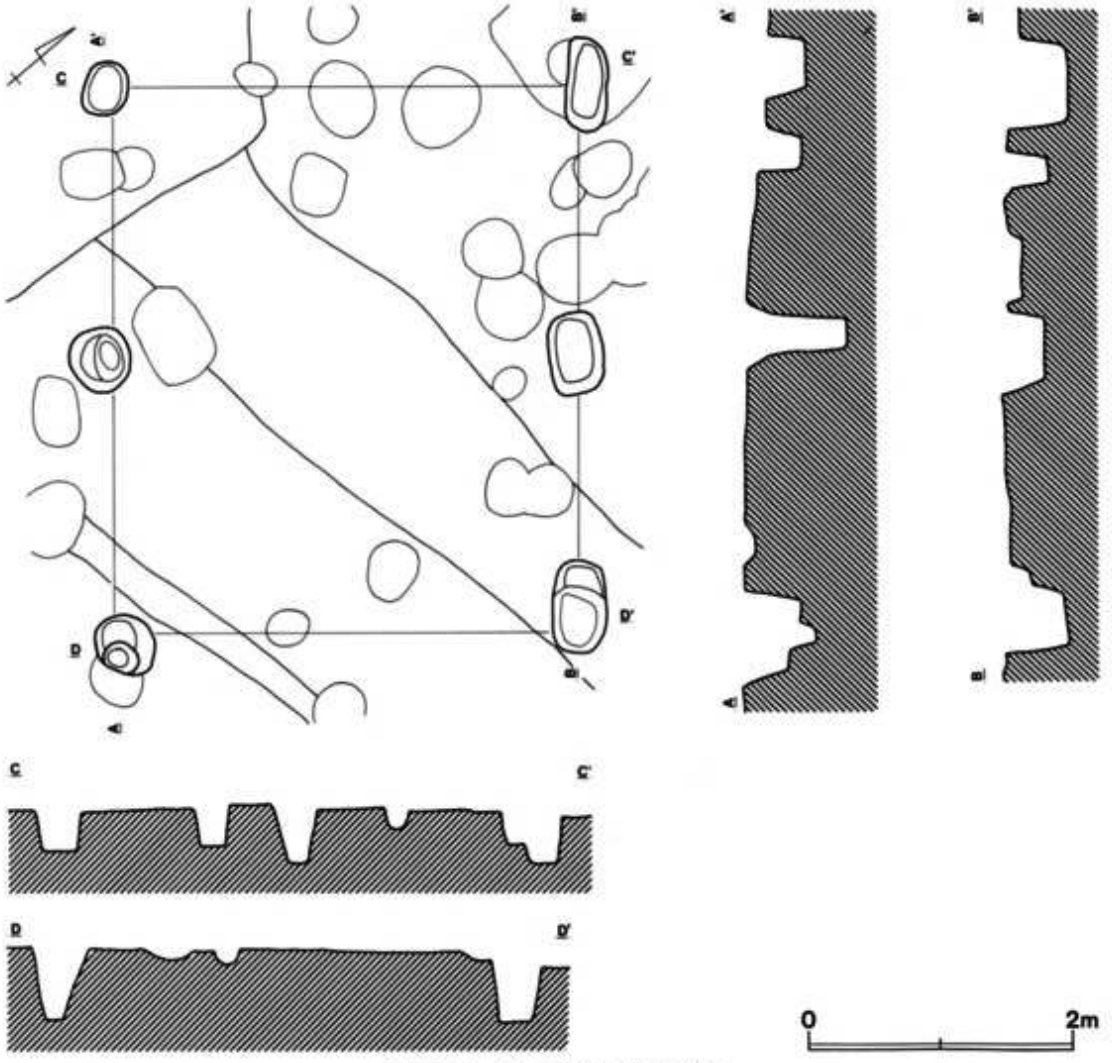


第302図　第11号掘立柱建物跡

方向が2間の長方形を呈する側柱式である。規模は、梁行が3.60m、桁行が5.40mを測る。建物跡の桁行方向は、N−59°−をEとる。柱通りは比較的良く、両側の桁行の柱穴の位置も良く対応している。柱心間は、梁行・桁行ともほぼ1.80mの等間隔である。柱穴の形態は、長さ35cm～50cmの円形か楕円形を呈し、深さは20cm～40cmある。覆土は、B軽石とローム粒子を含む黒褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

第12号掘立柱建物跡（第303図）

A地点の調査区東側に位置する。建物跡の形態は、北西から南東方向が2間、北東から南西方向は中間の柱穴が明確ではないがおそらく2間の長方形を呈する側柱式である。規模は、北西から南東方向が4.20m、北東から南西方向が3.60mを測り、北西から南東方向は2.10mの等間隔である。

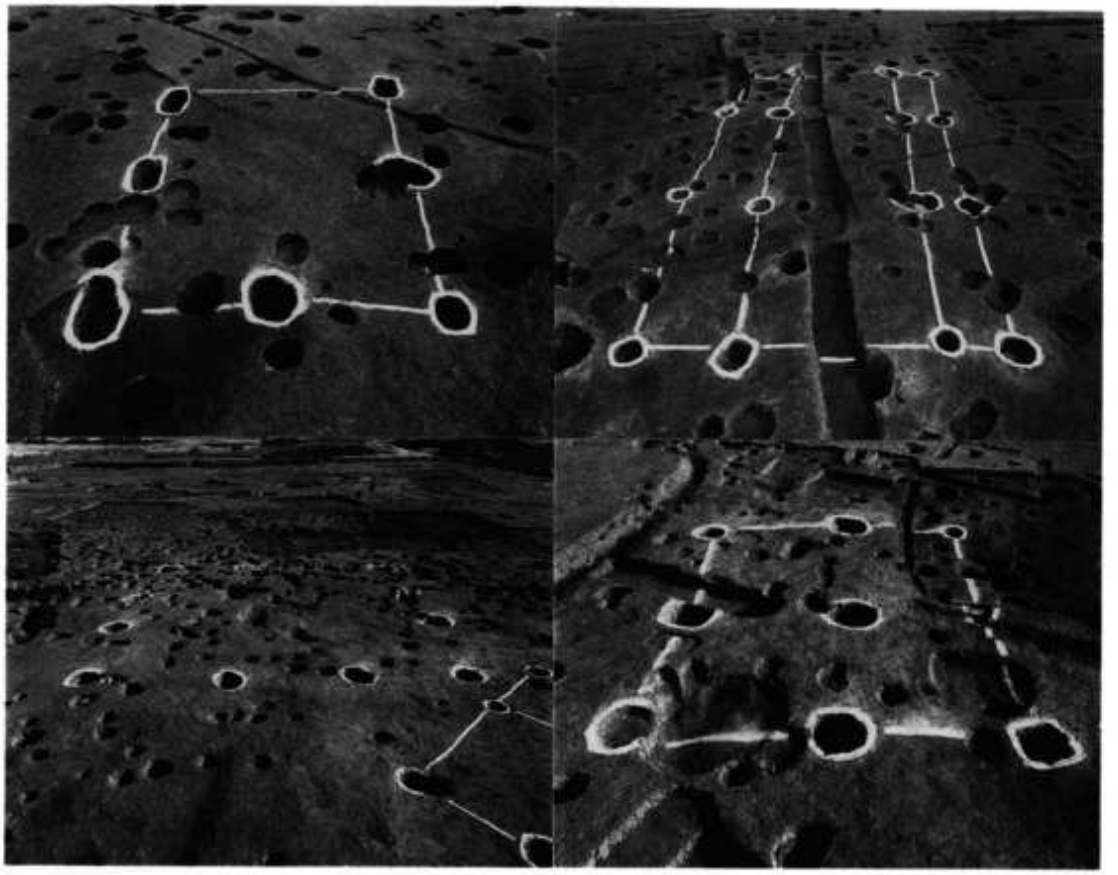


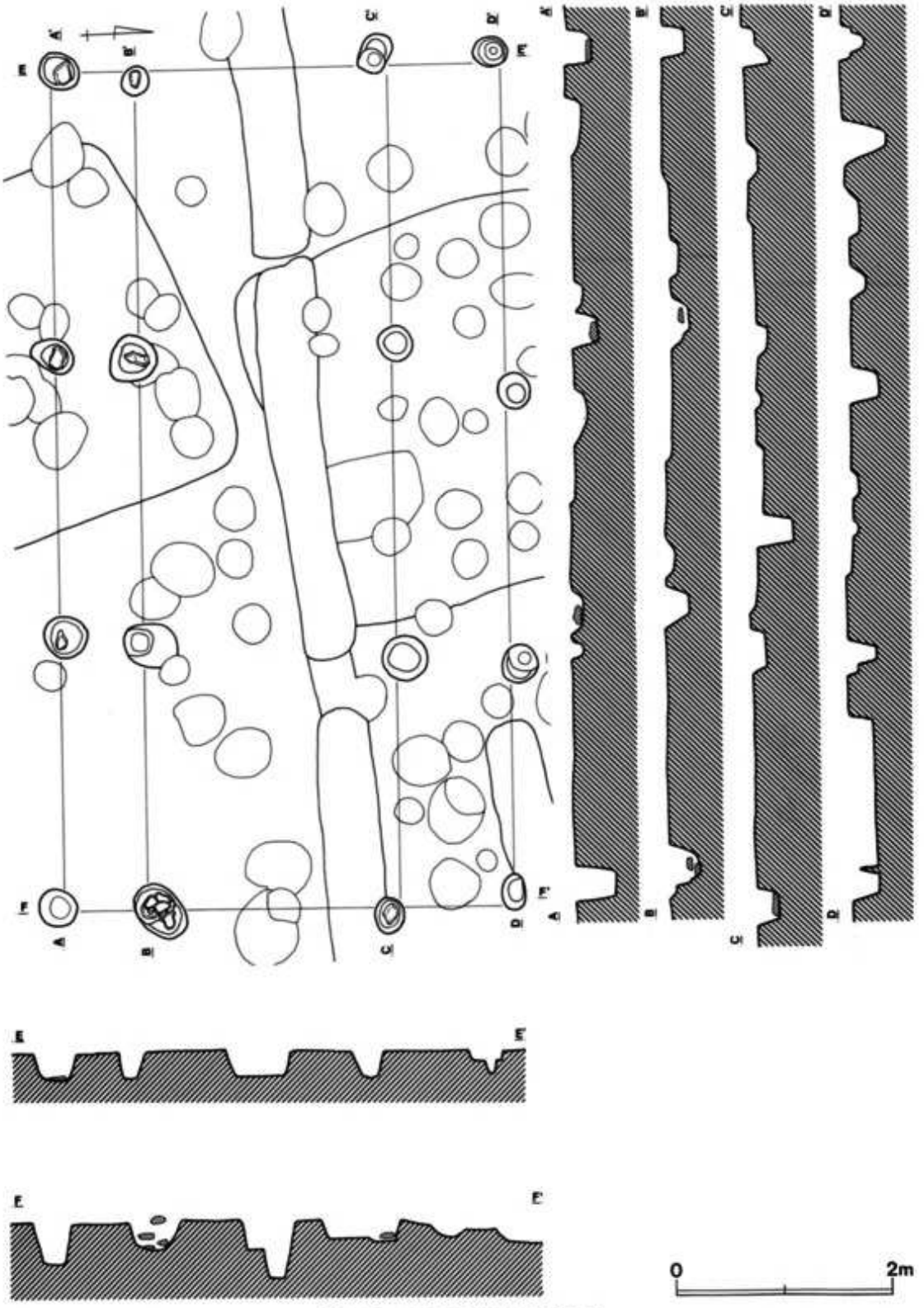
第303図　第12号掘立柱建物跡

建物跡の長軸方位は、N－50°－Wを向いている。柱穴の形態は、建物南西側と北東側の柱穴列では形態が異なり、南西側の柱穴列は直径40cm～50cmの円形や楕円形を呈し、北東側の柱穴は長さ70cm前後・幅30cm～40cmの長方形に近い形態を呈している。深さは30cm～80cmある。覆土は、B軽石・ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、覆土中から古墳時代後期の鬼高式土器の破片が数片出土しているが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

第13号掘立柱建物跡（第304図）

A地点の調査区中央の東側寄りに位置し、重複する第32号住居跡と第33号住居跡に切られている。建物跡の形態は、東西方向が3間、南北方向が1間の長方形を呈し、建物の南北両側に庇を伴っている。規模は、東西方向が7.80mあり、南北方向は2.20mで南北両側の庇部分を含めると4.20mある。建物跡の長軸方向は、N－92°－Eを向いている。柱心間は、東西方向がほぼ2.60mの等間隔で、南北方向は北側の庇部分が1.20m・南側の庇部分が80cmを測る。柱通りは比較的良いが、北側庇部分の西から2番目の柱穴は建物の側柱穴との対応が悪く、ややずれて配置されている。柱穴の形態は、直径30cm前後の円形を呈するものが主体である。深さは15cm～35cmあり、底面に礎石を伴うものが多く見られる。覆土は、B軽石・ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

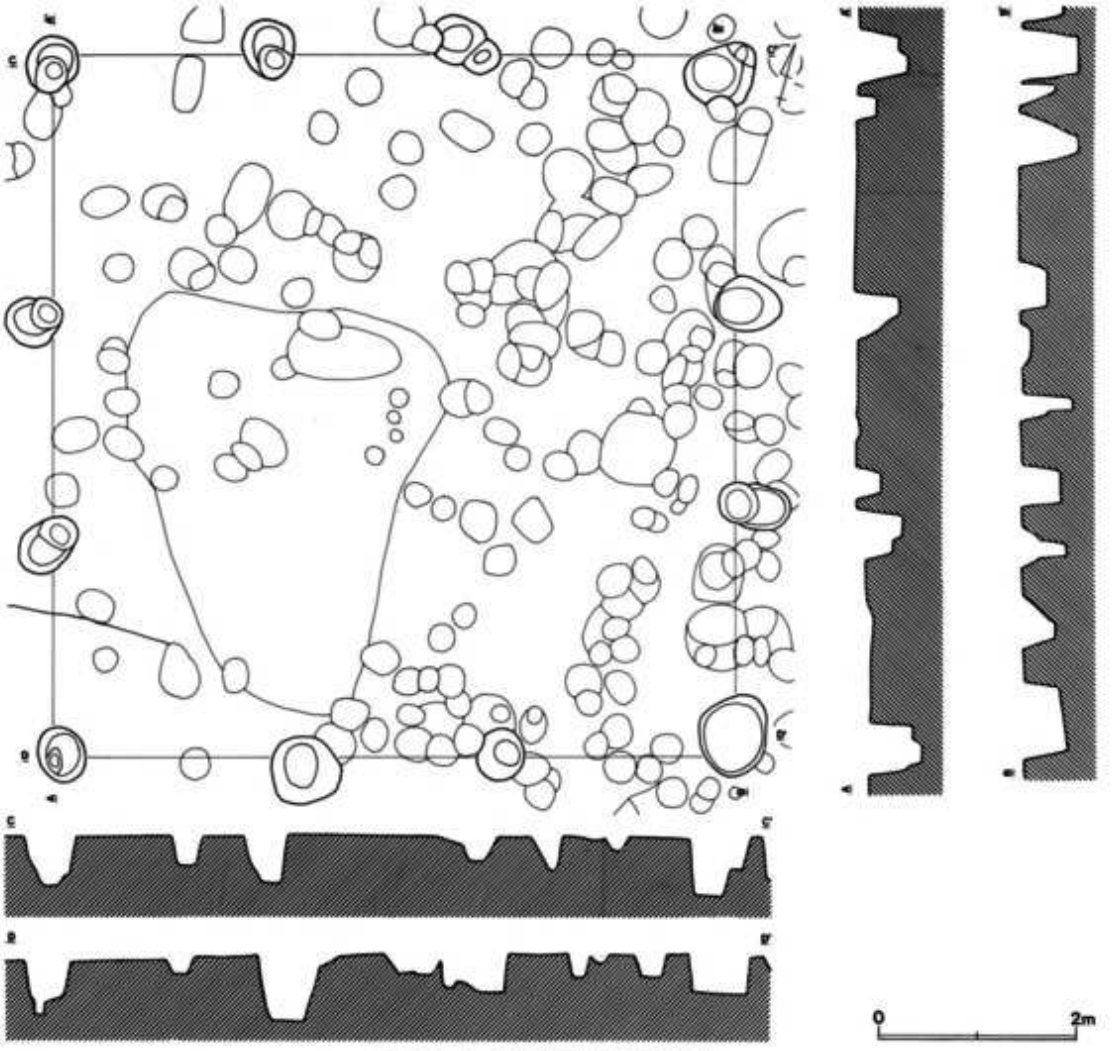




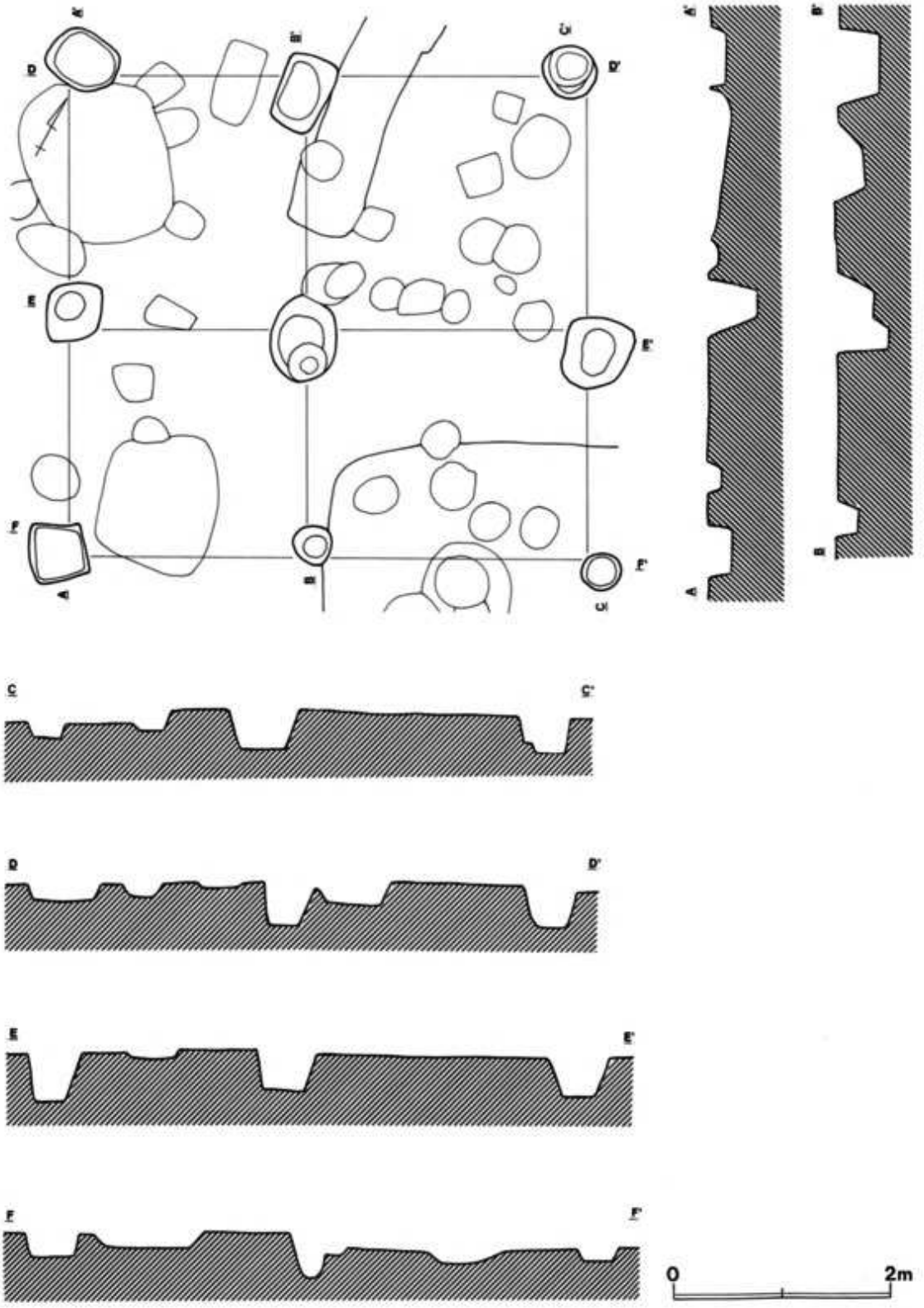
第304図　第13号掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡（第305図）

A地点の調査区中央の西側寄りに位置し、重複する第2号溝跡に切られている。建物跡の形態は、北西から南東方向と北東から南西方向とも3間の方形を呈する側柱式である。規模は、いずれの方向とも7mある。建物跡の向きは、N−15°−Wを向いている。柱心間は、北西から南東方向と北東から南西方向ともほぼ2.40m·2.20m·2.40mで、真ん中の1間が両側の1間に比べて若干狭くなっている。柱穴掘り方の形態は、長さ55cm～70cmの比較的規模の大きな円形か楕円形を呈し、柱穴内側に直径30cm～40cmの円形を呈する柱痕状の掘り込みを伴うものが多い。深さは24cm～60cmあるが、30cm～40cm程度のものが主体である。また、柱穴の中には覆土中に長さ15cm程度の偏平な片岩を1～2個伴うものもある。覆土は、B軽石やロームブロックを含む黒褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、覆土中から古墳時代後期の鬼高式土器の破片が数片出土しているが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。



第305図　第14号掘立柱建物跡



第306図　第15号掘立柱建物跡

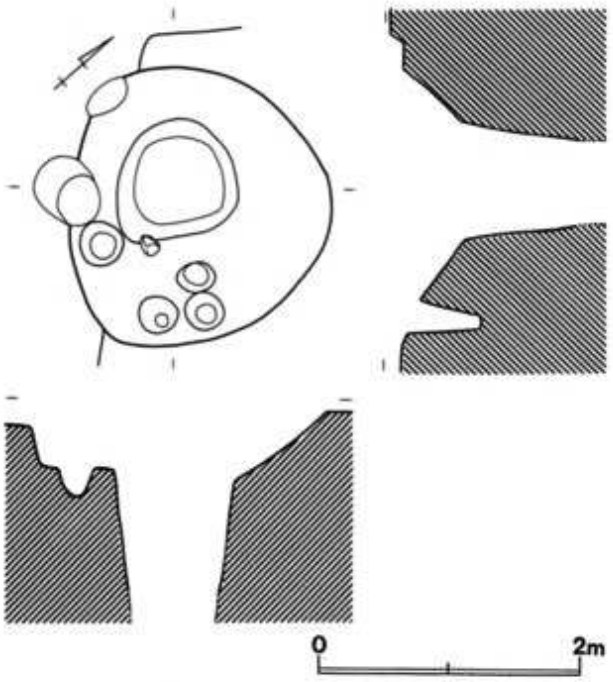
第15号掘立柱建物跡（第306図）

A地点の調査区中央の北側に位置し、重複する第19号住居跡を切っている。建物跡の形態は、北西から南東方向と北東から南西方向とも2間の方形を呈し、真ん中に束柱をもつ総柱式である。規模は、北西から南東方向が4.40m、北東から南西方向が4.80mある。建物跡の向きは、N−28°−Wを向いている。柱心間は、北西から南東方向が2.30mと2.10m、北東から南西方向が2.20mと2.60mで、いずれの方向とも1間幅が不揃いである。柱穴の形態は、直径35cm～50cmの円形・長さ50cmの方形・長さ70cmの長方形ぎみの形態等様々である。深さは、15cm～45cmあるが、30cm～40cm程度のものが主体的である。覆土は、B軽石・ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を主体としている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と考えられる。

3．井　戸　跡

第1号井戸跡（第307図）

A地点の調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第7号住居跡と第8号住居跡を切っている。本井戸跡の内部や周囲にはピットが比較的多く見られるが、本井戸跡との関係は不明である。井戸掘り方の平面形は、不整円形を呈している。規模は、北西から南東方向が2.14m、南西から北東方向が2.02mを測る。深さは、井戸底面まで完掘できなかったため不明であるが、おそらく2m近くはあるものと思われる。断面の形態は、深さ50cmまでの上半部は緩やかに傾斜し、そこから下半は直径90cmの筒状に深く落ち込んでいる。井戸内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。本井戸跡の時期は、覆土中より古墳時代の土器片が少量出土しているが、覆土にはB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。

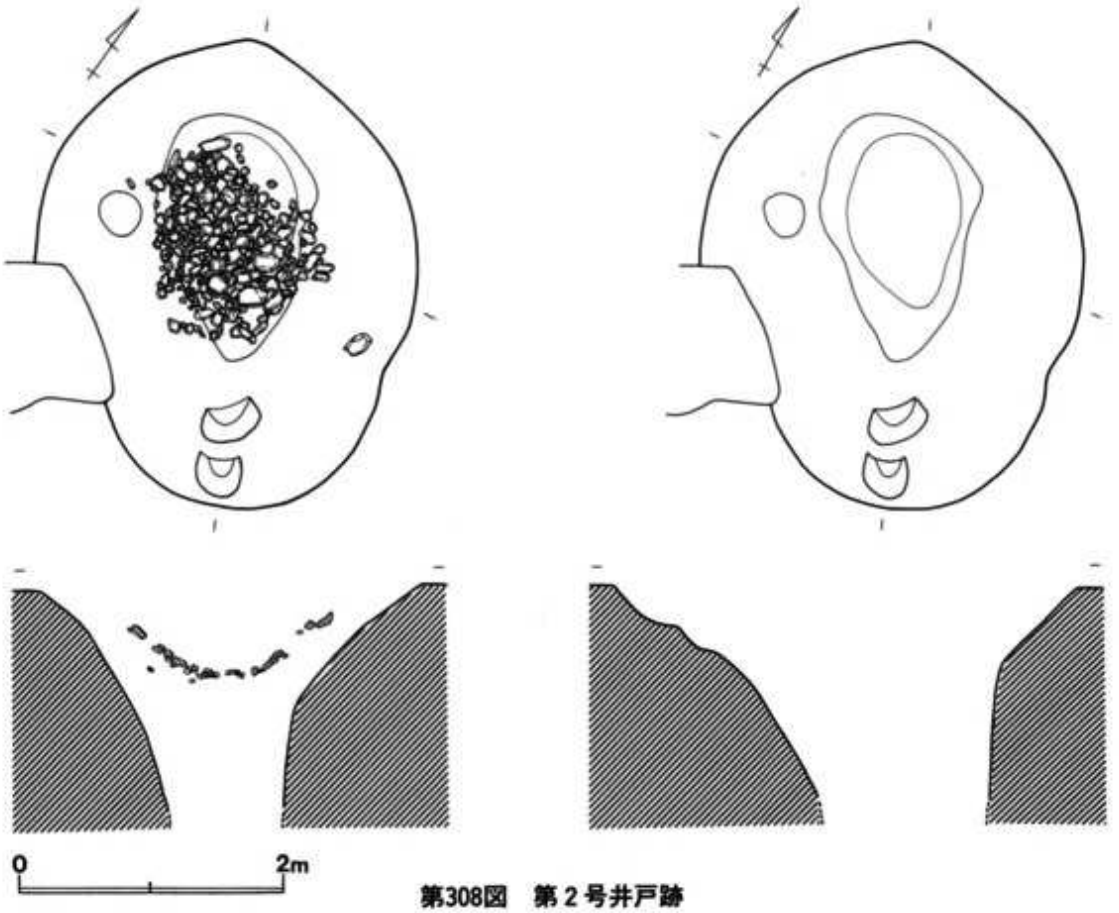


第307図　第1号井戸跡

第2号井戸跡（第308図）

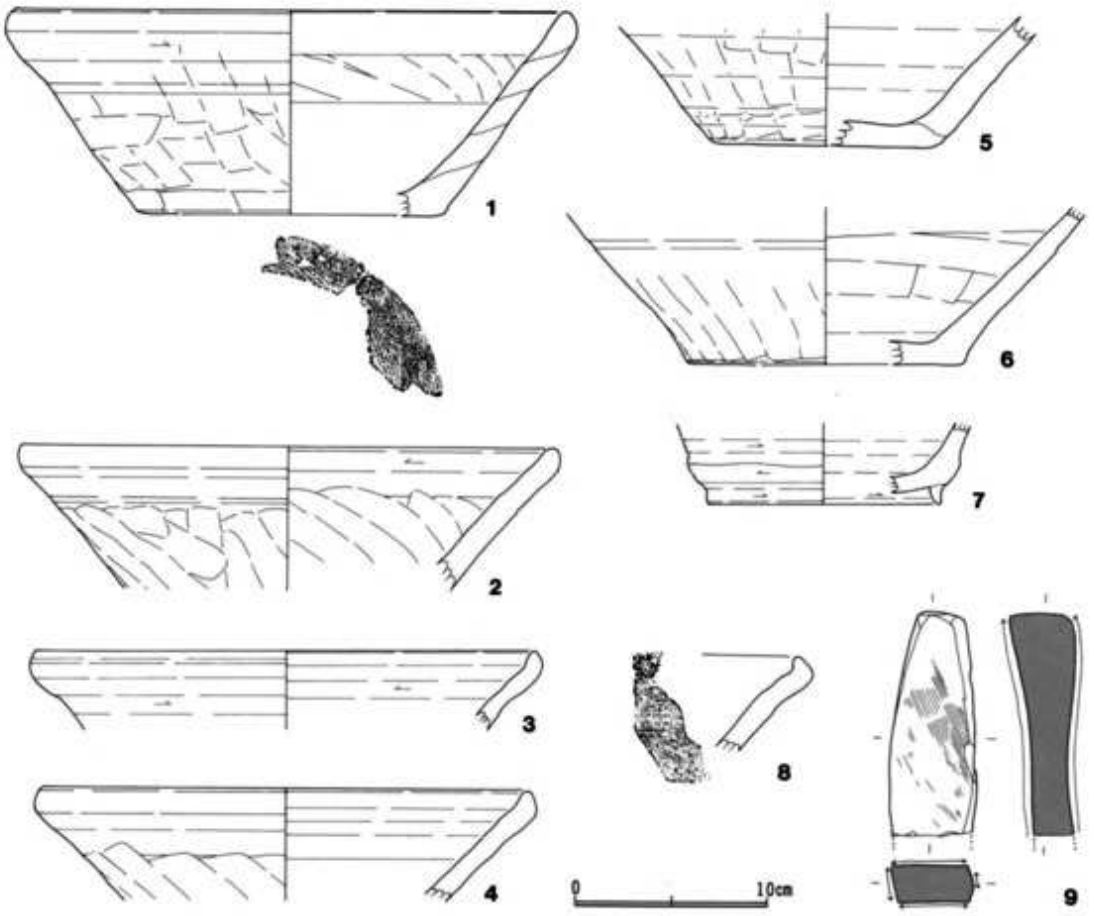
A地点の調査区北西側に位置し、重複する第12号住居跡を切り、第4号溝跡に切られている。本井戸跡の周囲には、ピットはあまり見られない。

井戸掘り方の平面形は、北西から南東方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、北西から南東方向が3.62m、北東から南西方向が2.92mを測り、比較的規模の大きな井戸である。深さ



第308図　第２号井戸跡

は、井戸底面まで完掘できなかったため不明であるが、２m以上はあるものと思われる。断面の形態は、深さ1.90mまでの上半部は緩やかに傾斜し、そこから長さ1.90m×1.20mの楕円形ぎみ形態を呈する筒状に深く落ち込んでいる。上半部の南東側壁面には、小さなテラス状の掘り込みが２箇所縦に並んでおり、階段のようになっている。井戸内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。本井戸跡の覆土上半には、覆土の窪みに沿って面的に多くの石が堆積している部分がある。これらの石には、焼けて赤色化しているものや煤が付着しているものが多く見られることから、石の上面で火を焚いたことが伺える。これらの石の上面には馬歯や在地産の鉢の破片などが投げ込まれており、何だかの祭祀行為のための施設の跡と考えられる。遺物は、覆土上半の石敷遺構から出土したものがほとんどで、馬歯や鉢の他に常滑窯系大甕の破片や山茶碗窯系鉢の破片と砥石の破片が出土している。これらの出土遺物には、二次焼成を受けたものがなく、覆土中で火を焚いた後に投げ込まれたものと推測される。この他には、覆土中から古墳時代後期の鬼高式土器の破片が比較的多く混入して出土している。本井戸跡の時期は、出土遺物から見て中世の所産と考えられる。



第309図　第２号井戸跡出土遺物

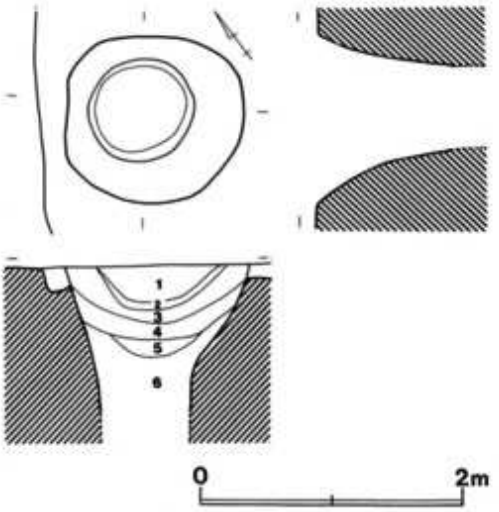
第２号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径(28.4) 器高 10.6 底径(16.0)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾ぎみに開き、口唇部は丸みをもつ。体部は直線的で、底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面雑なナデ、内面ナデ。底部外面回転糸切り、内面丁寧なナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡灰色 肉－淡茶褐色	1/4。底部外面外周は摩滅している。体部内面下半は良く(薄れている。在地産。覆土中。
2	鉢	口縁部径 (27.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は丸みをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰白色	口縁部1/3。 在地産。 覆土中。
3	鉢	口縁部径 (25.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口唇部は短く立ち、外面に狭い平坦面をもつ。	内外面ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色	口縁部1/4。 須恵質。在地産。 覆土中。
4	鉢	口縁部径 (25.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口唇部は上方に肥厚し、外面はやや丸みをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－黒灰色 肉－淡灰褐色	口縁部1/6。 在地産。 覆土中。
5	鉢	底部径 (12.0cm)	粘土紐積み上げ成形。体部はやや外反ぎみに開き、底部は平底を呈する。	体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－黒灰色 内－淡灰褐色	底部1/4。 在地産。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	常滑窯系 甕	底部径 (14.4cm)	粘土紐積み上げ成形。胴部はやや大きく開き、底部は平底を呈する。	胴部内外面上半ヨコナデ、下半篦ナデ。底部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－暗茶褐色 内－暗灰色 肉－黒灰色	底部1/4。 覆土中。
7	山茶椀窯系 鉢	高台径 (12.0cm)	高台部貼り付け。高台は断面三角形を呈し、低く薄い。	体部外面回転ナデ・下端ケズリ、内面回転ナデ。高台部回転ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡灰白色	底部1/4。 覆土中。
8	鉢		粘土紐積み上げ成形。口唇部は平坦面をもち、内側は若干突出する。	内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰色	破片。 在地産。 覆土中。
9	砥石	残存長 11.5 残存幅 4.5 厚さ 3.4	形態は先端部に向かって細くなる柱状を呈し、表裏面中央は窪んでいる。	表裏面・両側面ともよく擦れている。	凝灰岩	約2/3。 重さ215g 覆土中。

第3号井戸跡（第310図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第28号住居跡を切っている。井戸掘り方の平面形は、1.38m×1.28mの不整円形を呈している。深さは、井戸底面まで完掘できなかったため不明であるが、1.50m以上はあるものと思われる。断面の形態は、上半がやや傾斜して落ち込み、下半は直径80cmの円形を呈し、壁は垂直ぎみで筒状に深くなっている。井戸内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。本井戸跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土にB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。



第310図　第3号井戸跡

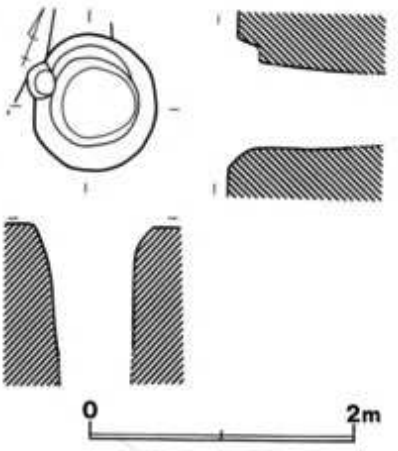
第3号井戸跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：暗灰褐色土層（B軽石・灰白色粘土ブロックを均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗灰褐色土層（B軽石・灰白色粘土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：黒灰色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗灰色砂層（砂を主体とする。粘性・しまりともない。）
第6層：黒灰色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

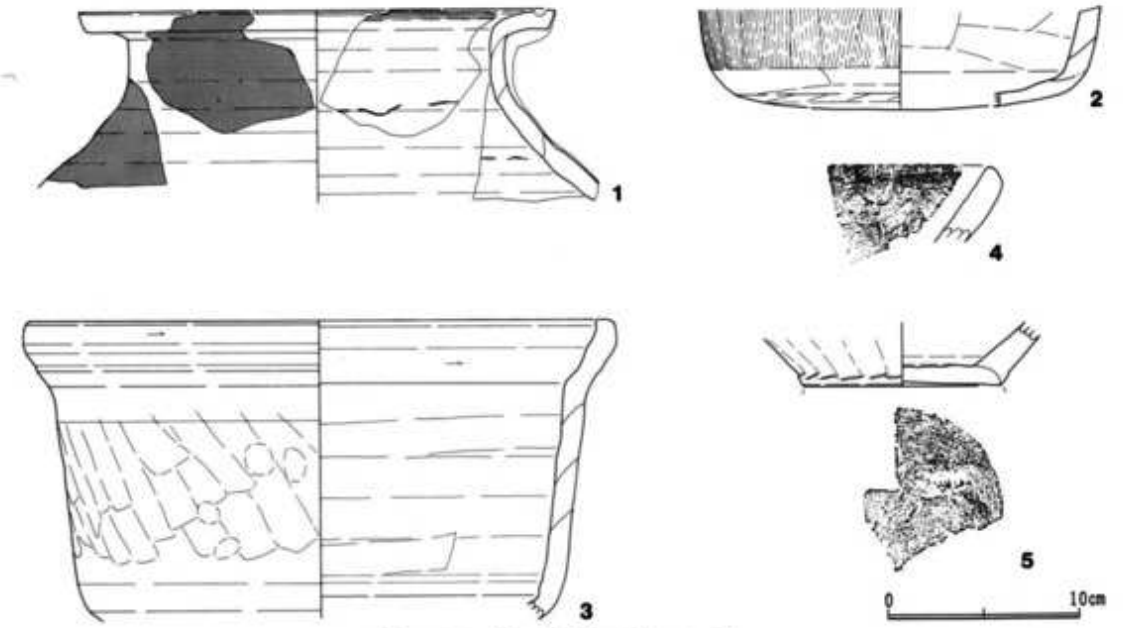
第４号井戸跡（第311図）

Ａ地点の調査区東側に位置し、重複する第33号住居跡を切り、第７号溝跡に切られている。

井戸掘り方の平面形は、1.04m×0.94mの円形に近い形態を呈している。深さは、井戸底面まで完掘できなかったため不明であるが、１m以上はあるものと思われる。断面の形態は、上半がやや傾斜して緩やかに落ち込み、下半は直径70cmの円形を呈し、壁は垂直ぎみで筒状に深くなっている。井戸内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。遺物は、覆土中より常滑窯系甕の破片とともに、在地産の内耳鍋や鉢の破片が出土している。本井戸跡の時期は、出土遺物から中世の所産と考えられる。



第311図　第４号井戸跡

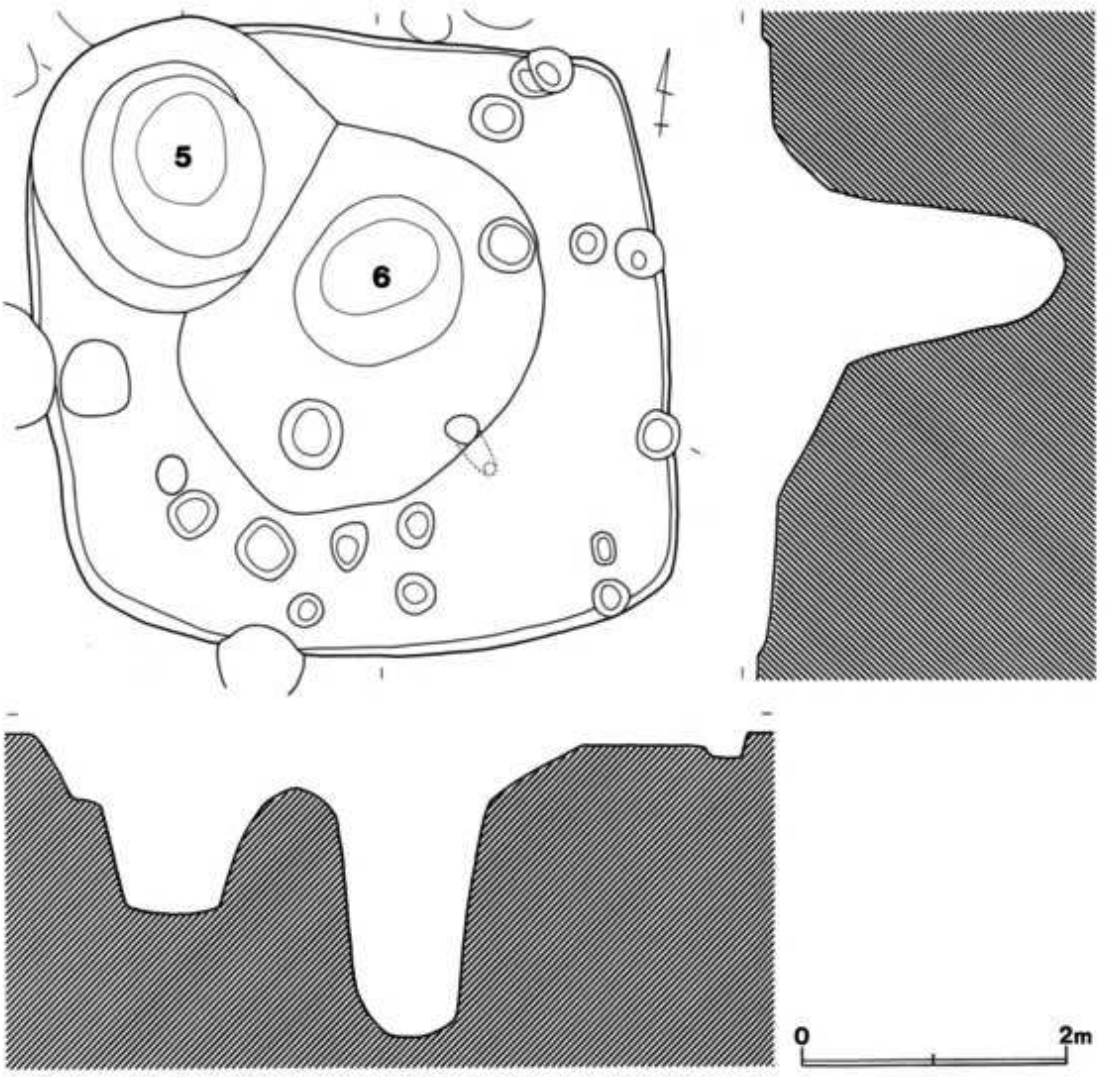


第312図　第４号井戸跡出土遺物

第４号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	常滑窯系甕	口縁部径（24.6cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部は水平に開く。口唇部は平坦面をもち、内側に沈線を施す。頸部は立つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。口縁部外面に淡黄白色釉、胴部外面に淡緑色釉がかかる。	淡橙褐色粒 外－淡黄白色 内－暗茶褐色 肉－淡灰色	破片。 口縁部外面の釉は、火熱により発泡している。 覆土中。
2	内耳鍋	底部径（17.0cm）	粘土紐積み上げ成形。胴部は厚く、底部との境は丸みをもつ。	胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	底部1/4。在地産。 底部外面に砂付着。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	内耳鍋	口径(30.2) 残器高 15.5 底径(24.0)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部に平坦面をもつ。胴部は直線的で、底部との境は丸みをもつ。器肉は厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヨコナデの後雑なナデ、内面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 内外－黒灰色 肉－淡褐色	1/4。 在地産。 外面煤の付着顕著。 覆土中。
4	鉢		粘土紐積み上げ成形。口唇部外面は丸みをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡灰褐色	破片。 覆土中。
5	鉢	底部径 (10.4cm)	ロクロ上での粘土紐積み上げ成形。底部は若干突出した平底で、比較的薄い。	体部外面篦ナデ、内面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 外－暗褐色 内－明茶褐色	底部1/4。 在地産。 覆土中。



第313図　第5・6号井戸跡

第5号井戸跡（第313図）

A地点の調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第6号井戸跡を切り、北側を近世後半以降の方形を呈する土壙に切られている。

井戸掘り方の平面形は、2.26m×2.34mの不整円形を呈している。深さは、比較的浅い1.40mを測る。断面の形態は、上半が緩やかに傾斜し、中位にテラス状の段をもつ。下半は1.42m×1.17mの楕円形を呈し、壁は急傾斜している。底面は広く平坦な円形を呈している。井戸内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。本井戸跡の時期は、覆土中より古墳時代後期の土器片が比較的多く出土しているが、覆土にはB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。

第6号井戸跡（第313図）

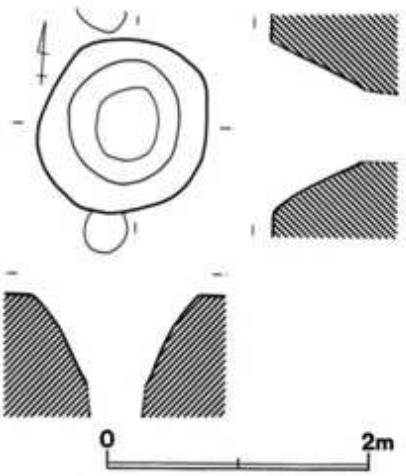
A地点の調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第8号掘立柱建物跡を切り、第5号井戸跡と第35号土壙に切られている。

本井戸跡は、4.80m×4.90mのコーナー部の丸みが強い方形を呈する浅い掘り込みの中央に、直径2.90mの不整円形を呈する井筒をもっている。上面の方形を呈する掘り込みは、深さが10cm程度の浅いもので、壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は比較的平坦でやや軟弱である。内部にはピットが比較的多く見られるが、それらの性格は不明である。井筒は、上半部はかなり緩やかな皿状の傾斜であるが、中位では1.42m×1.17mの楕円形を呈し、筒状に急傾斜している。深さは、2.34mと深く、底面は平坦ではなく丸底である。覆土は、上面の方形を呈する掘り込み部分が、B軽石を多量に含む淡灰褐色土で、井筒内は粘土層と砂層が互層をなしていた。井筒内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。本井戸跡の時期は、覆土中より古墳時代後期の土器片が比較的多く出土しているが、覆土にはB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。

第7号井戸跡（第314図）

A地点の調査区南端に位置する。本井戸跡の周囲には、ピットが比較的多く見られるが、本井戸跡との関係は不明である。

井戸掘り方の平面形は、1.34m×1.30mの不整円形を呈している。深さは、井戸底面まで完掘できなかったため不明であるが、1m以上はあるものと思われる。断面の形態は、上半がやや緩やかに傾斜して落ち込み、下半は直径50cmの円形を呈し、筒状に急傾斜して深くなるものと思われる。井戸内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。本井戸跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土にB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。

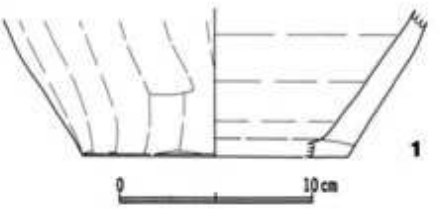


第314図　第7号井戸跡

第8号井戸跡（第316図）

A地点の調査区中央部の南側に位置し、重複する第47号住居跡を切っている。本井戸跡の周囲には、ピットが比較的多く見られるが、本井戸跡との関係は不明である。

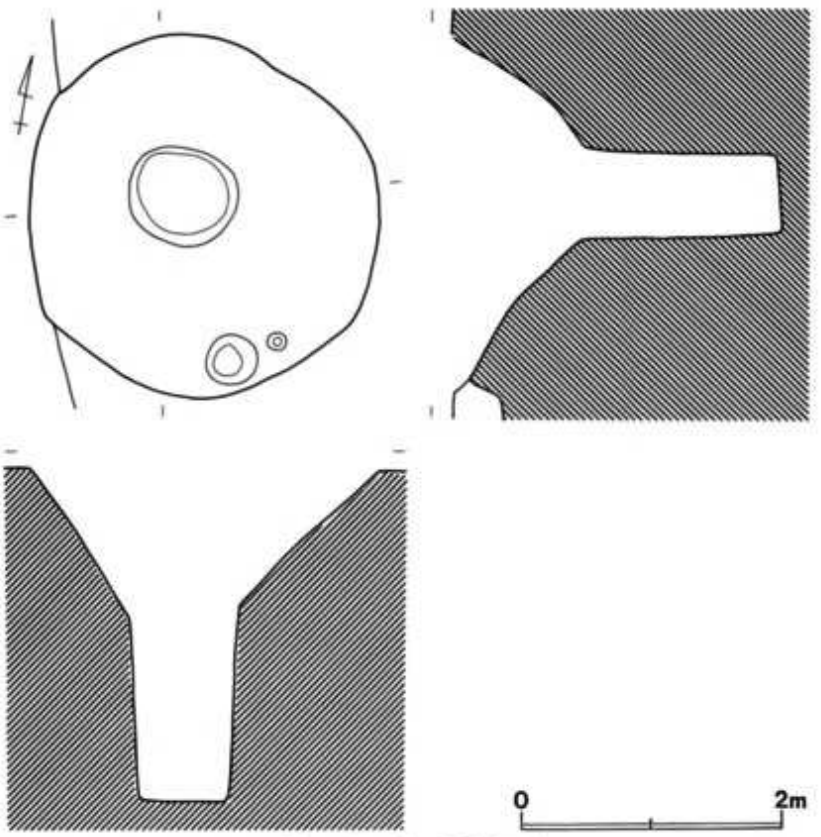
井戸掘り方の平面形は、2.82m×2.72mの不整円形を呈している。深さは、2.58mで比較的深い。断面は、漏斗状の形態に似ており、上半がやや緩やかに傾斜して落ち込み、下半は直径85cm×80cmの円形を呈し、筒状に深くなっている。井戸内には木枠や石組みの痕跡が認められないことから、素掘りの井戸であったと推測される。遺物は、覆土中から常滑窯系の甕の破片が出土しただけである。本井戸跡の時期は、出土遺物や覆土にB軽石を含むことから、中世の所産と考えられる。



第315図　第8号井戸跡出土遺物

第8号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	常滑窯系 甕	底部径 (13.8cm)	粘土紐積み上げ成形。底部は平底で、比較的薄い。	胴部外面篦ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。	白色粒 外－淡茶褐色 内－暗茶褐色	底部1/5。 覆土中。



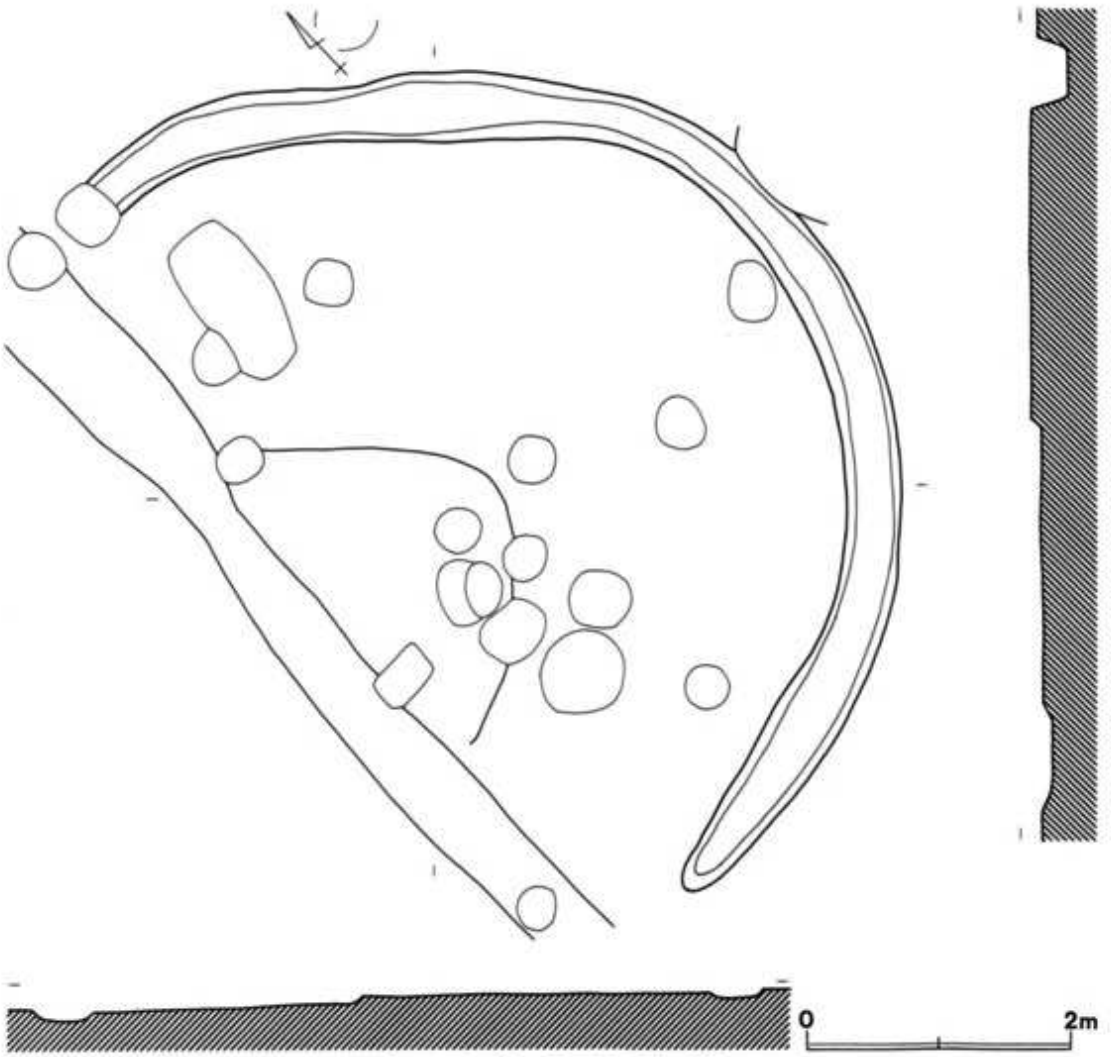
第316図　第8号井戸跡

4．円形周溝遺構

第1号円形周溝遺構（第317図）

A地点の調査区西端に位置し、重複する第11号住居跡に切られている。第13号住居跡や第3号掘立柱建物跡とも重複しているが、遺構の切り合いがないため、相互の新旧関係は不明である。

平面形は、東側半分しか残存していないため明確ではないが、一部直線的な部分も見られることから、正円ではなく胴張隅丸方形に近い形態であったようにも思える。規模は、南北方向が7.20m、東西方向は4.16mまで測れる。周溝は、幅が40cm～50cmの比較的均一な形態で、深さは最高で28cmある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は幅広く平坦をなしている。覆土は、焼土粒子や炭化粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中より古墳時代前期の土器片が少量出土しただけである。本遺構の時期は、覆土が他の円形周溝遺構と異なることや、遺物が少量ながら単一時期のものであることから、古墳時代前期に溯る可能性が高いと考えられる。

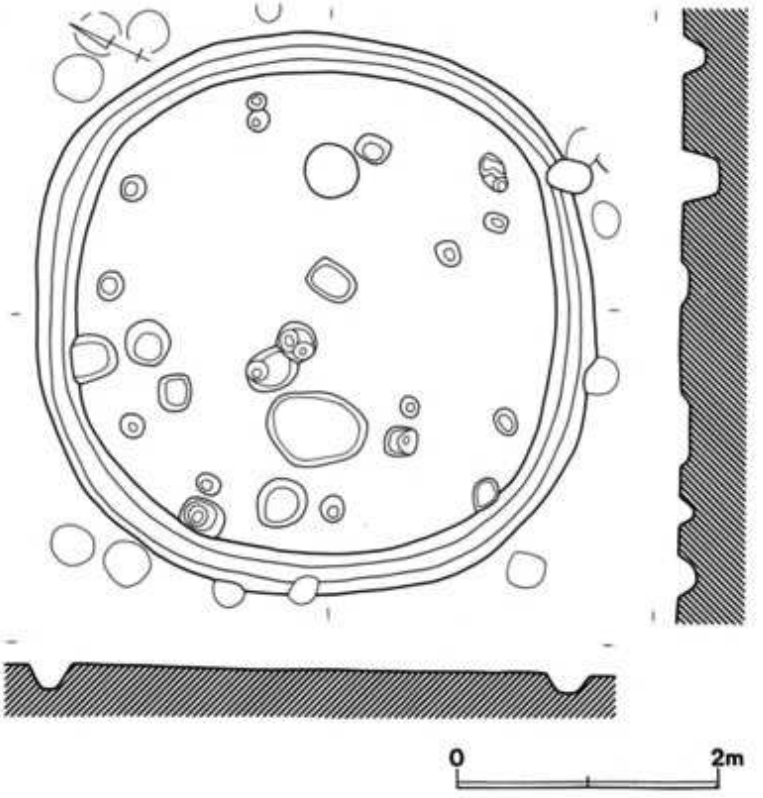


第317図　第1号円形周溝遺構

第２号円形周溝遺構（第318図）

Ａ地点の調査区中央部の南側寄りに位置し、重複する第11号掘立柱建物跡に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良い。

平面形は、比較的整った円形を呈している。規模は、北西から南東方向が4.30m、北東から南西方向が4.33mを測る。周溝は、幅が30cm程度の比較的均一な形態で、深さは最高で18cmある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は平坦をなしている。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、古墳時代後期の鬼高式土器の破片が少量出土しただけである。本遺構の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古墳時代後期の所産と考えられる。

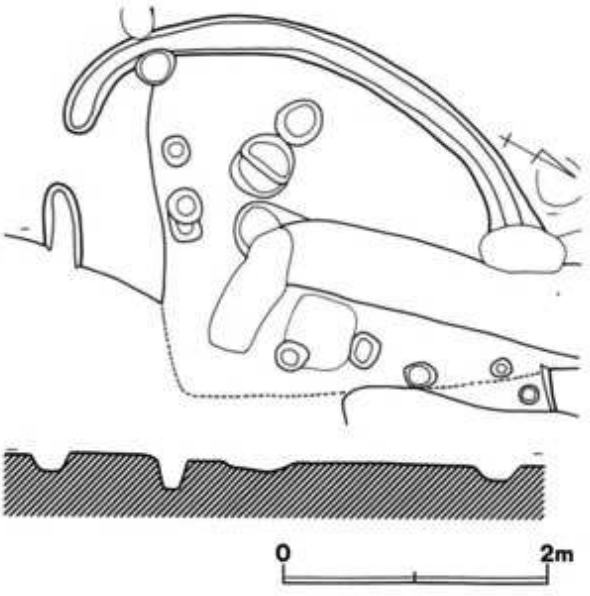


第318図　第２号円形周溝遺構

第３号円形周溝遺構（第319図）

Ａ地点の調査区東側に位置し、重複する第30号住居跡を切り、第７号溝跡と南北方向に向く溝状土壙に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、西側半分しか残存していないため明確ではないが、やや歪んだ不整の円形を呈していたようである。規模は、南北方向が約3.90m、東西方向は2.50mまで測れる。周溝は、幅が25cm～30cmの比較的均一な形態で、深さは15cm程度ある。壁は、やや緩やかに内湾しながら立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。本遺壙の時期は、覆土の状態から古墳時代後期の所産と思われる。



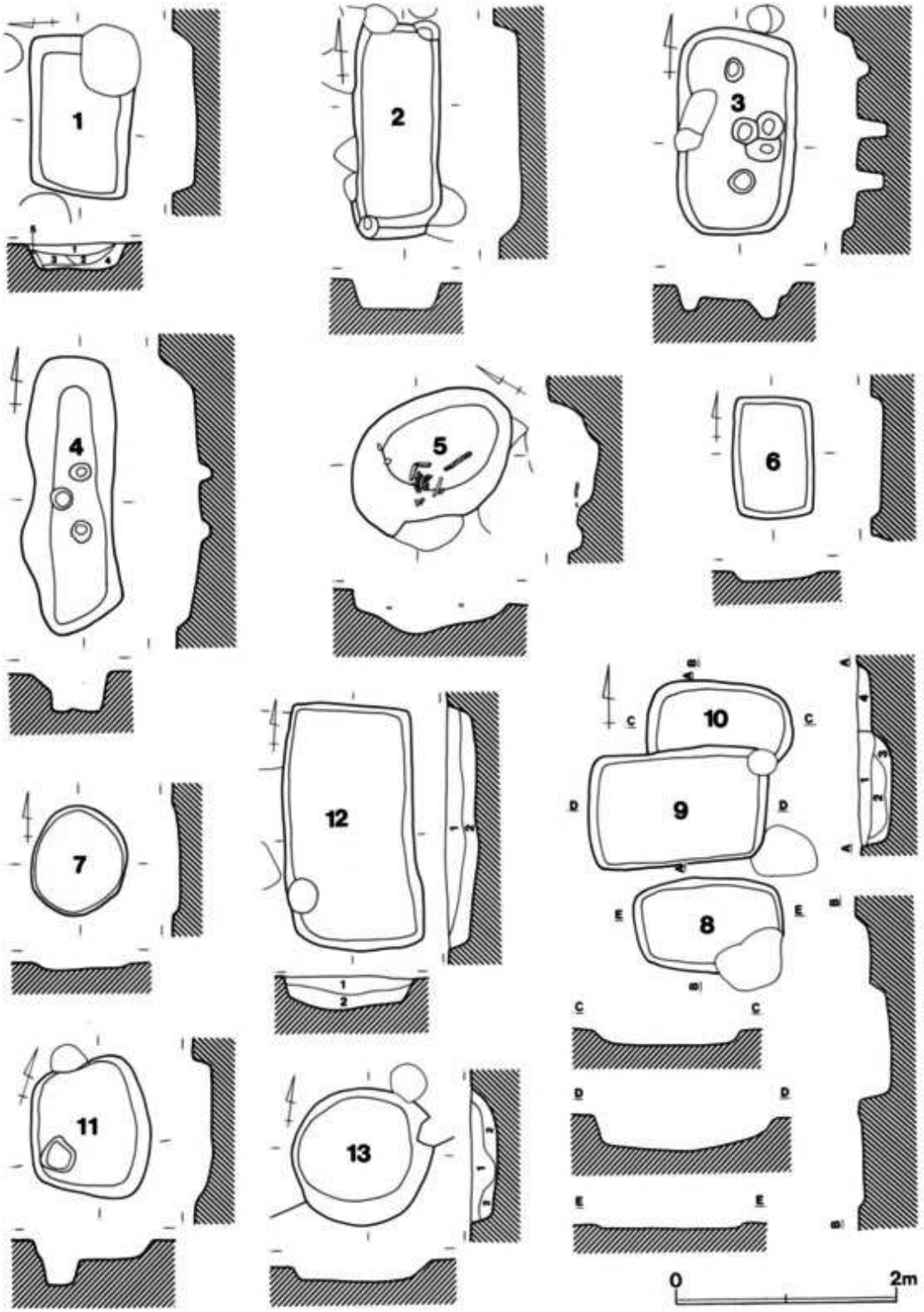
第319図　第３号円形周溝遺構

5．土　壙

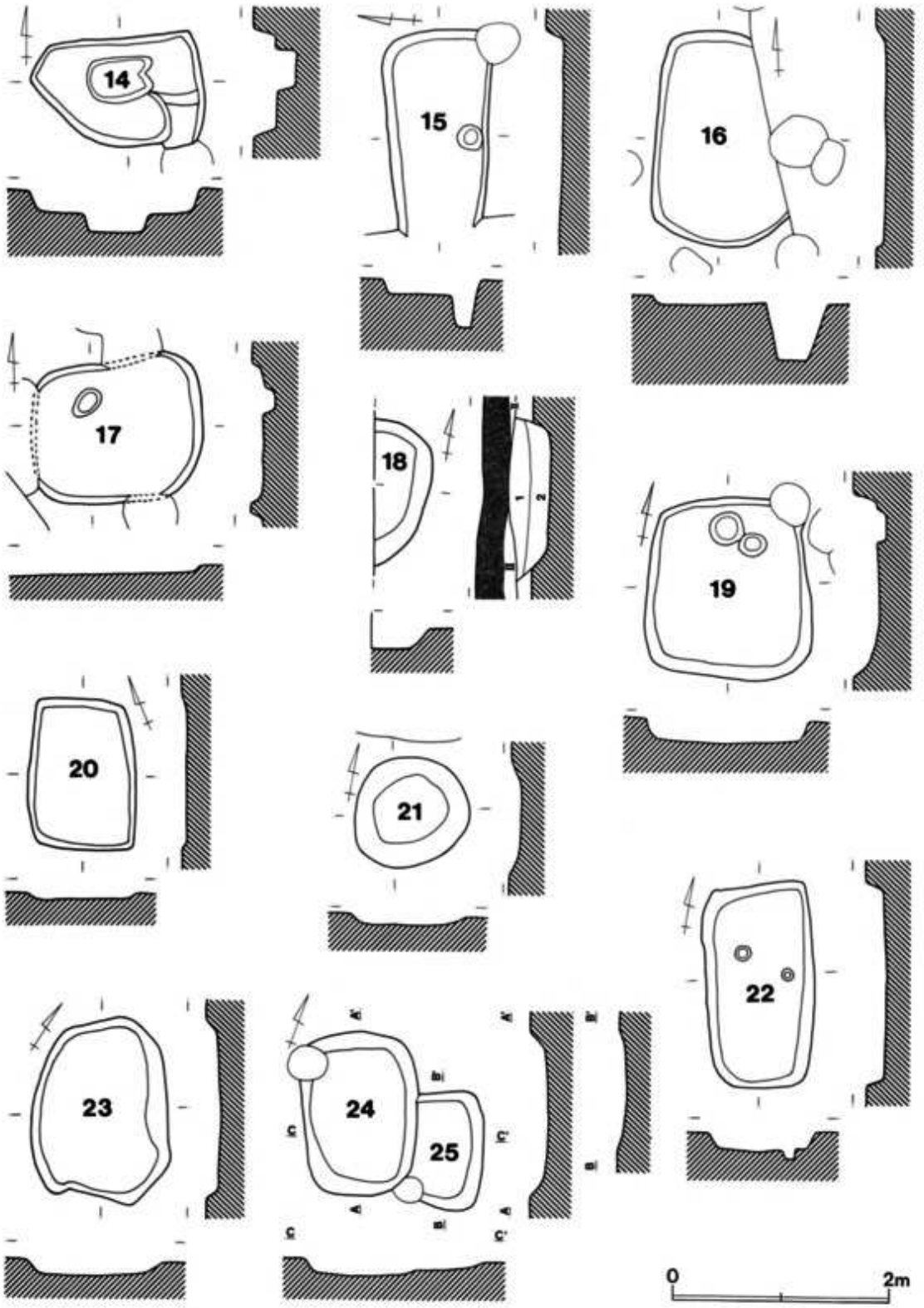
土壙は、調査区内で多数検出されているが、いずれも中世以降のもので、古代以前に溯るものはない。形態は、一般的な円形・方形・長方形を基調にするものと、東西あるいは南北方向に向く細長い溝状のもの（溝状土壙）がある。いずれも出土遺物がほとんどなく、その厳密な時期や性格が分かるものは少ないが、第５号土壙からは第２号井戸跡とともに馬の歯や骨粉が出土している。なお、溝状土壙以外の番号の付いていない土壙は、覆土中にＡ軽石を含む近世後半以降のものである。

土壙一覧表

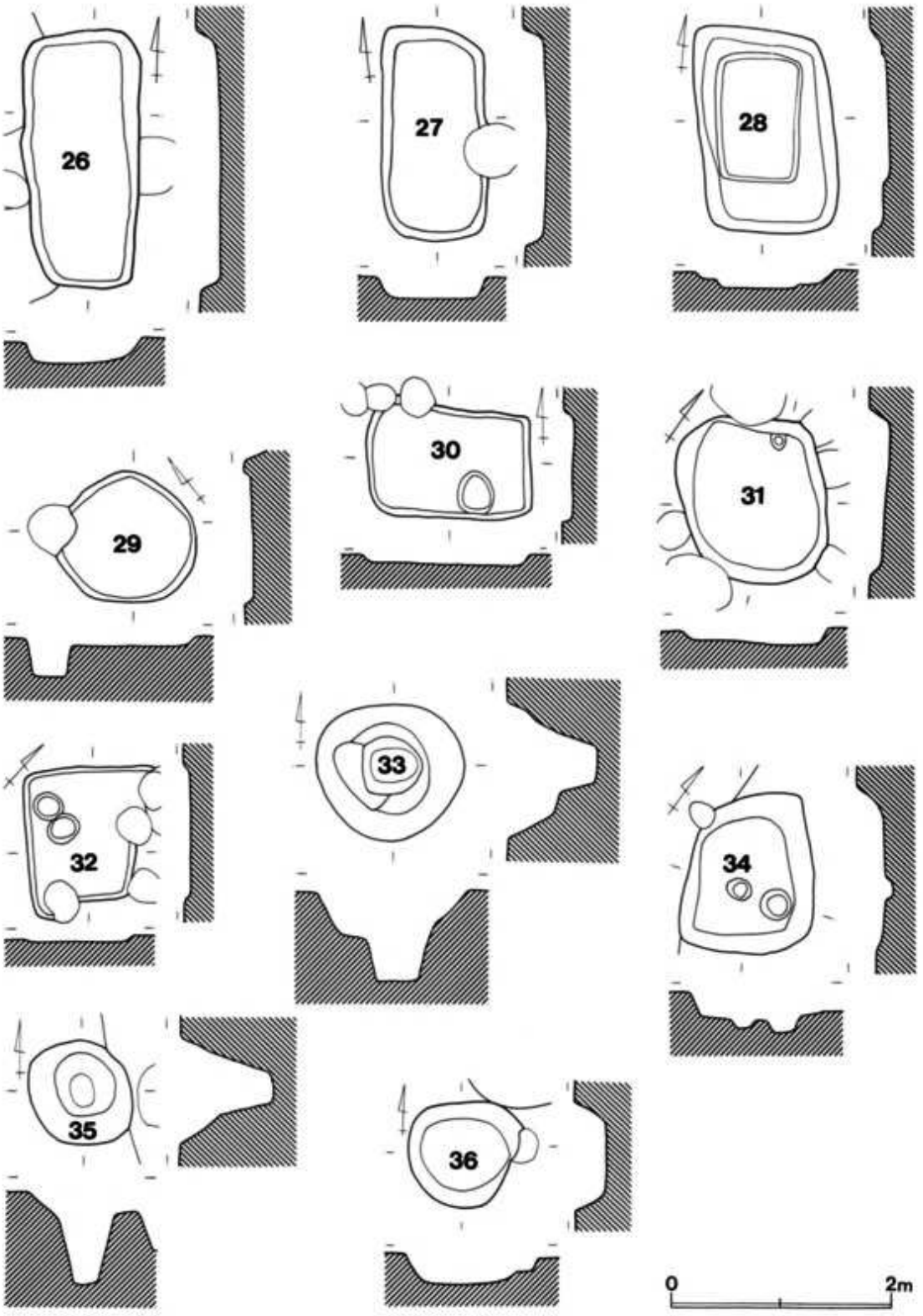
土壙番号	形　態	規模(m)	深さ(cm)	出土遺物	備　考
１号土壙	長方形	1.50 × 0.96	22	な　し	南東側コーナー部をピットに切られる。
２号土壙	長方形	2.00 × 0.82	28	な　し	第２号住居跡を切る。
３号土壙	隅丸長方形	1.94 × 1.10	46	な　し	第３号溝跡に切られる。
４号土壙	不整長方形	2.60 × 0.88	36	な　し	第２号溝跡に切られる。
５号土壙	楕円形	1.42 × 1.20	44	馬歯・骨粉	第16号住居跡を切る。
６号土壙	長方形	1.14 × 0.74	12	な　し	
７号土壙	不整円形	1.02 × 0.90	6	な　し	
８号土壙	不整長方形	1.40 × 0.88	4	な　し	
９号土壙	長方形	1.66 × 1.06	28	な　し	第10号土壙を切る。近世後半以降。
10号土壙	隅丸長方形	1.38 ×(0.60)	12	な　し	第９号土壙に切られる。
11号土壙	不整長方形	1.32 × 1.10	16	な　し	第15号掘立柱建物跡と重複している。
12号土壙	長方形	2.30 × 1.28	32	龍泉窯系青磁碗	第18号住居跡を切る。
13号土壙	円　形	1.32 × 1.28	24	な　し	第19号住居跡を切る。
14号土壙	不整形	1.60 × 1.00	42	な　し	
15号土壙	不整長方形	(1.94)× 1.02	16	な　し	最近の溝に切られる。
16号土壙	隅丸長方形	2.02 ×(1.28)	10	な　し	第20号住居跡・第36号住居跡を切る。
17号土壙	隅丸長方形	(1.40)×(1.34)	10	な　し	第36号住居跡を切る。
18号土壙	不　明	(1.38)×(0.46)	20	な　し	第23号住居跡を切る。
19号土壙	長方形	1.70 × 1.56	22	な　し	
20号土壙	長方形	1.40 × 1.02	8	な　し	
21号土壙	不整円形	1.08 × 1.02	10	な　し	
22号土壙	隅丸長方形	1.92 × 1.03	16	な　し	
23号土壙	不整形	1.72 × 1.30	16	な　し	
24号土壙	隅丸長方形	1.54 × 1.12	20	な　し	第25号土壙を切る。
25号土壙	隅丸長方形	1.12 ×(0.70)	20	な　し	第24号土壙を切っている。
26号土壙	隅丸長方形	2.40 × 1.10	24	な　し	第27号住居跡を切り、溝状土壙に切られる
27号土壙	隅丸長方形	1.96 × 0.98	22	な　し	
28号土壙	長方形	1.88 × 1.26	18	な　し	２基入れ子状に重複している。
29号土壙	不整円形	1.30 × 1.20	12	な　し	第28号住居跡を切る。
30号土壙	長方形	1.52 × 1.12	10	な　し	第37号住居跡を切る。
31号土壙	隅丸長方形	1.52 × 1.38	20	な　し	第15号掘立柱建物跡を切る。
32号土壙	不整長方形	1.24 ×(1.00)	6	な　し	
33号土壙	不整円形	1.40 × 1.26	84	な　し	第７号溝跡に切られる。
34号土壙	不整長方形	1.50 × 1.24	24	な　し	第49号住居跡を切る。
35号土壙	不整円形	0.96 × 0.96	86	な　し	第６号井戸跡を切る。
36号土壙	不整円形	1.04 × 0.98	32	龍泉窯系青磁碗	第19号住居跡を切る。



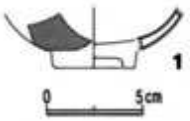
第320図　土　　壙(1)



第321図　土　　壙(2)



第322図　土　　壙(3)



第323図　第12号土壙
出土遺物

第324図　第36号土壙
出土遺物

第12号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	龍泉窯系 青磁碗		ロクロ成形。体部は内湾しながら開く。	体部内外面とも無文で、淡青灰色釉を施す。	白色粒 内外－淡青灰色	破片。 覆土中。

第36号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	龍泉窯系 青磁碗		ロクロ成形。体部は内湾しながら開く。	体部内外面回転ナデの後、淡緑色釉を施す。内面に草花文を施す。	白色粒 内外－淡緑色 肉－淡灰色	破片。 覆土中。

第１号土壙土層説明

第１層：黒褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（A軽石を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（A軽石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する）。
第４層：黒褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第９・10号土壙土層説明

＜第９号土壙＞
第１層：暗褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗茶褐色土層（ロームブロックを多量に、A軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（A軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
＜第10号土壙＞
第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、A軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第12号土壙土層説明

第１層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（B第２層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第13号土壙土層説明

第１層：暗褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第18号土壙土層説明

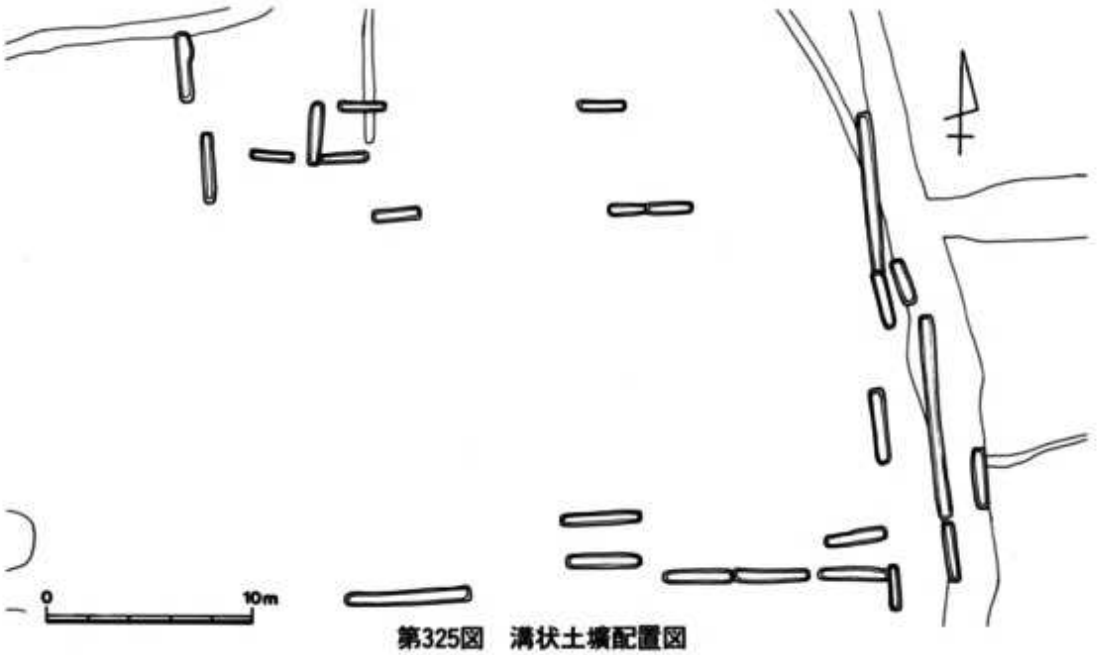
第１層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（ローム粒子・B軽石を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

6．溝状土壙（第325図）

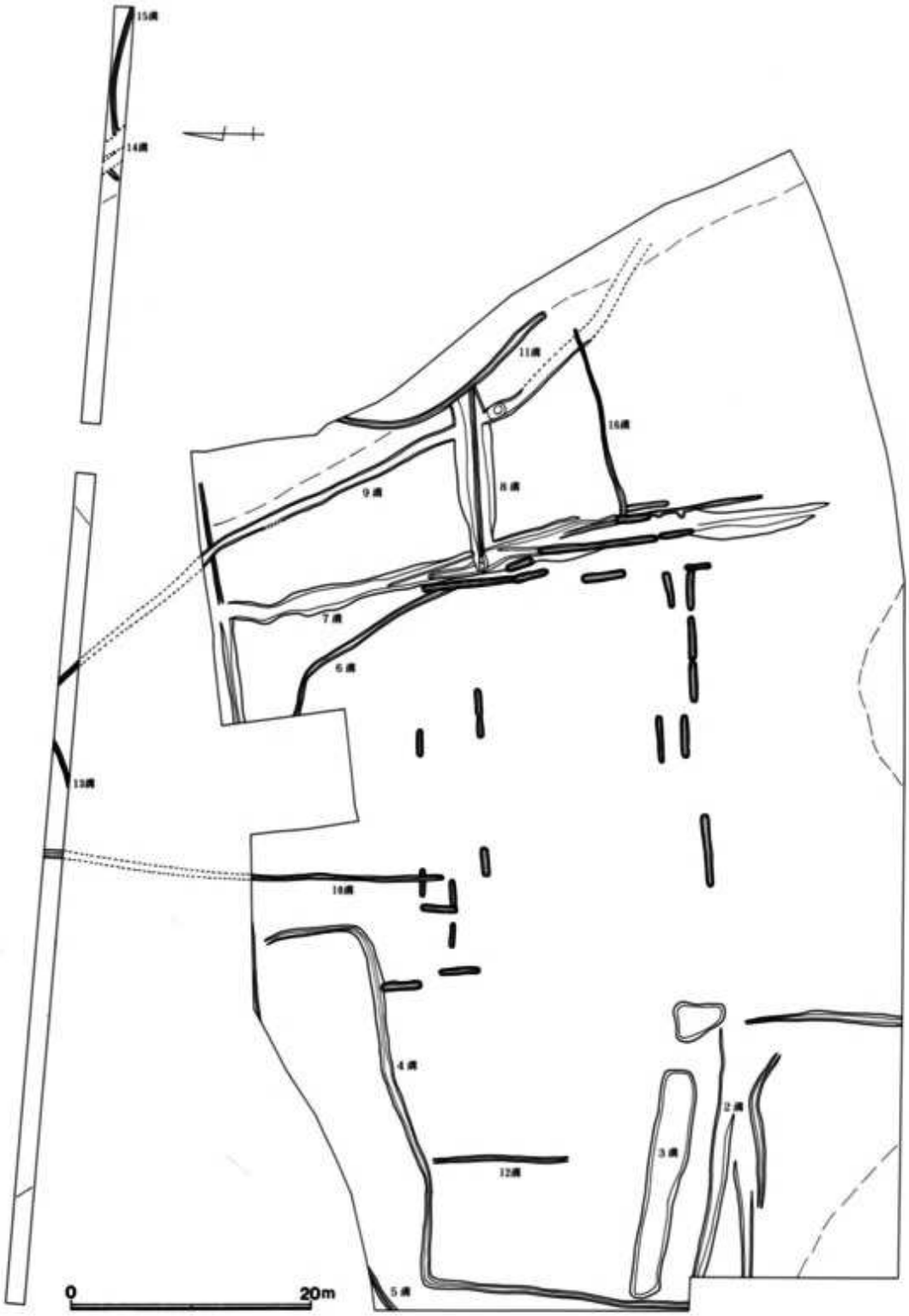
溝状土壙は、A地点の調査区中央部の広範囲に２５基存在し、重複する中世以前の遺構をすべて切っている。一部土壙同志で重複しているが、いずれも土壙の端部を相互に接する程度の類似した重複形態であり、明確に新旧関係が捉らえられないことからも、あまり時間差はないと思われる。

形態は、長さが最低２m～最高10m、幅が40cm～60cmの比較的均一で整った非常に細長い長方形を呈し、コーナー部はやや丸みをもっている。深さは、浅いものが15cm程度、深いものは40cmある。底面は、比較的広く平坦であるが、若干細かな凹凸が見られる。覆土は、B軽石やローム粒子を含む暗灰褐色土～黒灰褐色土で、覆土の埋没は自然堆積を示す。遺物は、重複する住居跡から混入したと考えられる古墳時代の土器片が少量出土しているだけである。時期は、土壙に伴うと考えられる遺物がないため明確ではないが、覆土の状態や他の遺構との重複関係から、本遺跡の中世屋敷が廃絶された後の、中世後半(15世紀後半)～近世前半頃の所産と推測される。

これらの直線的な溝状を呈する土壙は、その長軸を東西方向と南北方向に合わせて、東西・南北両方向ともそれぞれ直線上に列状に並び、部分的に２～３列併走した配列をとっている。その配置は、東西約35m・南北約24mの長方形に囲繞して土地を区画するような形態であるが、連続的な配列ではなく、不規則に並列する箇所も見られることから、溝状土壙自体には区画的性格はなく、おそらく畦や浅い小溝等による一次的な区画に沿って配置されたものと推測される。また、この溝状土壙によって囲まれた範囲内には、明確な建物跡が見られないことから、屋敷地の区画とは異なるようであるが、この溝状土壙が沿う区画は、後に第７号溝跡が重複して掘削されたり、東西方向の両延長上に第２号溝跡や第３号溝跡及び第８号溝跡が見られるように、ほ場整備前の調査区の現地表面に見られた畑の区画の基礎になったものと思われる。



第325図　溝状土壙配置図



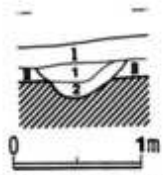
第326図　溝状土壙・溝跡配置図(中世以降)

7．溝　　跡（第326図）

溝跡は、A・B両地点で合わせて16条検出されている。大半は、覆土中にA軽石を含む近世後半以降のもので、現地表面の区画に関係するものが多いが、A軽石降下以前の近世前半以前のものが4条（第1・8・9・14号溝跡）検出されている。ここでは主にこの4条の溝跡について説明する。

第1号溝跡（第185図・第327図）

A地点の調査区南西端の小規模で浅い開析谷の縁に位置し、調査区内では等高線の方向に沿って、北西から南東方向に直線的な流路を取っている。形態は、上幅が約70cmの比較的均一な形態を呈し、深さは20cmある。断面は、底面が比較的広い逆台形である。遺物は、覆土中より鬼高式後半の甕・大形甑・坏等の破片が比較的多く出土している。時期は、覆土中にB軽石の混入が明確に見られないことや出土遺物から、本遺跡の古墳時代後期集落に伴う溝である可能性が高いと推測される。



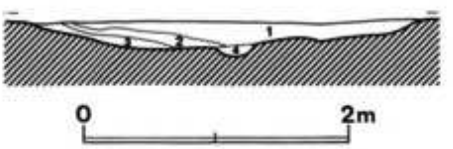
第327図　第1号溝跡土層断面図

第1号溝跡土層説明

第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）
第Ⅱ層：黒色土層（埋没土。）
第1層：暗灰褐色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒茶褐色土層（マンカン塊・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8号溝跡（第326図・第328図）

A地点の調査区東側に位置し、重複する第7号溝跡と第11号溝跡に切られ、第9号溝跡を切っている。流路は、第7号溝跡の真ん中から分岐してほぼ真東に直線的に延びているが、第11号溝跡より東側は耕作によってすでに削平されている。形態は、溝の上半が上幅約3mの比較的規模が大きく浅いなだらかな形態で、そのほぼ真ん中に幅30cm・深さ10cmの小規模な直線的な溝が見られる。この上半の規模が大きい溝は、A軽石を多量に含む近世後半以降の掘り返しによるもので、下半の小規模で直線的な溝が、A軽石降下以前に溯るものである。この小規模な溝は、排水路と考えられ、溝の底面は平坦で東に向かって傾斜しているが、第7号溝跡と重複する溝の西端部は丸く一段深くなっている。時期は、溝跡に伴う遺物がないため明確ではないが、本溝跡は西側の溝状土壙と同一線上に位置しており、その配列を規制する地割りとの関係が伺えることから、本遺跡の中世集落が廃絶された後の、中世後半（15世紀後半）以降の所産と推測される。



第328図　第8号溝跡土層断面図

第8号溝跡土層説明

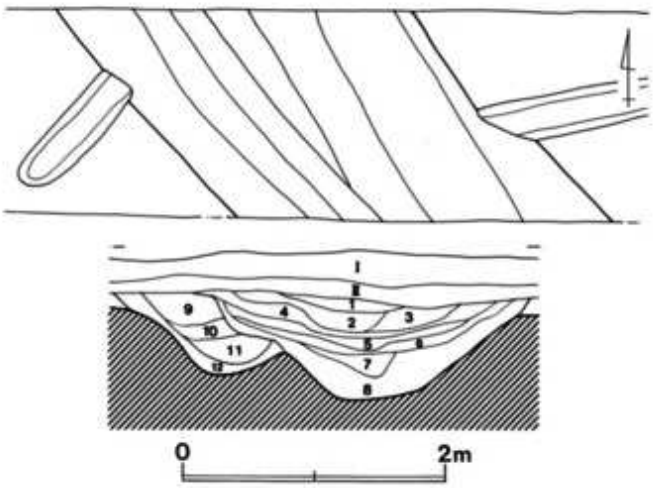
第1層：暗灰褐色土層（A軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黄灰褐色土層（A軽石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗灰褐色土層（A軽石・ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗灰色土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第９号溝跡（第326図）

Ａ地点の調査区東側からＢ地点の中央部にかけて位置し、重複する第５号溝跡・第８号溝跡・第16号溝跡に切られている。流路は、等高線に沿ってやや蛇行しながら北西から南東方向に向いているが、南端部はすでに耕作によって削平されている。規模は、溝の上幅が80cm～120cmで、南に向かって徐々に広くなっている。深さは10cm程度残存しており、底面は広く比較的平坦である。覆土は、Ｂ軽石を比較的多量に含む暗灰色土を主体にし、底面付近には部分的に細砂が薄く堆積している。時期は、溝跡に伴う遺物がないため明確ではないが、Ｂ軽石の混入が顕著であることから、中世の所産と思われる。

第14号溝跡（第329図）

Ｂ地点の東側に位置し、重複する第15号溝跡に切られている。本溝跡は、２条の溝が重複しており、東側の溝跡が西側の溝跡を切っている。調査区内ではいずれも地形の等高線の方向に沿って北西から南東方向に向いているようであり、掘り返しによる同一水路と思われる。新しい東側の溝跡は、上幅が約1.80m程度で、深さは80cmある。断面は、逆台形に近い形態で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は幅60cmと比較的広く平坦である。西側の溝跡は、溝の上幅がおそらく1.50m位はあったものと思われる。深さは65cmあり、新しい東側の溝跡よりもやや浅くなっている。断面は、東側の溝跡と同じく逆台形に近い形態であるが、底面はやや狭く丸みをもっている。覆土の観察では、いずれも同一流路で掘り返された可能性があり、比較的長期間にわたって維持管理されていたものと思われる。時期は、本溝跡に伴う遺物がないため明確ではないが、Ｂ軽石の混入が明確に見られないことから、中世以前の古代に溯る可能性もある。



第329図　第14号溝跡

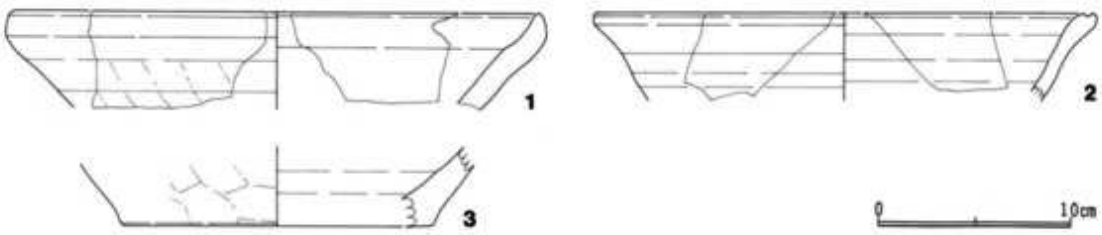
第14号溝跡土層説明

第１層：淡灰褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：淡灰褐色土層（鉄斑・砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：淡灰褐色土層（鉄斑を多量に、砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗灰色土層（砂を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：淡灰褐色土層（砂を均一に、鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：黒灰色土層（鉄斑・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：暗灰色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：淡灰褐色土層（鉄斑を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第９層：暗茶灰色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第10層：淡灰褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第11層：淡灰褐色土層（地山白色粘土ブロック・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第12層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

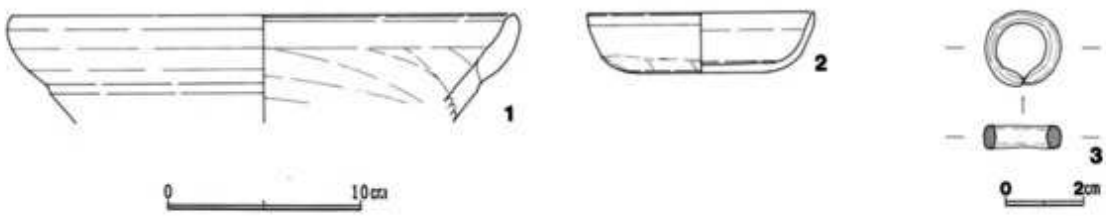
以上の個別に記述した4条の溝跡は、主に覆土の観察から近世前半以前(A軽石降下以前)の所産と考えられるもので、細かな時期のわかるものは少ないが、第1号溝跡は古墳時代後期の集落跡に、第9号溝跡は中世の集落に伴う可能性が高く、第14号溝跡は古代に溯る水路の可能性がある。これらのそれぞれ時期の異なる溝跡が、いずれも微地形条件に規制されて地形の等高線に沿った流路を取っていることは、本遺跡周辺に見られる条里形地割りとの関係で注意されよう。ちなみに、本遺跡周辺の条里形地割りを見ると、本遺跡の調査区の真ん中は、条里の南北方向の坪界線にあたるが、調査区内ではその坪界線に一致するような地割りの痕跡や溝跡はなく、本遺跡の1坪南側の条里坪内に位置する東田遺跡(本書第Ⅳ章)との地割りにおける様相の違いが注目されよう。

また、この他の近世後半以降(A軽石降下以後)の溝跡の中には、他の遺構との関係から見て、その掘削時期が中世に溯る可能性の高いものもある。それらは、中世後半から近世前半の所産と考えられる長方形の地割りに配置された溝状土壙の延長線上に位置する第3号溝跡と、南北方向の溝状土壙と重複し、第8号溝跡が分岐している第7号溝跡であり、特に第7号溝跡は数多くの掘り返しの痕跡が見られ、溝状土壙の廃絶後から比較的長期間継続的に存在した可能性が高い。この第3号溝跡と第7号溝跡からは、その掘削時期を示すものではないが、中世の遺物が覆土中に混入して出土しており、在地産の鉢や常滑窯系の甕及び山茶碗窯系の鉢の破片など(第330図、第331図)が見られる。また、第7号溝跡からは、中世の遺物や古墳時代の土器片の他に、銅地銀貼の耳環(第331図3)や、本遺跡では唯一の平安時代の土師器坏の破片(第331図2)が混入して出土している。この他の溝跡では、古墳時代前期や後期の土器片が少量混入して出土している程度のものがほとんどであるが、小規模で浅い最近の第10号溝跡では、覆土中に混入して中世以降と思われる産地不明の壺の胴部下半の破片が見られる(第332図)。

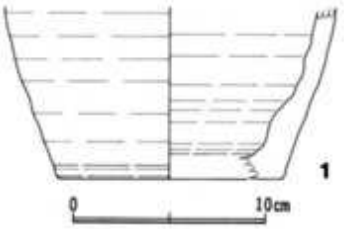
(恋河内昭彦)



第330図　第3号溝跡出土遺物



第331図　第7号溝跡出土遺物



第332図　第10号溝跡出土遺物

第3号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径 (27.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰褐色	口縁部1/6。 内面剥離顕著。在地産。 覆土中。
2	鉢	口縁部径 (26.0cm)	ロクロ成形。口唇部は肥厚して短く横に開き、内側に浅い沈線を施す。	口縁部内外面回転ナデ。	白色粒内 外－灰色	口縁部1/8。 東海系。 覆土中。
3	常滑窯系 甕	底部径 (16.2cm)	粘土紐積み上げ成形。底部は若干突出する。	胴部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。	白色粒 外－暗茶褐色 内－暗灰色	底部1/8。 覆土中。

第7号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径 (26.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡灰色	口縁部1/4。 覆土中。
2	坏	口径(11.8) 器高　3.1	口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は平底ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ、底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	1/3。 覆土中。
3	耳環	直径　1.9 厚さ　0.4	端部は開かずに接している。断面は幅広の楕円形を呈す。	表面には銀が貼られているが、ほとんど剥落している。	胴地銀貼り。	完形。 覆土中。

第10号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壷	底部径 (11.8cm)	粘土紐積み上げ成形。底部は平底を呈し、外面に浅い沈線が1条巡る。	胴部内外面とも回転ナデ。底部外面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－淡赤褐色 内－淡灰白色	1/3。外面は二次焼成受けて赤色化している。 覆土中。

第333図　浅見境北遺跡出土青磁碗

第Ⅵ章　中世における共和地区の様相

第1節　児玉党一族と共和地区

1．児玉党の発生と児玉庄

共和地区は条里水田が広がり、早期に開発が行われた地域であった。平安時代後半には、坂東諸国各地で武士の発生が見られ、武蔵国児玉郡地方でも武蔵七党の児玉党と後年に称された武士団が発生している。この地方は古墳群の密集地域であり、広大な条里水田とともに、有力な富豪農民層が各地域に割拠していたと想像される。そういった富豪農民層が次第に武装して武士へと転換していったものと思われる。そういった武装富豪層が条里水田に供給する九郷用水の使用をめぐり、互いに協力体制を築き、或は相互に婚姻を重ねて、児玉党と呼ばれる武士団を形成したものと思われる。児玉党の出自を記録する「武蔵七党系図」などでは、児玉党の祖を遠峯あるいは伊行ともいい、時の関白藤原道隆の子の藤原伊周の子とし、政権闘争に破れた伊行は外戚の有道氏を頼り武蔵国に下向したという。この伊行が児玉郡の有力豪族の娘を娶り、生まれた子が郡内各地に広がり児玉党を形成したとする。勿論この様な系図でいう児玉党の発生事情は信憑性を欠き信頼できないものであるが、児玉党の先祖が児玉地方の有力豪族であり、何等かの関係を持って中央の藤原氏に接近したとは考えられる。児玉党の祖は阿久原牧(神泉村)を支配し、ここを基盤として児玉郡の平野部に大きな影響力を持ったものと考えられる。郡内の特に共和地区に基盤を持った庄一族や真下氏、丘陵部にいた塩谷一族の祖と婚姻関係を結び党を結成し、党の維持運営のための、所領の保全のため中央貴族との関係を持ったものであろう。後にその関係を中央貴族の血縁と称するように変化したものと思われる。いずれにせよ児玉党の正確な出自は不明であり、古代末期には児玉党では庄・真下・塩谷氏がこの地域に勢力を有していた。

古代末期に於ける共和地区については史料がほとんどないため明らかに出来ないが、児玉庄と呼ばれた荘園が存在していた。京都の貴族九条兼実の日記「玉葉」に、安元元年(1175年)11月の条に、児玉庄が上野国高山御厨に訴えられた記事が見られるのが唯一であり、児玉庄の実態は全く不明である。児玉庄が児玉郡内のどこに所在したかも不明であるが、手掛かりとしてやや時代は下るが、文永11年(1274年)の「大嘗会雑事配賦」(金沢文庫文書)に児玉郡衙が郡内の国衙領に賦課したと推定される文書がある(峰岸1978)。これには郡内の名・郷・村の記載が見られ、ここに児玉庄域と推定される地域が含まれていないので、逆に記載のない地域が庄域と考えられる。この史料には枝松・枝松久光名・富光保木野村・富安新里・近吉・薦田が見られ、さらに安保文書中にも枝松名が見られ、この名内には塩谷・宮内・長茎郷が含まれていた。これらの名・郷・村は旧児玉郡内の児玉町児玉地区から金屋地区にかけての地域が枝松名の範囲に含まれる。神川町新里地域も富安に含まれるので郡の中西部地域は国衙領が多かったとすると、これらの史料に見られない郡の北東部の共和地区から本庄市にかけての地域と本泉地区が児玉庄のあった場所と考えられる。これは庄氏一族の分布域と重なっている。なお、本泉地区については山間部にあり、共和地区とは地理的にやや離れており、ここにも庄氏の分布が見られるが、ここでは共和地区を中心に進めて行く。

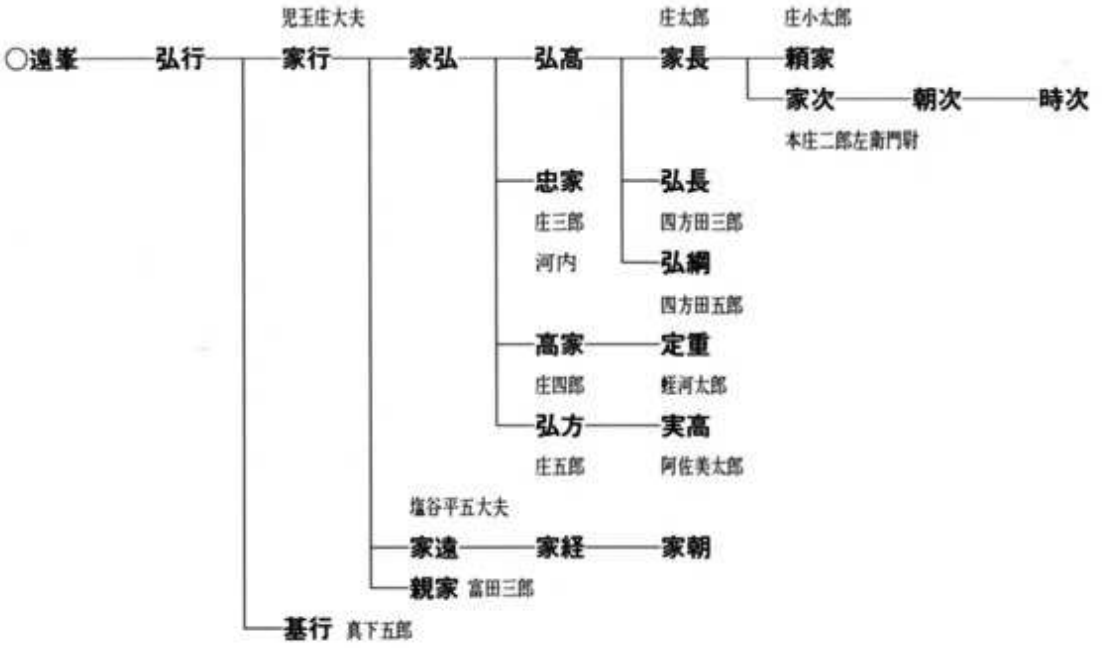
児玉庄のあったと推定される共和地区には広大な条里水田が広がっているが、これは当然本来は国衙領であり、これらを全て取り込んで児玉庄を形成できたかは不明である。或は条里水田外の生野山の谷間などを開発してそこを荘園化していったのかも知れない。いずれにせよ児玉庄が作られ、これを実質的に支配したのが児玉党の庄氏一族で、庄氏の重要な経済的基盤であった。武蔵七党系図には児玉庄大夫家弘、その子児玉権守弘高とあるように、児玉庄の庄の字が名字となっていったものと思われる。特に児玉庄大夫家弘の「大夫」の称号は、地方豪族で五位相当の者をいい、その地の開発領主をいうともいわれ(峰岸1984)、まさに家弘が児玉庄の開発主体者であったものと思われる。この代を限りにこの一族は児玉一族(党)の庄氏を称していくのである。

2.児玉党庄氏一族

①庄氏の系譜

共和地区に広く分布する庄氏一族は系図上では庄・蛭河・阿佐美・今井・鷲田・本庄・四方田・牧西・久下塚・若泉・小河原などに分れた。この内、史料上から実在が確認されるのは庄・蛭河・阿佐美・鷲田・四方田・本庄氏程度である。この中で庄氏は保元の乱に庄太郎・庄三郎が源義朝に仕えて活躍したが(『保元物語』)、まだこの段階では庶流の分派は見られない。源平合戦の段階になって、庄太郎と叔父の三郎忠家・四郎高家・五郎弘方兄弟の名が見られ、さらに家長の弟の四方田三郎弘長と同五郎弘綱兄弟が活躍している(『吾妻鏡』・『平家物語』等)。その後、鎌倉幕府が成立し、庄氏一族も御家人として奉公し、庄氏一族も鎌倉時代を通じて蛭河・阿佐美・本庄氏が分派していて、その名が史料・記録上(『吾妻鏡』等)に散見される。

庄氏の惣領家がどこに館を構えて所領経営を行っていたかは不明である。渡辺世祐・八代国治著『武蔵武士』(渡辺・八代1971)では庄氏＝本庄氏で本拠は本庄市の本庄城跡、『本庄市史』通史編(本庄市1986)などでは本庄氏を庄氏の本家といった見方をして、中世館跡のある本庄市北堀・栗崎といった説をあげているが、必ずしもこれで明らかになったわけではない。『武蔵七党系図』における庄氏の系譜をみると、庄氏は多くの庶子家を分派しているが、いずれも庶子家は九郷用水の流域に多くが本貫地を構えている。九郷用水の成立時期は明らかではないが、近年の発掘調査の成果では古代に遡るという(鈴木1989・1995)。庄園内の水田に水を供給する九郷用水の重要性は述べるまでもないが、その用水路の維持管理の面からも庄氏の本拠は上流域にあったと考えるべきであろう。九郷用水は幾つかの支流を分派するが、上流部の分派堰付近の右岸に真下氏がおり、真下氏が庄氏と比較してより劣勢であるにもかかわらず、早期に児玉一族から分派して独立して活躍している。真下氏は九郷用水上流域右岸にいて用水管理面で大きな影響力を持ったと思われる富豪農民層の子孫として、児玉党の中で庄氏より早期に分派した位置付けが理解できる。おそらくは庄氏も真下氏に直接用水支配の面で対抗の出来る地域にいたものと思われ、その本拠は真下氏の勢力の反対側の用水路左岸付近を想定できよう。現在の児玉町八幡山付近から吉田林付近がそれにあたり、この地域には特定の児玉党武士の名字と重ならないことや、塩谷氏の領域外にあたるので有力である。八幡山雉岡の地に雉岡城が後に築かれるが、小丘陵上の地形にあり北部から西部にかけて条里水田が広がり、九郷用水本流及び支流も近く、さらに鎌倉街道上道も付近を通り館を構えるには絶好な位置



第334図　『武蔵七党系図』略図

にあって、庄氏の本拠地にふさわしい。また、ここで児玉郡内に分布する児玉党一族の中で、庄氏一族の位置付けについて少し触れてみる。

武蔵七党系図中の児玉系図から見ても、児玉郡内に広がる児玉党の分派は真下・塩谷氏が早期に分派し、その後に庄氏の中で庄と四方田がやや早く分れ、その後に蛭河・阿佐美・本庄といった順に庶子家を出している。何れも九郷用水の上流から下流域に年代順に分れているのがわかる。系図は単に親が子に所領を分割相続させたように記してあるが、系図の前半部分、弘高以前と以後では系図の持つ信憑性に大きな隔たりがある。弘高の兄弟や子孫では多くの武士が、『吾妻鏡』や他の記録史料に名前が見えて、その実在が確認できるが、弘高以前の者で史料上に名を載せて、その実在を確認できるものはいない。初めに触れたように、系図の前半は郡内の有力豪族の連合体を党という組織のもと、一つの血縁のある家に擬して表現したものと思われる。だからこそ児玉党という武士団でありながら、塩谷・真下氏といった一族と、庄氏一族とでは性格的に違いが見られる。塩谷・真下氏とも名字の異なる庶子家をほとんど出していないのに対し、庄氏は前記のように蛭河・阿佐美・四方田・本庄氏などの庶子家を多く分派している。建治元年(1275年)に行われた京六条の若宮八幡宮の造営(注1)に多くの武士が参加しているが、この時に庄氏は武蔵国と美作国にあって十六貫、阿佐美氏は七貫、蛭河氏は七貫で、庄一族としては合計三十貫を負担しており、塩谷氏は十貫、真下氏は四貫とかなりの勢力の開きが生じている。塩谷氏は畠山重忠事件や和田氏の乱で一族が敗者側に加担したため、所領の一部を失っているが、承久の乱で一族をあげて活躍したので勢力をやや回復して十貫というやや大きな負担を担ったが、真下氏は石橋山の合戦で一族が平家方に与し、さらに一族が足利氏の被官となるものが出たりしたため、大きな勢力とはなっていない。このように鎌

倉期を通じて栄枯盛衰が児玉党一族にも見られるわけであるが、庄氏が鎌倉期に多くの庶子家を分派出来たのは児玉庄という経済的基盤があったことや、新たに獲得した所領の財力を無視できないであろう。この造営注文の中には庄氏のなかで四方田・本庄氏の名前が見られないが、この両氏も存在してそれ相当の勢力があったと思われるから、その差は更に開くであろう。

②共和地区における庄氏の分布

庄氏の惣領家の所在地を児玉町大字八幡山か共和地区西端の大字吉田林付近に想定した。庄氏の実質的祖ともいえる児玉庄大夫家弘は、有力庶子家として忠家・高家・弘方を周辺地域に分派している。家弘嫡男の弘高は、庄権守と称して、庄一族惣領として用水系を水口を押さえて九郷用水系下流域を支配したと推定される。下流域の庶子家は所領は分割相続したが、当然その管理下におかれたわけである。ただ弘高自身は全く記録に見えず、その子の家長の代になって活躍するようになる。弘高は比較的早くに没したのであろう。系図には次郎の記載がないので、次郎も早世したのであろうか。三男の三郎忠家は、系図の肩書に「河内」の記載がある。おそらくこれは現在の本泉地区の河内を指すもの思われ、子孫に金沢(秩父郡皆野町金沢)を称す者がいるので、身馴川流域に庄氏の勢力範囲が延びていたのであろう。この地域は児玉郡と秩父郡を結ぶルートで、かなり早くから結ばれていた重要な交通路であったと思われる。河内には児玉党と関係が深いとされる金鑽神社の分霊社があり、さらに隣字の元田には嘉元三年銘の大型の三連板碑があり、中世に於けるこの地域の重要性の一端が知られる。ただこの地域は共和地区とはやや離れており、共和地区に児玉庄があったと推定される上で、この地域が児玉庄に含まれるのかは不明である。

四男の四郎高家は、どういう関係からか木曽義仲の被官となっていたことがあり、宇治川の合戦後に義経に従ったという(注2)。さらに『平家物語』では一ノ谷合戦で平重衡を生け捕ったという。高家は共和地区の蛭川を支配し子孫は蛭河姓を称するようになる。蛭川地区は共和地区の条里水田地帯のほぼ中央に位置し、庄氏庶子家の中でもかなり有力な位置付けができる。現在、女堀川段丘上に蛭川地域の集落があるが、ここには東廓・西廓・南廓・北廓という地名が残り、東廓には方形の区画が見られ、ここが蛭河氏の館跡と推定されている(菅谷1981)。ほかにも北廓や南廓も方形の区画が見られ、関連の館跡とも考えられるが、現時点では史料がないので何ともいえない。蛭河氏は但馬国相博保の地頭職を獲得したことが史料(注3)からわかるが、それ以外の所領については不明である。蛭河氏は北条氏の被官となった一族がいたようで、北条氏の私的な法要に従事したり、北条氏滅亡後に起きた中先代の乱でも、北条時行に従って足利方に捕らえられた蛭河彦太郎入道がいた(注4)。蛭河氏は全ての一族が継続的に蛭河の姓を称したかはわからないが、庶子家の中には一部にはそのまま庄姓を名乗ったものがいた。高家の四男の系統に建武新政権に属したものがおり、長家・宗家父子はいずれも庄を称している。蛭河一族は、系図上ではさらに蛭川地域の東部にある今井地域を支配して今井氏を分派している。この児玉党今井氏については、確実な史料がないため明確ではない。

五男の弘方は、共和地区の南西部の入浅見から下浅見地域を相続して阿佐美(または浅見)氏を称するようになる。入浅見地域は共和地区の南部にある生野山の幾つかの尾根に挟まれた谷戸田水田

をその基盤とするようで、この地域には庄田・前田・鎌倉・矢場・城の内・内手などの中世的地名が残り、内手地域は緩い尾根上にあり、南側の斜面上に館跡があったのではないかと推定される。一部に土塁らしきものが残り、東部に観音寺・西部に金鑽神社があり古代末期の開発領主の基盤として相応しい位置関係が見られる。あるいは庄一族の当初の本拠地であった可能性も残されている。阿佐美氏は阿佐美郷の南東部の身馴川流域にある鷹田(小茂田)郷(現美里町)も支配していたようで、鷹田氏も分派している。

この様に共和地区内に有力庶子家を輩出していったが、ただこの段階でもこれらの庶子家の基盤が、その地域の古代末期からの有力名主層の地盤を引継いでいることは無視できない。ただ系図で見えるように、親から男子へというかなり男系の血縁関係が反映されてきた時代になってきたと考えられる。それまではかなり女系の関係の濃いものであったであろう。

3．児玉党真下氏

共和地区には前記したとおり児玉党庄氏一族が広く分布していたが、同じ児玉党の一族で真下氏が九郷用水上流域にいることは重要である。真下氏と庄氏は、系譜上同じ児玉党の一族であるが、「武蔵七党系図」上でもかなり離れた位置付けとなっている。真下氏と庄氏は所領が隣接して所在し、用水系も同じものを利用している。地縁関係を考えると協力関係がそこに存在したものと思われるが、これを示す史料はない。近世にあって九郷用水は22か村の用水組合で管理されるが、その中心的役割を果たした村が上真下村と蛭川村であり、用水割元村として明治期まで継続して勤めた。直接中世における児玉党との関係は指摘できないが、地理的に見た場合に九郷用水における真下と蛭川の重要性が近世になっても維持されたものであろう。

真下氏の動静を伝える史料は乏しく、わずかに源頼朝が石橋山で平家方と戦った際に真下四郎重直が平家方にあり、後に平家方として北陸道での木曽義仲との戦いで長井斎藤別当実盛らと共に討死にしたことが『平家物語』に見えるが、おそらくは一族の中で治承・寿永の内乱期に必ずしも一族をあげて同一行動をとらなかったものと思われる。真下重直が平家方として討死にしても真下氏自体は御家人として『吾妻鏡』や他の史料に散見されるので、鎌倉期を通じて御家人として存続していた。しかし真下氏の中で鎌倉期に足利氏の被官となった者が現われ、後に足利尊氏に従って室町幕府の奉行人となった一族もいた。足利庄にある鑁阿寺に棟札(近代足利市史、湯山1980)に、「中務丞有道広経私云真下」と書かれている。これは、天福2年(1234年)に足利義氏が鑁阿寺大御堂建立に際して作られた棟札で真下広経は雑掌として勤仕したものと考えられる。これは既にこの段階で真下氏が足利氏の被官となっていたことを示している。真下氏の中で足利氏に被官化した一族が、どういう理由で足利氏に庇護されたのかは不明である。一つには平家方にあって没落した真下重直の一族か、あるいは鎌倉初期の内乱で没落した一族か不明であるが、おそらくは初期の段階で没落した一族と思われる。勿論鎌倉期を通じて全ての真下一族が足利氏の被官となったわけではない。足利氏の被官となった一族は、足利氏の発展と共に関西にあって活躍し、摂津・尾張・安房・加賀国などに所領を獲得していたことが各種史料に見える。主に「広」の字を通字としていることが室町幕府関係の文書・記録に見られる。真下氏は「武蔵七党系図」では主に重・成(しげと読む)の通字を多く使

用しており、関東で活躍した一族に真下重氏などが見える(注5)ので、被官となった一族は真下氏の庶子家であったものと思われる。真下氏もかなり早期の段階で惣領・庶子家が別個の行動をとっていたものと考えられる。

なお、鑁阿寺の史料は真下氏も有道氏を称しており、後にこの真下一族は源姓を自称していくのでその面でも興味深い。児玉党の一族の中で有道姓を称していることが史料上から確認できる一族は真下氏の外には、塩谷・四方田・小代・越生・矢島などがいる。

いずれにしろ、鎌倉時代を通じて御家人としての真下氏が存在したが、一部の一族は足利氏に被官化し、幕府の滅亡後はこの一族が関西地方にあって活躍した。関東においても上野国にあって活躍した真下一族があり、真下重氏などは足利尊氏に仕えて所領を充てがわれているが、動静は不明である。戦国末期頃に真下郷にあって用水にかかわった真下左京亮や下真下新六郎の名前が史料に見られ(注6)、群馬県鬼石町には真下氏の子孫と伝える旧家があり、系図や伝書を伝えている(『鬼石町誌』)。

さらに真下氏と同様に庄一族より早期に分派したとする富田一族があり、児玉家弘の末弟に富田五郎親家がいる。富田氏は今井・四方田の西側、九郷用水の下流域近くに位置している。周辺地域が全て庄一族に囲まれており、かなり異質な位置にある。これは富田氏の祖が庄氏の祖とは別の古代の有力富豪農民層であったことを示しているといえる。児玉党富田氏も、今井氏と同様に別氏族の富田氏が多数あって、史料上児玉党の富田氏と確認できるものは少なく、その動静はつかみえないが、『吾妻鏡』には和田義盛の乱に富田三郎が与して捕らえられたと書かれ、源実朝よりその強力を賞されて罪を許されたという(注7)。また、承久の乱で京方として富田六郎兵衛尉長家が武蔵七党系図に見える。いずれにしろ富田氏も鎌倉期の動乱で盛衰を味わったものと思われる。

第2節　鎌倉時代の共和地区と児玉党

1．児玉党庄氏の西遷と北条氏

治承・寿永の内乱から奥州合戦にかけて、庄氏一族は活躍し各地に所領を獲得した。鎌倉幕府成立後も御家人として活躍するが、建久元年(1190年)の源頼朝の上洛に際しては、庄太郎(家長)・同太郎三郎・庄四郎(高家)・阿佐美太郎(実高)・四方田三郎(弘長)・真下太郎が参加している。その後の建久6年(1195年)に頼朝が東大寺供養で上洛した際も、庄太郎(家長)・四方田三郎(弘長)・浅見(阿佐美)太郎(実高)が参加している。承久の乱にも庄一族は参加し、庄三郎・庄四郎・蛭河刑部三郎・同三郎太郎が参加し、庄四郎は敵一人を生け捕りにしたが、庄三郎は討死にしている。この他にも『吾妻鏡』には多くの児玉党一族が見られ、本庄四郎左衛門尉時家・本庄新左衛門尉朝次・蛭河四郎左衛門尉・阿佐美六郎兵衛尉・四方田三郎左衛門尉景綱・四方田五郎左衛門尉資綱・阿佐美左近将監・四方田新三郎左衛門尉(高政)・四方田滝口左衛門尉時綱・真下右衛門三郎などがいる。

庄氏は、鎌倉時代を通じて蛭河・阿佐美・本庄氏などの庶子家を分出しているが、いずれも児玉郡内の本貫地以外に各地に所領を獲得している。

庄氏は、備中国草壁庄・小坂庄・美作国広野庄の地頭職・摂津国久貞名下司職・伯耆国北条郷代官職

など、四方田氏は備前国本調本庄の地頭職・出羽国平泉付近の所領・加賀国野田村・伊勢国多々利庄と丹庄山公田など、阿佐美氏は近江国内ほか、蛭河氏は但馬国相博保地頭職、本庄氏は筑前国小中庄地頭職などを獲得している。

鎌倉時代を通じて畠山重忠事件・和田氏の乱・承久の乱・宝治合戦・霜月騒動など大事件が頻発したが、児玉党一族もこれらの事件に巻き込まれた者が多かったようである。具体的には史料に乏しく事例をあげにくいが、塩谷維盛が和田氏に与し没落したように、大きな打撃を受けた一族もあったに違いない。庄氏の場合、具体例はないが、一族のある流れは早い段階で備中国や美作国に移住して行ったようで、建治元年(1275年)の京都六条西洞院の若宮八幡宮の造営注文には児玉党一族も多くが費用を負担している。国別に武士名が記載され、児玉党一族は当然武蔵国に書かれているが、美作国にも庄四郎入道の名で記載が見られる。これによれば庄氏の一部は早期にまず美作国広野庄に移住したのかもしれない。その後、庄氏は備中国中心に大いに活躍するが、関東における庄氏の動きは不明瞭である。武蔵と美作にそれぞれ活動拠点を持っていたわけであるが、武蔵の庄一族は北条氏の得宗被官となったものがいた。特に蛭河氏がそうで、徳治2年(1307年)5月に相模国円覚寺で行われた大斎結番では、毎月四日が北条時宗の忌日で、これは北条貞時が家人を動員して行った北条家個人の行事である。これに勤仕した武士は北条氏の被官と考えられ、この中に蛭河氏や浅羽氏など児玉党一族と丹党安保氏が見える。庄氏自体も建長元年(1249年)の文書(注8)によれば、庄四郎が北条重時の代官として伯耆国北条郷の地頭代に任命されていて、北条家の被官となっていたようである。真下氏の場合も、先に述べた通り足利氏の被官となった一族がいた。

2．鎌倉時代の庄氏の系譜

児玉党一族の内、庄氏は系譜上は児玉党の嫡流に位置付けられているが、その実態については庄氏伝世の文書がないため明瞭ではない。庄氏は、阿佐美・蛭河・四方田・本庄氏などの庶子家を多くだし、それぞれが御家人として活躍しているが、庄氏本家は早期に美作や備中国に所領を得て西遷したことが知られる。鎌倉期を通じてその行動や系譜はあいまいである。主に庄氏の系譜を知る手段は、「武蔵七党系図」や岡山県に伝わる各種の「庄系図」に頼るが、鎌倉期の庄氏の系図はいずれも記載が異なっており検討を要するものである。次にその概略を述べる。

A、児玉系図『武蔵七党系図』

家長 ┬ 頼家
　　├ 家次 ―― 朝次 ―― 時次 ―― 有次
　　├ 定経
　　├ 時家 ―― 家房 ―― 泰房 ―― 国房(本庄氏)
　　└ 時長

B、岡山県荘家所蔵「庄氏系譜」

家長 ―― 頼家 ―― 家次 ―― 朝次 ―― 時次 ―― 有次 ―― 資房

C、岡山県『小田郡誌』所収系図

家長 —— 家定 —— 信家 —— 家重 —— 家経 —— 家房 —— 資房

四郎兵衛

D、岡山県『矢掛町史・吉備郡誌』所収系図

家長 —— 頼家 —— 頼房 —— 頼澄 —— 房時 —— 頼資 —— 資房

E、岡山県横谷庄氏系図

家長 —— 家房 —— 家時 —— 家資 —— 資忠 —— 資義 —— 資氏 —— 資房

このように5種の系図をあげたが、系図自体の信憑性が乏しいため、家長と資房は一致するものの、その間の世代が全く異なっている。

Aは、「武蔵七党系図」である。武蔵七党系図自体も数種の写本があり、頼家を依家と記し、その後に家次以下をつなぐものもあるが、ここにあげたものが自然であろう。この系図は、前半部分は信頼に足らないものであるが、後半部分については文書類と比較してある程度は信頼の於けるものである。この系図の作成時期の問題で、概ね室町初期頃の代の記載で終わっている。

武蔵七党系図では庄氏嫡流は頼家の代で記載が終わっているが、頼家は一ノ谷合戦で討死にしたともいわれ、子孫が断絶したとも考えられるが、七党系図には他の一族の多くに嫡流の流れが一代限りしか記載されていない例が多く見られる。この理由は早期に西遷したため、系図作成の段階で子孫の把握が出来なかったのではないかとも考えられる。頼家の子孫が早期に備中国に西遷したため、その子孫の状況がこの系図に反映されなかったともいえる。武蔵七党系図の庄氏の所には備中との関係を示す記述は何も見られない。家次以下の流れについては、『吾妻鏡』には暦仁元年(1238年)2月に将軍頼経が上洛した際に、本庄新左衛門尉朝次の名前が見られ、御家人として本庄姓を名乗り関東で活躍していたと推定されるので、この段階で既に備中に西遷していた庄氏とは直接つながらない。そのためBの系図でいうような有次から資房へつなぐ系図は否定されよう。

BからEまでの系図は、岡山県に伝わるもので、いずれも庄太郎家長から引くことでは一致している。勿論この点についてもEの横谷庄系図では、家長以前は全く児玉党との関係を記さないなど問題が多いものであるが、家長が一ノ谷合戦で活躍して備中国草壁庄を拝領したことから始まっている。この系図の中で注意を引くのがCとDの系図で、原本を確認できなかったため情報としては武士名のみしかわからないが、Cでは家長の後に家定・信家・家重・家経・家房・資房とつなぎ、庄一族が通字としている「家」の字を多く用いていて、「家」から「頼」、そして「資」へと通字が変化していることもさほど違和感は見られない。ただ家定については四郎兵衛との肩書があり、これは武蔵七党系図では家長の子にはないが、家長の叔父にあたる庄三郎忠家の四男に家定があり、この家定の肩書は左兵衛尉であり、さらに『承久記』には後鳥羽上皇に仕えた武士に「児玉の庄四郎兵衛尉家定」があって、この者に比定できるであろうか。武蔵七党系図の家定の後は記載されていないため、この後の流れは不明であるが、Cの系図の家定が同一人物とすれば、家長ではなく忠家の流れが備中

の国に西遷したことになる。美作国広野庄や備中国小坂庄・草壁庄の地頭として活躍した庄一族に「庄四郎」を称する武士が多いことも、この庄四郎兵衛尉家定を西遷した庄一族の祖としたことと思われる。しかしDの系図では家長の後は、頼家・頼房・頼澄・房時・頼資・資房としてあり、この通字的な面ではこちらもそれほど違和感は見られない。頼房以降頼資までは外の史料上では一切名前を確認できず、この流れも正しいと言う確証は得られない。C・D・Eの系図に出てくる武士名は何れの史料にも見られず、全て創作されたものともいえるかも知れない。それは鎌倉時代を通じて、庄余一頼資(文永10年「毛利家文書」)、庄四郎左衛門尉資兼(永仁5年「東寺百合文書」)、庄又太郎親資(嘉元3年「熊谷家文書」)と、13世紀後半から14世紀初頭にかけて「資」の字を用いた者が多く見られるからである。C・Dの系図では14世紀前半になって「資」の字を使った武士が出てくるのと比較すると、実際には半世紀も早く「資」字を用いた一族がいたことになる。これを考えるとC・Dの系図も信憑性がおけなくなる。さらにこれらの系図では資房以降の歴代の当主についても、数人程度しか史料から名前を確認できず、逆に史料上に多く登場する庄氏一族の者がこれらの系図には当てはまらないのである。また各系図に記載されている家長の注記に「一ノ谷合戦で平重衡を生け捕り、その軍功により奥州室津庄を賜り、後に備中国を賜る」とあるが、これにしても『平家物語』には平重衡を生け捕ったのは庄太郎家長でなく、叔父の庄四郎高家であり、この注記を優先させれば、備中国に西遷したのは高家の子孫となる。「武蔵七党系図」では高家の孫に家氏と家重があって、家重の子孫の記述がないのでこの可能性もある。実際、美作国広野庄に関係する史料(注9)には庄四郎太郎入道が出てくるし、備中国で活躍した庄氏には「四郎」を称するものが極めて多いのである。

いずれにしろ庄氏の嫡流については「武蔵七党系図」では記載がなく、関東で活躍した庄氏は庶子家の中で蛭河氏や阿佐美氏の者が再び庄姓を称した者がいたので、本流は早期に西遷したものと思われる。B～Eの系図にしても、史料上に登場する一族の者と一致するものが極めて少ないため、その多くが創作されたものであろう。

3．鎌倉幕府の滅亡と庄氏一族

鎌倉幕府の滅亡にあたって、庄氏一族がどの様な行動をとったか不明である。わずかに六波羅探題が滅亡する際に、探題の北条仲時に従って近江国番場宿の蓮華寺で自害した者の中に庄左衛門四郎俊充がいたことが「六波羅蓮華寺過去帳」や『太平記』に見える。この庄俊充については備中国に西遷した庄氏の一族と岡山県に伝わる各種の系図に書かれているが、いずれも左衛門四郎俊充を左衛門四郎資房として書かれており、名前が一致せず同一人物か明瞭ではない。既に備中に西遷した庄氏一族は後醍醐天皇に従って行動を起こしている。岡山県に伝わる庄系図の内「庄氏系譜」には、六波羅番場蓮華寺で自害した資房の子の資氏・資政兄弟は、南朝方にあって活躍したという。資政の子の資昭は北朝に仕えたことが注記されており、この間の事情がこの系図ではよく説明されていない。

庄氏は北条氏の被官となった者もおり、北条氏の滅亡とともに大きな打撃を受けたに相違ない。しかしそれを示す記録はほとんど見られず、『太平記』には備中国住人の庄三郎高為が幕府軍にあって行動したことが見えている。また武蔵国住人の庄三郎為久は新田軍にあって鎌倉攻めに参加して

いる。この鎌倉幕府滅亡にあたって庄氏一族も新田・北条両方に分れて戦ったようで、幕府滅亡後に起きた中先代の乱では、蛭河彦太郎入道が北条時行に従っている。蛭河氏は北条氏の被官であったので行動を共にしていたのであろう。

建武の新政権が誕生し機構が整えられて行くと、倒幕に功のあった庄氏一族も新政権の一端を担うことになる。建武元年(1334年)に雑訴決断所の交名が作成され、東海道地域の雑訴(所領関係の訴訟)を取り扱う担当に庄左衛門尉長家の名があり、建武3年(1336年)には武者所が結番されたが、これの4番に庄四郎左衛門尉宗家の名がある(注10)。長家と宗家は、「武蔵七党系図」によれば親子の関係で、庄四郎高家の子孫にあたり庄氏流蛭河氏の一族である。蛭河氏は北条氏に被官化し北条氏とかなり密接な関係を持っていた。しかしこの庶子家の場合は北条氏に必ずしも従わなかったようで、蛭河姓ではなく元の庄姓を名乗っている。この一族と備中国に根付いた庄一族とのつながりは見られず、長家父子は関東にあって活躍した庄一族であった。

第3節　南北朝の動乱と共和地区

1．薊山合戦と真下氏

元弘3年(1333年)に鎌倉幕府が新田義貞らにより滅ぼされたが、この大きな時代の変革は共和地区一帯に所領を持っていた児玉党系の武士たちにも大きな影響を与えた。北条氏が滅亡しこれに殉じた一族に蛭河氏があったが、逆に新田氏側に立ち鎌倉幕府攻めに大きな功をあげた一族もあった。建武新政権が誕生しその組織内に庄長家や庄宗家父子の名が記録上に見られるが、建武政権が破綻し南北朝の時代に突入すると、児玉党武士達も南北に分れて戦うようになる。建武2年(1335年)以降に真下氏や四方田氏が足利氏に従い関西で活躍したことが数点の史料から窺えるが、南朝方として行動していた一族も見られる。しかしこの時代は北朝方でも足利尊氏と直義兄弟の不和など情勢は二転三転し、極めて複雑な情勢であった。共和地区を本拠とした庄・阿佐美・蛭河・真下・四方田・本庄氏はそれぞれ惣領家・庶子家が別個に活動し、関西や東北地方に本拠を移した一族も多くあって、その動静はつかみにくい。関東に残った児玉党一族も幾多の動乱を経て次第に歴史の闇の中に消えていった。南北朝以降、共和地区の情勢については極めて断片的ではあるが、地元に残る伝承などを取上げて概略を述べてみる。

延元2年(1337年)に奥州にあった南朝方の北畠顕家が、奥州勢を引き連れ陸奥霊山城を発して南下し、利根川・安保原・薊山で北朝方の足利義詮軍と激しい合戦(注11)を行っている。

薊山は児玉町下浅見から本庄市の南部にある残丘陵で、現在では大久保山・浅見山などと呼ばれている。この合戦については下真下の旧家に伝わる「伝書之事」(注12)に見える。それによれば「児玉党に真下佐兵衛と真下弾正がいて新田義貞に仕え鎌倉攻めに活躍した。その後、関西に従軍し、北畠顕家卿が奥州に発向した時には真下氏も新田義興公に従い東国に下った。」という。薊山合戦については「真下佐兵衛春行と真下弾正元幸は新田義興に従って薊山で足利義詮軍の上杉朝房と戦った。日が暮れたので義興は一端真下城に引きあげた。足利方の鎌倉勢は薊山に陣を取り、翌十四日早くに新田方は児玉党が先陣で鎌倉勢を攻めた。児玉党は永井政実と戦い、真下佐兵衛春行・同弾

正は鎌倉勢の中へ切入り、春行は長尾小三郎を討取り城内へ引返した。真下弾正元幸は上杉朝房と西原(本庄市今井付近)で戦い、さらに真下佐兵衛春行は上杉朝房を討取ろうと鎌倉勢の中へ攻め入った。この時に栗崎山(本庄市栗崎)に控へていた上杉重能勢が攻め来て戦い、真下佐兵衛春行は討死した。春行は平塚(児玉町下真下・共栄)へ葬られた。鎌倉勢は阿保原(神川町元阿保から上里町付近)へ引き、義興の下知により真下弾正元幸と同左馬丞は先陣で、同十六日に阿保原で鎌倉勢と戦った。鎌倉勢は敗北して永井政実の居城児玉郡御嶽山城(神川町二宮)へ引き、児玉党はこれを破り、さらに義詮を追掛けて入間川で戦った」と書かれている。この合戦の経緯を記す史料は他にないため、この「伝書」の真偽を検討できないが、この合戦で新田軍は城(真下城)を本拠としたこと、足利勢(鎌倉勢)は薊山から栗崎山(両方とも一つの丘陵で現在の大久保山をさす)に陣を敷いた。そして近辺の今井の西原などの原野で合戦が繰り広げられたものと思われる。真下城についてはこの付近に城郭的なものは見られないが、下真下の中屋敷・中内手にあったとされる真下氏館が新田方の本陣となったものであろうか。『桜雲記』や『元弘日記裏書』などでは利根川・安保原・薊山合戦が行われたのみしか記述はないが、いずれも北畠顕家軍(新田勢)が足利軍を破って鎌倉に攻めいったとしている。薊山合戦での実際は、『下真下地誌』には伝説に真下佐兵衛は真下城(下真下の中屋敷・中内手にあった真下氏の居所)に籠り、攻め寄せる敵の大軍を防いだが、守りきれずと西方に落ちたところ敵のために討ち取られたと記している。おそらくは北畠軍は薊山合戦で一端敗北し、北方の安保原付近へ後退し、ここで再び盛り返したのであろう(『下浅見地誌』)。

この薊山合戦にまつわる伝説の一つに西光寺の話が伝えられている。『下浅見地誌』によれば、浅見山に西光寺の跡があり、薊山合戦の時に兵火に罹り鐘が水中に没したという。下浅見に残る近世の名寄帳にも小名として西光寺・大門・寺前・西光寺のおり口などが見られる。この西光寺は児玉党の菩提寺ともいわれ、廃寺となった西光寺を後に再建したのが本庄市栗崎の宥勝寺といわれている。

2．丹党安保氏の進出

鎌倉時代前半までは共和地区は児玉党庄氏・真下氏・富田氏の一族が広く分布していたが、次第に新たに獲得した西国や奥州の所領に生活の基盤を移していく一族も多かった。さらに度重なる内乱で没落していくものも多かったようである。児玉党一族が鎌倉時代に起きた数度の内乱でどの様な行動をとっていたかについては、史料や記録には断片的しか出てこないため不明である。しかし児玉党が関与したと思われる事件を幾つか次にあげる。

建仁3年(1203年)に比企氏の乱が起き、比企一族が滅亡したが、比企氏の婿に児玉党があって討たれたという(注13)。この児玉党が何氏なのか記述はないが、この事件で大きな打撃を受けたものと思われる。元久2年(1205年)には畠山重忠が謀殺される事件が起きたが、この事件でも児玉党がかかわり、「武蔵七党系図」には稲島二郎友平が幕府軍に属して畠山氏と戦い討たれている。

建保元年(1213年)に起きた和田義盛の乱では、塩谷維盛・維光父子や富田三郎親家、稲島五郎友行らが和田氏に与し没落した。仁治2年(1241年)には本庄時家と小林時景が家来の狼藉で争い、時家の所領が没収された(『吾妻鏡』)。文永9年(1272年)には二月事件が起こった。これは六波羅探題の北条時輔が北条教時父子を討った事件で、これに加担した四方田時綱が処刑された。この他、正和

3年(1314年)には本庄国房と由利頼久が所領をめぐる相論を起こし、国房は所領を失っている。この他にも宝治合戦や霜月騒動、平禅門の乱など鎌倉幕府内における大きな内乱が起きたが、これらにも児玉党一族が関与した可能性はあるだろう。具体的に庄氏一族や真下氏がどの様な形でかかわったか、あるいは難を逃れたかは判らないが、次第に本貫地を失っていったものと思われる。暦応3年(1344年)の安保光阿譲状(安保文書)には、安保氏が児玉郡内の塩谷郷・宮内郷・太駄村の所領を子息に譲っている。これらの所領は本来は児玉党塩谷氏ほかの所領だったはずで、安保氏惣領家が北条氏に従い滅亡した後も、庶子家安保光家が足利氏に従い惣領家の跡の相続を認められた結果、鎌倉期に滅亡した塩谷氏の一族跡を拝領していたものと思われる。この後、安保氏は児玉郡円岡(児玉町八幡山と神川町八日市にまたがる字円良岡と考えられる)も所領に加えたようで、応永25年(1418年)の「足利持氏御判御教書」(安保文書)によれば、さらに児玉郡蛭河郷と阿久原郷も安保氏の所領となっていたようである。但しこの時代になると蛭河郷は本庄左衛門入道(号西、西本庄氏)に押領されていると安保宗繁が訴えている。蛭河郷は庄氏流蛭河氏の本貫地であったが、蛭河氏が北条氏の得宗被官として北条氏滅亡に殉じたため蛭河郷を失ったと推定される。

このように、鎌倉時代を通して共和地区に地盤を持った児玉党の庄・真下氏は次第に本貫地から離れていったものと思われる。勿論完全に全ての者が離れたわけではなかったが、児玉党の党としての関係は鎌倉時代初頭の頃とは相当掛け離れた関係になっていたに違いない。一族が全国各地に散らばった場合や、一族の大半が滅亡しても、大名クラスの武士の被官として生き残った一族が、共和地区に地盤を維持していた場合もあったであろう。阿佐美氏や本庄氏などはそういった形で室町期から戦国期にわたって関東で行動している。そういった間に時代を巧みに生き残った安保氏などが共和地区に勢力を広げて行った。

第4節　室町・戦国期の共和地区

1．児玉党流本庄氏の活躍

明徳元年(1390年)に、藤原泰次が鎌倉円覚寺の伝宗庵主に児玉郡下児玉郷内の地を寄進した「藤原泰次寄進状」(黒田氏所蔵文書)がある。この藤原泰次は、姓を欠いているためその系譜も不明であるが、本庄氏の一族ではないかと思われる。藤原泰次が児玉郡下児玉郷を重代相伝の私領といっており、下児玉郷周辺には児玉党阿佐美氏の所領に近く、阿佐美氏の一族かとも思われるが、既にこの時期には共和地区に分布した庄・蛭河・阿佐美・四方田氏などは、いずれもこの地域での活動状況が不明で、本貫地を継続支配できたか大いに疑問のあるところである。泰次も阿佐美氏よりはこの後に目立った活動を見せる本庄氏の一族と考えるほうが自然である。6年後の応永3年(1396年)に武蔵北部一帯各地で大般若経の一日頓写が行われた。これは日光輪王寺に伝えられた大般若経で、その奥書に武蔵国各地で一日頓写した状況が知り得る(注14)。これに「武州本庄郷藤原栄次」とあり、この栄次と泰次とは「次」の通字を用いていて同族ではないかと思われる。「武蔵七党系図」には庄太郎家長の子の本庄家次以降歴代が「次」の字を通字として使用しており、この一族かとも思われる。室町時代に入って本庄氏が次第に庄一族の阿佐美氏や蛭河氏等の所領のあった共和地区に進出して

いったものと思われる。安保氏が蛭河郷の所領を得ていたことと、この所領が西本庄左衛門尉らによって横領されていることが安保文書に見えることは既に述べたが、これは本庄氏の勢力が共和地区に延びていたことを示している。

この本庄氏は、本庄左衛門尉号西とか西本庄左衛門尉と史料上に見える。おそらくは本庄郷にあった児玉党流の本庄氏の一族と思われ、この一族は戦国期には本庄城主として山内上杉氏の重臣として活躍している(本庄市1986)。

戦国時代になると共和地区や周辺地域で活動していた児玉党流の一族も、度重なる争乱のためこの地を離れて行くケースが多くなっていく。戦国期初期の段階では鎌倉公方家や関東管領上杉氏の勢力下にあり、上杉氏の家老長尾一族も児玉郡内に所領を拡大している。さらに鎌倉の寺院領となった場合も多く考えられる。この時期まで生き残った児玉党の系譜を引く一族は、本庄・真下氏程度しか史料に名を見せなくなる。阿佐美氏は上野国に活動の拠点を移したようで、永禄4年(1561年)に作られたといわれる「関東幕注文」(長尾景虎＝上杉謙信が関東に進出した際に上杉氏の幕下に入る武将を衆別に列挙したもの)には、児玉党系の武士は上州総社衆に小幡三河守・大類弥六郎、箕輪衆に倉賀野左衛門五郎、沼田衆に阿佐美小三郎、下野国足利衆に小幡次郎・小幡道佐・本庄左衛門三郎、武州の衆として忍城主の成田氏配下に本庄左衛門佐などがあり、大半の児玉党一族は上野・下野国に基盤を移していたといえる。本庄にあって活動していた本庄氏も成田氏の被官となっていた一族があった。この段階で上杉謙信に属さずに後北条氏に従っていた者に庄氏や阿佐美氏があったが詳細は不明である。

2．その後の共和地区

室町時代末期から戦国時代の共和地区は、周辺には本庄氏のよる本庄城と上杉氏の持城の雉岡城の中間に位置し、上杉氏の支配下にあった地域と考えられる。しかし上杉氏は山内家と扇谷家に分れて争い、さらに関東公方の足利氏も鎌倉を維持出来ず下野国古河にあって古河公方と呼ばれ、それぞれが互いに反目し合い、さらに結びつくなど極めて複雑な状況を呈している。さらに山内上杉氏の家老職を継げなかった長尾景春が主家に背いて児玉にて兵を起こし、本庄の五十子付近を中心として長い戦いとなった。その戦場は共和地区周辺の富田・四方田辺りまで含まれていたようである。

その後、小田原北条氏が武蔵国に進出して山内上杉氏の勢力を一掃するが、甲斐の武田信玄や越後の上杉謙信が再三武蔵国に侵攻して北条氏と戦った。共和地区のある北武蔵はその都度の通り道であり、原野地域は戦場となった。天正10年の神流川合戦も共和地区からはそれほど離れた地域ではないし、兵火を蒙ったと思われる。天正18年に豊臣秀吉が小田原遠征を行うと、この地域も前田利家・上杉景勝らの北国勢が雉岡城を攻め、生野山に陣を敷いたという。児玉宿の農民は戦果を避けるため山中に逃げたといい、前田利家から児玉の豪族久米氏宛に還住を命じる「前田利家黒印状」(久米文書)を発給している。共和地域も豊臣方の大軍が上州より南下し雉岡城を攻めた際には、生野山北側の吉田林・蛭川地域に占拠したものと思われる。小田原北条氏の滅亡、さらに徳川家康の関東入国をもって関東地域の戦国時代は終わりを告げたが、共和地区もこれ以後平穏な時代を迎えることになる。

(野口泰宣)

(注)

(注1) 「京都六条八幡宮造営注文」(田中穣氏収集文書国立歴史民俗博物館所蔵)

(注2) 『武蔵武士』(渡辺1971)に逸話が載せられている。また、『吾妻鏡』文治元年(1185年)11月2日の条に「庄四郎者元与州家人、当時不相従」とあり、庄四郎(高家)は元は与州(伊予守源義経)の家人であったが、今は従っていないと書かれている。

(注3) 弘安8年(1285年)「但馬国太田文」、「相博保三拾九町四反二百四分蛭河左衛門」とある。

(注4) 徳治2年(1307年)「鎌倉円覚寺毎月四日大斎番文」(円覚寺文書)によれば、鎌倉の円覚寺で北条時宗の忌日の行事が行われたが、これに蛭河四郎左衛門尉の名が見られる。この行事は、北条貞時が家人を動員して行った北条家の行事で、蛭河氏も北条氏の被官として参加したものと思われる。また、建武2年(1335年)「実慶軍忠状」(竹内文平氏所蔵文書)に蛭河彦太郎入道が見える。

(注5) 貞和5年(1349年)「足利尊氏袖判下文写」(蜷川氏所蔵文書)。

(注6) 年不詳「城賢掟書」(鈴木家文書)。

(注7) 『吾妻鏡』建保元年(1213年)7月11日の条。

(注8) 建長元年(1249年)「六波羅探題北条重時下文」(毛利家文書)。

(注9) 文永3年(1266年)「関東御教書」(保坂氏所蔵文書)には庄四郎入道信願、文永10年(1273年)「関東御教書」(毛利家文書)には庄四郎太郎入道が見える。

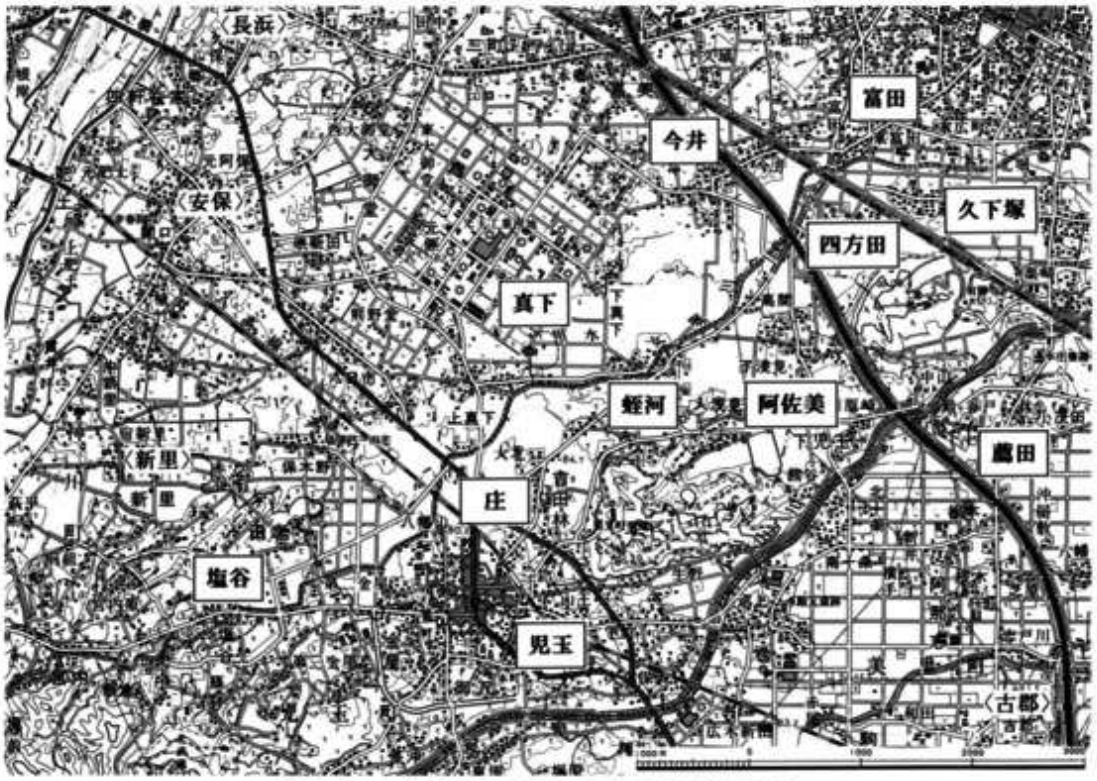
(注10) 建武元年(1334年)の「雑訴決断所結番交名」と、建武3年(1336年)の「建武記」に見える。

(注11) 『元弘日記裏書』・『桜雲記』。

(注12) 児玉町下真下坂本家文書。

(注13) 『愚管抄』。

(注14) この一日頓写の大事業は北武蔵各地で一斉に行われたが、児玉地方周辺では「榛沢郡北飯塚・同郡藤田郷・児玉郡阿久原・同郡本庄郷・同西本庄栗崎・同郡円岡・同郡金鑽談所」などで行われた。



第335図　共和地区周辺における児玉党の分布

第Ⅶ章　中世の土器と瓦

第１節　各遺跡出土の中世土器

今回報告した各遺跡からは、中世の遺構が比較的多く検出されているが、出土した中世の遺物については、寺院や館に関係する城の内遺跡と掘立柱建物と井戸によって構成される一般的な屋敷跡の一部と考えられる日延遺跡や浅見境北遺跡とでは、その種類や量に雲泥の差があり、出土遺物の様相の差異が遺跡の性格の違いを良く反映している。

中世の土器は、搬入品の貿易陶磁器や国産陶器と在地産の土器がある。貿易陶磁器は、青磁と青白磁があり、白磁は出土していない。国産陶器は、東海諸窯のものが主体で、瀬戸窯・渥美窯・常滑窯・山茶碗窯系の製品が見られる。量的に豊富な城の内遺跡では、圧倒的に多い常滑窯系の甕は13世紀～15世紀の長期にわたって搬入されているが、瀬戸窯・渥美窯・山茶碗窯系の製品は量的に少なく、また瀬戸窯系の製品については時期的な片寄りが見られる。在地産の土器は、内耳鍋・片口鉢・擂鉢・火鉢・土師質土器皿などがあり、その種類と量は城の内遺跡が他の遺跡を圧倒している。この中で特に日常雑器として内耳鍋や片口鉢とともに出土量の多い土師質土器皿が、城の内遺跡以外の遺跡で１片も出土していないことは、遺跡における性格の違いとその在り方をめぐって注目されよう。

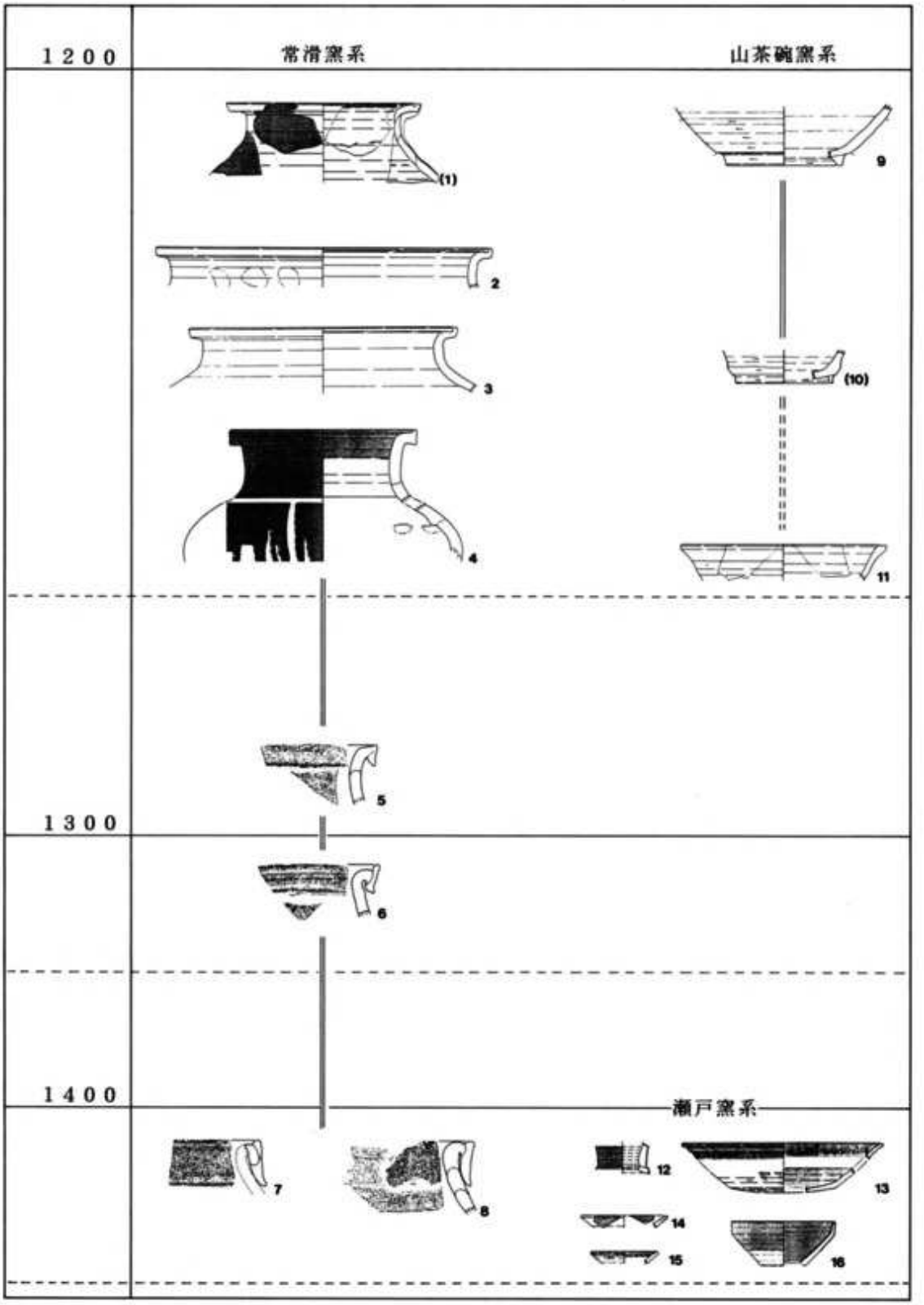
１．貿易陶磁器

貿易陶磁器は、中国陶磁の青磁碗と青白磁合子があり、城の内遺跡で青磁４片と青白磁１片、日延遺跡Ａ地点で青磁１片、浅見境北遺跡で青磁５片の計11片が出土しただけである。青磁碗は、いずれも龍泉窯系のもので、同安窯系のものは見られない。時期は、浅見境北遺跡第36号土壙出土の碗(第324図)が12世紀後半に上がる可能性もあるが、他は概ね13世紀～14世紀前半に位置付けられるものである。なお、城の内遺跡では、安保氏館跡(篠崎1995)で出土しているものと同様の緑釉盤の破片も出土したが、現在所在不明であるためその明細は分からない。

２．国産陶器（第336図）

〈瀬戸窯〉

瀬戸窯系の製品は、城の内遺跡で破片が７片出土しただけで、量的には非常に少ない。器種は、瓶類(第36号土壙・ピット87)、緑釉小皿(堀跡Ａ・Ｃ区)、大皿(第11号溝跡)、天目茶碗(ピット103)などがあり、後期様式(藤澤1991)のものが主体である。ピット87出土のNo12は、外面に鉄釉が施されており、法量や頸部の接合方法から後期様式の花瓶と推測される。第11号溝跡出土の大皿(No13)は、口縁部が若干外反して口唇部が丸く仕上げられるもので、底部は焼き歪みによりやや丸みをもっているが、破片のため足が付くかどうかは不明である。ピット103出土の天目茶碗(No16)は、内面と外面上半に鉄釉が厚く施されたもので、高台の形態は不明であるが、体部は直線的に開き口縁部は直立し口唇部が尖る形態であり、後Ⅱ期～後Ⅲ期(藤澤1991)のものに類似している。第36号土壙出土の瓶(第107図)は、焼きが甘く粉っぽい胎土をしており、器形や胎土からは他に比べて新しい時



第336図　国産陶器編年略図

期の可能性もある。時期は第36号土壙出土の瓶については明確ではないが、その他はすべて15世紀前半頃を主体とするものと考えられる。

〈渥美窯〉

渥美窯系の製品は、非常に少なく城の内遺跡の第5号井戸跡と第10号溝跡で同一個体の破片が1片ずつ出土しているだけである(第78図3・第132図2)。外面にハケ整形の痕跡を残し、縦格子文様の押印文をもつが、時期は明確ではない。

〈常滑窯〉

常滑窯系の製品は、城の内遺跡で中型コンテナ1箱分に及ぶ比較的多くの破片が出土しているが、他の遺跡はいずれも数片程度の出土である。器種は、大半が大甕の破片で、他には広口壺が若干見られるだけである。時期は、口唇部が上方向に短くつまみ上げられた「L」字状口縁を呈する5型式(13世紀前半)から、縁帯幅が5cm～6cmで下端が頸部に接合する9型式(15世紀前半)までの比較的長期にわたるものが見られる(中野1995)。大半は胴部破片であり、時期の分かるものが少ないため、量的な推移や細かな連続性は明確ではないが、概ね継続的に搬入されていたような様相が伺える。

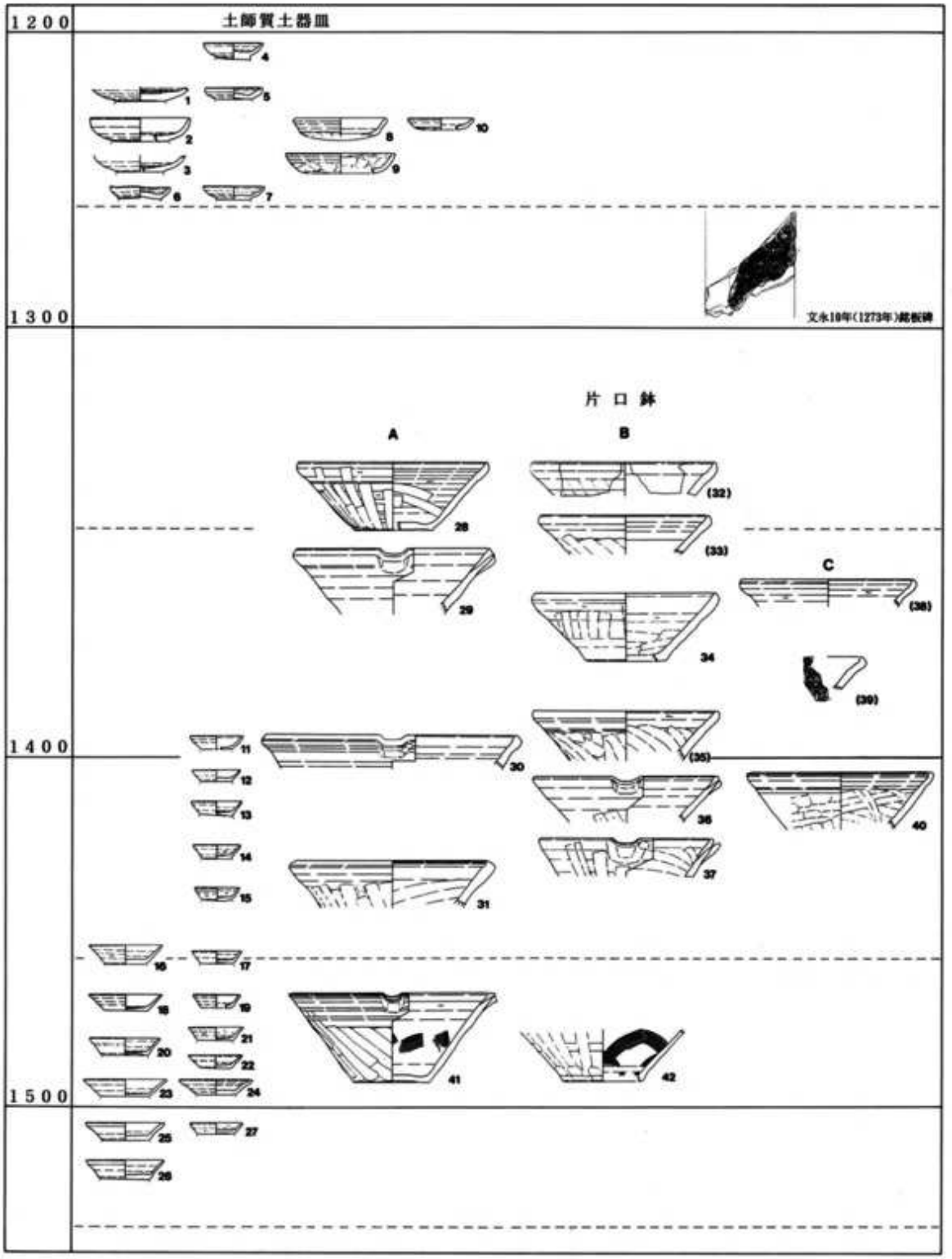
〈山茶碗窯系〉

山茶碗窯系の製品は、城の内遺跡第1号門跡前庭部・浅見境北遺跡第2号井戸跡と第3号溝跡で片口鉢Ⅰ類(中野1995)の破片があり、他には城の内遺跡の堀跡から鉢の破片が2片出土しているだけで、山茶碗や山皿は出土していない。城の内遺跡第1号門跡前庭部の鉢(No9)は、体部が内湾ぎみに開き、断面四角形の厚くしっかりした高台が付き、体部外面下半の回転篦ケズリの範囲が比較的広いものである。高台の形態や調整手法に古い特徴が見られるが、伴出した土師質土器皿の年代を考慮すると、12世紀末～13世紀初頭頃のものと考えられる。浅見境北遺跡第2号井戸跡の鉢(No10)は、断面三角形の薄い高台が付き、体部外面下端に1段の篦ケズリを施すものである。時期は、生産地編年(中野1995)の4型式～5型式に位置づけられ、13世紀前半頃のものであろう。浅見境北遺跡第3号溝跡の鉢(No11)は、口縁部が肥厚し、口唇部に沈線を施すもので、13世紀中頃のものと思われる。これらの鉢は、胎土の粗いものが主体であるが、浅見境北遺跡第3号溝跡の鉢は胎土が緻密で焼き締まりも良く、他の鉢とは生産地が異なるものと思われる。

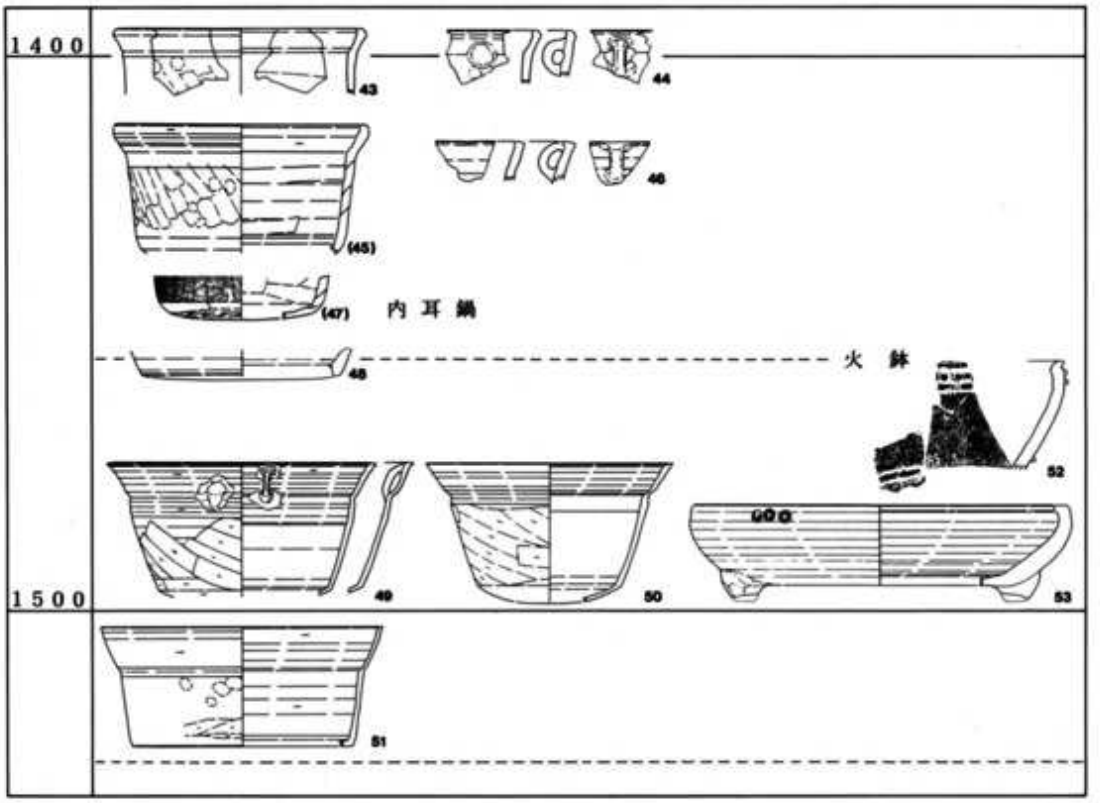
3．在地産土器 (第337・338図)

〈土師質土器皿〉

土師質土器皿は、城の内遺跡から比較的多くの破片が出土しているが、全体の器形が分かるものは少ない。時期は、概ね13世紀のものと14世紀末～16世紀前半頃のものがあり、14世紀のものはほとんど見られない。13世紀のものは、第1号門跡前庭部にまとまった資料があり、その他では堀跡から少量出土しただけである。これらは、該期に特徴的なロクロ成形(Ⅰ群)と手捏ね成形(Ⅱ群)のもの(服部1992)があり、いずれも大小2種によって構成されているが、大型のものはすべて破片であるため、その法量については正確ではない。量的にはⅠ群が大半を占め、Ⅱ群は極めて少量である。Ⅰ群の大型は、体部下半の開き具合を見ると、器高の低い皿形が主体と思われる。器形は、体部が強く湾曲して口縁部が上方向に向き、底部があまり突出しない形態で、内外面のロクロ目はあ



第337図　在地産土器編年略図(1)



第338図　在地産土器編年略図(2)

まり顕著でないものが多いが、底部が厚く内外面のロクロ目が顕著なやや古相のもの(№1)もある。

小型は、坏形と皿形が見られるが、大型に比べて内外面のロクロ目は比較的顕著なものが多い。この中で、第1号門跡の土段推定内の底面から出土した坏形の№4は、底部が厚く突出し内面が未調整のもので、他に比べて古相を呈しており、あるいは12世紀末～13世紀初頭頃まで溯る可能性もある。Ⅱ群は、口唇部が尖りその外側に傾斜する平坦面をもち、体部外面下半に比較的明瞭な稜をもつもの(№8・10)と、口唇部が丸く体部外面の稜が不明瞭なもの(№9)の二者がある。いずれも器肉はやや厚手であり、前者は外面ヨコナデの範囲が比較的広い。この13世紀の土師質土器は、鎌倉周辺の様相と比較的良く類似している(服部1992)。それによると服部氏のほぼⅡc期に相当し、13世紀でも前半の期間に収まるものと推測される。

14世紀末～16世紀前半頃のものは、口縁部の形状が14世紀代から継続する内湾系のものが、15世紀中頃には直線化し、15世紀末～16世紀初頭頃に外反へと変化するものと考えられている(浅野1991、田中1996)。これらは一系的に捉えられるものではないであろうが、城の内遺跡では土器の配列から見てほぼ継続的に存在するものと思われ、特に口縁部の外反は上半から下半へその外反位置が次第に下がりながら漸移的に変化する様相も伺える。

〈片口鉢・擂鉢〉

片口鉢は、内耳鍋とともに出土量の多いものであるが、城の内遺跡では内耳鍋が豊富な15世紀後半に伴う擂鉢は、それ以前の擂目をもたない片口鉢に比べて少量である。全体的に焼き締まりの悪い軟質のものが主体であるが、しっかりした還元焔焼成の硬質のものもあり、それらは古い14世紀

以前のものに多く見られる傾向がある。城の内遺跡や浅見境北遺跡では、口縁部の形態によって概ねA～Cの3系列に別けて考えることができる。A系列は、口縁部外面に平坦面をもつもので、口唇部先端が尖り平坦面の傾斜が急な断面三角形のものから、平坦面の傾斜が徐々に緩やかになりながら断面が方形のものになり、擂鉢に移行する段階には平坦面に窪みをもって水平に近くなるようである。B系列は、口縁部外面がやや丸みをもつもので、徐々に口唇部先端が丸みを帯び、口縁部内面の窪みも平坦化するようで、№36や№37のような口縁部が丸く仕上げられる形態のものは、この系列から派生する可能性もあろう。C系列は、いわゆる「了の字状口縁」(平田1989)と呼ばれるもので、本庄市東谷中世墳墓群出土の三口鉢(浅野1980)が代表的である。A系列の亜種とも思われるが、平坦面は狭く口唇部は短く内側に突出し、口縁部が体部に比べて薄く作られる特徴をもつ。これらの時期について、木津氏や浅野氏の年代観(木津1989、浅野1991)では、城の内遺跡第8号井戸跡出土の№28が、群馬県尾島町東照宮地内古墓群(大江1978)の著名な「元応二年」(1320年)紀年名鉢とともに出土したとされる鉢に類似することから、14世紀中葉頃に位置づけられ、堀跡出土の№41の擂鉢がその形態から15世紀後半と考えられるため、AB両系列ともその間に位置づけられるが、片口鉢の年代比定については、その祖形や系統の問題とともに未だ確定的とは言えないであろう。特にA系列としたものの口唇部形態の変化は、常滑窯系片口鉢Ⅱ類(中野1995)の変化と類似する部分があり、両者の年代的整合性を考慮して検討する必要もあるのではないかと思われる。

〈内耳鍋〉

内耳鍋は、在地産土器の中では比較的多いが、大半は城の内遺跡から出土しており、他では浅見境北遺跡の第4号井戸跡から1点出土しているだけである。埼玉県北部から群馬県地域の内耳鍋の変遷や年代観については、木津氏や浅野氏によって一応の編年が示されており(木津1989、浅野1988・1991)、特に浅野氏は当地域周辺の土器を主体にして編年されている(浅野1991)。それによると時期は、浅野編年のⅠ期(14世紀末～15世紀前半)～Ⅳ期(16世紀前半)のものが見られるが、量的にはⅢ期(15世紀後半)のものが大半を占めている。これらの成形技法については、底部が型作り、胴部が粘土紐積み上げ、内耳が挿入接合と考えられている(木津1987)。本報告の遺跡から出土した内耳鍋についても、底部や胴部の成形には雛砂や粘土紐積み上げ痕が認められるが、内耳については挿入接合の痕跡は見られず、近隣の皂樹原・桧下遺跡(平田1989)や古井戸遺跡(井上1986)と同様に、大半は貼り付けと考えられる。また、内耳鍋の底部は、15世紀前半と後半で丸底から平底への形態変化が指摘されているが(木津1989)、城の内遺跡では底部形態が推測できるものの大半が丸底形態であり、地域差や遺跡による主体客体の差異が考慮されるが、当地域周辺では15世紀前半から後半にかけて丸底と平底形態が共存するようである。

〈火鉢〉

火鉢は、城の内遺跡の第1号溝跡と堀跡で破片が出土しているだけである。いずれも平面形が円形を呈し、器高が低い大型の丸形盤状のもので、断面は体部から口縁部にかけて内湾しながら開き、口唇部に平坦面をもっている。堀跡出土のものには断面円形の太い足が付いている。文様は、第1号溝跡のものが貼り付け凸帯と珠文を施し、堀跡のものは押印花文を部分的に施している。時期は、いずれもその形態から15世紀後半頃のものと考えられる。

第２節　城の内遺跡出土の中世瓦

城の内遺跡では、中世の遺構から多くの瓦片が出土している。同様の瓦は、近隣の深町遺跡（鈴木・西口1981）や日延遺跡Ｂ地点でも若干出土しているが、その出土量や検出された遺構から見て、本遺跡に堂や寺院に関係する瓦葺建物が存在していたことが伺えよう。出土した瓦には、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・鬼瓦等があるが、すべて破片であるため瓦の全容が分かるものはほとんどない。

〈平　瓦〉

瓦の中では最も出土量の多いものである。大半は凸面に叩きを施すものであるが、第29図№32や第130図№37のような叩きが省略された無文のものも極少量見られる。凸面の叩きには、縄目叩きと文様叩きの２種があり、量的には前者の方が圧倒的に多い。

縄目叩きの平瓦は、幅が30cm程度の大型品（第27図№19）と22cm程度のもの（第78図№９）がある。厚さは、最高3.0cm～最低1.4cmのものがあるが、大半は２cm前後である。叩きは、側面に平行してほぼ凸面の全面に施されており、概ね２～３種類の太さが異なる縄目が見られる。叩き板の幅は、細い縄目のものでは約3.5cm～４cm程度で、堀跡出土の№96（第150図）の凸面側には、叩き板の端部の圧痕が見られる。凹面は、ナデ調整が主体であるが、全面や部分的に布目圧痕を残すものも多い。また、凸面側縄目叩きの転写圧痕が見られるものもある。この縄目叩きの平瓦には、凸面側の叩きの下に横方向の直線的な平行条線が比較的明瞭に残っているものが多く、凹面側にも同じ平行条線が見られるものもある。この条線については、「篦」（服部1984）や「刷毛」（鈴木1991）の整形痕とするものと、「糸切り痕」（石川1996）とする意見がある。城の内遺跡では、平行条線同志の重複が見られ（第150図№95・96、第154図№８）、また途中から平行条線が施されているもの（第150図№91）があることから、前者と同様に「木口状工具によるヨコナデ」（刷毛）と考えたが、破片であるためすべての平行条線を一律に捉えられるか明確ではない。特に二次的な整形痕と考えられる平行条線は、太い凹線状の条線に顕著であるため、他の細い線状の条線については粘土角柱からの切り離し痕の可能性もあるものと思われるが、良好な資料による検討と切り離し工具の推定が必要であろう。

文様叩きの平瓦は、文様の中央に主文様の大きな複線「Ｘ」字状斜格子文をもち、その狭端部側に３本・広端部側に４本の平行線文を配するもので、本庄市浅見山Ｉ遺跡出土の文様叩きの平瓦（本庄市1986）と同笵で、同じ作りのものである。それによると形態は、長さが27.5cm前後で幅が21cm前後のほぼ長方形を呈し、厚さは２cm前後が主体である。凸面は、無文の板状工具による叩きの後に文様叩きを施しており（第105図№３）、多くはその文様の周囲をナデている。叩き板は、幅6.2cmで長さは瓦の全長と同じ位と思われる。文様叩きは、第157図№１のように凸面の全体に施されたようなものもあるが、大半は瓦のほぼ中央部に２～３箇所並んで施されている。凹面は、縦方向のナデと布目圧痕を残すものがあり、ナデ調整のものには凸面側の文様の転写圧痕が見られるものが多い。

〈丸　瓦〉

丸瓦は、側面の形状によって、平坦なもの（Ａ類）、平坦で内側に狭い面取りを施すもの（Ｂ類）、狭い平坦かやや尖りぎみで内側に幅広い面取りを施すもの（Ｃ類）のほぼ３種類に別けることができ、Ａ・Ｂ類に比べてＣ類は厚く作られている。凸面は、いずれも縄目叩きの後にナデ調整を行うもの

が多いが、A・B類は全体にナデ調整が雑で下地の縄目を部分的に残すものが多く、C類はナデ調整が比較的丁寧で縄目を残すものは少ない。凹面は、いずれも布目を残すものが多いが、ナデ調整が加えられるものもある。これらA～C類の丸瓦は、第1号門跡前庭部や第16号土壙の伴出関係から、A・B類が縄目叩きの平瓦に、C類が文様叩きの平瓦に伴うものと考えられる。

〈軒平瓦〉

軒平瓦は、瓦当文様が分かるものは4片あるが、いずれも文様叩き平瓦に伴う同笵の連珠文で、成形は瓦当貼り付けである。形態や規模は、ほぼ文様叩き平瓦と同じであるが、厚さは平瓦に比べてやや厚い。瓦当面は、高さ4.0cm～4.4cm・幅21.5cm～21.9cmで、文様は細い圏線の中に直径4㎜の小さな珠文を約1cm間隔で14個並べており、珠文の上面は平坦でなく丸みをもっている。笵型の差し込みは、約5㎜程度であるが、いずれも笵の下側の方をやや深く差し込む癖がある。顎は、幅広の段顎の形態を呈し、裏面は縦方向の篦ナデやケズリによって調整されている。凸面は、文様叩き平瓦と基本的には同じであるが、軒平瓦には叩き文様の上にもナデ調整が加えられ、叩き文様が不明瞭になっている。軒平瓦の凹面は、すべて布目圧痕を残し、両端部や両側面付近の周囲にナデ調整を施している。この連珠文軒平瓦は、文様叩きの平瓦と同じく、本庄市浅見山Ⅰ遺跡出土の連珠文軒平瓦(本庄市1986)と同笵であり、製作も同一工人によるものと考えられる。

〈軒丸瓦〉

軒丸瓦は、丸瓦のB類とC類にあるが、いずれも瓦当面が剥離しており、瓦当文様との関係は不明である。瓦当面が分かるものは、堀跡から出土した小破片(第153図№122)だけである。これは、外区に小さな珠文を巡らせるもので、その内側の線はおそらく巴文の尾が伸びて圏線化したものと思われる。

これらの瓦は、概ねⅠ群(縄目叩き平瓦－丸瓦AB類)と、Ⅱ群(文様叩き平瓦－連珠文軒平瓦－丸瓦C類)に大別でき、それぞれの比較的良好な伴出資料として、Ⅰ群が第1号門跡前庭部、Ⅱ群が第16号土壙の出土瓦をあげることができる。その時期は、Ⅰ群が第1号門跡前庭部から出土した土師質土器皿の年代から13世紀前半以前に位置付けられる。Ⅱ群については、平瓦の叩き文様が連続斜格子文から上下の区画横線文によって単一文様として分離独立した単線「X」字状斜格子文を主文様とした服部・余語氏の叩目第4類(服部・余語1990)からの大型複線化として系譜が伺える(藤沢1983)ことや、文様叩きが凸面全体に施されないものが主体であることから、一応服部・余語編年の第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に相当するものと考えられ、その年代観を参考にすれば一応14世紀代に位置付けられる。このⅡ群の軒平瓦の文様である連珠文は、「量は少なくマイナーな文様」(佐川1994)ということもあって、中世瓦の中で主体的な対象としては研究されていない。そのため連珠文の系統的変化や性格については明確ではないが、一般的に言われているように、12世紀末～13世紀の珠文が大きく平坦なボタン状の形態からこのⅡ群のような珠文が小さく丸みをもった形態への変化が伺える。また、遺跡における出土量が他の瓦に比べて少ない点は、栃木県足利市の現在の鑁阿寺では建物の一切経堂だけに連珠文が葺かれている(足立・斎藤1993)ことが注目され、寺院の中の特定建物と関係する文様であった可能性も伺えよう。このⅡ群の瓦は、城の内遺跡の北東側約2.5㎞にある本庄市浅見山Ⅰ遺跡の瓦窯跡(本庄市1986)の瓦と同笵であり、そこからの供給が推測され両遺跡の地域内での関係が注目されるが、それについては浅見山Ⅰ遺跡の報告書の刊行をまって検討したいと思う。

第Ⅷ章　おわりに

児玉町を主体とする旧児玉郡地域は、古代末～中世に活躍した武蔵七党の中の児玉党諸氏の本拠地として知られているが、城の内遺跡が所在する女堀川中流域右岸の入浅見は、隣接する下浅見とともにその地名から庄五郎弘方を祖とする児玉党阿佐美氏との関係が古くから注目されている。すでに江戸時代に編纂された『新編武蔵風土記稿』では「入浅見村は阿佐美右衛門尉實高等が住せし地」とし、『埼玉の城館跡』(埼玉県1968年) では城の内をこの阿佐美実高の館跡に比定している。

城の内遺跡は、今回の発掘調査によって丘陵北側斜面下の狭い台地を造成した平場を、堀と土塁によって区画した館跡かそれに付随する屋敷跡であることが明らかになったが、この堀と土塁による区画の構築時期は概ね15世紀中頃である。そのため、この時期まで阿佐美氏が当地を維持して居住していたか不明であり、また、この時期に当地に誰がいたのかも分からないため、本遺跡の直接の居住者を特定することは困難である。ただ、それ以前の12世紀末～13世紀前半に存在した寺か堂を伴う屋敷跡については、縄目叩きの瓦を使用していることや、第1号門跡及び中心的な建物と考えられる第29号礎石建物跡を見ても、在地領主層の経済力を基盤にして建立されたものと思われ、この時期に当地を本貫地とした庄五郎弘方・阿佐美実高父子との関係が推測される。また、実高の弟や子供に僧籍の者が多く見られることも、本遺跡との関係で注目すべきかもしれない。

15世紀中頃に構築された館跡かそれに付随する屋敷跡は、台地平場のほぼ西側半分の範囲を想定したが、これだけで一つの完結した構造として捉えることはできないであろう。その敷地内の地割りは、周辺の現水田部に見られる条里形地割りと同じ東西南北方向の古い地割りに一部規制されながらも、Ⅱ区や堀跡ＤＥ区のような異なった方向の区画を新たに付け加えたような形態になっており、その新しい地割りは南側丘陵上の現地表面に見られる地割り方向と一致している。この丘陵上には、15世紀代の建物跡が検出された新屋敷遺跡 (1989年調査) があり、さらにその南側斜面には館跡と関係深い地名である小字の「内出」が連続しており、その地名から方形館のような比較的広い敷地をもつ伝統的な館が存在することも推測される。そのため、本遺跡はこの丘陵上の平坦部から南側斜面にかけて推測される中心的な館と関連して、その北側斜面下に増設された曲輪的な役割をもつ付属的な施設であったことも考えられる。そしてＢ地点に隣接する東側の平場 (Ｄ地点) については、後世の削平を受けているため明確ではないが、「ばんば」や「ばば」という呼称も聞かれることから (菅谷1981)、館に付随する小規模な牧や馬場を想定することも可能かもしれない。

本遺跡周辺では15世紀中頃～後半になると、児玉町古井戸遺跡第1号館跡 (井上1986)・本庄市北廓遺跡 (富田・赤熊1985)・美里町新倉館 (菅谷・岡本1980) などのように、比較的規模の大きな箱堀状の堀を巡らして防御的機能を高めた館跡が多く見られるようになる。この背景には、15世紀後半の享徳の乱 (1454年) から長尾景春の乱 (1476年) に至る現本庄市の五十子陣を中心とした古河公方と関東管領上杉氏の当地域周辺での戦闘による長い緊張状態が考えられるが、これらの在地小領主層の館と違って、浅見境北遺跡 (本報告) や南街道遺跡 (恋河内1996) のような低地内の一般農民層の屋敷跡は、15世紀中頃を境に廃絶されている。おそらく地元の緊迫した不安定な状況の中で、一般農民層の多くは戦禍をさけて安全な地に逃亡したのではないかと思われる。　(恋河内昭彦)

参考文献

浅野晴樹（1980）「埼玉県出土の中世陶器(1)」『研究紀要』第３号　埼玉県立歴史資料館
（1991）「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館報告』第31集
足立佳代・斎藤和行（1993）「足利における中世瓦の一様相」『唐澤考古』第12号　唐澤考古会
石川安司（1996）「比企地方の中世瓦(2)『比企丘陵』第２号　比企丘陵文化研究会
井上尚明（1986）『将監塚・古井戸Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集
上原真人（1990）「平瓦製作法の変遷」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会
大江正行（1978）『長楽寺遺跡』尾島町教育委員会
太田博之（1991）『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ－公卿塚古墳－』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第19集
木津博明（1987）『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団
（1989）「上野国に於ける在地生産土器に就いて」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会
恋河内昭彦（1993）『川越田遺跡Ⅱ（Ｂ・Ｃ地点の調査）』児玉町遺跡調査会報告書 第５集
（1995）『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書 第17集
（1996）『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書 第20集
小林康幸（1989）「関東地方における中世瓦の一様相」『神奈川考古』第25号　神奈川考古同人会
坂本和俊（1986）「鷺山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
佐川正敏（1994）「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集
佐藤好司（1986）「金鑽神社古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
篠崎　潔（1995）『安保氏館跡』神川町遺跡調査会発掘調査報告 第５集
菅谷浩之（1981）『児玉党阿佐美氏館について』児玉町史史料調査報告 中世１
鈴木孝之（1991）『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第110集
鈴木徳雄・西口正純（1981）『深町・城の内遺跡』深町遺跡調査会
鈴木徳雄（1989）「九郷用水の開鑿年代」『九郷用水関係資料集』児玉町史史料調査報告 第12集
（1995）「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」『堀向・藤塚Ａ・柿島・内手ＢＣ・児玉条里遺跡』
児玉町文化財調査報告書　第18集
田中　信（1996）「川越市内出土の中世土師器皿について」『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅻ)』川越市教育委員会
富田和夫・赤熊浩一（1985）『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第46集
中野晴久（1995）「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
（1995）「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
服部実喜（1984）『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会
（1984）「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古』第19号　神奈川考古同人会
（1992）「南武蔵・相模における中世の食器様相(1)」『神奈川考古』第28号　神奈川考古同人会
服部実喜・余語琢磨（1990）「称名寺境内出土の中世瓦」『物質文化』53　物質文化研究会
平田重之（1989）『皂樹原・槍下遺跡Ⅰ（阿保境館跡）』皂樹原・槍下遺跡調査会報告書　第１集
藤沢典彦（1983）『中・近世瓦の研究 －元興寺篇－』元興寺文化財研究所
藤澤良祐（1991）「古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館
（1995）「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
本庄市（1976）『本庄市史』資料編
（1986）『本庄市史』通史編Ⅰ
峰岸純夫（1978）「武蔵国児玉郡枝松名について」『埼玉民衆史研究』第４号
（1984）「中世社会の『家』と女性」『講座日本歴史３』中世１　東京大学出版会
山本信夫（1995）「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
湯山　学（1980）「武蔵児玉党の真下氏について」『埼玉地方史』第８号
横田賢次郎・森田　勉（1978）「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
渡辺世祐・八代国治（1971）『武蔵武士』有峰書店